

奇譚クラブ

1960年 2月号

懸賞入選作品
異色随筆

雌雄
猿轡放談

千草忠雄
浮家鷹三



2月号

奇譚クラブ

昭和三十五年二月号

2

奇譚クラブ

昭和三十一年一月一日創刊
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可
昭和三十一年一月一日創刊
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可
昭和三十一年一月一日創刊
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



定価二百円

IBM. 2805

入手至難の旧号発表傑作。切望に応じて堂々再登場

臨時増刊 悦 第3号

収録内容の項目

◎ 出歯の男	◎ 古池の怪	◎ 足枷の責め	◎ 裸馬の餌物	◎ 鉄檻の中の晒	◎ 雨中のクイン	◎ キング・サイズ
◎ 嵐を慕う蝶	◎ 新作特写フォト	◎ 二十四頁を埋めつくす	◎ 風を慕う蝶	◎ 新作特写フォト	◎ 二十四頁を埋めつくす	◎ 風を慕う蝶
◎ まといつく長蛇	◎ 岩に咲く珍花	◎ 柱掛人形	◎ 隔世の障子	◎ 含かんしゅう	◎ 囚(しゆら)肌	◎ お仕置前奏曲
◎ ニンフ就縛	◎ 限られた自由	◎ 架(か)の責	◎ 麗(れい)の艶	◎ 乱れる訪問者	◎ 花坂	◎ 道子
◎ 絹川 文代	◎ 絹川 文代	◎ 絹川 文代	◎ 絹川 文代	◎ 絹川 文代	◎ 絹川 文代	◎ 絹川 文代

巻頭を飾る華麗絵巻
四馬孝傑作画集



昭和二十九年、本誌黄金時代の問題作装いに新たにアンコール登場

悦 小説特選集

『悦 第三』
定価 三百円

お申込先
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号
天 星 社
振替口座 大阪第五〇〇四二番

又々素晴らしい悦特選集の登場
とやがて新しいお宝になることになり
ました。一枚一枚が胸内へ喰ひ
込むように感嘆を覚えています。
それに、どの頁を開けても、息も
つかずに読み耽りたい欲ばかり

◎ 告白 懺哭の記	◎ 謎の女と私	◎ 開雲博士の回想	◎ 責められた女	◎ 罪ある女	◎ 細に憑かれて	◎ 細子とお仕置	◎ 蜘蛛と蝶	◎ 復をめぐる随想	◎ 猿ぐつわと私	◎ 悪刑に泣く未亡人	◎ 私を愛して下さった皆様へ
◎ 古川 裕子	◎ 岡田 咲子	◎ 辻村 隆	◎ 近東規矩也	◎ 桜井京一郎	◎ 時山加代子	◎ 古川 裕子	◎ 飛田 良二	◎ 久留木 栄	◎ 岡田 咲子	◎ 古川 裕子	◎ 小坂多美枝

☆ 懸賞愛読者原稿募集 ☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものである。どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文藝、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで(四百字詰)
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二万円以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻希望の方は返送料同封下さい。
- 九、発表に支障のある個所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

- 【体験、告白、手記】 どんなに一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいったものはあるものです。物いわさるは腹ふくめるのとえ、どうか皆様の素直な喜びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用欄には本誌三月分以上贈呈します。
- 【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の佳作に限ります。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用欄には本誌五月分以上贈呈します。
- 【映画、雑誌通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持になった事項がありましたら通信下さるようお願いいたします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。
- 【レポート】 新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
- 【その他】 以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈する準備ができています。
- 【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通を希望する御意見などは御便なり便りとしてお寄せ下さい。誌面の許す限りづとめて発表いたします。

★ 本誌御購読の榮 ★

一月分(1冊)	八送共	二百円
三月分(3冊)	八送共	六百円
半年分(6冊)	八送共	千二百円
一年分(12冊)	八送共	二千四百円

本誌は直接郵送による販売を主としておられますので、購読御希望の方は直接発行所へお申込下さい。半年分予約の方には景品として大手札型豪華写真三枚、一年分予約の方には同じく六枚一組贈呈いたします。御予約の方は発売の都度郵送重荷造りの上急送申し上げます。尚、発行済の旧号は別項記載の通り在庫の上、御注文をお待ちしております。

奇譚クラブ 定価 二百円

二月号

昭和三十五年一月三十日印刷
昭和三十五年二月一日発行
編集印刷兼発行人 吉田 珍
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号
発行所 天 星 社
電話 天下茶屋 三六〇七番
原替口座 大阪第五〇〇四二番

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の少額のものを利用下さい。宛先は必ず書留ではつきりお書き願います。尚、御購読用紙は当社作成のものは品切となりましたので御了承願います。

略号「S特第三」 定価三百五十円

……四馬孝画集（力作二十四点）……

拷美ム深女持俵哀水股防蛇
問容手夜の体久れ責裂水倉
体打ち逆裁戰吊なめきの服幽
台操始り判法力倉驗怖閉

242322221019181716151413

烙印のX字架
口ソク責め
箱詰美入
苦悶の舌吊り
鼻責め地獄
猿轡と煙草
森の中の晒
愛人の危機
山小屋の異聞
浣腸室の女体
白い実験動物
美畜訓練師

…狂い咲く稀花特選 (フオト百四十八葉)

佳	希	一	尾	緒川	狂花の戯れ	(浜本)	緒川	脱し得ぬ拘束	緒川
厚	遇	の	座席	田原	タイルの冷感		田原	苦痛への階段	緒川
共通の戦き	(緒川)	大塚	レインコート	大塚	華鼻受難		大塚	押込みの艶肢	(愛川)
流れ落ちる美線	(緒川)	大塚	ひとばしら	緒川	友愛の表現	(愛川)	緒川	泥まみれの青春	大塚
哀美抽出	(愛川)	大塚	白蝶の不安	田原	花坂春日	緒川	緒川	美貌の憤悶	緒川
応接間の稀態	(愛川)	大塚	スポーツライト	緒川			緒川		緒川

傑作サド読物集

塔婆十郎・作
サド小説
『地獄の無法地帯』

▽▽ 拷問倉庫
吊り責め地獄

▽▽ 肉体の太鼓
地獄谷の悲鳴

覆面子白頭巾・作 参考写真多數
『緊縛フオトと緊縛フオト夜話』

▽▽▽▽
全盛期前期の緊縛フオト口絵
緊縛モデルの素顔
全盛期の緊縛フオト口絵
緊縛フオトと緊縛モデル

『緊縛写真と緊縛画集』

限定版特別号の第二弾！

定価 五百円
略号「緊縛」

四馬孝緊縛画集（二十五枚）

女体の耐久テスト
素晴しき会長
オシメカバートと赤ん坊
白いいけにえ
アクロバットの訓練
女学生の嫉妬
女体は美しき玩具
人間囃台の実験
物置小屋の怪
生理めの私刑
奴隷という責め
水責めにあう美女
回転する女体

女体の逆恨み
遠慮はいらねえぜ
女体の荷物
トランク詰の裸女
吊し責めの美女
浴場の悦虐
鞭の御馳走
淫虐な美容師
狂気の復讐
ヤキを入れてやる
電気責テスト

素晴らしき写真集（八十四葉）

序曲「手吊」のポーズ
第二章逆手吊と足吊
緊縛適の
クローズアップ
拘束女体の経過
股間縛り競艶
麗しき系列
狂った果実
晒し者なんだワ
腰巻の乱舞曲
女の飲ひ八態

さあどうでもして
陳列された女体
忘れぬ豊満美
黒蛇地獄
女のふんどし
女のサポーター
吊り人形の哀飲
断然これは凄いゾ
女囚第十四号籠り通る

臨時増刊
限定版
悦特
No. 2
定価 三百円

「悦虚小説と緊縛写真」特集号・第二集

四馬孝緊縛圖集

柱背負い
深夜の水浴
喰込む縄
あんよは上手

捕われ人
椅子縛り
水道責め
答打ちの果

悶悅姿態特選集

逢瀬のホーズ……絹川
はかなき悶え……田中
羞姿晒陽……愛川
縋なす白縄……絹川
柔肌の喘ぎ……平野
未知の驚き……岩井
造形美術……花坂
ロープ・ブラジャー
愛川

しずかなる受縄……花坂
美囚第十四号……絹川
悦び一刻……浜本・三木
乱れさく哀花……絹川
荒縄と美貌……絹川
悦虐狂奏曲……大塚
艶肌の拘束……絹川

(以上百十六葉収載)

……往年の好読物集

妓の影	泉辰之助
凌辱の幻想と期待	古川裕子
僕の記録	黒井珍平
くすぐられるよろこび	山本百合
キヤメラ愛好会	岡田咲子
被虐の愛情	若林啓子
責	竹谷十三
アブノーマル・ファンタジー	岡田咲子
変の字問答	浮家鷹三
マダム紅鶴	野村恵美子
哀艶責め場絵嘶	岩広志
蜘蛛と蝶々	飛田良二
由紀子のお仕置	大川由紀子
聖画の誘惑	近見啓



奇譚クラブ

復刊第五十五号
二月

目次

緊縛画 縛り初め (新春受難の巻) 滝れい子・画

縛りフォト「逆瀬川上流」 絹川文代・画

南村俊平妖美画集

南村俊平・画

▽鬼畜人誅滅

▽勇敢なる小女国水兵

▽戦没者に捧げる花

四馬孝傑作画集 吊り以前 四馬孝・画

懸賞愛読者原稿入選作品

雌雄 (しゅう) 千草忠雄 18

灸点哀歎賦 泉辰之助 44

黄色オラミ誕生 (第四部) 真木不二夫 50

現代マゾヒズム芸術時評 (アマゾンについて) 原忠正 57

マゾヒズム百景 馬場好男 62

創作「女友達」 三条卓史 64

創作「麻葉と禪」 横村奏 76

サド特集第三集の特写フォトについて 近藤一 86

乗馬ズボンシリーズ

太平洋にかける橋 藤山秀緒 90

連載告白小説「或る倒錯生活」 (四) 西村憲一 96

猿轡放談 (その一) 浮家鷹三 107

愛好者の記録 小森小太郎 112

体験小説「拷問に耐える」 庄田美起夫 120

特高拷問史 桂牧次郎 122

ドリーミング小説 女人旅情 栗瀬長 130

異加害研究 浣腸現考学 仏光刀四郎 134

創作 N 街の朱い室 雪俊遙 146

連載第三次元小説「影の国」 近藤一 155

新東宝作品「九十九本目の生娘」と

グラマー女優「三原葉子」について 読者通信 165

限定版特別号 第一弾ノ

「緊縛フォトアラベスク」

略号(あらべすく) 特価五百円(送共)

△収載内容V二十六項目 写真七十七葉

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 鏡……………愛川悦子 | 14 奔放な肢体大塚啓子 |
| 2 銘花二輪…花坂道子 | 15 鏡台と腰巻花坂道子 |
| 3 鉄……………鎖…大塚啓子 | 16 腰巻と鏡台花坂道子 |
| 4 諦……………銀…大塚啓子 | 17 奇妙な休憩絹川文代 |
| 5 庭園にて…絹川文代 | 18 田代悠子表情集(二) |
| 6 謎の微笑…田中芳代 | 19 脱がされた高手小手 |
| 7 田代悠子表情集(一) | 20 亀甲縛り…愛川悦子 |
| 8 誇る脚線美田代悠子 | 21 吊責折檻…村井知可子 |
| 9 この足どうかしら? | 22 立木縛り…村井知可子 |
| 10 裏と表と…愛川悦子 | 23 豊……………酔…愛川悦子 |
| 11 落陽の丘…愛川悦子 | 24 乱れ髪三景大塚啓子 |
| 12 ポリウムの花園…大塚啓子 | 25 椅子と絨緞愛川悦子 |
| 13 緊縛感の綾大塚啓子 | 26 姐上の美鯉絹川文代 |

(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行宛お申込み願います。)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。

臨時増刊号

略号「S特第二」

「サド特集号 第二集」

定価三百五十円(送共)

【麗美巻頭図絵、四馬孝画集】

- | | |
|------------|------------|
| ☆密……………質倉庫 | ☆地下室の苦行 |
| ☆悪魔のような女 | ☆苦……………悶 |
| 「春美の受難記」 | ☆吊……………責め |
| シリーズ 四点 | ☆乳……………責め |
| ☆新品第一号 | ☆人間フープ |
| ☆嫉妬の鬼 | ☆檻……………禁 |
| ☆奴……………隷船 | ☆アクロの訓練 |
| ☆妙……………吊責 | ☆捕われた商品 |
| ☆雨中の引廻し | ☆犬……………訓練 |
| ☆奈落のリハーサル | ☆女……………体 |
| ☆鼻責めテスト | ☆夜……………ながし |
| ☆黒目鏡の女 | |

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

- | | |
|-------------|-------------|
| 絹布と絹肌(田中) | 仇姿黄八丈(絹川) |
| 飾り人形(大塚) | 縄さばき(浜本) |
| 台上の賛(絹川) | 挑発の笑(絹川) |
| 若妻の秘美(花坂) | 被……………襲(花坂) |
| 白い若鮎(田中) | 深海魚(田中) |
| 麗……………囚(絹川) | 哀れな賓客(絹川) |
| 三面鏡(愛川) | 豊……………胸(愛川) |

【興趣尽きぬS的読物】書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)
緊縛フォトと緊縛モデル (白頭巾)
南村俊平画八猪大人の御乱行、強制女体浣腸器V

『悦虐小説と緊縛写真』特集号

定価三百円(送共) 略号「悦特」

△悦虐小説傑作集V S的作品のエッセンス

- | | |
|-------------|--------------|
| 雌……………獣の手記 | 呪……………縛 |
| 妻……………は縛らず | 悦虐の旅役者 |
| 夕……………の朝顔 | 長……………期刑 |
| 続……………囚 | 私の思い出奇 |
| 私……………の主 | 縛……………られた妻以前 |
| 色……………の狼 | 片……………耳伝 |
| 女……………奴隷の手記 | 縛……………られた妻以前 |
| 受……………難 | 地……………獄絵行脚 |
| 怪……………奇曼陀羅教 | 鉄……………格子の中に |

△グラビヤ緊縛写真V百十四葉の傑作

- | | |
|--------------|------------|
| 妖……………精(ニンフ) | 首……………縄 |
| 三……………葉葵の横顔 | シ……………ユミーズ |
| 誘……………拐 | 放……………心 |
| 羅……………致 | 間……………謀 |
| ブ……………洩れ | 三……………処責 |
| 木……………路 | 黒……………タイ |
| 夢……………花 | 観……………念 |

△四馬孝画責画集 口絵V

白……………魚の悶え 宙……………に踊る
苦……………悶の前奏 ア……………クロバツト
鉄……………鎖のきしみ 濡……………れる朱唇
籠……………の白鳥 土……………蔵の花

縛り初め

(新春受難の巻)

「カルタ会だなんて、ウソだったのネ。」「うるさいッ、つべこべ言うな。お前の晴衣姿を一度縛ってやろうと狙っていた俺だ。ハハハ、丁度、本年の縛り初めって、いうわけか。」「馬鹿にしてるワ、結婚してやらないから」



麗

逆瀬川上流

宝塚から逆瀬川沿いに六甲山に至る東六甲ドライブウェイの急坂を登ってゆくと、両側から迫ってくる山並の間に急流が岩を噛んでいる。アベツクのハイカーが時々登ってくるだけで、この悪路をドライブしてくる車もなかった。





モデル 絹川文代





モデル 絹川文代



鬼畜人誅滅

少女国に仇をなす鬼畜人軍は、少女軍の果敢な攻撃によって潰え去り、首級を挙げた兵士は軍舞に狂奔するのであった。

『南村俊平妖美画集』





勇敢なる少女国水兵



戦没者に捧げる花

吊り以前

男は無惨に括り上げられた娘を見て、ニヤニヤと笑った。柔肌をくびるように締め上げている縄は……。





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1960年 2月号

(第十四卷 第三号・通刊第百三十五号)

『懸賞愛読者原稿』 入選作品

雌

(し ゆ う)

雄

千 草 忠 夫

アパートの前で二、三度クラクションを鳴らした。待たされる事は分っていたので、煙草に火をつけた。気持ちを鎮める為でもある。事実、緊張で頭が痺れそうだった。アパートの窓々からもれる明りさえ、まぶし過ぎる位だ。かすかに狂燥的なリズムが聞えて来る。ここまで来たのに、自分のやっている事が本当とは思えなかった。幾夜も幾夜も考え抜いた計画を、また頭の中で反すうしているだけじゃないのか。

ドアを開けて外に立つと、夜気が湿っぽい。大きく、ひといき吸

い込んで煙草をすてる。ロビーのあかりを背に彼女のすらりと伸びた肢態が地に影を落していた。

女は何の挨拶もなしに、彼の開けて待つドアの前を、すつと通ってクッションに身をもたせた。前にまわってハンドルを握った時、男は思わず溜息をもらした。聞かれはしなかったか？彼は女を前にして我知らず卑屈になってしまっている自分に舌うちした。

「電報打ったわね」

事がすべり出した時、女は始めて口をきいた。

「ええ」

嘘が驚く程すらりと口から出た。他人の前に仮面をかぶる事、彼

の日常であつたとすれば、嘘は保身の術の初步にすぎない。

——あまりムキになるな。平常通りでいいんだ——

「大阪にはどれ程いるつもりなんですか」

「いやになるまで」

「いい御身分ですね。で、その間、アパートの方はいいんですか」

「いいわよ。お金さえ払っておけば、住もうと住むまいと、こちらの勝手」

「訪ねて来る人が困るでしょう」

「そんな者、勝手にさしとけばいいでしょう」

ハンドルを取る手のふるえが、やっと止まった。女は窓外に眼をやったまま、車の振動に身を任せている。車内灯でくっきり浮び上った鼻すじが美しかった。

バックミラーの彼女の姿に眼をやつて、男は自分の考えている行為が潰神ではないかと疑った。そして潰神者になろうとしている自分に戦慄した。

「ちよつと僕の家に寄ります」

「いやねえ、どうしたの」

「ゼツタイ秘密です」

わざと冗談めかして言う。

「いやに勿体ぶるわね——どうしたっていうの」

「まあ少しばかり我慢して下さい」

「おぐれちやだめよ」

「時間は充分ありますよ」

ハンドルを右へ切ると、不意に暗く淋しい街に入った。

男の家は住宅街の静けさを見降す高台に、黒々と一軒だけ闇に沈

んでいた。ちよつと寄るといふ話だったのに、男が車をガレージに入れるのを女は不審に思つて身を乗り出して来た。

「ええ、ホンのちよつとなんですが、退屈でしょうから、その間、最近作つた面白いものでも見てもらおうと思つたんです。大丈夫、汽車には間に合いますよ。そのつもりで早めにお迎えに来たんですから。さあ、こちらです」

女は不気嫌だったが、今更、反対もならず後に従つた。ガレージの中には、他に車が二、三台も黒々としずまっていた。ハイヒールの音が、その中に、やけにこだました。

あげふたをあげると、地下室に続く階段が急傾斜でかかっている段を降り切つた所に重い鉄の扉があつた。男が先に立つてそれを開き、スイッチをひねる。女の方は無気味さの中にも好奇心を压える事ができずに、地下室に足をふみこんだ。

ガランとした室内には、特有のしめり気を含んだ冷氣が、よどんでいた。打ちつけのコンクリートのハダが、あちらこちらにジツトリと水気をにじみ出して、白い螢光灯の下に静まり返っている。部屋の大きさは間口四間、奥ゆき五間位。地下室にしては高い（二間もあるうか）天井と、これまた不似合いに明るい照明が、この部屋を何か異様に見せている。

女は圧倒された様子で、たたずんでいた。

「死んだ親父が作つたんですよ。戦時中、ここに大量のガソリンを隠置していたんですね。あの奥の大きな扉の向うにも、これと同じ部屋が続いているんです。今では物置にしていますが、そのガソリンを資本に、戦後、親父が産をなしたらしいです。まだこんな地下貯蔵所を田舎の方にも作つておいたらしいですから」



女は冷たくあたりを見まわしながら聞き流していたが、壁の一点に眼がとまると、フト頬に血がのぼった。

「ああ、眼にとまったようですね。実は、あれを見てもらいたかったんですよ。ちよっとしたコレクションでしょう」

二人は、その壁ぎわへ行った。男は、ますます能弁になった。

「集めるのに苦労しました。今頃、鞭なんか乗馬位にしか使わないでしょう。古いのが欲しかったんですが、文献なんかを参照して作ったものもあります。鞭の素晴しさ——どこが素晴らしいのか僕が言わなくってもおわかりでしょう。その素晴しさを教えてくれたのは外ならぬ、あなたなんですから。それから、まるで熱病にとりつか

れたみたいになってしまつて——御覧の通り、もう二十種以上も集めました。見せたいものがある、といったのはこの事なんですよ。さあ——」

男の誘いを待つまでもなく、女は、つと手を伸ばして一本の鞭を手に取った。それは一米ばかりの細身の竹で作った、ありきたりのものだった。女は、それを手元から先の方まで刀の鑑定をする様に眺めまわしていたが、やがて不意に素振りをくれた。よどんだ空気が身を切られて悲鳴をあげた。更に、もうひと振り。頬が紅潮し、眼は熱っぽく光った。やがて、ホッと肩を落した。

「帰るわよ」

男は無言のまま、こだますハイヒールの音に耳を傾けるかの様に立ちつくしている。

女は扉の所で振り返った。当然、男がかけ寄って開けてくれるものと思つたからである。男の膝が、ガク／＼した。それでも強いて無表情を粧うて、何気ない風に女の顔を見つめている。女は、そんな男の態度を以外そうに見ていたが、やがて扉に手をかけた。

開かない。足をふんばって見ても勿論、開かない。ギリツと齒をかみしめて男を振り返った。呆然とした様な眼だった。

「開けてよ」

声と一緒に怒りが体中に、みなぎった。男は、その射すくめる様な視線にムキになって耐えた。ハイヒールの音が緊張を破った。女はタイトスカートの歩幅一ぱい壁へ歩み寄ると、輪にして掛けてある鞭を



つかみ取り、返す手で、あざやかに男の腰から腿のあたりを、まともに打った。男は防禦の手を挙げるヒマもなく後にのめった。

長い鞭である。二米はあろう。それが黒蛇のように空をのたうつては、男の体に巻きつくのだ。女は、そのしなやかな伸びを楽しむかのように、巧みに繰り出し繰り出する。にぶい音が体からほとばしるたびに、男は何度か床にはい、壁によろめいた。しかし、奇妙なことに、両手を挙げて顔を守るだけで、あえて女につかみかかろうともせず、退いて身を守ろうともしない。

二人とも無言だった。しかし、女の吐く荒い息と、無意識にもらす男のうめき、そして二人を結びつけ又はなす黒い鞭、この三つの

組み合わせが、何時しか異様な熱気をかもし出していた。それは打つ者と打たれる者の呼吸が一致した所から生ずるのかも知れない。

男は何か本源的な所から突きあげて来る恍惚感と戦っていた。くずれ落ちようとする意志を支えようとする眼に暗い光が宿っていた。

ピシリ――

女の鞭は、その眼の光に断を下すように真向から男の額を打った。

男の視野が真赤に染った。額を割った血が眼に入ったのだ。真紅の中にポーと浮び上っている女の踏みはだかった姿を仰ぎ見るようにして、彼はガックリと、前にのめった。女は床に伸びた男の背に、なおも鞭を振り続けた。男はただ痙攣的に体をくねらせながら、両手と片頬を、ざらつくコンクリート床に、こすりつけていた。カ

ッと開いた両眼には涙が、紅の色をうすめていた。彼は想っていたのだ、幼い日々の事を。鞭の痛みに、その若い想い出の一つを反芻していたのだ。

二

倫也が美奈の家へ書生に入ったのは、高校一年になったばかりの頃だった。形からいえば引き取られたという方が本当なのだが、実質的には書生のような立場に落付いてしまった。

倫也の父と美奈の父は学校時代から親友で、父がなくなると（母はまだ倫也の小さい頃に死んだ）一人息子の彼は、そのよしみで美

奈の父に引き取られた。彼には遺産と呼ばれる程のものは何も残されなかったから、さっそく明日からの生活の爲にも、何とか身のふり方をきめねばならなかったのだ。

美奈の父は、いわば成功者で、多くの会社に関係し、勿論、豊かな暮らしをしていた。人物としても、これといった悪評は皆無で、強いてあげれば、やや物事の考え方が時代おくれだという事ぐらいのものだ。しかし、これとて見る人が見れば美点の中に加えるかも知れない。

倫也を引き取る際にも無難いやな顔ひとつせず、むしろ当然とする風さえあった。彼からすれば、息子を持たない所から、本当の息子の様に、へだてなくいつくしんで、将来、見込みがあれば一人娘の美奈と、めあわせたい位の事は考えていたであろう。書生の立場に倫也を置いたのは、実は彼、自らだった。

美奈の父が、そういった倫也の態度に困惑した事は、彼が友人に語った言葉からも、うかがえる。

「この僕に恩を感じているのはわかる。しかし、あんな事までしてもらいたくないんだよ。驚いたね、君。家へ来た次の日から掃除は勿論、走り使い、その他の雑用は時間の許すかぎり何でもやる。今にお前の領分にまで手をのばすぞ——と家内と笑っているんだが、それでいて卑屈さは微塵もない。本当に真心からやっているという風なんだね。それを当然としているんだ。僕もはじめは、そんな書生みたいな真似は止せといっていたんだ。友人の子供を引きとったのはいいが、こき使っていると思われたんでは、やり切れないからね。だが、今じゃ黙って見ていることにしたよ。学校かい？ああ通っているよ。あんなに働いて何時、勉強するかと思うんだが、成績

は抜群だ。君、大変な拾いものをしたもんだよ。ありや心に何か持っているよ。今の若いものにはない、何かシンミたいなものをね」美奈の父の感想だけにとどまらず、倫也に接する者は誰しも同様な感に打たれた。事実、彼は頭が良いばかりでなく真摯だった。しかし彼の魅力となっていたのは、その眼だった。憂うつというのではないが何か、ちよつとしたはずみに彼の奥の眼がキラッとする時がある。これが人には倫也の深みとなって読まれるのだった。

女性にとっては、これが大きな魅力になるかも知れなかった。学校で多くの女生徒に取り巻かれた事は事実である。

スポーツマンではあったが、落着いた性格だったし、頭は良し、話しぶりがスマートだ。そして皆を笑わしておいて、ただひとりだけフト暗い光を眼に宿している。それは檻に閉じ込められた獅子の眼を思い起させた。

「スラッとした体つきでしょう。ハンサムというんじゃないけど、浅黒い顔に鼻すじが通って、その奥に眼が憂うつそうに時々光るのよ。ほんとにいつかあの眼で、じいっと見つめられた時、あたしカッとして顔に血がのぼってフラフラッとしちゃった」と、遠くを見る様な眼つきで、ある女性は溜息をついたものだ。

こんな中であって時によると倫也は、ひどく内気だった。特に女生徒に対してはそんな場合が多かった。ホンのちよつとした事で顔を赤らめる。特に一対一になった時には、それがひどかった。そんな倫也を見ると、人は何か不可解なものを倫也の性格に発見するのだった。燃えあがろうとする情熱を心の底に引張る何物かがある。それが女性に對した時、何かチグハグな感じを与えるのだった。だから倫也に想いを寄せる女生徒があったとしても、何か近づきがた

い不気味さを感じて、二の足をふんでいた。

ここに彼に最も接近した女性が一人だけいた。美奈である。彼女は倫也より三つ年下で、彼が美奈の家に来た時は、まだ中学生だったが、年上の彼に対して遠慮がなかった。否、父はいざ知らず、彼女だけは倫也に対して主家の娘という立場で当った。一人娘のわがままということもあるが、生れつきの勝気は、倫也に兄事する事を、がえんじなかったのだ。そして父や母が倫也に対して何か大切なものをあつかう態度でいるのを齒がゆがった。それに対する反撥ということも彼女の無意識の中にあつたのかも知れない。倫也こそのいい面の皮だったが、持ち前の自虐的な忍耐強さで耐えた。

部屋の掃除を命じたのが、はじまりだった。それが男にどんな気持を与えるか、この小娘は良く知っていた。思春期の少女の発する特別な香気のしみ込んだ部屋の隅々を、這いずりまわって掃除する男を、美奈は窓に腰を降して眺めていた。四つん這いになった男の背に跨って追い廻したい様な眼つきだった。

刺戟は変化がないと、すぐあきたりなくなる。美奈は、次第に大胆になった。ハイキングだといっては倫也を荷物かつぎに連れだした。おやといつて眼を見張る友人に「これは、あたしの番犬なの」と誇り顔をした。

帰宅してから、よごれた足を倫也に洗わせる事も平気だった。彼は高慢な心の持主にしては美しすぎる足指の一本／＼を、貴重なものの様に清めた。

しかし、これは序の口といつていい。何かにつけて彼女の母が倫也をかばい、美奈をたしなめたからである。その優しい母が、美奈が高校に入ると心臓病で急死した。仕事で留守がちな父をしりめに

美奈の倫也に対する態度は急激に埒を越えた。

もう三年越しに続いた女王と奴隷の関係である。美奈の眼には倫也の人格など、とうに無いも同然だった。無視したというより狎れてしまったのだ。そうでなかったら、どうして妙齡の女性が、自分の下着を一個の男性に洗わせるなどという事ができよう。美奈は女中をさせておいて戦慄的なよるこびをもって、それを倫也に命じた。だが、白いレースの山を受け取った倫也は無表情だった。

うす暗い風呂のタイルの上で倫也はそれを洗っていた。電気洗濯機は勿論あつた。しかし糸がほつれると称して、それを使う事をゆるさないのだ。倫也は涙を落していた——と考えるのは当らない。彼には、そんな悲壯感など全く無縁だったからだ。入念に泡の中でもみほぐす彼の表情には熱っぽい恍惚感さえあつた。ブラジャー、スリッパ、高校生にしては贅沢で派手なそれらのものを、ひとつひとつ丹念に洗ってゆく。眼には、あの暗い光が折々宿った。

美奈が乗馬クラブに入り、鞭を手にする様になったのも、その頃だった。流行の自家用車よりも乗馬を選ぶといった所に美奈らしさがあつた。平常、家に戻る時、鞭を手にするわけではなかったが、タイトの乗馬ズボンに細っそりした黒皮の長靴で身をよそおうて家を出入りする際、何かアラを見つけては倫也を打った。はじめは小突く程度だったものが、なれるに従って力が加えられた。打つ事そのものに情熱を感じはじめた風だった。ヒューと風を切る鞭のしなやかさ、打ち当たる微妙な手応えに美奈は、おぼれる様になった。つとめて冷たい眼つきをよそおうたが、木の間をもれる陽ざしの様に、熱っぽいものを隠せない。

寒い朝だった。曳き出された馬は冷氣に皮膚をふるわせ、太い鼻

いきを白々と吐いた。あぶみに足をかけて、跨がろうとした美奈は凍りついた金具にその足をすべらせて地上に、もんどりうった。

とっさの出来事で倫也はしばらくポカンとして、ぶざまな美奈の姿態を眺めていた。と、こうする間に腰をさすりさすり起きあがった美奈は、キッと倫也をねめつけた。どうした事か倫也は、今日に限って助け寄ろうともせず空ろな眼で美奈の顔に対している。

「バカ！」

今まで、ついぞ感じた事のない怒りに身をふるわせて、美奈は鞭をふりあげていた。空を切った鞭は真正面から倫也をおそった。額から斜にあごにかけて皮膚が切れていた。血がそこ、ここからブクリと盛り上って来た。

美奈は思わず後じさった。今まで鞭打っても服の上からだった。血を見た事はない。しかし彼女をひるませたのは、あながち血のせいばかりではなかった。彼女は見たのだ。血まみれの底から自分を見すえている眼の輝きを。それは美奈がはじめて見る倫也の「男」の眼だった。

三

今も美奈は同じ眼を見た。あれから五年になる今でも忘れられない眼だ。あの時は自分の家だった。ところが今は男の家、しかも地下室に閉じ込められて、ようやく男の深い、たくらみ



に気付いて美奈は慄然とした。

倫也は深い暗い混迷の底から、よろめき立った。裂けて垂れ下った服、血まみれの顔、その奥に血走っている眼。美奈は追い立てられるように再び鞭を振りかぶった。ひどく重い。肉体的な疲労に精

神的な不安がおおいかぶさって来る。負けまいとする意志だけが鞭を動かした。とたんに鞭のゆるいカーブを相手につかまれ、グイと手繰り寄せられた。ハイヒールの足を乱してよろめくところを、男は肩をつかんで引き寄せた。

眼と眼が、互いの心を読みとろうとガツキと交錯した。無言。顔が紅潮し息が荒くなる。あのいじけた男がいつの間に——といぶかるほど倫也の握力が強く絞めつけて来る。それなのに顔色さえ変っていないのだ。血まみれの形相に眼だけが落着いて自分を見つめている。

美奈は、ムカ／＼して来た。思い切り憎悪をこめて男の顔に、つばを吐きかけた。蛙の顔に水だった。そむけもしない。だが、急に男の腕の力が加わった。肩の骨が砕けるかと悲鳴をあげたとたん、薄手のブラウスが肩口からいさぎよい音をたて裂けていた。

美奈は呆然と男を見つめたまま立っていた。円い肩が剥き出しになり、豊かな胸が、はげしく上下している。

倫也が奥の部屋から細引きの束を持って来るのを見て美奈は、はじめて我に返った。両手であらわな肩を抱いて壁ぎわに後じさった。そんな美奈を男は冷たく見すえたまま突きとばす。よろけて手が宙をおよぐ所を強引にひきつかんで前手しぼりに縄をかけようとする。縛られる——おどましさに美奈は悲鳴をあげていた。

「ナ、なにをするのっ！ やめて、やめてったら」

蹴上げようとした足をすくわれて横ざまに倒れた美奈は、床の上をころがりまわり、歯をむき出して抵抗したが無駄だった。

床にころがったまま、縛られた両手を顔におしあてて美奈は泣いた。歯をくいしばって嗚咽がもれるのをこらえながらのくやし泣き

だった。だまされた、まんまとわなにかかってしまった。あんな人間のクズみたいな男にかかって、このあたしともあろう女が。身もだえしても追いつかない後悔。頭の割れんばかりの腹立たしさが、とめどもない涙に彼女を追いやった。

その両手が不意にグイと引かれた。あわてて男の姿を探し求める間に、カラ／＼と滑車の音がして、縄がぐん／＼上に引きあげられてゆく。バランスを取ろうと膝立つ眼に、奥の方でハンドルをまわしている男がうつった。

美奈は悲鳴あげた。もがいた。その間も一寸々体が引きのばされて、やがて、身動きもならぬ爪先き立った姿勢で静止した。

「ああッ」

両腕と、脚のこむらが引きつれそうになって、ゆらりと体勢がくずれる。それが又、腕が抜けんばかりの苦痛を与えるのだ。男は相変らずポーカーフェイスで、そんな彼女を、小気味よげに眺めた。耐えられない屈辱に体中が火と燃えた。ともすれば、うなだれ勝ちになる頭をキツともたげて男を見据えさせているのは、美奈の胸の内部にある倫也への軽蔑と、長年奴隷の如くこき使って来た者に対する根強い自尊心だった。

「卑怯者。まともに向ったならなににもできないので、あたしをこんな所へおびきよせたのね。奴隷らしいたくらみだわ。下司根性よ」

「……………」

「これからあたしに復讐しようというのね。こんな下劣なやり方で日頃の恨みを晴らすというのね。ハハハ、……………おかしいわ。こんな事で、あたしに仕返ししたつもりなのね。卑怯の上に馬鹿よ」

息切れがする。とぎれそうになる言葉を、強いてはげましなが

なおも面罵し続ける。無言のまま突立っている男にヒケ目を見せてはならないのだ。怒りが羞恥を忘れさせていた。

「あたしがお前に何をしたっていうの。お前は、あたしの家に養われた。その分だけ体を働かせてつぐのうのが、あたりまえじゃないか。あたしはお前をありのままに使っただけよ。それに今更、復讐なんてバカ／＼しいわ。お前は、もと／＼陰険だった。人前だけはいさも真面目そうにしている、こんな事をするのもわかるじゃないの。この家だって、まんまと乗取ったみたいなものじゃないの。肺病で死ぬのがわかり切っている女に取り入って……」

パシッと平手打ちが飛んだ。

「言うな」

押し殺した声だ。倫也の顔色は始めて激した。

「いうわ、いくらでもいってやる。奥さんを殺……」

平手打ちが二度三度、往復した。目がクラクラとする。

「フン、お前にも、言われて恥ずかしいと思う気持ちが……」

今度は鞭が飛んだ。

「ヒッ」

美奈は眼の前が真暗になって、底知れぬ闇の底へ引きずり込まれていった。力の抜けた体がダラリとぶら下った。

四

「そうだ、淑子は俺が殺したんだ」

ガレージの二階にしつらえた自分の仕事部屋にかけ上った倫也はソファにひっくりかえって、うめいた。地下室にぶら下ったままの美奈の事など忘れて、死んだ妻の面影を追っていた。

「不仕合わせな方。あなたはおんなというものを御存知ないのね」
いつだったか、淑子は手紙で俺をなじった事があった。俺は人生の半分しか知らず、他の半面をひが目で見て過して来たのだ。俺は母を知らない。母性愛を知らずに育った男は、女についてその愛について不具者となる運命を背負うのだ。

「あなたは人と人との関係を支配と被支配の関係でしか御覧にならない。愛というものが、おわかりにならないのね。女が、すべてを捧げつくす愛というものが……」
「……」
毛を伏せる淑子だった。

あれは、もう二人の仲が大分進んだ頃だったろうか。大学を終えて一人立ちになったという自信と、美奈から離れて一人住いをするようになった解放感が、俺に何か新しい力を与えてくれた時期だった。それでも、はじめは社長の一人娘というひけめがあったのだ。それを、しんぼう強く取りのぞいていくくれたのは外ならぬ淑子だった。彼女によって俺は自分の心がどんなにゆがんでいたかを覚って行ったのだ。さなきだに愛のうすかった俺が、春の若々しい芽生えをあ的美奈によってつみ取られ、奴隸の枷を、どんなに深く心に烙印されていたかを覚って行ったのだ。

その下着に顔をうずめる事によってしか満たされなかった美しい女性へのゆがめられた愛着が、はじめて、まともに受けられたあの日。俺ははじめて、美しいものを支配する力を持つ男性となったのだ。

この小鳥の様にふるえて、今にもくずおれそうに、なよ／＼とした女が、この俺を——男の俺を、あんなにまでしいたげて来たのか。
「苦しいわ、ね……」

あえぐ息にさえ陶酔の色濃い淑子だったが、この俺は愛も忘れ淑子さえも忘れて男の力に酔っていたのだ。

「お嬢さん……」

「いや。淑子って呼んで……」

こんな可愛い動物をひたすら御主人と仰いでいた俺に涙が出た。腹が立った。

二人の結婚は周囲から嫉妬と冷笑と羨望を持って迎えられた。社長の一娘、しかもそれが病弱とあったのでは、それと結婚する男の心底は見えていけると世間は見たのである。無理もない事だった。しかしそれが大きな誤解である事は、この結婚を最も強力に押し進めたのが、外ならぬ淑子の父である事を見ればわかる。親一人娘一人の淋しい家庭で、ともかくも現在まで、主婦として華やかな社交の場にも出ずにつくして来た娘に、少しでもなくさめを、父の愛のあかしを与えてやりたいのは親心だし、本人としても、ここまでするまで築き上げて来た事業を継ぐに足る人物がほしいのは当然の事だった。この二つを満し得る者として倫也が当然のように養子に迎え入れられたのだ。

春四月、華燭の典をあげた新郎は二十四才、新婦は二十才だった。二人が知りあって一年足らずの事である。こんなに挙式が急だったのは淑子が病気のせいだった。

肺結核が高校時代から彼女の胸に巣食っていた。生れつき丈夫でなかった淑子は、同じ胸を病んでたおれた母から、その病苦を受け継いだのかも知れない。それとも天は佳人を薄命に終らせて、人生の無常を啓示しようとしたのだろうか。

そこで不可解なのは淑子の態度だった。彼女は自分の命を永らえ

ようとする努力を一切すてきっている様に見えるのだ。現代の事である。しかも貧乏というのではない。万全の手を打てた筈である。しかも彼女は入院をこぼみ、更には床に臥せる事をさえ拒み、わずかに薬を用いる事を肯んじたのみだった。それは、あたかも天が与えた命に殉じようとしているかの様に見えた。そして、ひたすら家にあつて父の世話に、家事のきりもりに心をくだくのだった。彼女の結核が伝染性である事を知らないのだろうか。愛する父を、そしてやがては自分の半身となるべき夫を、自分の口から吐く病毒だけがそうとする女の心を誰が知り得よう。父の方がサジを投げた。そして、我が娘ながら神々しい程の美しさに何か慄然とするのだった。

倫也の忠告も勿論、聞き入れられなかった。

「さぞ、わがままな女とお思いでしょうね。あたしのことを思っ下さるお心は、ほんとうに有難いのです。でも、どうかこれだけはあたしのたった一つのわがままとゆるしてください。あなたやお父さまには、こんなもの位、はねかえす力があると、あたし信じております。だから、あたしは、もう何もおっしゃらないで、おそばに置いてほしいのです。そして、あなたの愛におぼれ死んでしまいたいのです」

それから、ハッとするとほど厳しい眼でつけ加えた。

「ひとのことなんか、どうでもいい。とろ／＼燃えるなんてイヤ。大きな、まっかな火の玉になって一時に燃えつきてしまいたい。美しい花のしおれるのを見るのはイヤ」

胸をおかされた者特有のすき透る様な白い肌の内側には火と燃える情熱があった。その火は永遠の命を一瞬にと燃えさかった。病菌

でさえもが、その燃焼を助けるかに見えた。

淑子が、手を取る倫也に感謝のひとみで応えながら、満ち足りた魂を昇天させたのは二年足らず後の事である。淑子の生き方は正しかった。彼女は死ぬまで消えない愛の思い出を、倫也の心に刻印したのだ。愛による支配と服従——淑子は自己の全生命をあげて、それを実践したのではなかったか。そして倫也は淑子に手を引かれてはじめはおず／＼と、最後には大きな信頼と感激をもってそれを体験したのではなかったか。倫也は淑子を通じてはじめて新しい生命と力を獲得したのだ。

いつて見れば、淑子は倫也を「男」にするために神が遣わした天使だった。彼女それを自覚していたかどうかは知らない。恐らく、おのれの美のひたすらな開花と燃焼とをエゴイスティックに追求したにすぎなかったであろう。だが倫也にとっては天啓にも等しかった。天使は風をまいて降り、倫也ともども自らを焼きつくして去った。一人後に残された倫也は、眼覚めた心を抱いて呆然と立ちすくんだ。

「淑子よ、お前はどんなに残酷な事をしたのか知っているのか。僕に新しいいのちを与えたのも束の間、そのいのちでお前をもっと強く、もっと深く愛するいとまもなく死んでしまった。残された僕は、いったい誰にこのいのちを燃やせばいいんだ」

倫也は、空しさの慰めを仕事に求めた。

養父を助けて会社を切りまわす腕の冴えに「虎の威をかる」と負けおしみの陰口も一部にはあったが、一般には畏怖と尊敬の眼で見られるようにさえた。それと共に、倫也の仕事に対する熱狂ぶりも豊富な話題をまいた。よくドライブもした。そんな時、きま

って不思議がられるのは、倫也が女性を車に同乗させているのを見た事がないということだった。三Cの雄たる自動車は、とかく女を誘惑する道具と見られ勝ちな昨今にしては珍しい事だと人の目をひいたわけである。

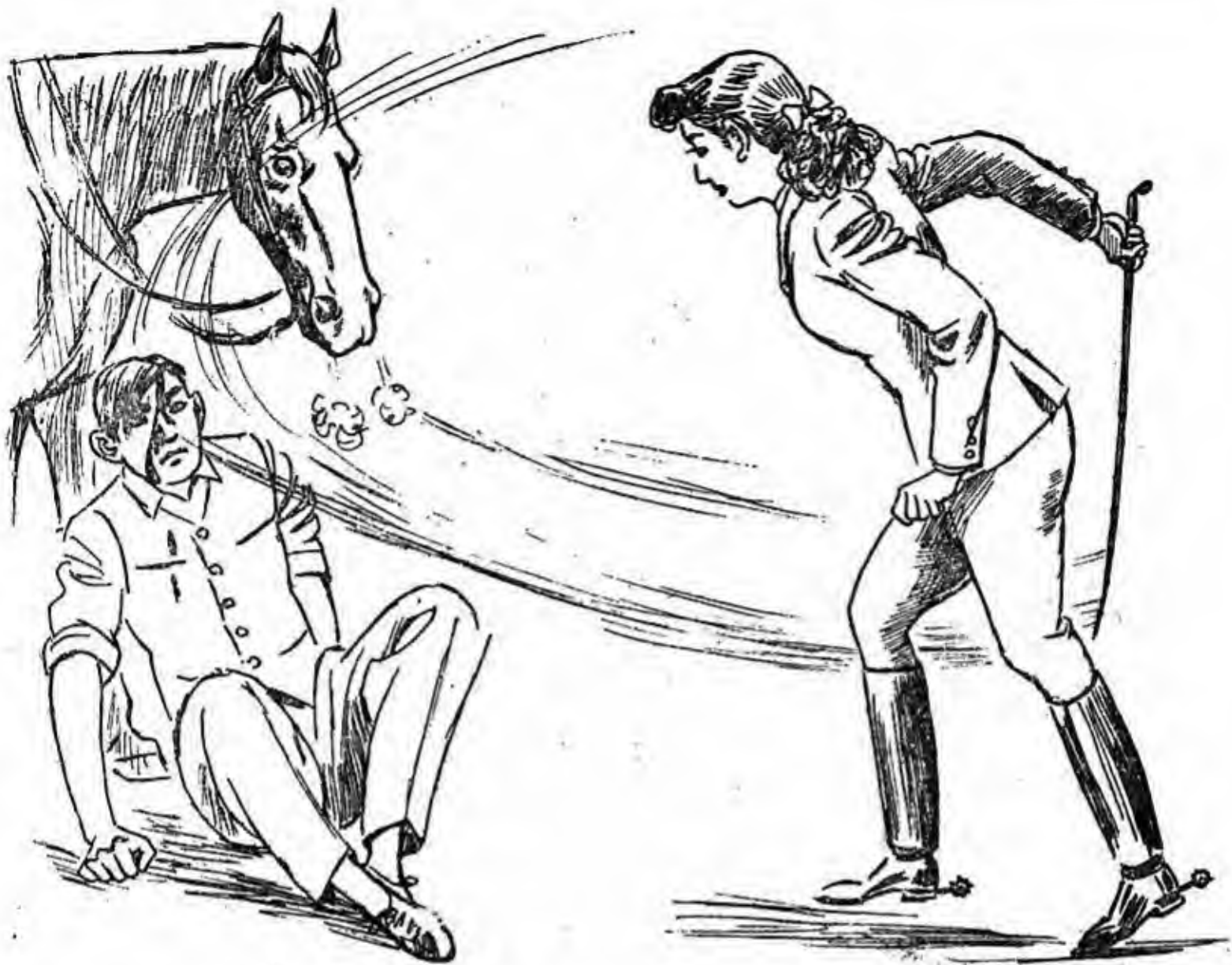
そんな女に対する潔癖さが倫也の人望を高める一因ともなったのだが、倫也にして見れば、下心あって集するつまらぬ女どもに、淑子が死をもって覚ましてくれたこの尊いいのちを燃したくなかったのだ。

倫也は広大な屋敷の片隅に忘れられていた物置き（養父は戦時中、その地下室その他に多量のガソリンを隠匿して、戦後それを資本に産をなしたのだった）を改造して、ガレージ兼用の居室を作った。本館にも勿論、自分の部屋はあって、会社の仕事などを養父と共にそこでやるのだが、それ以外の時間はこの一角で引きこもって過すことが多かった。

ガレージの広さは大型車、四台を楽に入れる位はある。しかし中に入っているのは塗りの剥げた中古車ばかりである。勿論、最新型のビュイックも一台あるのだが、これは、もっぱら養父が使うだけで、本館の近くの別な車庫に入っている。いわば、この一廊は倫也のたてこもる城なのだ。

倫也は中古車をいじくりまわして、自分の思う通りのものに仕立てあげるのが楽しみなのだ。ピカ／＼にみがきたた外国車を楽しまわす趣味は彼にはなかった。いかにも倫也らしい。

その頃、美奈の父が死んだ。高校から大学まで我が子のように育てて来た倫也が、一人前になった途端に他家の養子となった事さえ、何の不平ももらさなかった彼だったが、さすがに娘を一人残し



て逝くのは心残りだったのだろう。倫也に後事をたくする遺書を残していた。

「お前が美奈をどう思っているか、わしは知らぬ。しかし、美奈がお前をどう思い、又お前が家に居た時、お前をどう扱ったかということは薄々ながら感じもし、他人の口からもそれとなく聞いている。お前が家に居る間、その事を知らぬふりをしていた事は、ここに重ねて詫びる。一人娘を叱れぬ親馬鹿とさげすむのもよい。しかし、一言云わせてもらえば、（おそらく現在では、そんな事はないとは思うが）お前の美奈に対する理由のない卑下が、あの子をそうさせたのだ。お前はどんな所からして奉仕の気持を、服従の気持にすりかえたのかわしは知らぬ。お前がわし達によくつくしてくれた気持が奉仕であった事は疑わぬが、それが美奈に対してだけは服従の気持だったのではないかと、わしは見ている。美奈の後事を託するのは、お前しかない。美奈にとってはお前一人が身寄りだ。どうしろこうしろという指図は一切残さぬ。すべてをお前の裁量にまかす。美奈の将来をお前一人に賭ける。先に書いたわしの皆さんの観察が、何らかの暗示をお前に与えたとすれば、わしの目論見は当たったわけだが……」

美奈の意志があったにせよ、養子も迎えずに終った父の心情は、倫也に託するものが如何に多いかを物語っている。これは倫也が生涯をかけて解決すべき問題だった。倫也の生き方が美奈の幸不幸を決定するのだった。

倫也には、これを拒否する事はゆるさなかった。否、

倫也自身にとっても美奈との対決は早晚、起らねばならぬ問題ではなかったか。

それにしても、美奈の気持を無視したような父は何を意図したのであろうか。父の死後、美奈の態度を見ると、倫也の指図を受けよと父から聞いていない様な風なのだ。はじめは何しに来たという顔だった。勿論、倫也の方も、お父さんに頼まれて——などとは、おくびにも出さない。それでも後になると、身近かな者の気安さからいろ／＼相談を持ちかける様にはなった。しかし、どこまでも使用人だという態度を変えないのだ。倫也は黙って為すべき事をした。ただ彼女の言うままに。

遺産相続、その他のごた／＼が、ひと通り片付くと、その方が気楽だと言って、美奈は広い屋敷を他人に貸し、アパート暮らしをはじめたのだ。贅をつくした高級アパートで、一生暮しても困らないだけの財産をかかえ、美奈はしばらくブラ／＼していたが、それにあきたと見えて、乞われるままにファッション・モデルを気ままにやりはじめた。

無論、美奈をめぐる男の噂は多かった。しかし、不思議にそれが長続きしない所を見ると、あるいは、根も葉もないゴシップに過ぎなかったのかも知れない。そして倫也を未来の夫に擬する世間の風評の高い中に、それを知るや知らずや、美奈は時々倫也を呼びつけては、何かと雑用を言いつけた。

五

倫也はソファから起き上って、血糊でこわばった顔を洗い（このガレージには生活に必要な設備はすべて、ととのっている）着替え

をした。デニムの作業ズボンにランニングシャツ。学生時代サッカーで鍛えた隆々たる筋肉が逆V字型に引きしまって、浅黒い体に真白なシャツがいさぎよい。瞳が暗い情熱をたたえて燃えている。

今こそ亡き恩人に託された事業を執行する。今まで秘めて来た意志を、この一週間に爆発させて、自我の全き達成を目指すのだ。淑子を通じて体得した男の力が、かつての汚辱の主、美奈に戦いを挑む。

復讐ではない——と倫也は考えている。これは、もっと深い底にある原始的な本能に基く。相反する性格を持ちながら相寄らねばならない、雄と雌との宿命的な斗争なのだ。倫也は、すでに幸不幸のことなど忘れていた。

倫也が立ち去ってから、どれ位たったろう。とてつもなく長い様にも思えるし、つい先だっただけの様な気もする。もう両手は、しびれ切って脚は棒の様だ。失いそうになる気の張りが、ギリリともみ込む様な腕のつけ根の痛みで引きもどされる。

何を考える余裕も持てず、理不尽なと思う怒が、苦痛を反応する頭にひらめくだけだ。涙をおさえる事が美奈のできる唯一の抵抗だった。

突然、重い扉を開ける音が響きわたって、美奈はハッと身をこわばらせた。ラバーソールが、ピタ／＼と近づいて来る。浅黒い長身が前に立った。沸き上る怨みの眼差しを見返す眼は、意外に明るく落着いていた。

「待たせたね。これからどうするのか、知っていた方が君も僕に協力しやすいだろうから、それを話す。今日から君を僕のペットとして飼う事にした。名前が人間のままじゃおかしいから、今後はシロ

と呼ぶ。もつとも、後で身体検査をした時、名にふさわしくない肌色だったら変更するかも知れないが……」

美奈——シロは何のことかまだ納得がいけないのかポカンとしている。

「ペットである以上、一切、飼主に対する反抗はゆるされない。ひたすら御主人の命令に服し、更に進んでその意を迎える事が大切だ。これまで人間として生活して来たのだから、はじめは辛いかも知れない。が、主人たる僕の意図をくんで誠心協力を惜まないでもらいたい。若し万が一にも反抗的態度があれば、分を越した行為として嚴重に処罰する。更に……」

甲高い嘲笑の音が、沈んだ地下室にはね返った。

「勝手なことを。いったい誰に断わって、あたしをペットにするなど——冗談にしても余り気がきかないわ」

倫也は美奈の悪態を薄笑いしながら聞いている。

「今の言動は厳罰に値するが、まあ、今の所、大目に見ておいてやろう。動物は着衣をまとわない。従ってシロも今後、人間らしい服装をしない事を原則とする。又、真にペットであるとの自覚に達するまでは、ともすれば反抗の手段となり勝ちな手足と舌の自由を制限する」

シロは、カッと熱くなった。拘束——猿轡——まるでそれが実現したみたいに彼女——もはや雌というべきか——は身をよじった。のどが引きつって声も出ない。

「以上、おおよその計画についてのべたが、明日よりの細部の日程については追って掲示することとし、今日はこれからのペットとしての入舎手続きを行う」

終って倫也はシロの方を、覚悟はよいかの思い入れでジッと見た。美奈は、あまりのことに憎悪をこめた冷眼で、むきになって見返すより他はなかった。ただ気丈だけで支えている顔から、血の気がスッと引いた。

冷酷に我が身に加えられてゆく暴虐に、美奈はカラ／＼に干上ったのどをヒイ／＼鳴らした。全身がカッとほてって、燃える様なのに、まるでオコリにかかった様に、芯からのふるえが止まらない。はずかしさに思わずアッと声をのむ。そんな女の気持に頓着なく、冷氣がヒヤッと背すじにまではい上って来る。

やがて、バラの花の散らしたパンティ一つという姿にされた美奈は、両脚をよじりあわせながら、ガックリうなだれた。

倫也は、突き上げて来る気持を押えつけるのに息苦しくなってきた。しゃべると上ずった声になりそうで、こわかった。そんな自分に腹が立って、我にもなく動作が乱暴になっていた。

落着け。動物だと思ふんだ。憎む相手に思い知らせるのに我を忘れるのか？ だらしないぞ。奥から椅子を持って来て腰を降す。煙草を一本吸う間に、どうにか自分を圧えることができた。

足元にしわくちゃんになっている華やかな衣裳を丸めて部屋の片隅に投げやりながら倫也はいった。

「もうこんなものにも用はないわけだ。汗を気にすることも要らず、よこれを心配することもない。こんなものを身に着けているから洗わなきゃならないことになる。いっだったっけ、僕に下着を洗濯させたことがあったな。家畜の身もわきまえないで人を使うというのも、こんなものを着ているからさ。サッパリしたろう。」

美奈の口元が美しく怒りを表わしている。

「やっぱり思った通り素肌は名前の通りだな。ペットにするには適当だ。フン、やっぱり恥ずかしいかね。今になれるさ。そうしている所は絶品だね、僕の眼に狂いはない。生れてこの方、ペットになるために体をみがいて来たんだものな。それを人に見せないというのは勿体ない話さ。特に君に一番つくした僕にね」

美奈は、うめきながら身もだえた。吐き散らしたい言葉に胸がふさがって、かえって声にならない。どす黒い屈辱感が胸に、しこりになって上下している。不覚の涙がはじめて頬に伝わった。それにすかさず言葉の鞭が飛ぶ。

「お嬢様と奉まつられていた時は、薬にたくも見られなかったな。涙か、いじらしいね。ペットになると違うものだな」

どっと堰が切れた。嗚咽と怨み言と、そして絶叫とが、ごっちゃんになって口が出る。倫也は椅子に腰を降して、そんな美奈の表情を観察し、心の内を推しはかっている。唇に勝利の色がおおいがたかった。やがて、

「もう十分、人間に別れを告げたる。体も、どこといって欠点がないようだから一応合格として、新しい装身具をつけてやろう。」

奥には、かねて準備がしてあったと見えて、次々と色んなものが持ち出された。縄、鎖、何かわからぬ革製品、等々。最後に四方と天井に鉄格子を植えた長さ一間、幅三尺、高さ三尺ほどの大きさの車つきの箱が押し出されて来た。

美奈は、ひたすら、おびえた。自由を奪われ、あまりの苦悩に舌さえままたらぬ今、残された唯一つの窓である両眼も、冷たい眼、嘲弄の色で見返されて、なすすべもなく戦きが身内にとまらないのだ。

棒の様に硬直した我身をかざっていた人間らしい装飾品——時計イヤリング、ネックレス等が取り去られたシロは、うなだれたまま畜体に墮ちる最初の刻印が身に加えられるのを待った。

両手首に五センチ幅の黒サビの光る腕輪。足首にもそれと同じものがはめ込まれる。何の抵抗もない。もう何時間吊り下げられている事か。今は易々とペットの身を飾る品々を受け入れるしかない。ネックレスに代る黒革の太い首輪が金色の鈴をきらめかせて、繊細な肌の乳白色に映える。

それでも、轡をはめられる時、シロは必死の抵抗を示した。自分の意志を表す手段がすべて封じられるという本能的な恐怖がシロを狂暴にした。が、それもはかない気休めに過ぎない。強烈な平手打ちでグラ／＼とする所をこじ開けられ、テコを差し込まれ、奥歯にわたされたパネで舌をおさえられた。パネは奥歯にネジで食い込ませてある。美奈は恥も外聞もすてて泣いた——いや、ほえた。それは現代のあらゆる美飾をはぎ取られて原始の姿に返った雌獣の発するにふさわしい声だった。

足輪に鎖がつながれ、五十センチの長さに歩幅を制限する足枷となった。両手をつりあげていた綱がゆるめられたと思う間に、手はうしろにねじあげられて錠された。首輪に細い金の鎖が取りつけられる。

体をくの字に折ってコンクリートの床に突っ伏してすすりあげている丸い肩を飼主の靴先が蹴る。

「さあ、今夜はこれ位にして晦へ入れてやる。歩くんだ」
さっきの檻が、それだった。下はマットレスになっていて、藁を敷いてある。その上へ、手足の自由を奪われたシロはころげ込んだ。

だ。パチッと電灯が消える。地下室を出る時ふりかえって見ると、うす暗くともった常夜灯に、ひときわ白いものがうごめいて、薬をガサ／＼鳴らしていた。

人間が安らかな眠りにについている時でも、家畜は夜もすがら寝もやらず、寝薬をならし続けることがある。まして、たった今、家畜の身におとされた美奈は、眠るところのさわぎではなかった。薬がチクチクと肌をさいなみ、後にまわった両手の節々が苦痛を送ってくるのだ。

体を伸す余裕は十分あったが、明日を恐れる心をどうして、のばすことができよう。今は涙さえ涸れた。こみあげてくるのは悔恨か憎悪か、それとも悲哀か、自分にさえ定かでない。ただそれをめぐって、思いが渦を巻くだけなのだ。そして折々雷のように体を引き裂く不安と恐怖。

屈辱感と恐怖心は強かったが、反抗心が失われてしまったわけではない。美奈は抗しようとして果されない無力感、もどかしさ、くやしさに涙を流す。

かなわぬまでも、羞恥に燃える心を変え、屈辱と憤怒にふるえるまなこを槍に変えて、意志の自由だけは守り通そう。レジスタンス斗士の心を心として、最後の勝利を我が手におさめるのだ。家畜は悲しく思い定める。美奈は眠ろうと努めた。手枷にひしやげた腕は、いつまでも苦痛を訴える。時間の流れを知らせるもの何一つない闇の中に、白い生物は展転反側した。

夏の夜とはいえ、地下室にやどむ冷氣に抗しながら、やがて美奈はあられもない姿態を薬に埋め、家畜としての初のねむりに落ちていった。

六

青ざめた頬に薬屑が一本ついている。乱れた髪には無数だ。長いまつ毛が重く垂れて、ルージュのはげた唇がこころもち開き、白い歯並びが光る。なめらかなシミ一つない肌だ。足は、すらりと、こきみよく伸びている。枷の黒と肌の白とのコントラストが妖美な雰囲気をかもし出す。

倫也は、まじろぎもせず見入っていた。眠っている美奈に心をゆるした眼つきになっている。心身両面に加えられた苛責に疲れ果てて、前後を忘れてシロは惰眠をむさぼっている。

地下室に朝はない。螢光灯が白々しい光をまき散らしているだけだ。だが地上では、すでに暗黒は去っていた。倫也は早起きしたわけではなかった。もう九時なのだ。日課をはじめの時間なのだ。

しかし飼主はシロの美しさに、しばし我を忘れた。つかみかかりめっちゃくやにしてやりたい衝動と、宝物のように大切にしたい欲望とが戦っていた。それが結局、一つのものであることを彼は気付かない。そして、憎い女に、てもなく魅かれる自分に腹が立つのだ。

倫也は檻の戸を開けると足を突込んで、靴のつまさきで美しい生物を、蹴飛ばした。シロはムッとうめいて、あわてて身を縮めた。あられもない寝姿を見られた恥かしさが、土足にかけられた怒りより先に反応した。羞恥に身もだえるひまも与えず、薬屑をいっぱいつけたシロは、鎖で檻の外に曳き出される。そして前のめりになって倫也の足もとにうずくまった。昨夜の決心はどこかへ吹飛んで、顔もあげられない。

「御主人様より後まで太平楽に寝るなんて、もっての外だ。明日からこんな事があつたらゆるさんぞ。御主人様の前に出たら正座するんだ。上体をまっすぐのばして胸を張れ。頭は垂れるんだ」

たたきつけられる罵声におびえてもぞく／＼と御主人様、定めめの姿勢を作る。盛り上った胸部だけが、屈辱の姿勢に反抗するかの様にツンと上向きにとがっている。

それと向いあつて倫也は椅子に座を占める。

「今日は第一日から、今後の日課を務めてゆく基本的な動作を教える。ちょっとでも違反があつたら、罰は重いことを銘記しておけ。いいな。まず俺の前に出たら必ず今の姿勢をとる。顔をあげても、俺の顔をうらみがましい眼つきで見たら第一級の罪だ。その他反抗的な態度と見られる事は一切ゆるさん。動作ののろいことも罰に値する。仕事は特別な時をのぞいて、すべて口でやる。犬猫は手

を使わんでも用を足している。……」

倫也は声をはげました。最初が大事だ。内心の弱味を見せてはならないのだ。ともすれば叫びそうになる良心をおさえ、悪魔を呼び起し、自ら課した義務感に身をよるわねばならない。

一方、美奈は羞恥を殺そうと身を固くしながらも、不可解な倫也の狂気じみた行動に思い悩んだ。なぜなのだ。自分をこんなにまでしいたげるのは。男が女を誘拐し、その自由を奪う目的は、常識から考えてただ一つ、と思っていただけに、倫也の昨夜からの言動が解せないのだ。かつて彼女が倫也をこき使った復讐か、とも考えて見る。それにしては念が入りすぎている。これが倫也のやり方なのだろうか？

倫也の意図——自分をこんな姿に引きずり込んだその意図が判らないことが、今の美奈には最大の不安だった。一体、何に対して身構えたら良いのか。倫也は何もいわず、ポーカーフェイスを構えている。おろ／＼戸惑う心は無慈悲な強圧に、なすすべを知らず心ならずも服従してゆく。

「犬が御主人様の御気嫌をうかがう時は、尾を振ってじゃれつく。朝、檻から出されたらそれをまねる。犬の心を心としてやれ。さあやってみろ」



グイと靴が目の前に突き出された。美しい眉をしかめて、思わず身をさる。

「いや。そんなバカなこと。死んでもイヤ。」

ガンと靴先が豊頬を蹴った。カッと血がのぼる。うらみの眼が上を向く。それが倫也の眼をとらえるかと思えない内に、体はもんどり打って床の上に蹴倒されていた。

「痛いめを見ないと、どうしてもわからないらしいな」

不気味な低い声。

「こわろう。眼かくしをしてやるぞ」

黒い布が、もがきまわる視線をピタリ防ぐ。反対に唇がはずされた。

シロは暗黒の不安におののく。身を守るすべは、すべて奪われ、おそいかかる鞭に身構える事さえできない。逆に、今は悲鳴をあげ慈悲を乞うしかない口のみ自由とは。飼主の計算は微細にわたってしつように人間性の放棄を迫る。

倫也は幅広い鞭を選んだ。苦痛は与えてもきずつけない。

ヒュッと素振りをくれる。シロがあらぬ方に顔を泳がせ身を固くする所を首鎖を引く。重心を支えようとするところに、すかさず鞭が飛んだ。

「ヒュー——」

家畜としての第一声が咽喉をさいて、白い獣体がつんのめった。打たれた部分が見る見る桃色に染まってゆく。

第二、第三の鞭が所きらわすおそいかった。仰向けば胸部に、身を起せば肩に、そして背に。首鎖を引かれて動きを制せられた新畜は、床をゴロゴロころがりまわった。

「ヒュー……ウワッ」

恥も外聞もない。するどい痛みはないが、ペタッと吸い着くような革鞭は、骨の芯から痛みをつきあげて来る。それにコンクリートのとげが、もがきまわる肌をひっかく。

「ア、アッ——ゆるして。もう、よしてッ。ゆるして下さいッ。いうとおり、いうとおりしますから……もう……」

鞭が止んだ。

「よし、正座」

まだぐらぐらする目の前に、再び靴がさし出される。シロは、いきどおりを涙に変え、固く眼を閉じてそれに唇を押しつけた。それをじらすように靴先は左右にゆれる。腰の上にきっちり交叉された両手が、家畜に落ちた美奈の心境を物語って空をかきむしる。

やがてズック靴の布地を通して、なま温かい湿気が足に伝って来た。高慢な令嬢が生れて始めて流す涙と汗だ。倫也は胸の高鳴りを押し殺して、更に圧迫を加える。

「動作がにぶい。ちっともうれしじゃないぞ。何だ、そのヘッぱり腰は」

クーツとシロの喉が鳴った。泣き声をたてまい、少しでもくずすまいとせいてきた気持が遂に破れた。わーッと泣きくずれながら美奈は哀願の口調になっていた。

「お、お願いです……御不浄に行かして。あ、あれから一度もー。ネ、おねがいッ」

倫也の意図は的中した。鞭くらいで、あの誇らかな自尊心をくずす事はそう簡単ではないと思っただのだ。体の外からと内に内側からも責めるのだ。羞恥を伴って。屈曲させられた姿勢はそれを助け

る。思わず満足の笑みが頬に浮ぶ。ぐしょ／＼にぬれた顔を、髪の毛をつかんで仰向かせる。

「ここで絶対服従のちかいをたてたらゆるしてやる。いってみる、いえるか」

シロは刺す様な苦痛に美しいまゆをゆがめながら屈辱の言葉を自ら探し求める。その眼——かつては、やや、けんだかいきらいはあっても、美しさを自他共に認めていた眼が、今は涙にかすんで痴呆の様に空を見つめている。

「今後、わたくし……」

「畜生がわたくしだと？」

「……家畜、シ、シロは……ゴ、御主人様の御命令に……いっさい服従いたします」

「若し違反した場合はどうされてもかまわないと、つけ加えるんだ」

「若し、これに違反した場合は、わたし……イエ……シロは御主人様からどんな、……お、おしおきを受けても……不足は申しあげません」

せくりあげる涙はとめどもないが、不思議に美奈は胸が軽くなった。倫也から、よし、可愛がってやるぞ、と思ひもかけぬ優しい声をかけられ、頭をなでられた時には、何か甘い感慨さえ胸を突きあげて来るのだ。美奈は、なにがなにやらわからぬ思いに胸せまっとなおも泣いた。

「さあ、用を足すがいい」

シロは甘い感慨から、ハッと我に返る。

イヤ、イヤよ。いくらなんでもそんなことが出来るものですか。

彼女は戦った。内と外、体と心、意志と生理——いわば、あらゆる人間性と動物の生理が、この一瞬に自己の存続をかけて血みどろに戦ったのだ。

倫也は冷たくよそおっている。

真赤から蒼白へ幾度となく変色するシロの顔色。あがき続ける細い指先——そんなものを通して、すべてを予測し切って、しかもすましかえっている。

七

家畜シロ日課表

午前七時 起床、身辺の整頓。

午前七時三十分 朝食。

午前八時 食後の運動。

午前九時 運動一時間、夕食、御主人様のお相手一時間、就寝、

以後、運動一時間、夕食、御主人様のお相手一時間、就寝、

以上。

倫也とて遊んでいるのではない。夏のことから多少ヒマがあり社長の息子として、時間の自由が多少あるから、それをさいてやっているのである。事自分の生涯に関する一大実験とはいえ、本来の仕事をおろそかにする様な倫也ではなかった。そして、時間が、一人きりになる時間が、自分の今の実験に最も大切である事を良く知っていた。シロが日がな一日、あの地下室で何を思い、何を悟ってゆくか。自分は時々降りて行って、かきまわしてやるだけで良いのだ。

あれから三日目、だが三年もたった様に思える。今も檻の中で、所々シミやアザのついた体をちぢこめながら、長い長い時間をもてあます美奈である。普通なら、ちょっとしたよこれでも気になって石鹼の泡できよめる美奈である。それが今では全身にこびりついたごみや汗のしみも、さほど気にならない。いや、気にしている余裕などないのだ。それに比例して人間美奈も、頭の片すみに追いやられていた。それに堅く錠をおろして専ら動物としてのみ行動する事が最良の保身術だという事もわかって来た。こうして、倫也のいない間の時間に、その錠された人間性は自由を求めて狂いまわるが、やがて日一日と、それはあきらめにむしばまれてゆくのだろう。昨日は、汚物の入ったバケツを口にくわえて、上のガレージまで捨てに行くのを、あれ程いやがって鞭を喰った美奈だったのに、今朝は眉を悲しげにひそめただけで柔順にやったではないか。皿に直接口をあてて食物をむさぼるのを、泣いて拒んだシロだったのに、今朝は激しい空腹に負けて、外間も忘れてかぶりついたではないか。美奈はそんな自分を自嘲をもって反省する。それは、かつては倫也に向ってとぎすまされていた非難の刃が、今では自己に向けられている事を意味する。そして、それは自己をペットの環境に順応する様自らを説得しようとする悲しい動物的本能のあらわれでなくて何であろう。美奈は、自分が人間に値しないものだと考えていない。ただ、この悲運を如何にして巧みに切り抜けるかに腐心するだけだ。しかし、外から加えられる圧力が、やがては脳の髓まで浸透して、完全な人間性の放棄を迫るであろう。うとくと一時の安らぎにまどろむシロは、鎖を鳴して身をよじった。

もうこんな境遇になれたのだろうか。シロは倫也が帰って来たの

を知らずに、舌のきかない口から、よだれを流して寝込んでしまった。

主人をお迎えしなかった罪は重い。首鎖をつかんで引きずり出されたシロが、ゆるしを求めて主人の足にじゃれつき、唇を靴におしあてても、ゆるされなかった。

中世の西欧で、晒しの刑に用いられたのと同じ様な刑具が持ち出され、それに固定された。首と両手首が一枚の厚板にあげられた穴に、きっちりとはめ込まれ、その板の位置が低い為、どうしても膝をついて、体を折り曲げる姿勢になった所を、両足も別の金具で固定された。見るもみじめな姿だ。そんなシロは唇を外され、いやという程鞭打たれた。ゆるしを乞う悲鳴と、少しでも鞭をさけようとあやしくくねる態とは、心ゆくまで飼主の目と耳とを楽しませたに違いない。

そのままの姿勢でシロは、生れて始めて足指の味を、たんのうするまで味あわされた。足指で、ノールブルな鼻をいじくられた。今まで誰一人として触れさせた事のない美貌を足先で弄ばれたシロは、新しい家畜意識の許容を迫られて、あらためて泣いた。枷の板で首と手を固定されたまま、直立の姿勢に吊り下げられて、シロは、その夜を過した。

翌朝、地下室におりて来た倫也は、予期に反して意外に優しくかった。シロは責めをのがれた安心感に、枷を外された体を倫也にすり寄せて、じゃれついた。それは「誠意をこめて」といっても良い位だった。その上、朝食は倫也手ずからスプーンを取ってシロに食べさせた。シロは椅子の側に正座して食べさせてもらいながら、主人のもう一方の手が優しく髪をなでるのを、眼を細めて受けていた。

そして何か甘い感傷が胸にひろがって来た。

「意地を張るから痛い目にあうんだよ。ね、わかったろ。よしよし今日はいい子になっているから、このきたない体を洗わしてあげよう。ほら、美しい顔がこんなによれて、体中どろだらけだよ。ちよっと見てごらん」

シロは、つい甘い言葉に酔って、うなずいてしまってからハッとした。

いや／＼こんなあたしの姿を見るなんてイヤ。倫也さん（何と彼女は心の中で「御主人様」と叫ばずに「倫也さん」と、たしかにいった）ゆるして、おねがい。

倫也は、そんな事にかまわず、大きな洋裁店にある様な三面鏡を押し出して来た。

「さあ、いや／＼なんかしないで見てごらん。せっかく出して来たんだからね」

シロは倫也の言外にかくされた「見なきや見るようにしてやる」というおどしを、今までの経験から読み取った。

そこにうつった姿は、つい先だってまで有望なファッション・モデルの新人として喧伝されていた美奈だろうか。美しくセットされていた髪は油気もなくそそけ立ち、唇には朱の色も薄れて、顔中、涙と汗のシミだらけ。おまけに、さっき食べた飯粒まで、くっついてる。ドレスの胸あきを引き立てていた細く、程よく長い首すじに黒々と首輪がはまり、盛り上った豊胸も薄よごれている。シロはあらためて自分の実体を突きつけられ、声を殺して泣きむせん。我知らず倫也の胸に飛び込んでなくさめてもらいたい妖しい衝動をかるうじておさえながら――

「よし／＼泣くんじゃない。あんまり汚ないんで驚いたんだろう。今までは、クリームの泡から生れたように美しい、清潔なシロだったんだからね」

シロは、こらえ切れずに倫也の膝に突っ伏してワン／＼声を立てて泣いた。倫也の手がその髪を優しくなぞる。

「さあ行こう。おいで」

いくら甘えてもペットはやはりペット。首鎖を引かれ、歩幅を制限する足鎖を鳴らしてシロは地下室を出た。自分をこんな姿にした張本人が倫也なのを、シロは忘れてしまったのだろうか。泣いて甘えた胸のときめきが後を引いて、喜々としているかの様にさえ見えるのだった。

しかし、そんなはかない喜びも直ぐケシ飛んでしまった。今の今までバスルームにでも連れて行かれると思っていたのに、倫也はガレージから戸外へ連れ出そうとするのだ。シロは戸口に立ちすくんだ。

まだ午前中とはいえ、真夏の太陽はもう地を焼かんばかりに照りつけている。三日ばかりだったが、人工光線の柔らかさになれた眼はクラ／＼とした。

この日光の下に、あたしのこのみじめな姿を晒せというのか――忘れかけていた羞恥が再び全身をほてらせる。しかし、こんな家畜のためらいなど無視して首鎖が引かれる。陰の多い人工光線に、かすかに秘めていた羞恥が、あます所なく白日の下にさらけ出された。ジリ／＼照りつける陽光に汗を流し、頬をなぶってゆく微風に消え入りたいはずかしさにさいなまれながら、深くうなだれたシロの素足は、いた／＼しく砂利を踏む。

倫也は本館の方へと道を取る。シロは又、別な恐怖にとらわれてハッと足をとめた。

忘れた筈の誇りが、又々意識の底からほじくり出され、あばきたてられるのだ。

シロはペタリと土に正座して、御主人様の足に口づけし、何度も叩頭してあわれみを乞うた。さっきの優しかった倫也に一縷の望みをたくしながらか。

「バカ、甘えるのもいいかげんにしろ。主人の命令に逆らう気か。それも、お前に良かれと思ってやる事に」

鞭が鋭く背に鳴って、シロはよろっと立ち上った。

ああ、ダメ。もうダメ。もうあたしには何も残っていない。人間らしさを何から何までむしり取られて、本当に誇りも羞恥も認められない畜生になり下ってしまうんだわ。

実をいうと、家には彼以外には誰もいなかったのだ。養父は昨日から避暑に出かけて留守だし、女中たちには、俺一人ぐらい何とかなるから郷里へ顔を見せて来いと、ヒマを取らせてある。倫也とてこんな事を他人に見られたくはない。そこに考え及ばない美奈は、まんまと倫也の尻に落ち込んだのだ。

本館のポーチに面した広い芝生に出る。そこにプールがあった。倫也のいったのは、ここだった。

「さあ、久し振りだろ。充分、水につかれよ」

いいも終らぬうちに背を突き飛ばされる。そこは三米の跳び込み台の下で、背は立たない。アッと頭から落ち込んだシロは、不自由な手足に気も転倒して暴れ、悲鳴をあげた。これは水浴よりも水責めだった。

水をたっぷり飲んで、失神寸前に首鎖を引張りあげられる。大きく息をつく間もあらず、又ズブリと突込まれる。

やがて、唇まで真青にして、眼をツリあげたシロは、コンクリートの上に引きあげられる。肩がせわしく息をつき、水玉を陽光に反射して、ヒクヒクふるえている。飲んだ水を吐かされるのに、シロは又、ひとしきり悲鳴をあげた。

焼けつく日光に、やがて元気を取りもどしたシロは、今度は跳込台に追いあげられる。手を後に固定されたまま、口で梯子の鉄棒をくわえて重心をとりながら、鞭に背を小突かれて、ようやくにじり上った。

そこから又、突き落されるのだ。不自由な体は棒の様にグルグルと宙を廻転して、バシャリと水に落ちる。背を、胸を、そして腹をまともに水にぶち当てて、魂消えるばかりの悲鳴に咽喉を裂く。

最後まで手足の自由は解かれなかった。首鎖を引いても身動きすら出来なくなったシロが、激しい鞭に追いたてられて、ようやく地下室に入った時は、もう午後になっていた。

後に残されたシロは、もう何も考えられなかった。涙さえかれて壁の一点を白痴のような瞳でぼんやり眺めている。

八

翌朝の日課に降りて行った倫也は、自分の危惧が当たっていたのを眼のあたりにして、いささかあわてた。

やり過ぎたかな？

シロの態度、動作に弾みがない。おとなしく服従はしているが、まるで木偶の様に生氣がないのだ。これまでは自分の命令に対して

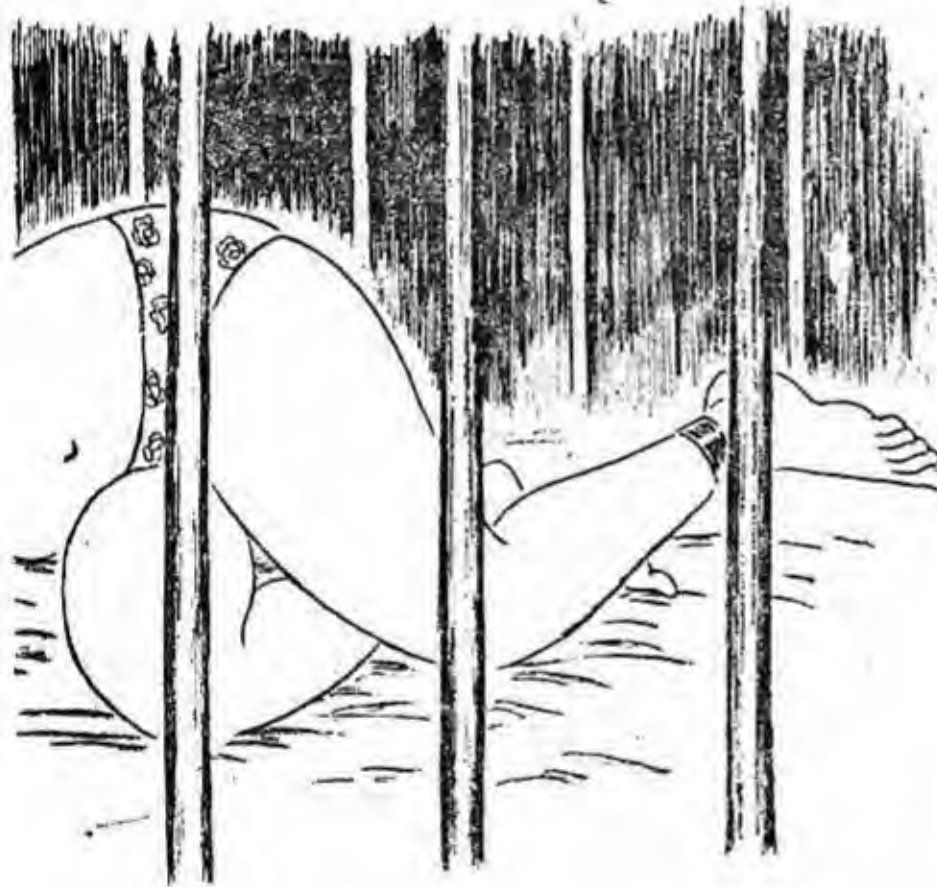
シロは何らかの精神的な反応を示していた。羞恥とか、怒りとか悲憤とか。そして、それを弄ぶ事が倫也の目的であり、楽しみでもあったのだ。何時か、今日の様なシロになるのを予期しないわけではなかったが、一方ではそれを恐れもしていた。そして、シロがそうなる直前が、彼女を解放してやる時期だと考えていた。

しかし、今からでも方法がないわけじゃない。倫也は、足もとにうずくまったシロの髪を優しく撫ぜながら考えていた。もう一つだけ残っている。

その午後、おそくなつてから会社から帰った倫也は、シロを芝生に曳き出して遊ばせた。ボールを投げては拾ってこさせる。芝生の上を這いまわらせる。果ては走高跳や巾跳までさせた。シロは背を陽に焼いて走りまわった。流れる汗にテラ／＼輝く粧いのない美貌は、女神像のそれのような美しさを思わせ、倫也はいい知れぬ憂悶に胸ふさがる思いだった。女神、美奈と家畜シロと、そして瀆神者である自分と――

ほんやり考え込んでいる御主人様を不審そうに見あげて、この迷いの主の雌は、つつましくその足元に正座していた。

夕食が済んでからシロは、今度は真正銘の、バスルームに連れて行かれ



た。そしてそこで、ここ幾日かの間ではじめて後手を解かれ、足鎖も外された。

残されたシロは、西洋式のバスチェアに身を沈めて、両手をバチャ／＼やって見た。手当たり次第に何でも把んで見た。

自由――

これも一時的な、はかないものだろうが、その一時を楽しみたかった。後手という姿勢が心の上にまで卑屈さを植えつけていた事をしみ／＼感ずる。こうしていると、何か胸がふくらんで来る様な気さえする。シロは美奈の心を取りもどして、すき通る様な我が胸を愛しげに抱きしめた。

浴槽を泡で一ぱいにして、そのなめらかな感触に肌を喜ばせながら、汗とあぶらを流した。普通の生活を送っていた頃は何とも思わなかった石鹸の泡の一つ一つの輝きが、宝石の様に貴重に思えるのだった。

いつか女性の本能に立ち帰って、美奈は自分の体をみがきあげる事に熱中していた。誰の為に？と聞いたら、おそらく彼女は狼狽して頬を赤らめたに違いない。無意識の中に御主人様――倫也を対象としていた彼女だった。

それにしても、と美奈は安逸を満喫しながら考えた。何故、こんな自由が突然ゆるされたのだろう。最前のあの

倫也さんの物思わしげな顔は何だったのだろう。いままでは恐い顔か、無表情をくずさなかった人なのに、あたしが前にいるのも忘れてしまったかの様に何か考え込んでいらした。何か心配ごとでも？あたしの事かしら――

ここまで考えて美奈は、ハッと自分の今の身分に思っていたり、甘い思いを叱りつけながらもポツと頬を染めた。

脱衣場に倫也が入って来た気配に、美奈はシロにかえた。あたふたと身づくろいをして御主人様の前にうずくまり、両手を、いわれぬ先に後にまわす。カチリと錠がおりた時には、覚悟

していたとはいえ、熱いものが、せくりあげて来た。

シロは人気のない廊下を伝い、二階へと導かれる。家には倫也と自分だけしかないという事は、もうわかっていたから、昨日の様な屈辱感にとられる事はなかったが、家の中を、後手で曳かれて行く自分をかえりみる事は、矢張り辛かった。地下室の自分のねぐらだけが、今の自分の唯一の安住の場所なのだと思う。

倫也は、さきほどシロが我から両手を後にまわした様子、自分の方をチラと見上げたうらめしげな眼差しに、満足とも失望ともつかぬ混乱した頭を、もてあましていた。相手がこれほど早く屈服した事も意外だったが、それにもまして、自分の心理の動きが、ともすれば予想外の方向にそれて行くのに困り果てた。屈服させるのが目



的だったのに、それが実現した今、ちっとも嬉しくないのだ。心の空洞が益々拡って行くのだ。

とある扉の前に来ると、それでも倫也は気を取り直してポーカーフェイスにもどった。こんな事をしたって、この心がどう満されるわけのものでもない事は判っていたが、最後のダメ押しのつもりだったし、これをしないとおさまりがつかない様な気分になっていた。先に立って扉をパツと開けた。

シロは薄暗い廊下のかかりから室内のまばゆさになれるにつれて、自分がどこへ連れて来られたかを覚った。そして、さっき何故自由に体を洗う機会を与えられたかという理由もわかった。それと同時に冷たいものがツーと背筋を走った。膝が感覚を失ってガクガクふるえた。

そこは倫也の寝室だった。いかにも寝心地の良さそうなベッドが壁ぎわにあって、枕もとのスタンドの明りで部屋全体がピンク色に染まっている。

倫也は先に入って、ナイトテーブルの傍の椅子にこちらへ向いて座った。光線の工合で顔は良く見えない。

敷居の所に立ちすくんだシロは、おろ／＼戸惑った。首鎖は引かれず、自由意志にまかされた恰好なのだ。倫也はじっとその様子を見つめている。シロは、ふら／＼とその足元にうずくまっていた。

「さあ、元気づけの為に一杯やれよ」

テーブルの葡萄酒が、なみ／＼とグラスに注がれ、うつむいていたあごを持って、グイと上向きにさせられる。固くつむったまつ毛がふるえ、頬がこわばっている。無理に押し上げた口に酒を注ぎ込みながら、倫也はシロの震えさえ感じない程、自分も震えているのを知った。

涸れた筈の涙が頬を伝った。

思い切り泣いて、すがりついて慈悲を乞うて見ようか——いや、もう遅い。思い切って動物の身に落ちようか——いや、いや。

シロのもだえを半眼で見すえながら、倫也は酒には手もつけず、結果を待っていた。どういう結果でも良かった。何か起りさえすれば良い。震える両手を握りしめて気持を鎮める。

シロは夢心地の中に立ち上った。どうしようとしたわけでもない。ただ無言の倫也にせきたてられて動いたといった方が当たっている。その時はもう、酒の中に仕込まれてあった眠り薬がきいて来ていた。

九

暗い闇の底から浮び上る様に美奈は意識を取りもととして来た。家畜に仕込まれてからのクセで、両手を使わずに起き上ろうとすると床の下が柔かくへこんでよろけた。無意識の内に両手が体を支える。

ハッキリ眼が覚めた。手は自由になっていた。足も。あの不愉快な黒い輪さえも、あとかたなく消え失せている。そこで又、アッと声をのんだ。

あれから、あれからどうされたのだろう。

羞恥と不安がドットとおしかぶさって来た。しかし、どこも体の変調は感じられない。奇異の感とまじりあった安心感であたりを見廻す。

あたしの部屋だ！

では、みんな夢だったのか？ いまわしい悪夢だったのだろうか？ ベッドの傍には、あのスツケースがあり、そのわきに何か箱が重ねて置いてある所を見ると夢でもなかった様だ。

とび起きて、ブラインドをあげる。もう日は高く、強い日光がどっと部屋に入ってきた。時計は止っている。新聞受けを見る。

やっぱり——

矢張り、がっかりした。夢ではなかったのだ。あれは本当にあった事なのだ。いまわしい記憶がよみがえって来て、美奈はベッドに泣きくずれた。が、そのすすり泣きは甘かった。誰かに訴えるように、ひたすら泣いた。次第に気が晴れて行く様な泣き方だった。

思い出した様に、あの箱を開けて見る。剝がされ、土足に踏みにじられた筈のあの時の衣類だった。それがみな、キッチンと洗濯されプレスを当てて入れている。美奈は洗濯された衣類を取りあげて、かっとなを染めた。誰が洗ったのだろうか？

倫也は眠ってしまった美奈に一指も触れなかった。美奈のいましめを解きアパートに運んだのだ。

計画は完了した。それが成功したか否かは、まだわからないが、兎に角、やるだけの事はやった。自分の自我を回復し、美奈の父の遺言に示唆された事を実現するために、自分で最上と思う事をやっ

てのけた。後は美奈自身の問題だ。

だが、倫也の心はなぐさまなかった。あの計画半ばにして心をむしばみ始めた不安は、日を追って拡大するばかりなのだ。彼女に対する自我の回復は出来た。しかし、それは暴力によるものではなかったか。美奈は俺の暴力に屈したのであって、本当の俺、俺そのものに服従したのではない。愛のない征服の無意味さを倫也は今にして知る。淑子の場合は、愛の上に立った自我と自我とのからみ合いだった。それが今の場合に違ふ。愛のない所に何も生れはしない。今にして倫也は、古代帝王の酒池肉林や、その暴虐の、よって来る理由を知った。彼等は淋しかったのだ。そして今は俺も——

倫也は酒におぼれようとした。バーの女共など目に入らない。酔眼に浮んで来るのは美奈の美貌だけなのだ。いつしか、カウンターに酔いつぶれた倫也は、「美奈、美奈……」と、うわごとの様に口走っていた。

倫也は、この一週間の間に何時しか彼らしい愛し方で美奈を愛し始めていたのだった。そして、彼の苦しみは、むしろそれを認めまいとする意志——つまりめ意地との戦いに起因していた。

どうにか感のたしかさだけで車を繰って家についたのは、すでに午前二時頃だった。ガレージの二階の長椅子にドツと腰を落す。酔った頭には自尊心もなかった。美奈の愛がほしい。再び、学生時代の様にでも良いから美奈に近付きたい。しかし今となっては、あんな事があっては、どうしておめく顔と顔を合せられよう。

真暗な中にフト人の気配が動いた。それがツト倫也の方に寄ってその足元にくずおれた。倫也はギョッとしてスタンドをひねった。美奈だった。一週間前、倫也にとらえられた時の服装で、彼女は

倫也の足にすがりつき、紅くそまった頬を靴先にすりよせていた。倫也は吹き抜ける嵐の様な激情の中に、泣き出したい衝動を殺して、グッと美奈の、たおやかな肩をつかむと、ゆっくり引きあげて行った。

(終)

新人モデル大名刺判緊縛写真集

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みい)
敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 岩井 和子
略号(みは)
稚き柔肌にまといつく縄目は痛々しいまでに苛烈だった。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みほ)
縄と縛の祭壇に上ったいけにえは観念の眼を閉じていた……

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みと)
黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出した。

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 田原美佐子
略号(みろ)
初々しい裸身が縄で自由を奪われながらも美しい女体構図

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 平野 笑子
略号(みに)
艶やかな色香に満ちた餅肌も縄にくびられて哀れな表情……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みへ)
白磁の肌にしししと喰い込む妖しい縄の魅力……

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円
新人モデル 絹川 文代
略号(みろ)
身動きも出来ない後手しぼりと剥がれたズロースとは……



灸点哀歓賦

泉 辰之助

「御免」

と心易く格子を開けると、台所から娘のお葉さんが顔を出して、「まあ」といった表情をした。

そのまゝ二階の仕事場へ上りかけると、上から、一見して素人には見えない、バーのマダムかといった女が下りて来て、狭い梯子段で、すれ違った時、危うく此方がよろめきたくなった。

「やあ」と声をかけるなり二階に上り込むと茂平爺さんも、

「暫くですね、ようこそ」と、私とは年こそ

春日町から大塚へのバス通りが出来てから、もう十幾年もの歳月が経ってしまったが、この界限、一寸、横丁へ入れば、昔の「太陽のない街」が、そっくりそのまゝ、残っているといった所である。

灸点師、茂平爺さんが住んでいるのが、その横丁であった。

私は暫く無沙汰したので、足休め傍々寄って見ようと思いついて、植物園裏から歩いて来た。

違え、古い友達に逢えた嬉しさを、声音にまで響かせていた。

「もう一人、すぐです。ゆっくりして行って下さい」

見ると、中年の婦人一人と、その女中らしいのが一人、丁度その中年の婦人が衣紋をぬぎかけている処であった。

いゝ処へ来たものだ。中流以上の奥様風の女で、ことに後姿がメッポーいゝ。

灸の療治に來ているのだから、肌脱ぎにならない訳に行かないし、それかといって、余りブザマに、今の言葉でいえばドライに、パツと脱がれては興味が無い。何かためらう様な、それでいて、見せてやりましょうという様な自負心が窺える。そこが私には魅力である。

するりと着物を落すと、その背は、こんな美しい生きものに灸など据えるなんて本当に勿体ないと、飛び出して爺さんと女の間に割って入って、勘弁して貰いたいと思う様な美事さであった。が、勿論そんな馬鹿げた事は出来るものじゃない。私はカタズをのんで、じっと部屋の隅から目を据えていた。

茂平爺さんは無造作に、もぐさの小さいの

を腰の上、丁度、可愛いえくぼにも見える窪みの上へ置くと、何んのなさけ容赦もなく、線香の火をうつした。ブスッと燃え上る薄紫の煙り、真白い肌の焼ける臭い、その黒い一点をじっと辺りから強く押している爺さんの指先、目をすえて見詰めている私には、小さいもぐさの灰になるのが、かなり永い時間にも思えたが、又、余りにも早く消えて行った瞬間でもあった。

茂平さんは私の存在など眼中にないもの、様に、第二の灸を今消えた跡へ下ろした。又薄紫の煙がスーと上り始めて行く。丁度、五つすえると、今度はその右の位置に墨で印をつけ、小さいもぐさを置いた。

「今日やれば大分、楽になれますよ」

「お蔭様でこちらへ通い出してから本当に楽になりました」

「まあ、辛抱して通ってお出でなさいよ。貴女ぐらいの若さで、あちこち痛むなんてことは、チト早過ぎますね。旦那さんだって、可哀そうですよ」

女は黙っていた。

「私しやね、日露の戦争に、これでも行ったんですぜ……」

「今じゃ、こう老ばれてしまったが、若い頃は中々働いて来たんでさあ」

又、茂平爺さんの十八番が始ったかと思つた。

「今の大连、その頃じゃ、ダルニイといっていましたよ。そのダルニイで、ひでえ事があつたんですよ、日本の若い女が二人逃げ遅れて、露助に捕つてしまつたんでさあ。二人とも素人じゃない。満洲へ稼ぎに出かけた、よくいえば芸妓、マア酌婦といった処かね。年頃は二十一、二と聞きましたよ。それが驚きましたね。あろう事か、二人とも市中引廻し。ね、勿論かあいそうに両手を、こつちでいう高手小手にフン縛られて、首に太い縄をかけられて、露助やチャンコロの見物人がワイ／＼騒ぎ立てる目抜きの大通りを引廻しにされる光景なんざあ、思つても癪にさわるじやありませんか」

「そうして、さん／＼廻りものゝ見世物にして楽しんだ挙句、どうです、公園のライオンの餌食にしまったんですからね。二人とも逃げられないと観念していたんでしようが引廻しの時は、少しでも足が止まると、後から鞭でなぐられていたそうですよ」

「ライオンの檻の前に引張られて来た時は、二人ともビックリして気を失ったといふますよ。そうしたら今度は、その女達に水をブツかけたり、鞭で打ったりして、ようやく気がついたのを、檻の天井から吊り下げたんだそうです。一人は気丈な女で、しっかりしていたが、一人の女の方は気が狂ったようになっただけです。そいつを手を叩いて見ていた奴等は、本当に人間の面した鬼畜でさあね」

爺さんは、自分がその惨虐な処刑を目のあたり見て来たように上ずった調子で、しゃべり続けていた。

「それを聞いたら、もうジツとしていられますんや。大いに仇をとってやりましたとも」

第一、第二の世界大戦でも、敵愾心を煽るため惨虐なデマは敵味方の双方に乱れ飛んだものであった。

それにしても、奥様風の女は、流石に一言も声を出さないでその話が終るまで、爺さんのする灸の熱さをジツと堪えていた。

女中は心持ち顔を赤らめて、下を向きながら耳の方は話をさむぼる様に聞いていた。

「戦争と女、誰だって戦さは嫌さ。だが、女

がこんな時には一番可哀そうなものさね。今日はこの位にしてね、又と、しましようか。灸の方も済んだからね」

奥様と女中といった風の二人連れは、形を直して挨拶もそこ／＼に帰って行った。

「お爺さん、相変らず、いくつになってもスキものだね。あんな話をしていゝのかね」

「なあに、却って、あゝした話を女は聞きたがるものでさあ。時々、今の様なのをくさりしてやると、喜んでいますよ。その証拠にあゝやって毎日来るんですから不思議なものです。貴方はまだ気がつかないでしようが、あの机の上の小さい鏡さ、あれが丁度、療治されている女の顔を、よく映すので、こっちは何知らん風をしていても、ジツと灸の熱さを堪えている女の顔をゆくり楽しむ事が出来る仕掛けになっているんですぜ。エヘヘ……」

「おい、お葉、お葉。用があるんだ」

と娘を急に呼んだ。

「今日は大分、仕事をしたから御褒美に一本つけてお呉れ。丁度、旦那も来ていなさるし。もっと面白い話でも如何です？」

一人娘のお葉は爺さんの大自慢であるが、

正直まあ十人並という処か。しかし細君を早く失くした茂平さんには宝物である。

「有難う／＼。旦那、ゆっくりして行って下さいよ」

「お客は、さっきの様な年増の人が多いですか」

「エヘヘ……、近頃は女のお客さんが多くなつて。時々お出でなさいよ。中々いいのが来ますよ。他所では見られない素肌の美しいのが。今、流行りのヌードとか、ストリップとか、高い銭を出してまで見に行くことあ、ありませんや」

爺さんはチビリ／＼酒をやり乍ら、益々上機嫌になつて行った。

「旦那、お葉のを見ましたか。一つ、お見せしましょうか。彼女も、どうして棄てたもんじやありません。立派な女、一人前ですぜ」

爺さんは酒のさかな代りに、今度は自分の娘で私の眼を楽しましようとして来た。

「おい、お葉。お前、父つあんが灸をしてやろう。旦那の前だって、そんなに恥かしがる事はあるまい」

階段の途中から顔だけ出した娘は「まあ、いやなお父つあん」と叫ぶなり、かけ下りて

しまった。

「へエ、あいつも大分、娘らしゅうなッて来たな。旦那、しかし可哀そうなもんで、母親代りに毎日働いてくれるのに、映画一つ見るじやなし、自分の娘ながら、感心な奴だと思つてますよ。どうです、一度どこかへ連れて行つてやってくれませんか」

爺さんは、しきりに娘を連れ出す事を私に頼むのであった。

二

それから、時々爺さんの仕事場を訪ねる様になった。

灸は勿論、療治しに来るのに違いなかったが、女達にとつては、体を治し乍ら心秘かにマゾの法悦境にひたりに来るものも或はあったかも知れない。私は爺さんに教えられてから、白い肉付きのいゝ肌



にゆらめき上る薄紫の煙に魂まで奪われてしまった一方、机の上の小鏡に映る女の、ジツと熱さをこらえる美しさに見惚れるようになっていた。そして、我に帰った瞬間、フト子供の頃、母親に折檻されて、灸と線香から逃れようと、もがき廻った記憶が、よみがえつて来たりした。

お葉とも二、三回、映画と一緒に観に行ったり、彼女もその帰途には一寸、軽く一杯というところまでつき合つてくれる様にもなった。が、しかし、今日は映画などではない。爺さんにも承知させて少し遠出と、しやれたのである。

お葉は洋装より和服の方が似合うかも知れない。今日は、どんな装いで来るかそれも楽しみの一つだ。人

通りの多い大塚駅前では、立ってもいられないので、小さな喫茶店で落ち合う事になっていたが、煙草を三本喫ってしまっても仲々やって来ぬ。女の外出という手間どるものだがそれにしても何んと遅い事だろう。

しかし、彼女を待っている間に種々秘策を練って置けたのも、却って待つ身の幸福でもあった。

「ここ、ここ」と合図してやる。

彼女は一寸、汗ばんだ様子で、ポツと上気した顔をして近づいて来た。

「大分、遅かったね」

「だって、出がけにお父つあんが、あんまりひやかしたりするのよ」

成程、新しいスーツを着て、すっかりいつもと様子が変わっている。体の線が、やゝハッキリと見てとれた。

爺さん、この間「一つ、お葉のを見せましようか」と、妙に私の興味をそそっていたが、今日こそ絶好のチャンスというものだぞと、我ながらニコリとした。

「早く出ましようよ」

「遅く来て馬鹿に急ぐじやないか」

彼女も、今日のデイトを喜んでいるらし

い。先ず第一部はハイキングとして、万事はそれからであると考えた。……………

ウィークデイの故か、相模湖は緑の山々の間にヒッソリとして、湖の水も冷たかった。

広い湖面に浮ぶボートもチラリホラリ、軽く漕ぐオールの音が、ハッキリ聞えて来る程であった。

彼女も遊び疲れたのか、うっとりとして、小波の流れ散る影の行方を見つめていた。私は急に彼女が、いとしくなつて、彼女の方へ動いた途端、ボートがグラツと来た。

「アッ、危い」と、彼女は真青になつて私にしがみ付いた。

湖から駅までの上り道でも、私の手につかまる様にして甘えた。私は、もう躊躇せず、折よく通りかゝったハイヤーを呼び止めた。

車は東京の方へ向つて走り出した。もう湖は山の彼方に隠れようとしていて、彼女は楽しかった思い出を噛みしめる様に、振り返り振り返り眺めていた。

「運転手さん、そこを左へ」

車は国道を横に切れ、国鉄の線路を越すと急に道が狭くなつて、漸く車一台が木の間を縫う様に進んで行く。車の行ける処まで来て

そこで降りると、林の奥に鉱泉宿が一軒だけ立っている。美女谷温泉とは名前からして気に入ってしまった。

「御飯でも食べて行こう」

私は、ズン／＼先に立って歩いた。彼女は玄関に入るまで一言も口をきかなかったが、別に悪びれる風もなく、朝の時より大分、落着いていた。

「静かだなあ」

小川がサラ／＼と音を立てゝいるばかり。時季はずれか、川魚を味に来る風流人もいないらしい。

ストックキングの脚を少し投げ出す様にして彼女もグツタリとしている。早くこのストックキングも取ってしまったらいいのに、スーツも脱がしたい。私は、それからそれと、いろんな欲望の虫が目覚めて来た。それでも、私が洋服を脱ぎ棄てると急に気がついた様に、宿の浴衣をとって後に廻つてくれたりした。

「君も楽になった方がいゝよ」

「えゝ」

と、いったきり彼女は、モジ／＼している。

丁度そこへ、宿の女中が風呂場へ案内に来

た。

「サア、どうぞこちらへ。奥さんどうぞ御一緒に」

私は、彼女がどうするか、大いに興味をそゝられたが、却って私が先に行つてた方がスムーズに幕が開くと思つて、渡り廊下から風呂場の方へ下りて行つた。

熱海や箱根を見た目には、いかにも鄙びた浴槽ではあったが、コン／＼と溢れる湯につかっていると、このまゝ何も考えたくない様に気分が落ち着いて来た。

と、その時、ガラス戸に写る人の影、そうだからだつたと現実には引戻された私は、我ながら苦笑した。

珍しい川魚料理が、彼女の氣に入つたらしい。ビールを飲む手つきにも、すっかり氣を許した女の態度が現われて来た。

「お父つあんは、いつもあんな話しているの。うちのお父つあん、余程、交っているのね。そばにいと、私の方が赤くなつてしましますわ」

「人間いくつになつても、女の話、それも若い女がいじめられる話は好きなものさ。それ

はそれとして、君も時々お灸して貰っているの？」

「いやあね、そんな事お聞きになつて」

「だって、お父つあんが、いつていたじやないか。お葉のも一つ、見せましようかつて」「そんな事、いつまでも憶えているもんじやなくてよ。ね、それよりビールを、もっと飲まして頂戴」

「飲ましや、白状するかい」

コップにビールをついでやると、彼女はグツと美味しそうに半分ほど飲んだ。

「さあ、もう一杯だ」

と又、ついでやつた。

「時折は、お仕置にお灸をすえられるんだらう？」

「子供じやあるまいし、お仕置だなんて」

「嘘いうなよ、背中を見せてごらん」

と彼女を矢庭にグツと引寄せさま、帯に手をかけた。

「止して」と口ではいったが、却って私の心をかき立てるように、上半身を自分から私の方へ、もたせかけて来た。

「証拠を見るんだ」

と、わざと手荒く浴衣を引剥ぐようにする

と、どうした具合か、簡単にするりと肩からすべった。

「恥しいわ」

私は畳の上につつ伏してしまつたお葉の背から腰の辺りまで、それこそ宝物でも眺める様に視線を走らせた。ふっくりと肉ののつたなめらかな肌。そこにあつた、点々と黒い米粒ほどの小さい跡が。

「お葉ちゃん、僕にも一つ、お灸をすえさせてお呉れ」

と、いゝながら私は既に用意して来ていた道具を、洋服のポケットから取り出した。

女は、初めビックリしたに違いない。私は女の上半身を動かぬ様に片手で抑えつけ、片手でライターから線香に火を移した。もぐさも、震える手で白い肌の上にのせた。薄紫の煙りが、やがて上り始めた。とう／＼、願望の女の肌を焼いてやる事が出来るのだ。

「お葉、熱いか。熱ければこうしてやろう」

と私は、女のとけた細帯をたぐり寄せると女の手をぐっとネジ上げ、手首を縛つて、それを更に胸へ一廻りさせてしめ上げた。そうして今度は、ハンカチを女の口にくわえさせた。

(終)

黄色オラミ誕生

第四部

夫不二木真

1

前にも述べたように、このメリール国は、フェルネという若く美しい女王の統治する王国である。ほくに与えられていた部屋は、そのフェルネ女王が住む宮殿の内部の一室であった。

宮殿に住む———という、いかにも豪華にきこえるが、多くの部屋は、女王の起居する居間から、もっとも遠く離れた片隅にあり、窓は一日中、太陽の当らない裏庭に面して、一カ所ついているだけであった。

簡素で清潔で、決して住み心地は悪くなかったが、やはり、どことなくつめたい感じで、殺風景である。

その窓からは、庭の植込み越しに、厩の白い屋根がみえた。

厩といっても、いわゆる「馬」はいない。そこにつながれているのは、このメリール国の男性、つまり、オラミたちであった。

暗い石造りの建物の中には、およそ五十人いや、五十頭ほどのオラミが、鎖につながれてひしめいているのだ。

それらの車力用オラミは、宮殿に住む女官たちの公用外出のために、用意されてあるのだった。

必要が生じると彼女らは、これらのオラミを厩から引っぱりだす。そして、鎖を使って車につなげる。

哀れな男性たちは、腕のひじの部分から、胸、背中にかけて、金属製の帯をはめられ、首すじのところには、あらかじめ鎖をつなぐ環がついていた。

それらの金属製のタガは、すでに彼らの体の一部のように密着していた。

二頭立て、四頭立て、さらに八頭立て、十五頭立てというような大きな車に乗った彼女たちを、この国の男性たちは、皮鞭に打たれながら引っぱらねばならぬのだ。

ほくは毎日夕方になると、いつも窓からその厩の白い建物を眺め、その屋根の下にうめいている同性たちの運命を思った。

そしてさらに、日夜不安にさらされている自分の、将来の運命をも思ったのである。

「——イシヤマ、窓からなにをボンヤリ眺め

「ているの？」
背後で声がした。ぼくは、ドキリとして振り返った。
ウーナだった。口もとに美しい微笑を浮かべている。

「ええ、夕陽があんまりきれいだったものだから……」
ぼくは、ドギマギして答えた。
オラミたちに同情して、なんとか彼らの人権を取り戻すことを考えていた、なんてこと



は答えられない。

まして、この国から脱走することを考えていた、なんてことを口にしたら、たちまち処刑の広場へ連れていかれ、いつかの乗用車オラミ三百三十五号のように、鞭三百回のお仕置で殴り殺されてしまう。

「わかりました。あなたは、あなたのお国のことを思い浮かべていたのでしょうか？」

ウーナの声音は、からかい気味だった。

「いいえ……」

と、ぼくは首を横に振った。

「あなたのお国のこと、私も少し調べてみました。なかなか興味のあるお国ね」

といって、ウーナは意味ありげなふくみ笑いをした。

ぼくは、自分の故国の最近の事情を知りたかった。興味のある国、とウーナは言っただけで、どういう意味なのだろう。日本のニュースを、ウーナは何かで読んだのだろうか。

ききたかったが、ぼくは黙っていた。ちよ

つと意地になっていた。

この国の女性たちに嘲られるのは、もう馴れていたが、たまには、ほくだって、ひそかな抵抗をこころみることもある。

「日本という国は男尊女卑なんですってね。いくら東洋の端にある野蛮国でも、いまだき珍らしいわ」

ウーナの口調には、嘲けりがあった。

「とんでもない。男女同権ですよ。戦争に負けてからは、立派なデモクラシーの社会組織になっています」

と、ほくは答えた。が、ウーナは、フッフ

……と笑って、

「それは表面だけのことでしよう。そのデモクラシーの中身は、やはり、いまだに男の王様が尊敬されている、知性の低い、戦争好きの皮膚の黄色い島国種族らしいわ」

痛烈な皮肉を、ほくに浴びせるのだ。ほくには、返す言葉がなかった。

このころになると、ウーナとほくとの会話は、すべてメリール語だった。

それまで、ほくとウーナの意志の交換は、すべて英語でなされていた。ウーナは、このメリール国で、ただ一人の英語を解する女性であり、そのために、ほくの身柄はウーナに

預けられているのだ。

だが、ほくがメリール語の片言を話すようになると、彼女はもうほくに英語を使うことを許さなかった。

ほくは不自由だったが、これも仕方がなかった。

ほくは捕虜であった。

ウーナの口ぞえがなければ、ほくと坂井はこの王国に捕われた途端に、フェルネ女王の命令によって殺されていたのだ。

2

その夜、ウーナの部屋で、何かの祝宴が開かれた。

この国の高官であるウーナの部屋は、フェルネ女王の居室にも近く、さすがに絢爛、ぜいたくなものであった。招かれた客は十人ほどで、この宮殿に勤務する、かなりの地位にある貴婦人ばかりであった。

当然のことながら、みな若く美しい女性で室内は花が咲いたように明るく、艶やかだった。

ポリウムのある体軀の、胸と腰のまわりだけに、花模様をついた薄衣をゆるやかにまとい、ゆたかに白い四肢を、のびのびとソファ

に投げだして、テーブルの上の、さまざまな料理や酒に、うちくつろいでいた。

ほくが、この場所に呼びつけられたのは、実は、祝宴の途中からであった。

ウーナ付きの女官が、急に、ほくを呼びにきたのだ。

ほくは、すでにベッドに横になっていたのだが、すぐに飛び起きた。ぐずぐずしてウーナの機嫌を損じることには怖ろしい。

「ごめんください——」

ほくは、ウーナの部屋をノックした。

「お入り——」

ウーナの許可があり、ほくはドアをあけて室内に入った。

まず、うやうやしく一礼する。

と貴婦人がたが、ほくの姿をみて一斉にドツと笑ったのだ。

顔をあげたほくの眼に、前述の乱れ咲いたような貴婦人がたの、あでやかな光景がとびこんだ。みんな上機嫌に酔っていて、腕も脚もながながとソファにのびし、しどけないポーズであった。

彼女らが、若しもほくに一片の「男性」いや「人間」を認めてくれたら、すくなくとも行儀のわるい姿態を見せなかっただろうが。

いきなり笑い声をぶっつけられて、ぼくは眼がくらみ、胸が波うち、またオドオドと顔を伏せたのだ。

酔っている貴婦人がたは、その好奇の視線を、ぼくに向け、立ちすくむぼくに、短かい言葉を口々に投げつけた。

「おおッ、プーチ・オラミ！」

「黄色いプーチ・オラミ！」

「すてきだわ！」

「みればみるほど、珍種だわ。奇型だわ！」

「ウーナ、私、あなたがうらやましい！」

それは、ぼくに対する感嘆の讃辞だった。

ウーナに対する、羨望の言葉だった。

プーチ・オラミというのは、何度もいうように、愛玩用男性という意味である。

貴婦人たちは、この宴席たけなわの余興に突如、ぼくが出現したことを、手を叩き足を踏み鳴らしてよろこぶのだ。

「みなさん、お静かに……」

ウーナが立ちあがり、片手をあげて貴婦人たちを制した。その表情は、輝やいてみえるほど得意げであった。

「みなさん、ごぞんじのように、この黄色いプーチ・オラミは現在、私の持ち物になっていますが、これは、通訳という職務にある私

が、女王さまから一時的に預っているのにすぎないのであります……」

「そんなこと、前から知っているわ。それでも、あなた仕合わせよ。トクだわ」

貴婦人の一人が、口をはさんだ。

「だから、今夜このような席に連れてきて、私たちの遊びの相手をさせるといことは、じつは女王さまに内緒なのよ」

恩に着せるような口調で、笑いながらウーナがいった。

「わかりましたよ！」

誰かが、パチパチと手を叩いた。その拍手には、嫉妬の響きすらあった。

（そうか、おれは、この席での、なぐさみものになるのか！）

ぼくは、すぐ悟った。予期しないことではなかった。

ぼくは観念して、両膝を折り犬のように床へ坐つた。こういう恰好をすれば、彼女たちはよろこぶのだ。

観念することも、あきらめることも、もう馴れている。

たとえ表面だけでも、あきらめるフリをしなれば、この国では生命があぶない。

なぶりたければ、勝手になぶるがいい……

もうヤケだった。

「あーら、おもしろい坐りかたをすること」

「ほんと。よくもあんなに、器用に膝が曲ることね」

案の定、嬌声が湧いた。

ぼくが両膝を折って、ピタリと日本式に坐ったことが、おもしろいというのだ。犬や猿が芸をするように……。

このメリール国には、牛や馬がない。犬や猫もない。それらの代用を、すべて、オラミ、つまり男性どもが、つとめるのだ。

それらの獣畜の存在を知っているのは、英国生れ（と、ぼくは、ひそかに推察しているのだが）のウーナだけである。この国の女性の中で、ウーナだけが、純粹のメリール人ではないのだ。

ぼくは胸中ふかく、そこに一縷の望みをつないでいるのだが……。

3

だが、ぼくのひそかな期待とは逆に、ウーナは、完全にこの国の思想に同化しているようだった。

「——イシヤマ、立ちなさい」

無慈悲な声で、彼女は、ぼくに命令した。

「ハイ……」

ぼくは素直に立った。酔っている貴婦人たちは、ぼくのその立ちあがりかたがおかしいといつて、肩をゆすり両手で胸を抱いて笑いころげた。

「その壁際に立って、お前のそのからだを、みなさん方に、よくお見せしなさい」

「ハイ……」

ぼくは、ウーナのいうとおりにした。ぼくのからだは、ほかのオラミたちのように、腰布を巻きつけただけであった。

ぼくは、さらしものになり、貴婦人たちは、また口々にしやべりだした。

「ちいさい身体ね。ちよっと私とくらべてみようかしら」

一人の貴婦人が、ソファから立ちあがり、よろめく足どりで、ぼくのそばへ近寄ってきた。

ぼくは怖れて、あと退りした。が背後は壁だった。

「あんまりそばへ寄ると、黄色い獣の、ヘンな匂いがうつることよ」

誰かが、いった。また一同が足を鳴らして哄笑した。

ぼくの目の前に、薄絹で包まれた巨大な体軀が接近してきた。その白い皮膚から発散する強烈な匂いは、体臭であろうか、香料であ

ろうか。ぼくは、目まいを感じて、まぶたをとじた。

熱い息が顔に吐きかけられ、ぼくは眼をあけた。

ぼくの身長は、五尺三寸ある。日本人なら



ば、まず普通だ。

だが、メリール国の女性たちは、すべて、五尺七寸から八寸以上もある。

肩も腕も脚の太さも、たくましいと形容したいほどに、肉づき豊かなのだ。しかもなお女性としての優雅さを失っていないのは、みごとに隆起の胸部、ほそくびれた胴、巨大にまるく盛りあがった腰部、そしてすばらしく長い脚線を持っているからであろう。

ほくの前に接近してきた貴婦人は、わざとらしくクンクンと鼻を鳴し、

「ほんとうに、くさい。青くさいわ!」

と、大げさに顔をしかめた。

「このオラミは、肉を食べないで、野菜ばかり食べているからよ」

ウーナが、笑いながら説明した。

彼女のいう肉とは、食料用オラミのことである。

どうしてぼくが、そんなものを食べられるものか。共喰いではないか!

「だいたい、日本人というのは、肉をあまり食べない習慣なのよ。おもに、草の実を食べるんですって」

ウーナが説明した。

「草の実を食べるんですって? まあ!」

「下等な種族なのね」

「だから、栄養が足りなくて、胴体ばかりがあんなに長いよ。反対に脚がみじかくて、あの不恰好なこと……」

観念してはいるものの、こう侮蔑を浴びては、一瞬、ほくの血は全身に逆流した。

日本人同志の間なら、ほくの身体は、けっして卑下したものではない。だが、欧米人たちの中に混ると、やはり、みじめであった。

まして、このメリール女性たちの眼から見たら、たしかに貧弱で劣等にちがいない。

ぼくは、すぐまた、もとのあきらめにもどった。

(もっと笑え。もっと悪口をいえ。もっと、さげすめ!……)

ぼくは胸の中で叫んだ。罵声を浴びながら自虐のうずきがあった。

貴婦人たちの嘲罵は、なおもつづいた。

いや、彼女らに言わせれば、それはぼくをいじめる揶揄でも嘲罵でもなく、単なる批評にすぎないのだ。

彼女らの眼には、なにしろぼくは、心をもたない、一頭のオラミにすぎないのだから。

とにかく、ぼくは彼女らの酒のサカナであった。

「あの皮膚の色をごろんなさい。黄色というのかしら、褐色というのかしら……」

「ツヤのない、醜い色ね」

「そこが珍種の珍種たるところよ。こんなオラミ、めったにないわ」

「肌の色もそうだけど、それより珍なのは、あの顔よ。顔の形よ」

「そうね。四角いような、丸いような、平べたくなって、鼻が低くて、頬骨が高くて、歯が前のほうに反っているわ」

「髪の毛の黒いのは、なにかドウモウな感じがするね」

「でもね、この小さな身で、力は強いし、よく働くのよ」

と、ウーナが弁護の口をはさんだ。

黄色オラミを繁殖させ、この国の労働力をもっと増やすように計画したのが、このウーナだった。

いや、計画だけではない。すでにそれは実行に移されて、ぼくと同時に捕われた坂井はいま、特殊オラミ繁殖工場で、日夜、地獄にあえいでいるのだ。

「——黄色オラミはね、とても指さきが器用なのよ。あきらめが早く、したがって環境に順応する習性が強く、権威に対しては、卑屈

なほど従順なの。まずい食べ物でも、粗末な寝床でも、不平を言わずによく働くのが黄色オラミ。このオラミが増えれば、私たちの生活は、ますます便利に、快適になるのよ。いかが、すてきでしょう？」

ウーナは頬を紅潮させて、得意げに語った。

「でも、働かせるより、当分のあいだは愛玩用として、たのしみたいわ」

といった女性は、一座の中でも特に美しく立派な体格をしていた。長くのぼした金髪をふさふさと肩のあたりまで、なびかせている。

「サリー、あなたは、おうちでは、オラミをどんな使いかたをなさるの？」

と、その立派な体をもった女性に、ウーナは皮肉まじりの口調できいた。

「使いかたって、それはいろいろよ」

サリーは、うふふ……とふくみ笑いをして妖しい瞳で、ぼくをみた。それは妖しかったが、青い美しい瞳だった。ぼくは背すじのあたりが、ゾクゾクとふるえた。

「黄色さん、こっちへおいで……」

サリーが手まねきして、ぼくを呼んだのだ。「黄色さん」という言葉にも、すでにぼくは

無感動だった。「さん」という、ふざけた敬語は、ウーナへのお世辞のつもりだろうか。ぼくは、ぼくのご主人である、ウーナの顔色をうかがった。

サリーの命令を、きいてもよいでしょうかというお伺いであった。

ウーナが微笑で、うなずいた。ぼくはサービスのつもりで、思いきって四つん這いになると、おどけた顔をしながら、サリーの足もとに這っていった。

ぼくを見おろして、かん高い声でサリーは笑った。ぼくは、サリーの足に唇を寄せた。

つぎの瞬間、ぼくの首すじにサリーの足の裏がかかり、ぼくの身体は激しい勢いで、床の上に転倒した。

起きあがろうとするぼくの背中に、サリーの足がのって、ぎゅうッと踏まえた。

すごい力で、重たかった。動けなかった。一座の貴婦人たちは、どっと歓声をあげると、テーブルを離れて、一斉に、ぼくの周囲に寄り集まってきた。

室内履きをはいた幾つかの足の裏が、われがちに争って、ぼくの肩を、背中を、踏まえあるいは蹴りつけた。

「うう、うむッ！……」

ぼくは悲鳴をあげた。

息苦しさにあえぎ、仰むけになったぼくの顔の上に、こんどは誰かの素足の裏が、むんずとばかりに踏みつけてきたのである。

(未完)

臨時増刊号『青い廃院』 定価二百円(送共)

長篇サディズム小説の決定版、堂々二篇登載

弓沢俊二郎作、四馬 孝画

「青い廃院」

四馬 孝画廊(口絵)

○美貌の人

○美女誘拐

○苦悶する美貌

○屈辱の責め

○踊り責め

○廃院の中

○モデル責め

○救出

永山久美雄作、杉原虹児画

「与那国奇談」

サディストの夢を満足させる女ばかりの国に展開する一大ドラマ。

乞食非一読ノ

△変ったレッスン(表紙裏)

△受縄(目次裏)



Amazonen aus
"Das Magozin."
1927-28Jr.

アマゾン
女性騎手についての特集

独逸娯楽誌ダス・マガツイン誌の記事による

(一九二七—一九二八)

現代マゾヒズム芸術時評

—原 忠 正—

復刊第二百十項

独逸雑誌「ダス・マガツイン」より

「女性の乗馬」と「女性騎手」

について

„Die Dame als Jockey.“

Eine reudisportliche Betrachtung von
Paula Stuck. aus = DAS MAGAZIN

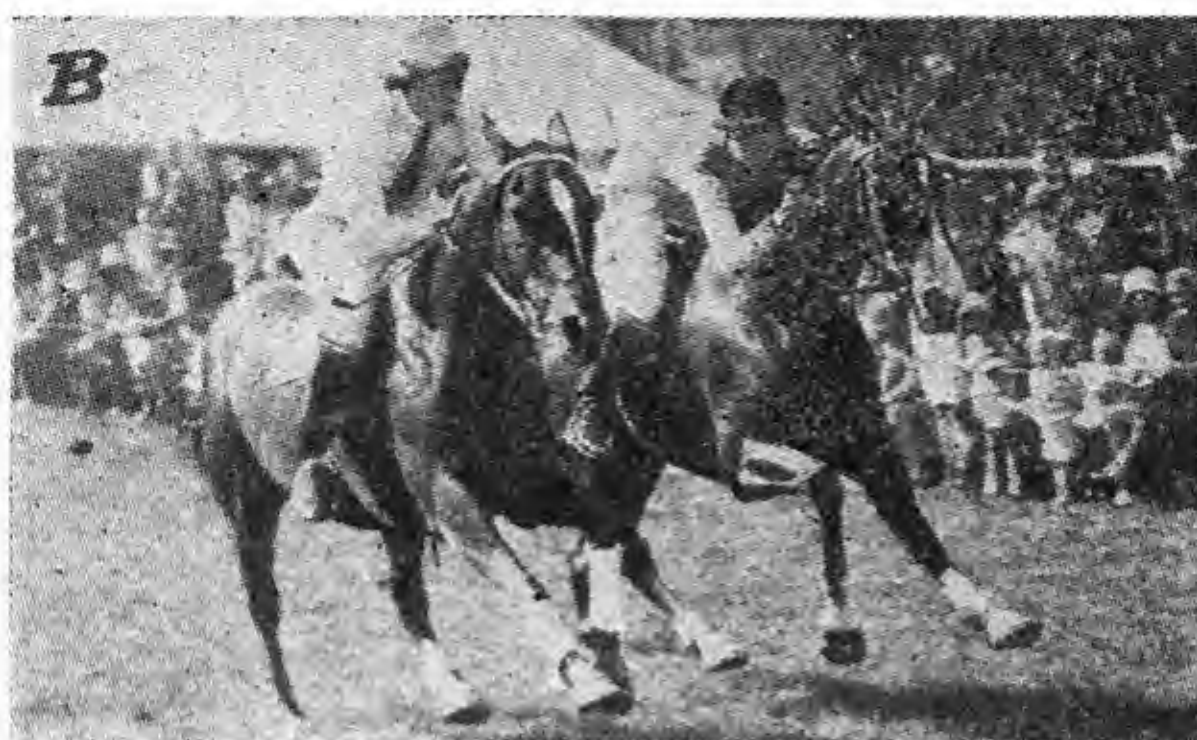
= Juli 1928 (Nr. 47)

最近、麻生保氏、馬場好夫の両氏によって
屢々誌上に見られるマゾヒストの立場からす
る女性の乗馬に関する記事は、私にこの可成
り長い頁数をその記事で埋める気持を起させ
た。旧来、「ダイアナ夫人」以来、本誌の読
者が、男を馬の代りにする態の乗馬にしか共
鳴を示さなかったのに反し、これ等、前記二
人の方の記事は、真正の乗馬、及びこれに関
連した品物衣裳について、紹介し、そこから
奔騰する想像力によってマゾヒズムを誘致し
ているからである。漸く、この様な情勢の下
で、始めて私が蒐集し、分類した数千点に及
ぶ女性乗馬に関する資料に基いた記事が、マ
ゾヒスティックな読者に迎えられるのである
う。

従って、私は今後、毎月必らず女性乗馬に

関する専門的な紹介を本欄に加えてゆきたいと思う。

初回に御紹介するのは、今日入手困難と思われる雑誌からのものである。ルドルフ・シユリヒテルII画家、長靴フェティシストとし



て有名。第一次大戦後、ゲオルク・グロツスや、エゴン・シイレ等と並んで独乙の頽廃を描いて一部に認められたが、夭逝した。IIが拠った「ダス・レエベン」誌や、ユーモア雑誌「ウー」(『Das Leben: UHU』)と並んで勢力のあった娯楽軟派誌「ダス・マガツイン」誌は、可成り突込んだ態度で偏向性愛者向きの記事写真を掲載しているが、ここで私が御紹介するのもこの「ダス・マガツイン」誌、一九二八年七月号通巻四十七号第四十六頁から第四十九頁に至る特集記事「騎手としての女性」(パウラ・シュトゥック記)

である。第一頁の左側、つまり題字の向側には、エアブラシされた女性騎手の写真(A)がある。この女性は職業的騎手である。即ち競馬用の帽子、上衣をつけ、乗り方も所謂モンキイ・ライディングと云う競馬(特に平場レスでの)独特の短の短い騎乗姿勢をしている。特に説明はないが、これは英国で今月も猶、行なわれている女性騎手による競馬の資料として珍らしいものである。四、五年以前に「緑園の天使」(原名National Velvet, 主演エリザベス・テイラー、ミツキイ・ルウ

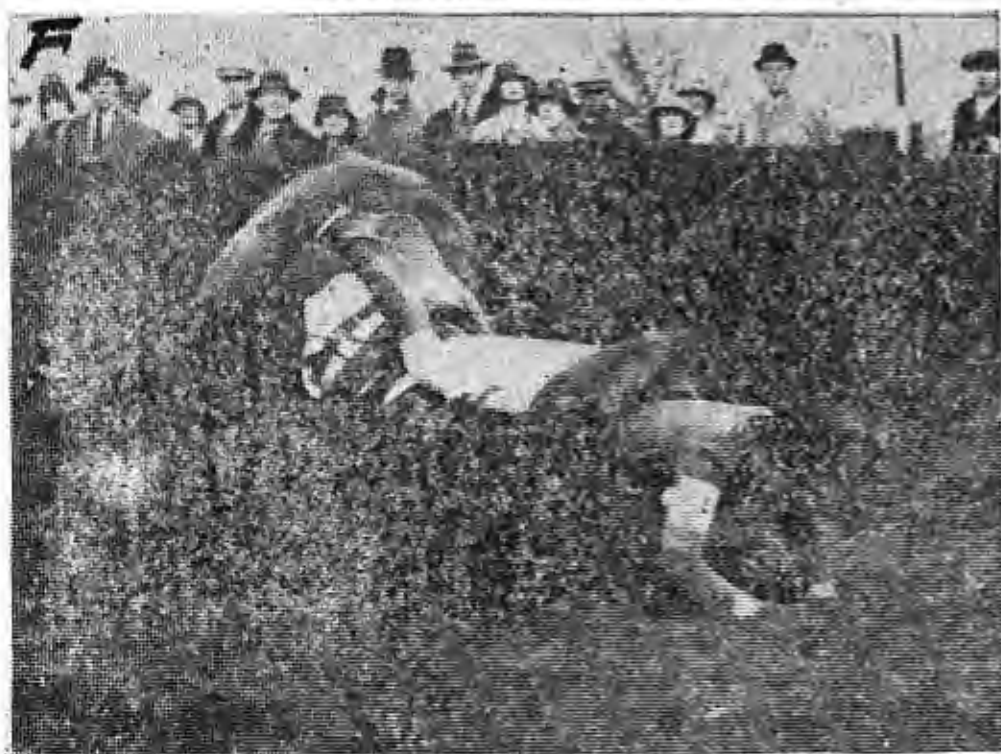


ニイ、パラマウト・テクニカライスタンダー(ド判)という映画の中で高名な美人女優エリザベス・テイラーが女人禁制の英国一の有名な競馬「グラント・ナショナル」に男装して参加する場面があったので、或は記憶している読者の方もあると思うが、非常に珍らしいものである。競馬の最後の部分での追込みが如何に残酷なものであるかは、恐らく大部分の方が御承知であろうと思う。但し、前記の映画では、全くマゾヒスト向きの雰囲気はなかったと覚えている。

この女騎手の写真の下方に、頁半分の大きさで「女性騎手による競馬のゴール附近の接戦」の場面の写真(B)が出ている。(原文説明 Knapp vor dem Ziel überholt.)この方は騎乗姿勢は、むしろオーソドックスな



馬術の乗り方に近いが、或は障碍を伴う競馬かも知れない。次頁の上半分には、英国の女性騎手による繋駕競争の写真(C)がある。繋駕とは二輪の軽い馬車を曳いて馬を走らせる特別なレースで、この場合は、只、速歩の



みが許されており、駆足を一寸でも出せば失格というレースである。しかも推進には、長鞭しか使用出来ないもので技術的にむづかしいものである。(原文説明 Englische Trabrennfahrerin.)この下に片鞍による女性競馬の転倒寸前の写真(D)がある。これは恐らく「ピーチャーの小川」の様に水濺を含む障碍レースのスナップであろうと思われる。婦人

用片鞍は、片側の腹を拍車で、他方の腹を長鞭で、同時に刺戟するもので、今日は古典的な馬術とされているが、一九二〇年代には未だに大部分の婦人は、この別名、横鞍 (Side Saddle) を使用したものである。(原文説明、Ein unfreiwilligs Exd.) 次の第三頁

目の上部には女性騎手による障礙レースの写真 (E) がある。これは恐らく英国での騎馬であろうと思われる。騎乗法は全く純馬術風のものである。その下に女性騎手の落馬の写真 (F) がある。(原文説明、夫々 Momentaufnahme aus einem Hürden rennen, :Der Sturz.) かつて米誌「スポーツ・イラストレイテド」(Sports Illustrated.) が同様の写真を天然色で掲載した。(一九五四年七・八月) 丁度女性騎手の

片方の長靴をはいた脚が馬の腹の下にもぐり込んで興味深いものであった。落馬、転倒等は其の後に来るべき、懲戒や屠殺への期待感と別に、それ自身が十分楽しめるものが多い。かかる緊急の場合には、女性には忽ち本性を露呈するものだから、である。



更に次の最上頁に馬術競技に出場した二人の女性の写真が出ている。(G及H) 上のは独乙の女性、下のは英国の女性のものである。(原文説

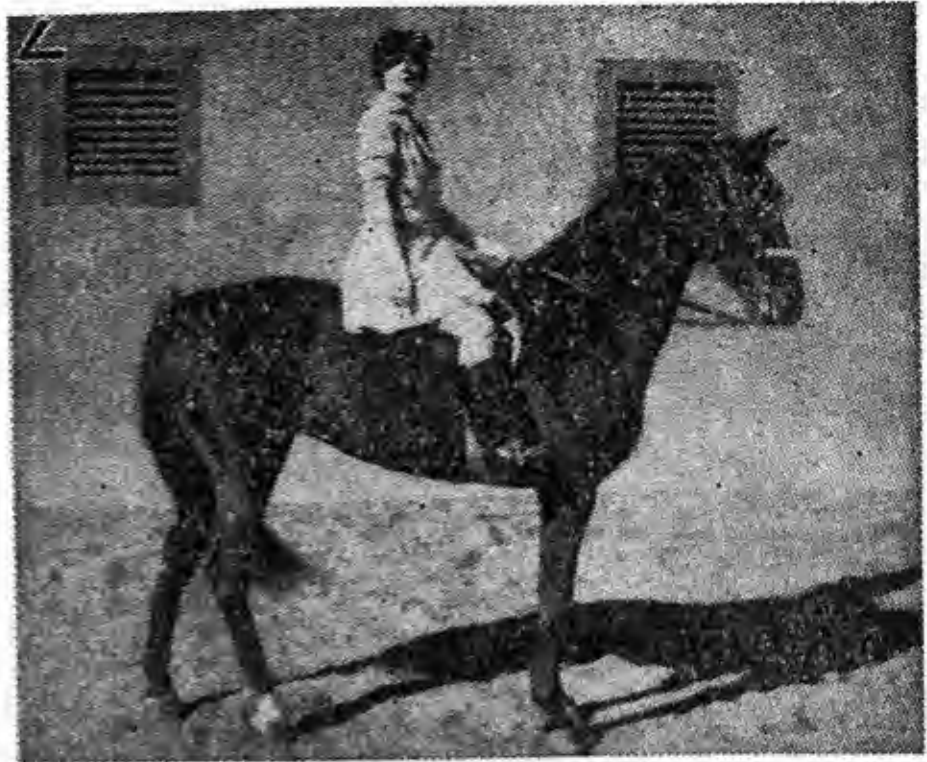
明 Konkurrenz beim Damen-Yagdr-pringen.)

ドイツ女性 (G) の方は意志的な表情で正面を向いており、英国 (H) の方は、向うをむいた馬の横に立って鎧革を合わせている処である。

この女性は極めて長い柄のついた拍車をつけている点に注意されよう。

右の様な各種の写真の間に説明記事があり最近、女性の間で乗馬が盛んになったという意味のことを書いてある。特に次に記す様な女性馬術家の名が出ているので、併記してお





Irngard von Opel: Kate Franke: Baro-
nin Annelies von Oppen hecin: Frau von
Barékow: Frau Beckel: Psinzessin Frie-
drich Siegiswund von Preussen: Frau
von Heynitz: Frau von d. Burg: Frau
Glalim: Frau Rau: Traulein Vierling:
Traulem Broschek: Fraulein Yurgen:
Fraulein Rasmussen,

次に同じ雑誌の一九二七年版、三月号、六二五頁に横鞍での散策中の婦人の乗馬写真二葉を掲載し、馬術についての小文がある。(原題 *Etwas vom Reissport.*)

又、同年一月号、三四二頁には、ここに掲げた様に二葉の写真掲げて(写真 K 及 L) 新旧二通りの婦人乗馬服を並べている(題名、及び説明 *Zwei Welten: Die Dame im Sattel im Jahre 1905 und die Amazone von 1927.*)

一九〇五年の方は悉くスカートで蔽ってしまっているのに対して、一九二七年には男性同様のキュロットと長靴をつけ、かつ、それ



を覆っていない点が目される。そして今や一九五九年度には、この上衣さえも短かく、多くはスウェーターを着て、ズボンの中に収め込んでしまう事と比べて興味深いと思われる更に同誌一九二七年四月号、七一〇頁には「馬背に跨って」と題する記事が発見される(原名 *Auf dem Rücken der Pferde—Hernaus-Smith.*)

七一〇頁の上部には、伯林郊外を乗馬する婦人を示し(原文 *Im Berliner Tiergarten.*) 下部にはメキシコ・シテイの公園でのメキシコ女性の朝の乗馬を示し(原名 *Morgenritt mexikanischer Schoren im Cheputlapac-Park, Mexico City.*) 七一頁には、スコットランドの狐狩りの夫妻の写真掲げている女性は手に犬追いの長い鞭を持ちトッパ・ハットでいるから恐らく横騎りの仕度であろう。(原名 *Hinter der Meute*



im schottischen Hochwald=Aufnahmen: Abbe.)

七二頁の上部には馬上に立つ女性を、下部にはロデオ・ガール(ニューヨークスタディアムでの実況)を示している。(a) (原名 Reiterkunststücken moderner Amazonen: Ein "Rodes-Girl" zeigt im New Yorker Stadium tallkühne reitervliche Vorführungen.)

七二三頁には珍しい写真(R)がある。クーデンホク・カレルギ侯夫人の乗馬服の写

真である。沼氏が手帖に詳しく説明した通りクーデンホク・カレルギ侯に嫁いだのは日本女性である。但し、この写真の女性は、或は彼女の長男の嫁であるかも知れない。(Goabin Coudenrove-Kalergi.) この写真の撮影者、ドーラ・ペンダ(D'ora Penda)は当時、ウィーンで高名な写真師。モードやストリップ紛いのものを始め、アブノーマルな人々のための作品も多い。彼の作の五、六点は、すでに本誌に紹介された。この頁の下には、夫々乗馬散策の小さな写

真が出ている。この記事も馬術が女性のスポーツとして普及して来たこと、乗馬の楽しみとその種類、及びシヨウ馬術についての簡単な紹介記事である。一九二七年、及び二八年度の同誌に掲載された記事のみであるが、これらの記事を掲載したこの雑誌が、単に上品、健全なスポーツとして馬術をすすめているのではなく、男性側からみた乗馬女性(この記事では Reiterin) Amazonen と二通りの言葉を使っている。)の魅力について語っている点は、最も注意すべきことの一つであろう。

マゾヒズム百景

馬場好男

第二十七景 我が周囲にみたマゾ

日本テレビで十月十四日の夜、日活の井上梅次監督のドラマで「東京の幽霊」というのをやったが、一寸面白いシーンが見られた。

ストーリーは夫の身の上が気にかかり、一度は天国に行ったものの、一カ月の期限を条件で再び地上へ舞い戻った人妻、小夜子(月

丘夢路)を通じて、地上の人間の愛情や欲望の醜くさを風刺しようとしたもので、一時間のドラマだったが、此の中に茶の間の娯楽としては珍らしいシーンが一カ所あったのだ。

それは夫(森雅之)の馴染の芸者やパアーの女給の内、此のパアーの女給は十人の恋人を持って適当に世の中を楽しんでいるが、この女が森雅之に夕食と一緒に、という電話を

自分のベッドの中からかける場面で、これが殆んど半裸に近い状態で、ベッドの下に男がうずくまって此の女の投げ出した足先を磨いているものなのだ。それも、先ず、すんなりした美しい脚をみせ、そして足先を磨く男が楽しそうに、そっと爪先にキスをする。そのままカメラは女の太腿から腰、胸、顔と写してゆくもので、この様に堂々と足にキスするシーンは恐らく始めてでないかと思われる。ミュージカル・ショーの中には、これに似たものは多々あるが、ドラマとしては文句なく第一号だろう。

これも同じ日本テレビで、チェコ映画の大

人向きの漫画、「悪魔とカーテ」も面白かった。或る国の悪い女王のため国内が恐怖におののく生活をやっている。そこで地獄の鬼共が此の女王を出す。ところが此の使者は間違えてカーテという、善良な人妻をさそって行く。悪い事をしている者は鬼を恐れるのだがカーテは善良な人間のため却って鬼の方からカーテを恐れ、地獄はカーテのため一大恐怖時代となる。カーテは、花が咲き一日中ダンスの饗宴にあるといって地獄へ連れて来た豚を（人間の身体をしている）毎日の様にウソをついたと責めるが、いつも此の豚の上に馬のりに跨っているのである。地獄へ行く道中もそして地獄でも、それから人間の世界に戻る時の道中もカーテは豚を馬にして這い廻らせこずき廻している。大人の女を男の上に跨らせるという此の着想は漫画にしても面白いものであった。

久しぶりに前によく行ったキャバレーにゆく。指名のアキさんはグラマ美人で私と付き合うのは、七、八度になる。踊っても一緒に飲んでも相手はノーマルだし、私も又、自分の面子上、そうくにおかしな？性癖は披露

出来ないで、ひとなみに酔って、ひとなみに踊る程度だったが、その夜、「アキさん電話」のアナンスに立った彼女が戻って来て、「嫌な奴」と、ひどく怒っている。

「どうしたの？」

「ううん、誰か判らないけど、キット客の人よ。鼻をつまんで声が判らない様に喋ってるのよ」

「何って？」

「アキさんのドレイになりたいんだって」

「ドレイ」

「変態ね、きつと」

「ふふん、よほど君にはれてるんだナ」

「姿な人、そんなのに限って危いのよ。女を縛ったりする奴よ。きつと、そうね」

ここで私は、どうもヘンタイという男のサジズムが多い事を思わせられた。私が一寸だけ力説したのは

「いや、本で読んだけれど、女を無上の女神にたとえて、苛められたという男も多いんだよ。今のも、きつとそうだよ。いわゆるフェミニストさ」

「気持が悪いわ。いくらフェミニストでも」

「僕がそういったら？」

「ふふふ、さあ、踊りましょう」
私は酔った上のいたずらにせよ、このようなことを電話する男も居る事を知って、奇妙な安心感を覚えたものである。

私の家の近くにある眼医者は、もう戦前から開業しているが、ここにいる看護婦が非常に男性的で、これが又有名になっている。眼を洗う位はやってくれるが、その治療の荒っぽさは一寸、昔の軍医の比でないのだ尤も、人なつこい女で、すぐ誰とでも打ちとけてくれるので肩のこらない相手ともいえる。前に私が建築現場で、ドリルをやっていたそばを通った時に、金物の小破片が眼に刺さってしまい此の医院に治療に来たが、あいにく医者が往診中で此の看護婦がやってくれる事になった。ベッドに横臥した私の眼に麻酔液をおとして、此の異物のぬきとりを始めたが、此の看護婦が別の同僚に、此の人の頭をしっかりと抑えていてといって私の頭を抑えさせ、自分分はベッドに横向きに腰かけ乍ら私の胸にのしかかった。

眼の痛い事も忘れて、淡いマゾ感に私は、ふけたものである。

女 友 達



三条卓史

作画

て五階のフロアへ出た。

「ねえ早苗さん、あなた近頃どうしていらっしゃる？。ご主人と仲よくやっていたらいいわね。」

加津子は、みつ豆の寒天をスプーンで掬って形の良い唇へ運びながら早苗に話しかけた。

「それがねえ、最近、結婚倦怠期ッてでも云うんでしょうか、あまり、うまく行っていないのよ。」

「ほんと？ それ」

「ええ、あたし達、結婚してから、もう四年になるのに子供がないですよ。主人にとって家庭が少し味気なくなつたのかも知れないの。それで最近麻雀に凝ってしまった、会社のお休みの日だって、滅多に家にはいないのよ。」

早苗はそう云ってみつ豆のグラスを置くと

淋しそうに眼をテーブルの上に落した。

「へえ、そんな生活をしていらっしゃるの。」

あなたのご主人はお勤め先も宅の主人の会社なんかよりずっと良いし、随分お幸せな生活をしていらっしゃると思っていたのよ」

「あたしも主人の気持を家庭へ戻そうと思っ

窓会以来じやアないの」

「ええ、あれからもう何年になるか知ら。ほんとうに暫らく振りだわね」

「ねえ、五階のティールームへ行かない。いろいろお話があるのよ。それとも貴女、急ぐ」

「いいえ、いいわよ。じやア」

「あら、早苗さんじやアないの」

「おや、これは加津子さん。ずい分、お久しぶりね」

早苗が新宿の東横デパートのエレベーターに入ると、人の肩越しに旧友の加津子が声を掛けた。

「ほんとうに。いつか銀座の松屋であった同

て、お料理やらお化粧やら随分、気を配って
はいるんですが、矢張り駄目ね」

「早苗さん、ちよっと」

と加津子は急に声を落して

「ご主人に、これがあるんじゃない？」

と云いながらテーブルの下で小指を伸して
見せた。

「あら、そんな人はいないと思うわ。そんな
素振りには、ちっとも見えないんですもの」

「でもねえ早苗さん、最近の風潮はまったく
物凄いですからね。今頃の若い女の人なん
か随分、積極的で、相手が妻帯者であろうと
てんで問題にしていけないんですから。」

「ええ、わたしもその点は或る程度、疑惑を
持って、いろ／＼調べて見たんですが、どう
もそうではないらしいの」

「そうお、じゃア矢張り、あなたのリード
の仕方が拙いのね」

「えッ、わたしのリードの仕方が拙いッて。
それ、どんな意味ですか」

加津子はあたりの様子を疑うように見廻し
たが、近くに客のいないのを確かめると、更
に一段と声を小さくして早苗の耳に口を近付
けた。

「早苗さん、男ッて常に変化と刺激を求めて

いるものよ。結婚した当座こそ、新しい夫
婦生活の珍らしさで張り切っていたても、だん
／＼馴れて来るとその単調な生活に倦きが来
るのよ。家庭のうちの相変らず単調だと、夫
は家庭外に刺激を求めるようになって、競馬
や競輪に凝ったり、若い女をこさえたり、酒
場を飲み歩いたりするようになるのだわ。そ
こでね早苗さん、あんたも思い切ってご主人
に新しい刺激を与えるように努力して見た
らどう？」

「主人に新しい刺激を与えるッて、どんな
事をすればいいの」

「ほほほ、むつかしい事を訊くわね」

と云って少し頬を染めて笑ったが、急にま
じめな顔付きになって

「早苗さん、あんた浅草のロック座へ行って
みた事ある？」

と訊いた。

「あたし、浅草へは足を踏み入れた事もない
わ」

「そうでしょうね、あなたはお上品だから」

「そんなのじゃないの。只、何となく今迄あ
ちらの方へ行く機会がなかったのよ。で、そ
のロック座がどうかしたの」

「ええ、わたしは新聞の広告で見て、一度主

人を誘って行った事があるの。そうしたらね
帰って来て暫らくすると、二人でお芝居をし
ようと云い出したのよ」

「どんなお芝居なんですか？」

「それがねえ、此処では言えないわ。でも、
宅では日曜日は夫は絶対に外出はしないの。
何しろ次々と新しいお芝居の演出で夢中な
んですから。」

そう云ってから加津子は、暫らくは早苗の
顔を、表情を窺うように見凝めていたが、膝
の横に置いていた買物包みを手早く解くと、
そっと早苗に示した。

「これどう、みんなお芝居の材料よ」

と云って拡げて見せた包みの中にはうすい
水色のジョーゼットや、眼もさめるような緋
色のサテンなどの布地に交って、ニッケル色
の細い鎖や丸い環が、眼を射るような冷たい
光を放っていた。

「まア、衣裳までも新調するんですの？」

早苗が驚いているのを、

「ええそうよ。これ土曜日までに主人の好み
の型の服に仕立てるのよ。素敵でしょ。です
から、宅には倦怠期ってものは薬にしたくも
ありませんわ。夫は日曜日をほんとに楽しみ
にしているんですものね」

と言いながら、それ等を元のように包み終った加津子は、グラスの中の最後の蜜を空けると、

「ねえ早苗さん、この日曜日にわたしの家へいらっしやらない？ 少しは当てられるかも知れないけれど、案外あなたの悩みを解く鍵が見付かるかも知れなくてよ」

と云って、にっこりと笑った。

「ええ、都合でお伺いしますわ。わたしも現在のようでは、ほんとうに困ってしまうんです」

「ね、だったら是非いらっしやい。待ってますわ。」

「ええ、じゃア、またその折にね」

二人はそう頷き合うと、どちらからともなく立ってカウンターの方へ出て行った。

○

次の日曜日はカラリと晴れて、良い天気だった。

「今日は取引先の会社の連中との試合があるンでな」

と、言訳しながら茶の間を出て行く夫に、「あたし、都合で昔のお友達のお宅に伺ってもいいかしら」と云うと

「ああ、いいとも。どうせ僕は夕方までなけりや帰れないんだから、行つて来るがいいさ」と、そそくさと靴を穿いて外出した。

早苗は手早く食器を片付け、鏡台の前へ坐つて外出化粧を初めた。

鏡に映る自分の姿を見ると、結婚した当時より少し肥えていたが、別に容色が衰えたと言う程の事もない。服を着換え、玄関に鍵を掛けると勝手口から家を出た。

町はアベックや、子供連れの夫婦の往来で賑っていた。早苗は自分ひとりの姿が何だか寒々としているように思われ、身も細くなる気持を抱きながら、渋谷駅から省線電車に乗った。

新宿で中央線に乗換え、武蔵小金井の駅に降りた彼女は、先日、加津子から貰った略図をたよりに、駅前の通りを北へと歩いていった。

加津子の家は、町から大分離れた櫟林の外れにあった。その辺りは、畑と林の間に古い農家が点々と散在して、武蔵野の俤をとどめていた。

「やア、早苗さんですか。お待ちしていましたよ。さア、どうぞお上り下さい」

加津子の夫の欣一は、軽快なスポーツウエ

ア姿で玄関へ現れた。

「あの、加津子さんは？」

居間に通された早苗は、薦められた座布団に遠慮勝ちに坐りながら、そっと訊いた。

「ええ、今ちよっとそこまで買物に行つてゐるんです。直ぐ帰つて来ますから、まあ寛いで下さい。どうです。今日は大分暑いじゃアないですか」

と気さくに行いながら、台所からサイダーを持って来て早苗にすすめた。

「お家は閑静で、およろしいのね」

と、欣一に話しかけている時、勝手口の戸が開く音がして

「おお、今日は暑いこと」

と呟きながら加津子が帰つて来た。

「おい、早苗さんが見えてるンだよ」

「あら、ほんと？」

加津子は買物籠を調理台の上へ置くと、座敷へ入つて来た。

「どうだい？その服の着工合は」

欣一は、早苗の方を向いて煙草をふかしながら、声だけ加津子に語しかけた。

「あなたも意地の悪い方ね。ねえ早苗さん、見て頂戴。主人はわたしをこんな格好で市場へ行かせるんですよ」

と言って早苗の傍に寄った。麻に似た、水色のワンピースドレスが、すらりとした加津子の身体によく似合っている。ゆったりとしたフレヤなスカートに、鶏卵ぐらいの大きさの紅いバラの造花が一輪縫いつけてある。彼女が坐ると、そのバラはスカートの襞に隠れて見えなくなった。

「あたし恥かしいから、途々ずっと買物籠でかくしながら歩いて行っただわ」

「おいおい、それは命令違反だぜ」

「だって、いくら何でも人が変に思いますもの」

「ようし、命令違反第一号だ。覚えて置くがいい」

「ええ、覚えておくわ。ねえ早苗さん。この前観たお芝居で、大勢のダンサーが丁度こんな服を着てライندگانスを踊ったの。で帰るとその翌日から早速わたしにこの服を作らせて着せるのよ」



「好いじゃアないの、よく似合ってるよ」と早苗が笑うと

「服は好いのよ、でもこのバラの花がねえ」

そのバラの花の縫い付けてある服の裏に細いベルトが取り付けてあって、それが加津子のウエストをきっちりと締めているのだ。だからそのバラの花は彼女の動作につれて、ふわりとした服の布地とは関係なく動くのだ。

「ハッハッハ、これが今日のプロローグです」

よ。これから加津子が、あなたに面白い芝居をして見せるそうですから、楽しみにしていって下さい」

そう云って欣一は愉快そうに笑った。

「ねえ早苗さん。あなた今日は一つ脇役をやってみない？」

「あら、あたしにはお芝居なんて出来そうもないわ。」

「何でもないわよ。うちのお芝居なんて、大した筋はないんだから。そう

ね、まあ大体わたしと同じような事を云ったりしたりすればいいのよ」

「おやおや、遂に早苗さんを誘惑したな」

欣一が横から口を出した。

「あら誘惑だなんて、でも折角いらしたんですもの。じっとして観てるより、矢張り演技者になってる方が良くはなかって？」

「ハハ、そういう考え方もあるんだな」

「じゃ、これから準備をしましうよ。早苗

さん、今日は少し暑いけど、ここへ私の着物を出して置くから着換えていてね。用意が出来たら呼ぶわよ」

加津子は簞笥から派手な柄の長襦袢と伊達巻、それに赤い腰布を添えて早苗の膝の横に置くと、欣一と一緒に隣りの部屋へ入って行った。軒に釣った風鈴が、微風に揺れてチリンと音を立てる。静かな部屋に取り残された早苗は、そっと傍の衣裳を手に取った。プンと樟脳の匂いが鼻をついた。

やがて加津子に呼ばれて隣りの部屋に入った早苗は、思わず眼を瞠った。

この部屋は、二人のお芝居専用の室に改造されたらしく、普通の部屋にあるような調度品は何一つ見当らずに、正面一杯にカーテンを張って、そのカーテンに緑の山野の画が描かれている。つまり芝居の書き割りである。その横に、組立て式の木製の十字架を立ててある。十字架の横木の両端には、ちゃんとニッケルの環まで付いている。

床には、えんじ色の絨氈が敷いてあって、その中央に手鏡が置いてあり、その鏡の上にキリスト像の絵はがきが貼りつけてあった。「こっちへお出でなさい。今日は切支丹の宗

門改めの場をやるんです。加津子も早苗さんも信者ですよ。改宗するかしないかは勝手です。筋はその時次第で組立てて行きますからせりふも任意にやればいいんです」と欣一が言った。その欣一は、メリヤスのシャツの上に手製の袴かみしもを着けて、剣道袴けんどうはかまを穿いている。

「此処でいいんでしょうか」

早苗はそう云いながら部屋の隅に坐った。「えゝ、いいでしょう。ではこれから始めますよ……おい、お加津、出て来い」

と、急に芝居がかった口調になってそう呼ぶと、書き割りのカーテンがゆらりと揺れて加津子が姿を現わした。彼女は胸高に晒を巻き、赤いサテンで作った腰巻姿で後手に縛られ、その縛られた綱を後に長く曳いている。「さアお加津、お前はどうしても改宗させねばならぬ。よいか、よく考えて、その踏み絵を踏むのだ」

欣一は加津子の縄尻を持つと、彼女の上体を手鏡の方へ、ずいと押した。

「イエス、キリスト……アーメン」

加津子はいたずらそうにそう云うと、早苗の方を見てちよつと笑った。早苗は眩しいもののように見ていた。

「こら、演劇進行中だ。笑っちゃいかん。そして、アーメンと云う奴があるか。ゼウス、キリスト、ハライソ、ハライソと云うんだ」「はいはい」

そう云うと加津子は足許の手鏡をひよいと跨いだ。

「こら、なぜ踏まぬ。さあ踏み」

欣一は、わざと大きな声を出して又もや加津子の背を押した。

「わたしやころびはしないんだよ。どうとも勝手にするがいい」

急に、早苗がびっくりする程、歯切れのいい啖呵が加津子の口から飛び出した。

「なに改宗しない？ フン、良い度胸だ。だがな、それじゃアこっちの都合がちと悪い。わしはあくまでお前を信者から引き抜いて、手活けの花にするつもりだ。どうでも踏まなきゃ、踏めるようにしてやるから、こっちへ来い」

欣一は、加津子を書割りの前へ引き据えろと、物入の中から褐色の皮のバンドを持って来た。

「あら、それで吊るの。よくてよ今日は」加津子はそれを見ると頓狂な声を上げた。「だって踏まないんじやアないか」

「踏まなかったって、それはいやよ」

と、二人とも何時の間にか芝居のせりふから、夫婦の会話に戻っている。早苗は急におかしさが込みあげて来た。

「いいから、これで吊られたお前を早苗さんに見て貰え」

「知らない」

加津子はそう云ってツンと横を向いたが、両手は後で縛られているので、手で拒むわけには行かないのだ。

欣一はバラリとそのバンドを捌いた。幅約十センチ、長さ一メートルばかりのバンドの中央に矩形の金具が紙で留めてあって、その金具からT字形に今度は二メートル位の皮ベルトが付いている。

「ひゃー、きついわア」

そのベルトを胸から背に廻して、尾錠をき

ちんと掛けると、加津子は声を上げた。

「早苗さん、加津子はあんなに云ってるが、あれで結構たのしいんですよ」

欣一の言葉のように、加津子の声とは反対に、その表情には些かの苦痛らしい影も見えなかった。欣一は、長いバンドをびったりと留めると、天井の滑車から太い綱を下してその下端の鉤を背の環に掛け、柱の横の綱を引

いた。

「ひどいわ。今日は吊らないって約束じゃアないの」

「ああ、吊り上げはしないよ、このくらいで止めておくかな」

欣一は、そう云いながら加津子の肢体を爪立ち寸前の位置まで吊っておいて綱を留めた。そして早苗を振り返って

「早苗さん、今度はあんたの絵踏みをやりましょう」と云った。

「あんた、早苗さんは始めてだから、苛めちゃ駄目よ」

と加津子が上体をゆらゆらさせながら云った。

「分ってるよ。さア、これを踏みなさい」

と、どうしても言葉が丁寧になって、お芝居の雰囲気が出ない。

早苗は踏もうか踏むまいか、と暫らく案じていたが、ひよいと加津子の方を見ると、彼女は皮のバンドで吊られながら、面白そうに笑っているの、彼女も思い切ってその手鏡を踏み越えた。

「おや、あなたも改宗しないの？」

と、却って欣一が案外なように云って加津子を見た。

「じゃア、あなたはこちらへ来て貰いましやう」

と云って十字架の傍へ連れて行った。早苗の心の奥には既に相当の好奇心が動いていたので、進んで十字架を背に両腕を上げた。

「早苗さん、袂がぶら／＼して格好が悪いわ肩を抜きなさいよ」

と加津子が声を掛けた。早苗は欣一の前に上体を曝すのは恥かしかったが、加津子の声に押されるようにするりと襟から両腕を抜いた。長襦袢は袖もろともに裏を見せて、ばらりと垂れた。

「ほほう、早苗さんも仲々芝居気があるんだねえ」

両手首を横木の環に紐で繋ぎ終ると、欣一はあらためて早苗の前へ廻って、その姿態をじっと見た。

「いやですわ、そんなにご覧になっちゃ」

「これは失礼、でも、匂うような女盛りですね、まったく」

「これ、あんた、なんですのッ！」

加津子が大きな声で欣一をたしなめた。

「おやおや、奥様のおかんむりだ。じゃア早苗さんは其処で暫らく見ていらっしやい」
欣一はそう云って十字架の傍を離れた。

やがて彼は、書割りの後から一本の竹刀を提げて出て来ると、加津子に向って

「やい、お加津。どうでもころばねえと云うなら、痛い目を見せるがどうだ」

と、再び芝居口調で言った。

「どうなと勝手にするがいい、この三ン下役人め」

「よう云うた。その言葉を忘れるな」

欣一はそう云うと、加津子の横へ廻って背を軽く打った。加津子は小さな声で、

「あなた、もっときつくぶってよ」と呟やいた。

「どうだ、まだうんと云わないか」

今度はピシリと云う、かなり鮮やかな音がした。

早苗は思わず、ぎょっとした。ほんの仕草だけのお芝居だと思っていた彼女は

「うッ」

と云う加津子の声に、急に不安を覚えた。

加津子は微かに呻くと爪先立って胸を大きく前へ張った。眼は、じっと閉じている。

ピシッ。

と、また竹刀が鳴った。五度、六度――。

そのたびに加津子の口から妖しい呻き声が洩れた。でも眼は閉じたままである。全身で

竹刀の打撃を受け止めている感じであった。

「どうです早苗さん。こんな責めは」

そう云いながら欣一は笑った。

「びっくりなさったでしょう。でも

こうした事も馴れて来れば案外たいした事もないんですよ」

「ねえ、あなた」

加津子が急に眼を開いた。少し、うっとりとしたような眼付である。

「早苗さんに、羽根をあげて……」

「え、羽根？」

早苗は加津子の言葉の意味が解らなくて、不審の声をあげたが、それは次の欣一の行動によってすぐに解けた。

「早苗さんも、そうした姿で見ているだけじゃア興がうすいから、極く軽く、ホンの少しいじめてあげましょう」

欣一は一本の鷲ペンを持って来る

と、早苗の姿態や表情が加津子によく見える位置に立って、その羽根の先端を、そっと彼女の肌に触れた。

「あうッ」

と早苗は飛び上らんばかりに驚い



て、急に腕を締めようとしたが、その腕は完全に十字架の横木に沿って伸び切っているの
で、徒らに手首に紐が深く喰い込んだだけで

あった。

「まア素敵、すばらしいわ」

加津子は、驚ろきと羞じらいと、くすぐりに悩む早苗の姿を見て、思わず声を放って喜んだ。

「あれッ、もう改宗します。ですからやめて……」

早苗は全身を竿虫のように動かして、その羽根から逃れようと悶えたが、欣一の操る羽根は攻撃をやめようとはしなかった。

欣一は、やっと遠慮して止めようとする加津子の声が

「やめちゃ駄目！」

と、けしかけるように追っかけて来た。

早苗は、たった一本の羽根が、こうまで自分を取乱させるとは想像もしていなかった。

そして、両腕を水平に伸ばして自由を奪われている無抵抗な姿が、こんなにも力のないものだという事をも初めて味わった。彼女は欣一の羽根に攻め立てられ、ブラジャーに守られた胸を大きく波打たせて身をよじらせた。

「あらあら、もうお昼だわ。あなた、ちよっと休みましょうよ」

思い出したような加津子の言葉に、欣一は

やっと早苗を解放した。

○

三人の昼食は簡単なサンドイッチと牛乳でさっき加津子が市場から買って来たものである。加津子は天井から吊られた鉤を外されたままの皮バンドを着けた後手縛りの姿で、また早苗は加津子を縛った縄尻で矢張り同じように後手に縛られ、加津子と並んで食卓に坐っていた。

欣一は、まるで赤ん坊にでも食べさせるように皿の上のパンと、牛乳とを加津子と早苗の口に運んだ。

「早苗さん、あなた胸が淋しくない？」

「あら、どうして」

「だって、そら、その胸が——きゅッと、くびれる程縛って下さい——といってるんですよ」

「まア、冗談ばかり」

「あたしのベルトはこんなに締ってるのよ」
加津子は、そういって、わざと胸を大きく張って見せた。

丁度、その時である。

「ごめん下さい」

と急に玄関で男の訪う声がした。

「あッ、誰か来た」

欣一は慌てたように玄関へ飛んで行った。

加津子と早苗は、不自由な姿で、もつれ合うように隣りの部屋へ逃げ込んだ。

「ああ、びっくりしたわ」

と加津子は小声でそういうと、早苗と顔を見合せてニッコリと笑った。

そこへ欣一が入って来て

「ばく、これから急に会社へ行かねばならん用事ができたんだ。今、電話で連絡して呉れたんだよ。夕方には帰って来るからね」というと

「あんた、手を解いてよ」

と追い縋ろうとする加津子の言葉も耳に入らぬように、急いで玄関から飛び出して行ってしまった。

「どうしましょう」

早苗は当惑したように、自分の姿を見返った。

「早苗さん、あなた、わたしの後へ廻って歯で綱の結び目をゆるめて頂戴」

加津子は、比較的落着いた口調でそういうと、早苗の方へ背を向けた。

「ええ、いいわ」

早苗は加津子の結び目を口で啜えて根気よく捻じた。立っただけは上体が動いて解けな

いので加津子は俯伏せになった。早苗の齒は一生懸命に縄にいどんだ。後れ毛が汗で額について、氣持が悪かった。

「さア、解けてよ」

早苗がそういつて顔を持ち上げると、加津子は無言で起き上り、そのまま玄關の方へとんで行った。

「やっと戸締りをして来たワ。私たちがこんな格好をしている時、誰か来やしないかと心配でならなかったのよ」

といつて早苗の傍へ坐りながら、

「でも、もう大丈夫だワ。お勝手にも鍵がかかってあるし、これでもう二人だけの世界よ」

といつて微笑んだ。

「じゃ加津子さん、わたしのも解いて」

早苗が、加津子の微笑にこたえるように笑いながら肩を捻じると

「あら、何よ。これから主人の代りにあなたとお芝居をするのよ。だから戸締りをしたんじゃないアない」

加津子は、そういつて早苗の肩を掴んで、そのまま押し倒した。そして

「わたしのバンドは主人でないと外れないのよ。そしてあなたの綱もあなた自身では外せ

ないわ。わたしがゆるしてあげるまではね」

「加津子さん、どうなさるの？」

「さっきのお芝居の続きをしましょうか。あなたは改宗しますといっていたけれど、あれは嘘の転宗よ。ほんとうに転宗を誓うまであなたは責められるのよ。今度は女同志で主人がいないんだから、羞かしい事はないでしょう」

この時、早苗はふと、欣一の急の外出は、予め夫婦の間で計画された筋書きではないかと感じられた。

「でも加津子さん」

「いいわよ、そうしていらっしゃい。」

加津子はそういつと、先程自分が責められた竹刀をひろい上げて、二、三度空を切つてから早苗の方をみてキラリと眸をひからせた。

早苗は恐ろしくなつて身を跳いたが、自由をうばわれているのでどうにもならない。

その夜、ようやく縄目を解放されて家路につく早苗の姿は如何にも疲れ果てているように見えた。しかし、心は奇妙にハズンでいるのだった。

その次の日曜日――。

早苗は朝から洗濯物を済ませて座敷へ落着くと、新聞を持って来て読み始めた。夫の圭介は今日も麻雀に出掛けて留守である。碧い空に、さっき乾した下着類が、白い旗のように爽やかな風に揺れていた。

早苗が眼を落した新聞には、先日、或る学校で起つた、女教師の生徒殴打事件の詳報が載っていた。生徒が宿題を忘れたのを懲らしめるために授業後、受持の女教師が、野球のバットで女生徒を擲つたという記事で、その女教師は一種のサジスチンではないか、という言葉で結んであった。

早苗はその記事を読みながら、先日の加津子の家での出来事をまざ／＼と思ひ出していた。太い十字架や純白の鷲ペンや、手錠や竹刀などの責道具に交つて、加津子の妖しい情熱に燃え立った顔が頭の中をぐる／＼と廻転した。羞かしさと切なさ、じいんと身内に響く打擲の苦痛とが、何だか甘美な夢のようにさえ思われて来るのであった。

――加津子さんは、今日も欣一さんと変つたお芝居をしているだろう――

そう思うと、思わず訪ねて行きたくなるのであったが、それでは何だか自分の氣持を加津子に見透されるような氣がして、今日の訪

問はよそう、と思い止まった。

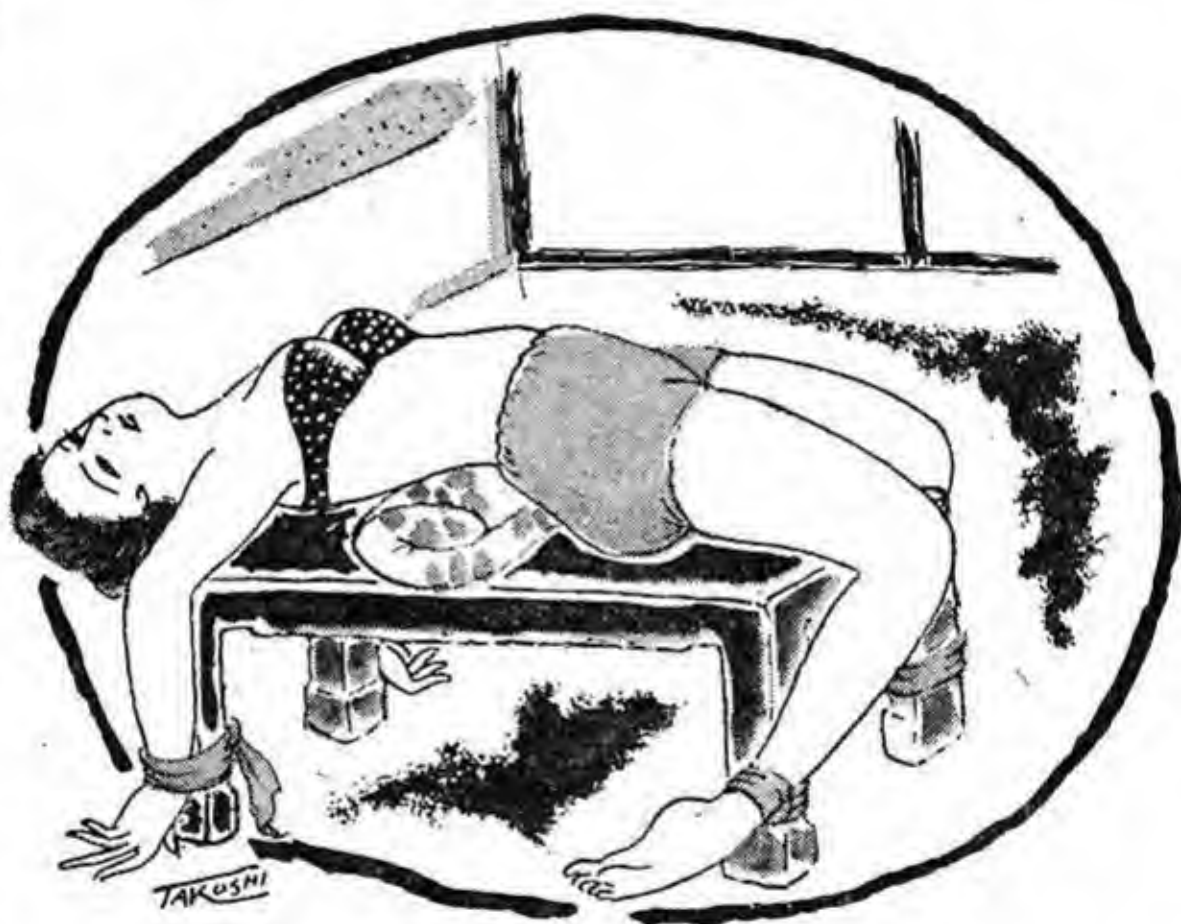
彼女は早目に昼飯を済ますと、この前、加津子が話していた浅草のロック座へ出掛けていった。

観客席のライトを消して、そのため一きわ五色のライトに映えるステージに、次々と豊富な肢体のストリッパーが現われて、いろんなダンスを踊った。こうした物を初めて観る早苗には、ダンサーの姿態や、身に纏っている綾羅のよな風変りな衣裳が、物珍らしく感ぜられた。

そうした数々の踊りの合間に、寸劇があった。「吉野桜」という題で、洋舞の舞台が一転して、幕があくと正面に辻堂があつて、背景は杉木立の吉野山中である。上手から、かつぎに打掛姿の静御前が木の枝を杖にして出て来る。

「ああ慕わしや義経さま、今はいずれに」

と、さも疲れた様子で辻堂の縁に手を掛けて思い入れをしている処へ、下手から鳥帽子に水干姿の頼朝の手の者が二人、たすきを十字に掻綾取り、長刀に反りを打たせ、一人は



大薙刀を持って登場して来た。

「おお、これなるは正しく静どの」

「いいや、わらわはそのような者ではない」

「いやいや、鄙には稀なそのいでたち。これは必定義経どのおもい者、静の前に相違あるまい」

るまい」

と二、三度、台詞のやりとりがあつて後、「義経どのは何れに参られた。ありていに申されよ」

「わらわは知らぬ。ええ、この手を離しゃ」「なぜ申されぬ。ならばおん身の身体に聞こう。こう来やれ」

と揉み合いながら二人の武士が静を堂の中へ押し入れようとする。それを拒む静の打掛が剥ぎ取られ、下着も千切れて、緋の袴一枚の姿になる。その武士と争うたびに長く垂らした髪が乱れて海草のように揺れる。二人の男に左右の腕を取られた静は、白い上体を観客の方へ真正面にして反り返らせて見得を切る。とそのまま堂の中へ後退して引摺り込まれ、荒い格子の扉が閉まった。

すると急に堂の中が明るくなり、ステージは反対に暗くなつて、堂の格子へ静と二人の武士の影絵が映る。

これからは無言劇である。黒い静の影が右へ逃げ、左へよろめく。男の影は刀の下緒を持って静を追う。遂に堂の中央で捕えられ、ギリ、ギリと縛られる。そして二人の武士に刀の柄で次々と小突かれ、叩かれて苦悶する姿が、影絵だけに一きわ幻想的で観客の気持

を昂ぶらせていった。

最後に舞台がぱつと明るくなると、堂の扉が開いて、サッと三人が正面の階段の傍へ出る。静は真田織の打紐でギリギリ巻きに縛られ、膝まで届く長髪が肩から胸を這っている。左右の武士は片足を階段に掛け、静の身体を捧げるようにして、

「いざ鎌倉へ……おお、そうじゃ」

と同音にいうと、それを合図にするくんと幕が下りてその劇は終わったのであった。

○

早苗が浅草から帰って来たのは日暮れ前であつた。何だか物足りない気持で一人夕食を済ませ、後片付けをしている処へ加津子が訪ねて来た。

「あら加津子さん、先日は」

「どうもご苦労さま。今日もいらっしやるかと思つて心待ちにしていたのに、とうとう来なかったのね」

「ええ」

「どう、懲りたの？」

「いえ、そんなのじゃないけど……」

「今日はご主人はどちらへ」

「相変らず麻雀ですわ」

「それでは淋しいわね。大方そうだろうと思

つて、わざ／＼やって来たのよ」

加津子はそういうと意味あり気に笑つた。

「ご主人はいつも何時頃お帰りになるの？」

「そうねえ、大抵十時か十一時頃ですわ。麻雀の後でお酒を飲むんですよ。いつも酔つて帰って来るのよ」

「飲む、打つ——か、大分お道楽が広いわけね」

「ええ、ちつとも家にいないんですものね」

「ねえ早苗さん、わたし今日は重大な使命を帯びて来たのよ」

「え、重大な使命？」

加津子の思いがけない言葉に、早苗は一瞬加津子の顔を見た。

「ええ、ちよつと冒険だけれど、あなたのご主人を家庭に取戻す秘策を良人から授かつて来たのよ」

「まあ」

と早苗は驚ろいたが、そうした心遣いをして呉れる加津子の気持は嬉しかった。

「ねえ加津子さん、それはどうするの？」

と問い返したが、

「あとで分りますよ。まあ、わたしにまかして置きなさい。それより、これ、おみやげのジュース。二人で飲みましょうよ。ちよつと

コップを貸して」

と、早苗の間には答えずに、風呂敷包みからジュースの瓶を取り出した。

「あらまあ、それは済みません」

早苗は笑いながら立つて、コップの用意をした。

やがてそのジュースを一口飲んだ早苗が、

「あッ、これは」

と片手で口を覆うのを

「少しジュースに混ぜ物がしてあるけど、安心してお飲みなさいな。これが今夜の使命に一役買っているのですから」

といつて、加津子もコップへ唇をつけた。

暫らくして

「どう、酔つて？」

と加津子がいった時には、早苗は何だか雲の上を歩いているような気持になっていた。

「早苗さん、あなた今日はお家で何をしていたの？」

「ふ、ふ、何をしたか判る？」

「変ないい方ね」

「お洗濯」

「それから」

「お炊事」

「当り前だわ。そんなこと。でも何かしたで

しょう」

「ええ」

「聞かせて頂戴。わたしの家での事、思い出したでしょ？」

「……」

「はにかみ屋さんね、ちゃんと顔に書いてあるわ」

「あら」

「いま、八時前ね。ご主人がお帰りになるまで、まだ時間があるわ。」

加津子はそういいながら、テーブルの上のコップを下におろした。

「早苗さん、あなたはこれからこの上に横になるのよ」

と命令するような口調でいった。早苗は瞬間に、又、先日のように責められることを覚悟していた。

「加津子さん、お願いだからひどい事はしないで」

「いいから、早くしなさいよ」

早苗がためらうのを構わず加津子は黒褐色のテーブルの上に仰向けに寝かせ、傍の日本手拭を裂いた布で左右の手足をテーブルの脚に縛りつけた。テーブルの寸法が余り長くないので、彼女の足は膝を曲げて引き付けた格

好になり、頭はテーブルの端から出てしまった。

「加津子さん、頭が下がって、苦しいのよ」

と、早苗が、早くも弱音を吐きかけるのを「今から何をいつてんの。だまって、じっとしていられっさい」

と、からかうようにいいながら、座蒲団をくるくると丸め

「さ、背を反らせるのよ」

と促しながら、ぐいぐいと早苗の背とテーブルの間に押し入れた。

それは、あたかも蛭が引っくり反っている姿に似ていた。

その上、早苗が必死に首を振って避けようとする口へ、風呂敷でしっかりと猿ぐつわをした。

「ねえ早苗さん、あなたは今夜、このままの姿で旦那様をお迎えするのよ。あなたのこんな格好を見て、ご主人、どんな顔をなさるか知ら。楽しみにして待っていらっさいね」

「ウウ……」

「電気だけは消して置いてあげてよ」

そういう声と同時にパッと螢光灯が消えて漆黒の闇が部屋の中へ流れた。

早苗は、玄関の戸を軋ませて帰って行く加

津子の姿を耳で逐いながら、加津子のいった言葉のように、夫が帰って来て、自分のこんな姿を見たら一体どうなるのだろうと思ひ、何だか怖いような、それでいて、早く夫が帰って来て呉ればよいと希うような複雑な気持ちで、闇の中の壁の一角をじっと見凝めていた。

無残に縛られた草苗の頭の方から、夜更けの風が吹いて来て、軒の風鈴をチリリンと鳴らした。

本誌特集号の案内

◎既刊特集号は左記の通り在庫いたしておりますから、未見の方は売切にならぬ中にお申込下さい。

長篇サド小説「青い廃院」

定価二百円（略号「青い」）

「悦虐小説と緊縛写真」

定価三百円（略号「悦特」）

「サド特集号第二集」

定価三百五十円（略号「S特二」）

「悦特第二集」

定価三百円（略号「悦特二」）

「サド特集号第三集」

定価三百五十円（略号「S特三」）

「嵐を慕う蝶」

定価三百円（略号「悦特三」）

限定版「緊縛フォトアラベスク」

特価五百円（略号「あら」）

限定版「緊縛画集と緊縛写真」

特価五百円（略号「緊縛」）



四 捜 査

麻薬取締官、野原五郎は、下宿の二階に帰って来ると、抱えていた包をドサンと抛りだしてニヤリとした。

中野の国立療養所付近の住宅で麻薬の取引が行われているという情報を得た事務所では、時を移さず捜査を開始することになり、囃として、まだ一味の者達に面のわれていない野原が選ばれたのだ。

情報提供者の言によると、彼等は仲々警戒厳重で合言葉のかわりに禪を目印にしてい

(創 作)

麻 薬 と 禪

榎 村

奏

青 木

審 画

六尺禪をしていけば必ず信用されるからと云うことだった。

野原は包を開けると晒を取り出し、長さを計って裁ってから、窓を全部、閉めきった。

久方ぶりの禪だった。身が引締るような爽快さに、懐しい軍隊時代を思いだした。

彼が入隊したのは、陸軍の歩兵聯隊だったが、海岸に野営しての水泳訓練は相当に酷しかった、彼は、そのときはじめて六尺禪の締め方を覚えたのである。はじめは仲々班長の気に入るように締められず、何度もやりなおしをさせられたりして苦勞したものだが、馴

れてくると固く締めあげたときの爽快感が何とも云えなかった。

十年以上も経っているが、一度覚えたことは忘れないもので、野原は手際よく締めると鏡に自分の姿を映してみた。

男ざかりの皮膚は、まだ充分に若々しく、見るからに逞しい体格に彼は満足した。

少し寒くなったので服を着ようとしたが、禪を脱るのは何だか惜しい気がして、そのまま服を着込んだ。暫くは気になったが、それもじきに忘れてしまった。

夕方、風呂屋の近くまで来て、野原は禪を

したままだったことに気がついたが、(ナニかまうもんか)と勢よく暖簾をくぐった。

「野原さん。今日はまた珍らしいものを締めてるんですネ」

番台の親爺がひやかすように声をかけるのを笑って誤魔化した、その声で周りの人がジロ／＼見るのには彼も一寸てれた。

バスを下りると目的の家はすぐに判った。

さすがに少し緊張してベルを押すと、若い女がとりつぎに出たが、女中にしては化粧が濃いように感じた。応接間に通された野原が何気ない振りで窓の外を見ると、向い側の電柱の蔭に、万一の場合を考えて張っている田上取締官の姿が見えた。

十分以上も待たせてから、黒眼鏡をかけた鼻下に口髭のある中年の男が入って来た。きちんと身だしなみのいい背広を着ていて、黒眼鏡さえなければ立派な紳士として通用するだろう。

「規定通り服装検査をする。裸になりな」

男は事務的に云って窓のカーテンを引く。

「禪のことだろう？」

野原は、さも慣れた者のように、悠然と構えた。

「俺の云ったことが聞えなかったのか。裸になれと云ったらその通りするんだ」

そう云われて、(こいつア相当うるさいわい)と思いながら服を脱いでだ。

男は野原のそばへ寄ると、前から後から仔細に禪を点検している様子だったが、やがて

「よし」と頷いた。

「金は持って来ただろうな？」

「勿論。この通り——」

野原が上衣の内かくしから紙幣束を覗かせると、男は、もう一度頷いて、

「よし。では、案内しよう」

「案内？ 品物はここにあるんじゃないのかい？」

「やばいからな。ここにア置いてない。ナニ時間は喰わせねえよ。自動車が用意してある」

(まずかったな)と思ったが、いまさら出なおして来るとも云えない。自動車は危惧した通り裏口に駐車してあり、田上に連絡する隙はなかった。しかし、時間が経ち過ぎれば彼も当然、不審を抱き、適切な処置をとるだろうから大して心配はいらない。ただ予定の行動が少しばかり遅れるだけだ。
ルノーの狭い車内で、黒眼鏡の男も野原も

無言だった。自動車は療養所の外側を半分廻って丁度、反対側の埋立地に出た。そこは分譲地になっていて、点々と新しい住宅が建ちかけていた。その中に一軒だけ如何にもお誂え向きにポツンと離れて建っている家の前で野原は降ろされた。

男に促されて従っていくと、玄関からは入らないで、植木の一本もない庭を通って物置のような建物に連れていかれた。三坪程の広さで土間に粗末な卓子と椅子が二脚置いてある。

「早いと頼むぜ。麻薬はどこにある？」

野原が焦れたように云うと、男はヘンに落着きはらって、

「判ってる。じゃア、もう一度服を脱いで貰おうか」

「またか？ 随分うるせえンだな」

「取引きは禪一本でして貰う規定なンでね」

「判ったよ。お易いことだ。だが、今度は現物を見ねえことにやな」

そう云ったとき、入口から二人の若い男が入って来て、背の高いほうが手に提げていた小さな鞆を卓子の上に置いた。

野原は、さすがに緊張を覚えると、手早く服を脱ぎ禪一本になった。

三人の男の眼が一勢に野原の禪に集中すると、一瞬何か頷き合ってから、黒眼鏡がニヤリとして、

「大変お気毒だがね、この取引は中止することになりそうだ」

「何だと？」

野原は内心ギクリとしながら、

「理由は何だ？ そいつを聞かして貰おう」

「理由か。フフフフ。オイ、順。てめえのをみせてやれ」

順と呼ばれた背の高いほうの男が裸になる

と、やはり六尺禪を締め込んでいる。

「サア、こいつの禪をよく見てみる。タレを折り返して二重にしてある。これが特徴さ。

おまえさんなアどうだ？ フフ、うまく誤魔化したつもりだろうが、見事失敗だったナ」

「……！」

野原は黙った。今度こそ本当に腹の底から（まずい！）と思った。しかし、まだ身分がバレたわけではない。無事で帰れるとは思わないが、ともかく何とかして活路を見つけることだ。

「フン。そうだったのか。俺にしちゃ一寸ばかりドジだったが、売らねえってンじゃしかたねえ。これだけ現金を持ってきや仕入れる

ところは他にいくらだってあるんだ。それにしても大層ご鄭重な扱いを受けたもんだ。この礼はいずれさせて貰うぜ」

そんなことを云いながら、野原が脱ぎ捨てた衣類に手を伸そうとすると、

「待て！」

と黒眼鏡が凄んだ声をだした。

「そのまま動くな！」

「服を着てもいけねえのか？」

「フフ、これが見えねえのか」

黒眼鏡はゆっくりと拳銃をとりだした。

「一体、俺をどうする気だ——？」

「おまえさんが麻薬Gメンだと白状するまでの辛抱さ。それまでは、ちったア痛い目もみなきアならねえヨ」

「麻薬Gメンなんかじゃねえって云ったってどうせ信用はしねえんだろうからな。まア、好きなようにするがいいや」

「フン、いい度胸だ。だが、いまに吠え面がくなよ。必ず正体を発いてやるからな」

野原があらためて物置の中を見回すと、空の水箱や空罎が転っている片隅に、荷造り用にしては少し太すぎる麻縄が束にして置いてあり、そのそばには使い古した竹刀が二本立てかけてある。さしずめこの小屋は、取引き

だけでなく私刑にも使うのだろう。羽目板の小さな染みも血の痕ではないかと思うと、さすが薄気味悪い。

田上ももう異変に気のついた頃だが、うまく此処が発見できるだろうか？ 奴等だってそう易々と俺を殺すこともあるまい。どんな私刑をされるのか判らないが、堪えられるだけ堪えてみるのだ。勿論どんなことがあったって口は割らんぞ！

呻 吟

黒眼鏡の男の指図で、順と政が各々に野原の手首と、足首を縛った。たったそれだけでも、一度も縛られた経験のない野原は、縛られるということが如何に不安なものであるかを痛切に感じた。

観念して眼を閉じている野原は、自分の体が持ち上げられて卓子の上へ俯向きに横たえられると、鞭打たれるなと察して背中筋肉を硬くした。

しかし鞭は飛んでこず、禪の結び目に誰かの手が触れたのを感じた。思わずハッとしたのは禪も脱られるのかと思ったからだ、そうではないらしい。

（ヘンなことをするな）と考えてみたが見当

にとっては、このうえもなく面白い見世物になる。

「フン。仲々強情な奴だ。オイ、順。少オし痛めてやんナ」

そう云うと黒眼鏡は、椅子にかけ脚を組んで煙草を啜えた。

順は竹刀を取り、野原の哀れな姿に一撃を与えた。

野原が「グッ……」というような声を発したのは、打撃の疼痛よりも、不意の鉢の動きで禪が緊めつけられたからだだった。

「もっと打て。キリキリ舞いをするまで打ちのめすんだ」

打たれる反動で野原の鉢は振り子のように揺れ、戻ってくるところをまた打つので、しまいには本当にキリキリと回りだした。

竹刀の鳴る鈍い音に混って、泳えきれない野原の呻きが洩れ、搾りでた脂汗が土間にポタポタと落ちた。

(苦しい。もうやめてくれ!……)

そう絶叫しかけては齒を喰いしばっていたが、そのうちに野原は「グワウ!……」と蛙が踏み潰されたような声を出して気を失ってしまった。

「ナンだ。もう気絶しちまいやがったのか」

黒眼鏡はつまらなそうに云って吸いさしを投げ捨てた。

「禪で吊っちゃア酷ですぜ。どうします?」
順がペツと唾を吐いた。

「惨酷なのはいいが、すぐノビちまったんじや面白くねえ。降して気つけでも飲ましてやれ。後アまたそれからだ」

グツタリとなった野原をかかえるように土間に横たえろと、緩んだ禪を締め直してやっから、順はウィスキーのポケット壺を出して口に含ませた。

大きく呼吸をして眼を開けた野原の顔を、

黒眼鏡は靴の先でつつくと、

「オイ、どうだ。一寸アこたえたかい? もういい加減に云っちゃまったらどうだ。警察のイヌだってことをよ」

「うるせえ! 何度訊いても同じだ」

「ホホウ。よくよく強情なんだな、てめえは。まだ懲りねえとみえる。よしよし、もっと可愛がってやるぜ。そうだ、特別に注射をしてやろうじゃないか」

「注射?!……」

「そうヨ。嬉しいだろうが——」

「何の注射だ?」

「トボケなさんな。注射といやア麻薬にきま

ってらア」
「……!」

野原は慄然とした。麻薬の恐ろしさは知りぬいている。しかし、自由を奪われていては拒みきれものではない。一本や二本ならいい。もしこのまま監禁されて打ち続けられたとしたら?

「ハハハ。あんまり嬉しくもなさそうだな。オイ、順。打ってやれ」

順は、例の鞆から注射器やアンプルを取り出した。

絶望した野原は身動きもしない。抵抗しても無駄だと覚ったからだ。虐待された後の鉢中の骨がバラバラになりそうな疲労と疼痛で、動くにも動けなかった。

チクツとした痛みで針の刺されたのが判った。

そのときどうしたわけか、野原は妹の顔を想い浮かべた。二人きりの兄妹のせい、離れて住んでいても兄想いの妹だった。その妹がうるさいくらい結婚を勧めるクラスメートの森川朝子の顔も浮かんだ。結婚を渋っているのは野原のほうだった。朝子が嫌いというのではない。彼には朝子を幸福にする自信がなかったのだ。まず第一は自分の職業であ

る。三月ほど前に、一度かなり具体的なところまで縁談の進んだことがあったが、野原の態度がハッキリしない為に、そのまま消えの形になっていた。

（結婚しないでよかった……）そう思ってた、

（ナンだ。俺は、まるでもう殺されると、きめているみたいじゃないか）と急におかしくなった。

「親分。大分弱ったようですね。続けてやってくたばりでもされちゃアまずかアありませんか？」

順が注射器をかたづけながら云った。

「チェッ。岩乗な駄をしてやがるくせに、やにだらしがねえんだな」

と黒眼鏡は一寸考えてから、

「おい。今日はこのくらいで勘弁してやる。

今夜一晩と、つくりと返事を考えておけ。いいか」

「フン。一晩たっても返事は同じことだぜ」

「まあ、いいや。いまのうちにせいぜい強がり云っている。順。こいつの着てたものは一纏めにしてあっちへ持ってくんだ。政。てめえは番をしてるんだ。縛ってあるから逃げ気遣えはねえが油断するんじゃないぞ」

黒眼鏡と順が出ていってから一時間ぐらいて、順が政の食事を持って来た。

「政。ご苦労だナ。ソレ、晩飯だ。コッペパンだが我慢しろよ。そのかわりにこれをやらア、親分には内緒だぜ」

「どうせ俺アいつだって貧乏クジさ。早く兄哥みてえになりてえよ」

「まあそう僻むなって。じゃまた後で来てみるからな」

政は愚痴を云いながらも、順に貰ったウィスキーに気をよくして、パンはそっちのけで早速、ラッパ飲みを始めた。

野原には勿論、食事は与えられなかった。

「そうそう、灯を点けなくっちゃ——」

政は空箱の間をゴソゴソやって臘燭を探しだすとマッチをすった。

忽ちウィスキーを空けてしまった政は、

「チェッ。こんな不味いパンなんか喰いたかアねえや。オイ、てめえ欲しけりややつてもいいぜ」

と云ったが、野原は、

「いらねえ」と首を振った。別に意地を張ってではなく、本当に食欲はなかった。

それからまたどのくらいの時間が経ったのか、フト見ると政は卓子に顔を伏せてジッと

している。どうやら酔がまわって居眠りを始めたらしい。

野原はゴロゴロと転って卓子のそばまでいくと、ソロソロと上体を起こし、次に反動をつけて立ち上った。蠟燭の火で手の縄を焼き切ろうと思ったのだ。しかし、卓子の上の蠟燭はいまにも燃え尽きようとしていた。そして結局は失敗だった。

暗闇の中で、野原は縄に歯を立てた。仲々とけない。歯が痛くなると、卓子の端で擦った。また歯で噛む。歯茎から血を出したのか口中に生臭い味が広がった。

政が、いつ眼を覚ますかもしれないし、順が「また来る」と云った言葉も気にかかる。野原は全身汗みどろで、何とかして縄をとくと必死だった。しかし、如何に焦っても、嚴重に縛った結び目は容易にとけるものではなかった。

戸の外に登音がした。

（駄目だ！……）

野原は急いで土間に倒れると息を殺した。

戸が開いた。

「政。どうした？ 真ッ暗じゃないか——」

順の声がして、懐中電燈の光が政に向けられ、それから野原を照した。

野原に近寄った順は、何を思ったか、いきなり縄をときにかかった。

「君?……」

「シッ!」

「どうしてまた……」

野原はそう訊かずにはいられなかった。

「理由なんかどうだっていい。早く逃げるんだ」

「すまん。恩に着る——」

「服を持ってきたかったが、親分に感づかれそうなのでやめた。我慢しな」

「そんなことはない」

「それからナ、さっき打った注射は蒸溜水だけだ。安心しなよ」

「そうか。助かった……」

「それからもう一つ。この家も先の家もガサを入れたって無駄だよ。証拠品は全然ありゃアしねえ。もぬけの殻さ。本拠はこの紙に書いていた。今夜中に手入れすりア一網打尽だ」

「君は!……」

「俺を信用するかしねえかは、あんたの勝手だ。さ、早くいきなせえ」

「じゃア——」

軀の痛みも夜気の冷さも感じないように、

禪一本の野原は深夜の埋立地を走った。

通りへ出ると、運よく通りかかったタクシーを止め驚く運転手に、

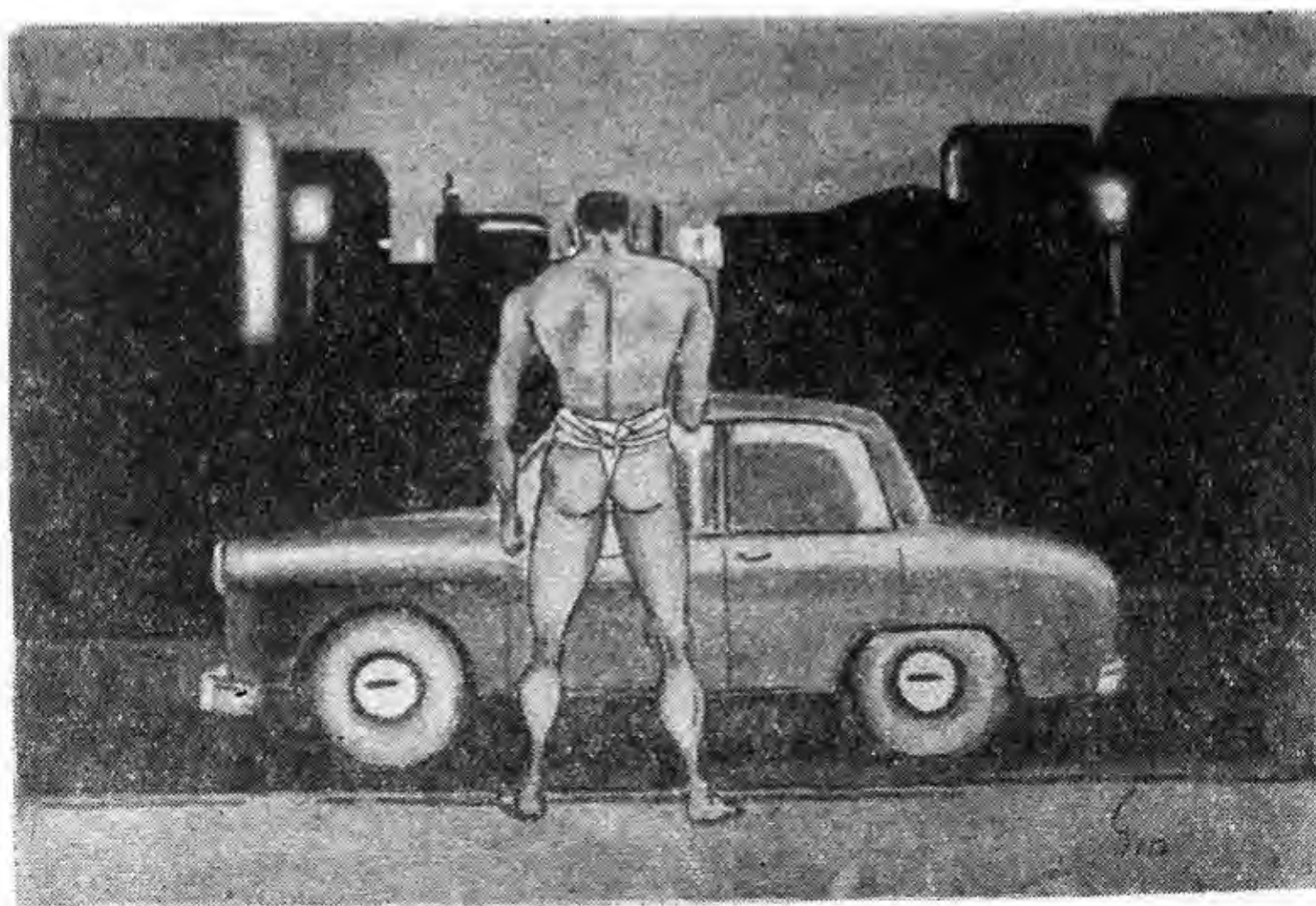
「わけがあつてこんな恰好をしてるが、警察の者だ。目黒の麻薬取締官事務所へ急いでくれ」

と云つて飛び乗る。

「かしこまりました」

若い運転手は気負った返事をして、アクセル・ペダルを踏む足に力を入れた。

野原は、順の言葉を信じることに決めていた。一味で、しかも幹部であるらしい順という男の行動は、確かに不可解ではある。だが親分の眼を欺いて蒸溜水だけを注射したり、危険を冒して逃がしてくれたり、そのうえ本拠の所在まで教えてくれたりするのには、明らかに野原を麻薬Gメンと知



つての協力に違いないし、それにはそれ相当の理由があるだろうが、ともかく彼の言動は信じるに足ると思えた。

(そういえば、あいつは竹刀で俺を打つときも加減していたようだった……)

野原は、ギャング・スターにでもありそうな垢ぬけのした順の様子を思いだすと、なぜかフツと一抹の佻しさを感じた。

慕 情

野原の急報により、直ちに非常召集された麻薬Gメンの一隊は新宿方面に向い密輸団の本拠を襲って親分をはじめとする一味をことごとく逮捕した。

その中に、順こと坂田順吉のいたことは、野原の胸を痛くした。

取調べに先だって開かれた会議の席上で、坂田順吉の取扱いについての意見が交されたとき、野原は、

「彼の協力に対しては、何等かの考慮を払って然るべきだと思います。自分が助けられたから云うのではありませんが、協力者を見殺しにしたら、協力者は無くなるんじゃないでしょうか。それに、何と云っても今度のことは、彼の協力の功績なんですから——」

と力説した。

「功績はよかったナ」

と、笑う者もあり、何人かの賛成者も出たが、結局それは人情論にすぎず、順吉の罪はどうしようもない事実だった。

麻薬常習者の取調べで一番てこずるのは拘留中に起こる禁断症状である。

「よう、一本打たしてくれよう。お願いだ。頼む！ チェッ、俺が仲間を売ったからこそ一斉検挙できたんじゃないか。少しア恩に着たっていい筈だぜ。それを、何ンでえ、一本ぐれえ。頼む。頼まア。俺がこんなに苦しがつてるのに、てめえらよくも平気で見てられるな！ 畜生ッ。死にそうだ。死にそうだア！……」

眼をひきつらせ、咽喉を掻き撚り、のたうち回って苦しむさまは、順吉も例外ではなかったが、野原の姿を見ると、いままで喚いていたのをピタリとやめて、

「あっちへいってくれッ！ 頼む。こんな俺を見ないでくれ！……」

と哀願するように云って顔を覆った。

野原にしても、順吉が禁断症状で苦しむのを見るのは辛い。

「頼むよ」

野原は田上取締官に囁いて、ソツと部屋を出て行くのだった。

順吉の刑が決まると、野原は何かホツとした。そして早速、面会の為に拘留所の門をくぐった。

順吉は寝てはいたが、すっかり健康を恢復して明るい表情をしていた。

「元気そうじゃないか。安心したよ」

「すみません。色々ご厄介をかけました」

「イヤ……俺は、君には本当に感謝しているんだ。しかし、それに報いることは何もできん——」

「その話はやめましょう。あの頃のことは思ひだしたくねえんですよ」

「そうだったな。ところで故郷から名物の蜜柑を送ってきたんでネ、少し持ってきた。喰うかい？」

「いただきます。大好物ですよ」

「それはよかった」

「野原さんのお故郷ってどこですか？」

「静岡さ」

「いいところでしょね」

「うん、気候はいいな。温暖の地で——」

「羨ましいナ」

「君は——？」

「私の故郷は東京の真ん中、焼野原の防空壕の中ですよ」

「そうだったのか……」

野原は、淋しげに笑う順吉の齒の白さを、いまはじめて発見したように美しいと思うのだった。

正月も慌しく過ぎ去って、ボツ／＼花の便りも聞かれる頃になった。

ある日、事務所から戻った野原五郎が、何時ものように二階へ上ろうとすると、階下の主婦が呼びとめた。

「お客様がお待ちですよ」

「客？」

「苦みばしったいい男で、ソウ／＼、坂田とか云ってましたわ」

「坂田が！ アア、どうも——」

野原は梯子段を駆け上ると襖をガラリと開けた。

「やア、出所したんだね。おめでとう！」

「色々とうも——。すぐ伺おうと思ったんですが、就職のことやなんかあったもんでして、つい——」

「で、いま——？」

「キャパレーに勤めてます。用心棒じゃありません。昔、ちよっとシェーカーを振ったところがあるンで——」

「バーテンダーか。そりゃアいい。君には似合うよ」

「いやア……」

少年のように頭を掻く順吉は人が変わったように快活で、野原は思わず微笑んだ。

突然、妹の典子がやって来たのは、順吉を送り出したすぐ後だった。

「何だ。いつ上京して来たんだ？ 吃驚するじゃないか」

「クラス会があんのよ。めんどくさいから連絡しなかったの」

「相変らずだナ」

「お兄さん。本当に、一体、どうなのよ？」

「え？ 何が——？」

「トボケないで。朝子のことにかまっているじゃないの！」

「アア、元気かい？ 朝子さん……」

「元気よ。フフ、顔見たい？」

「バカ」

「見られるわよ、いますぐにでも。ホテルに待たしてあるンだ」

「何だ、それなら一緒に来ればいいのに」

「ハッハハ、本音——」

「バカもん。大きな声で笑うな。みっともない」

「サア／＼、今夜はデイトしなさい。しんみりとネ」

「かなわんよ、おまえには」

春のスーツを着た朝子は、めだつほどではないが充分に美しかった。月並みだと思っただが、野原は銀座へでることにした。コロンパでコーヒーを飲みながら朝子の白い手を見て、（やっぱり結婚しよう）と考えたのは順吉のことで心が和んでいたせいかもしれなかった。

あてもなく夜の舗道を歩いていると、二人は確かに幸福な一組の恋人だった。野原は、はじめてソツと朝子の肩を抱いた。

二、三日して事務所へ順吉から電話がかかってきた。

「——俺だよ。どうしたい？」

「野原さん。今夜逢ってほしいんですが、おひまでしょうか——？」

「うん、ああ、いいよ」

「では七時にアイレン・ホテルへおいでください」

「よし、判った」

既に部屋で待っていた順吉は、駆け寄るようにして野原を迎えたが、その眼はいつもよりはキラ／＼と光っていた。

「酔ってるのか、君……」

「イヤ、ナニ、一寸だけ。本場のウイスキーがあるんですよ。どうです一杯」

「スコッチか。有難いネ」

嫌いなほうではない野原は、ニコリしてグラスを口へ持っていたが、順吉の様子がどうも気に懸った。

「野原さん。結婚するんでしょう？」

「結婚？ 何だい、だしぬけに——」

「隠しても駄目ですよ。ホラ、こないだの夜一緒に歩いてた女、綺麗な女じゃありませんか」

「ああ、あれ……君、見てたのか——？」

「ええ、見てましたとも。ちゃアんと」

「それなら仕方がない。白状するよ。そのつもりだ」

「やっぱりね。どうも、おめでとうございませう」

「よせよ。まだ先のことだ」

酔うと蒼くなる質なのか、順吉の額はひどく蒼白だった。

「君。そんなに飲んで大丈夫なのか？」

「心配ご無用。私ア酔っても決して乱れやしませんから。それより野原さん。バスを使っちゃどうですか？ サッパリしますよ」

「うん、そうだな。そうするか」

「ここで脱いでいったほうがいいですよ。バス・ルームは狭いから」

「そうかい。じゃ失敬するよ」

野原が脱衣するのをジッと瞞めていた順吉は、野原が真っ白な六尺褌を締めているのを見ると、思わず眼を瞠って、

「野原さん。あんな、褌を常用してたんですか！」

「イヤ、実は、あれ以来なんだ。何となく離せなくなってるネ」

「嬉しいネ。実は私もそうなんです。いまでも締めてますよ」

そんなことが、なぜそんなに嬉しいのか、順吉は子供のように、はしやぐようない方だった。

野原がバスからあがると、順吉はまたグラスにウイスキーを注いだ。

「俺はもういいよ。余り強いほうじゃないんだ」

「じゃ、この一杯だけ」

「そうか。じゃ折角だから……」

一息に空けると何だか舌に刺すように感じたが、気になるほどではなかった。

「野原さん。私ア、云わねえつもりでいたんだが、今夜は、やっぱり云っちゃいます」

「何のことだい？——」

「あんなとき、あんたを助けたのは、あんたが好きだったからだ！ 他に理由はねえ。判ってくださいませんか？……」

「うん。いまでも有難いと思ってる」

「こうして、どうやら真人間になれたのも、あんなに嫌われたくなかったからだ。その一心がなけりゃ、人間こうも変れるもんじゃありませんよ。でも、でもね。所詮、私とあんなア別々の世界に住む人間だ。それがやっと判ったんです」

「どういう意味だね？」

「イヤ、もういいんですよ。あんなに私の気が判らねえなア当然なんだ」

「坂田君。君は何を云おうとしてるんだ？」

そう反問したとき、野原は不意に激しい眠気に襲われ、順吉が何か云ったように思ったが、それきり何も判らなくなってしまった。フト気がついて、反射的に腕時計を見るともう十二時近かった。驚いて起きあがると、

自分がベッドに寝ていたのだと知った。

「坂田君……」と呼んでみたが、答えはなく姿も見えない。

野原は慌しくベルを押しボーイを呼んだ。

「坂田さんはどうした？」

「先ほど、お発ちになりました」

「発った？ 汽車でか？」

「はい。十一時の列車にお乗りになるとか申しておられました」

「どこへいったんだろう……？」

「さア、それは——」

「イヤ、いいンだ。私も帰るよ」

ホテルを出ると、丸ビルの上に星がチカチカと瞬いていた。

野原はスプリングの襟を立てると、

「変った奴だ……」

と呟いて歩きだした。

(おわり)

サド特集号・第三集の

特写フォトについて

近 藤

一

企画も回を追うと女体美の追究が益々激しく、グラビアも精選されたフォトで整備されてきたと思います。今回掲載の各フォトが、いずれも陰惨なものを残さないのは流石ですが、ポーズや縄のかけ方に変化が乏しいと、バックの多少の変化ぐらいではマンネリズムに陥いることを免れません。さらに欲をいえば、モデルの体質にもバラエティを求めたいと思うのです。従来、ポリウレームの点では伊

吹真佐子嬢がトップでしたが、ムクムクした肥り方は現在、大塚啓子嬢の持味でしょう。この二人を除くと他のモデルは適度な肉感を持った肉附でした。それも概ねピチピチした弾力に富み、新鮮な感じの強いものでした。初々しさも勿論ですが、二十五、六の女盛りから三十代後半の落着いた妖艶さも貴重なものと思います。しっとり凝脂の輝く肌、或は弾力とは縁遠い爛熟しきった柔かみを持つ

モデルが現れてもよいと思うのです。杉美美嬢や最近の岩井知子嬢のような瘦身のモデルも大事ですし、益田房子嬢の落着きや気品、花坂道子嬢の優婉な感じも大切だと思っています。

今回の特集では、やはり絹川文代嬢の被縛姿態が一番多いのですが、浜本喜美、三木敬子、両嬢のコンビや花坂道子、大塚啓子、愛川悦子、各モデル嬢の特色を生かした作品が並び、楽しく拝見いたしました。一五〇葉に垂んとする貴重なフォトについて、それぞれの標題に従い、順を追って感想を綴ってみました。

第一の「佳肴一尾」の絹川嬢は、洋装のモデルとしてはトップスターと思います。黄八丈のような和装も良く似合っていました。それは、やはりデビュー以来、売物の脚線の美しさと手入の行届いた髪の毛、稀少な目鼻

立ちの美しさのせいだと思うのです。この作品では、脱がされかけた左肩から露わになった肌に豊かな肉感があり、僅かに覗く純白な下穿きに清潔な感じがします。長く編んで垂らした髪も若々しく、表情も佳良です。唯、右ページ上、左のものは無くてもよいと思いました。

「狂花の戯れ」は素晴らしい作品でした。両嬢の身のこなしに清潔感が溢れています。表情も良いし、身に纏ったものも美しく、何よりも両嬢の身体の素直な美しさに惚れ／＼します。縛られることによって恋慕を表現するような任せきった可憐さ。厳しく縛り上げることを通して愛情を表現するような執心、そういったものが自然に流出しているようで、或いは何かの罰が口実かも知れませんが、愛情に基いたS・Mプレイといった愉しさの溢れる作品でした。しかし、第二ページの最後と第三ページの最初とは入替ってもよかったのではないのでしょうか。とにかく、両嬢の美貌殊に被縛モデルの瞳の美しさは抜群のものと思います。

「タイルの冷感」の田原美佐子嬢は、上の二葉が初々しく好感が持てます。脚の線も綺麗で、ヘヤースタイルを工夫すれば新鮮な情感

も増すと思われます。

「厚遇の座席」は流石に絹川嬢の貫禄充分に落着いた色気が満ちています。はっきりした眼鼻立ちのモデルだけに、装いには華麗なものが良さそうです。この作品でも肌の白さに襟の黒いのがクッキリ際立って見えます。背面のフォトでグイッと捻じ上げられた両手首も好ましく、また喰い入る縄目に絞なして胸を縦に走る縛しめが素敵なアクセントになっています。絹川嬢の和装の、いかにも鉄火な感じにマッチしていますし、以前、書いたように彼女の最近の豊胸は本誌のピカ一的存在ですから、それなりの処遇をすべきことは当然でしょう。粹で鉄火で女盛りの美女を捕えての吟味とでもいう処でしょうか。心憎い演技ぶりです。

絹川、大塚二嬢の「共通の戦き」は面白い作品でした。お互いに相手を意識し合った表情があり、絹川嬢に特に強く感じられます。大塚嬢を庇うような、それでいて負けたくないという競争心のリキミがあるようです。勿論、表情の巧みな彼女の方が厳しく縛しめられ、遙かに屈辱的なポーズをとらされているのですが、身長があるだけに、焦りが却って妙な硬さを出してしまします。ムクムクと肥

えている大塚嬢がパンティ一枚で胸の線の美しい絹川嬢がスリップ姿なのも楽しめます。

大塚嬢も美貌の絹川嬢との共演で、さぞやりにくかったでしょうが、いずれも髪の豊かなモデルだけに面白く、私は第二ページ中段の二葉が美しい競艶になったと思います。大塚嬢には猿轡を施さなければいけません。

「華鼻受難」は可憐な作品でした。黒の縄も余り被縛を感じさせませんので、却って縄の見えない左上の煙草と右上のネジ廻しが秀作です。のけぞった喉の線の美しさ、恐怖と苦痛に見開かれた瞳、やはり絹川嬢の演技力は一級品です。

「流れ落ちる美線」は、右下の二葉が佳良です。頭上に伸び切った腕、露われた腋毛、猿轡に活きる瞳がよく吊られる苦悶を演じています。ウェストのくびれとヒップの張りは、画で見るデフォルメされたものと実際とが、かなり違うので、特に絹川嬢の場合、この作品のカットはよかったのでしようが、唯、長時間の吊り責めにグッタリしたポーズを、はっきり出して欲しいと思います。

「友愛の表現」も楽しい作品です。「狂花の戯れ」と対照的に、これにはお仕置の味があります。若くて峻厳な女主人と生殺与奪の権

を握られている女奴隷といった演技です。まるで一匹の牝獣を懲しめるように、当然のこととして縛り上げて行く軽装の美女。そして裸身に剥かれ一言の抗弁も謝罪も許されず組敷かれ、馬乗りには抑えつけられ責め上げられる肉体の豊かさを誇る若い女。盛りを誇る女の匂いが強烈に漂うような、稀少な作品でした。

「哀美抽出」は、花坂嬢の独壇場ともいうべき長襦袢の被縛ポーズですが、洋髪、ネックレス、レースの肌着といった洋風のもの巧みにマッチした新鮮でエレガントな和装になっています。優しい女らしさの表情が巧みなモデルだけに肢を開くのは悪く、腿を合わせ頂垂れるポーズが、何ともいぬ佳さを作っています。

「応接室の稀態」の愛川嬢は新しい試みにぶつかったようですが、やはり、まだリファインされぬ個性の残りが多く、すっきりしません。それは、まず鈍重を感じさせるような豊かな肉体のためでしょうし、次に相変らず洗練されぬヘヤースタイルと化粧のせいと思われます。彼女自身、今までの作品では、どのような豪華な衣裳をつけるよりも、裸身の方が自然でした。これだけの緊縛に、さしたる

表情もないのですが、五葉の中では右上のものが良いと思います。

「脱し得ぬ拘束」は、第二ページ左上のものを第一に推します。縄のかけ方も変わっており絹川嬢の美貌だけに愉しめますが、この作品の彼女の背面には可憐という感じがなく、脚線が活きないと下品になりかねません。夫からお仕置される美貌の新妻といった作品でした。「苦痛への階段」の袖のない肌着は可愛らしいもので、角度によっては絹川嬢の上体にそぐわない感じもします。そのためか彼女の女体の美が、かなりマイナスされています。彼女としては、昇段を必死に拒むつもりか、階段での苦闘を表現しているのか分りませんが、真中の頭から転げ落ちたポーズ、逆のけぞっているポーズに迫真力があります。女体は常に喉の線が襟足を活かしているければ愉しめません。首の太く短い女体は魅力半減です。絹川嬢とても例外ではなく、常に注意して欲しいと思います。

「押込められた艶肢」といっても、余り手や脚が活きていません。このスペースなら二人分はありますから、下体をかかめるとか仰向けに寝かして膝を胸に接した方がよいと思います。下のフォトの方が表情が豊かで美しい

ものです。愛川嬢の和装も佳いものです。

「レインコート」の巾広の猿轡と首縄は幻想的です。最近、どうも本格的な首縄が乏しいようで淋しく思っていました。素肌にレインコートをまとい、眼の下まで覆う猿轡にフードをかぶり、首縄を締められる辺りは、古川裕子さんを想い出させます。以前の萩千恵子嬢出演の、古川裕子好みの緊縛持写には及びませんが、身長の高い割に肉附豊かな大塚嬢を活かして、本誌上に古川裕子の再現を望みたいものです。

「ひとばしら」は、余りよいではありません。それぞれのアップは、さすがに絹川嬢の豊胸を活かしていますが大体、爪先を六〇度にくる型の直立不動は女体美を損じます。以前にも触れておいたように、絹川嬢はヒップの張りに乏しいのですが、この作品では腹部を極端に凹ましたため下穿きの前が、たるんでしまったのは落第で、猿轡のない三葉の表情の悪さと共に惜しまれます。尤も左ページ下、二葉目は彼女らしいツンと澄ました小憎らしさが見事に出ています。

「泥まみれの青春」は本号の圧巻だと思えます。大塚嬢にして初めて可能な被縛美だと思えます。現在のモデル中で荒縄に堪え得

るのは彼女と愛川嬢だけでしよう。愛川嬢については分譲品の「悦唐雨ざらし」を拝見しましたが、やはり大塚嬢との間に身長差から来るらしい開きがあります。つまり小柄でムクムク肥えている大塚嬢であるだけに成功した作品でしょう。荒縄の喰い込みも厳しく申し分ない緊縛です。腰巻一枚の裸身というのも、髪の高い大塚嬢には、うってつけでしょうし、人影のない水際に引据えての折檻というような構成も良いものです。泥水を浴びせかけたというより、水を含んだ泥を塗りつけたというような泥のつき方ですが、脚はもとより背中から胸の双つの膨みまで泥だんごのように汚され、腹部も泥まみれになって土の上に、じかに引据えられた哀れな姿は、やはり素晴らしいものでした。顔にふりかかる髪をくわえ正座させられている彼女の腰巻は濡れて、へばりついているようで、情感溢れるポーズですし、さらにその彼女を打つ杖も見え、続いて彼女の豊かな腿の上に大石が一つ二つと積まれる辺りは、代官所の責め問いを思わせます。最近の作品で急速に柔かみを増し、めっきり女らしさを見せて来た大塚嬢に好感が持てます。右ページ下、左のものと、左ページ上、三葉と下左のものは特に絶

品で、恐らく彼女の代表作になるでしょう。表情に豊かさが出て来たのも見事です。

「白蝶の不安」は前面がロープ・ブラジャ、背面が本縄縛りともいうべき縄のかけ方で面白いのですが、脚を開いて立つような情感の乏しい田原嬢では充分な効果がなかったようです。マスクも未だ洗練された処に乏しく、

といった知的なものも少く無難作で、男の子のようなハイティーンのマスクですから、同じポーズをとらせた場合、中富綾子嬢や田中芳子嬢と、かなりの開きがあるようです。

「美貌の憤悶」の絹川嬢は、なかなかの好演でした。長襦袢の縛しめは、夫からのものか恋人からのものか、いずれにしても彼女を、こういった姿態に括り上げる男性の範囲は限りがあります。彼女は縛られたから怒っているのか、怒って云うことをきかないから括られたのか、とにかく憤りを瞳に現わし、何んとか拘束を解こうと努めています。苦痛と屈辱の余り、あられもなく悶え廻るのですが、白い襟と、露わになった下半身に見える純白の下穿きが好ましく、訴えるような怒りを籠めた眼差しも実に綺麗に写っています。

「スポットライト」の絹川嬢も、彼女の肉体の美しい部分を多く接写されて幸せだと思

ます。再三、述べたように、彼女は首から肩の辺りの線、伸び伸びした四肢の線、それに手入れの行届いた髪と巧みなメイキャップによる美貌が長所で、ヒップの辺りの張りや乳房の弾力が物足りないように思います。この作品は特に可もなく不可もない出来だと思

ます。先には大塚嬢の女囚姿が見られ、今回は拷問のようなポーズも出ましたが、絹川嬢も哀れな女囚姿を曝し、手錠や足鎖を纏ったのですから、次には愛川嬢の女囚物で苦役や懲罰が欲しいものです。品のある益田嬢や花坂嬢の囚われの姿や処刑の図の美しさも待たれますが、更には各モデル嬢を順次に春日嬢の足許に跪かせてみたら面白い物になるでしょう。

附記するならば、四馬氏の責面のうちでは二番目の「防水服の恐怖」が最も気に入りました。尤も、それは私の独得の感じ方のためなのですが、最近、呼吸も充分できぬような首縄というフォトが少いのですが、一三八ページの杉美美嬢のフォトや一五二ページの村田那美子嬢のフォトなどは稀少なものだと思います。容姿端麗な若いモデルを揃えるK・Kですから、首縄の点に注意して素晴らしいフォトを産み出して頂きたいと思います。

太平洋にける橋

藤山秀緒

乗馬ズボンシリーズ

会津の夜

静かな河畔の黄昏であった。

恵美子は湯上りの浴衣姿で椅子に腰かけていた。向きあって、これも浴衣姿に寛いでいるのは、バーバラ——米国人であった。

恵美子は、米国の百万長者の令嬢、バーバラ・アダムスの日本観光に、通訳として同行しているのである。

「エミコ、今日は本当にすばらしかったです。ピヤッコタイ、いいましたか、あのミューズイアムの絵、すてきです。日本のハラキリすばらしいです」

「まあ、お気に召しまして？、あんな惨酷な絵やパノラマをお見せして、気分でも悪くなさりはしないかと……」

「ノー。すばらしい。日本の研究ハラキリからです。」

「まあ、でもハラキリは昔の自殺方法で、いまはあのような死に方はしませんのよ。それに、ハラキ

リはとても残酷なものですわ」

「エミコ、云いましょうか。わたし腹切りに憧れて日本へ来たのです。戦争の頃、日本人はよくハラを切りましたね。そう軍人にまじって、オンナの人も切りましたね！、雑誌のグラフで見ました。」

「まあ！ 驚くことばかりですわ。ハラキリの写真なんて！」

「そう、アメリカ、自由の国です。どんなフオトでも、出していけないという規則、ありません。でも、私、見たのは、アブ・ノーマルな本でしたけれど、ジャップのハラキリ特集でした。……でも、みんな死んでしまった後のフオトなのよ。米軍が攻め込んで、日本軍がギョクサイしてから写真でしょう。クビのないのもあったわ。クビを切るのね。……中には一寸しかお腹を突いてないのもあった。……でもね、エミコ、私、感激しちゃったんです。どこの戦いの時だかは忘れたけれど、司令官や兵隊を逃すために、看護婦が、将校の服を着て、米軍の前でハラキリをしたんですって。戦える男という男は、一人だって貴重だったのね。きっと看護婦は、自分ももう戦うこともできないし、いつそ、ここで司令官の軍服を着て陣地の高い処で腹を切っ

たら米軍も驚いて、しばらくは攻撃もしないだろう。そうして、みんなを逃がそう、って考えたんじゃないかしら。……でもね、そんなことを真面目にきいて、看護婦に腹を切らせた司令官は、随分オバカさんだわね。だって、望遠鏡で見れば、男か女かぐらいは一目でわかるじゃないの。でも米軍は、女だとわかったけど、砲撃はやめたんですって。そして、もう日本軍は反撃しないと判断して、前へへ〜と出て行って、その看護婦の死ぬ処を全部見物したのだそうです。可愛想にねえ……」

「そ、それで……」

恵美子は、いいようもない感激にかられていた。

「その人の死ぬ処、全部カメラにおさまっているのよ。望遠レンズだから、本人は、もちろん知らない。砲撃もやんだし、自分の役目も立派に果すことができると思立ったのだわ。」

バーバラは、じっと思い出すように眸を天井にむけていた。

「一枚の写真は、まだ切っていないの。りりしい軍服、革ベルトでウエストを絞って軍刀を抜き、乗馬ズボン（キユロット）で長靴をは

いて、サングラスをかけているの——人相をかくすためでしょうね」

「勇ましいのねえ……」

「うっとりするような写真だったわ。死を決した人の顔って、本当に美しいものね。キユロットは男物だけれど、よく似合っていたわ。何か手をあげて叫んでいるの」

「……天皇陛下万歳だわ……きつと！」

「そう。祖国の勝利を祈って死ぬのね。……そう思ったなら、なんだか思い出して涙が出そうよ。乗馬靴の両足を踏みしめて、両手をあげていたわ……」

「それから！」

「二枚目はね、左の脇腹へ軍刀を刺し込んでいるの。女と思われたくないので、軍服も胸の処はボタンをはめたままで、お腹の辺りだけ外したらしいの。で、傷口は見えないけれど、体が前屈みになって、……ああ、シヨックだわ。顔は、うつむいてしま……」

「三枚目は？」

「それが、ひどいのよ。キユロットの両脚をぐっと踏みしめて、顔をあげているの。……もちろん、サングラスは外れてしま……彼女の顔がくっきり。マユが引きつり、口をひらいて、いまにも呻きがきこえそうなの。傷は

見えないけれど、相当深く突いたらしいの。だって説明に、彼女のこの顔のけいれんは腹部動脈に切込んだものと思われる。つて書いてあったの」

「そして、どうなりましたの！」

「……それからが駄目なのよ。泳えきれなくなったのでしよう、彼女は俯伏せに倒れてしまっているのよ。……だから後は、彼女の肩とキユロットと長靴の位置で、苦悶の様子を想像するだけ。……でも、何度か起き上ろうと、キユロットのヒザを立てそうにしているフオトもあったわ。……そして、このあとが彼女がのけぞっているのだけど、フオトはつきりしないのよ」

「……可愛想にねえ……」

「仰向けに、のたうっている処もあったわ。キユロットが血でドス黒くなって……ああ、これから先は、私どういおう。大層なの。死の五分前って書いてあって、担架に仰向けに寝かされて、白眼をむき、歯をくいしばって軍服を掻きむしっているの。切腹してから三十分たっているんですって。見かねて米軍が担架で連れて来たのね。彼女は手当を拒んだ。助かる見込みもなかった。この戦場ではこれが説明よ。そうして、あとは、死んでし



まった処。担架に、軍服の乱れを正し、ベルトを締め、キエロットの両足もきちんと揃えて眠らせてあったわ。でも、血だらけ。ねえエミコ。日本人は、ハラキリを皆知っている

のでしよう？ ……見せて！見せて！」
バーバラは子供のように甘えた。
恵美子は呆心したように、バーバラの話を聞いていた。

「女が切腹する！」
恵美子の胸は異様にたかぶった。
「そうだ、ここは会津の東山。白虎隊の踊りがあるのだ。芸者は、みんな白虎隊の扮装で踊ると聞いた。見よう！」

とっさに恵美子は、そう思いつくと、バーバラに白虎隊の踊りを呼べば、きっとハラキリもあるから、とすすめた。

バーバラも喜んだので、すぐ芸者を呼ぶことにした。

外人が見る、というので芸者たちは、特別にはりきったらしい。太刀を抜き、黒紋附に男袴で、それは本当に、りりしいものだった。でも、バーバラは見終って、がっかりしていた。ちっともハラを切らないのである。

「エミコ。折角だったけど、ハラキリはありませんでしたね」

「……」

「バカですねえ。思う存分、切っ
て倒れたら、もっと、もっと評判
になるでしょうに、彼女たちには
本当のこと、わかっていないので

すねえ」

バーバラは、さも残念そうに云った。

恵美子は、バーバラの望みを叶えてやるためには結局、自分が、やって見せなければならぬことになった。

「バーバラさん。私だって、巧くはないけどこんなものだという事は出来るかもしれないわ。おわびにお見せしましょうか」

バーバラは目を輝かせた。物珍しさに日本の女通訳から切腹の仕方を習うというのではなかった。エミコそのものの、苦悶の姿が見たいのだった。

開眼

恵美子は、紋附袴、白鉢巻、太刀までも借り込んで、次の間で支度していた。

バーバラは、色つきワイシャツに、スラックス姿で座敷を片附けたり、準備に大わらわである。

「バーバラさん。どう？ 似合うかしら」

恵美子が、一寸恥しそうに扮装して出て来た。バーバラは、すっかり上気嫌で、

「おお、エミコ。さっきのゲイシャよりずっときれいですよ！」

「まあ……」

恵美子が一寸、笑った。彼女は、すぐ真剣になった。

「バーバラさん。見て！」

彼女は大刀をガバと左の脇腹へ突き立てていた。

このことがあってから、バーバラは恵美子を片時も側から離さぬようになった。

バーバラの切腹マニヤぶりは、いよく激しくなった。

バーバラは、和服を買込み、恵美子に手伝わせて着ては、恵美子の指導で芝居を演ずるようにすらなつた。

はじめのうちこそ半信半疑の恵美子だったが、バーバラは手をかえ品をかえて恵美子につきあいを求めた。とうとう恵美子までが、深い関心を持つようになってしまったのである。

バーバラは、日本の軍服を手に入れたといいつつけた。恵美子は結局、浅草まで行って、将校服と、飛行服、乗馬ズボン、軍用雨衣など、ひと通りの物を買って来てやった。その時、自分のも一揃い買い求めたことはバーバラにも云わなかった。

バーバラは、その軍服を着けて、切腹の凝態にのたうち廻るのであった。

恵美子は、バーバラの前では、あくまでも冷静に、「先生」として振舞った。バーバラに芝居をさせて、批評したり、一寸、手本を示す程度にしていた。

恵美子は、なんとなく、バーバラの渦中より、少し離れた処にいたいと云うプライドに似たものを持っているのだった。

だから恵美子が、深い関心をよせるようになったといつても、それはバーバラさえ、知ってはいないのだ。恵美子自身の心の秘密なのであった。

バーバラと別れて、自分のアパートへ帰って、はじめて恵美子はマニヤとして独り、プレイにひたるのである。

「は、腹切る事は苦しいが……お、お国のために……なることなら……よ、よ、喜んで！……さ、さようなら！ いざ、いざ——ウ——ッ……ウウム」

独り芝居には筋もなかった。ただあるのは彼女が他人のギセイとなって潔く命を捨てるという設定だけである。

恵美子自身が、このようにして凝態に熱中し、夜毎に悶えていることは、バーバラも知らない。

こうした女心の複雑さを、運命の神はほく

そ笑みながら覗き見ているのであろうか。

コスチュームも次第に変化をつけ、浴衣、訪問着、紋附、稽古袴、乗馬服、軍服、スポーツ服、水着、等々、新しい試みがなされて行ったが、結局、バーバラの切腹に関する最初の印象が強かったせい、軍服や、乗馬服がよく使われるようになった。

そんな日がつづいていくうち、バーバラの帰国する日が近づいて来た。バーバラは、帰国にあたって恵美子に、こんな事を頼んで行くのだった。そして、それが恵美子の「職業」になろうとは。

調教師

バーバラは、帰るときに、恵美子に、映画を作って送るように頼んで行ったのだ。

毎週、新しい趣向のハラキリ・シネを、恵美子は捻り出さねばならなくなった。バーバラの出資で、簡単なスタジオや、カメラなども買入れはしたが、ここでも恵美子は、自分がカメラの前で演技することに抵抗を感じたのである。

沢山の費用が、半ば無制限にバーバラから送られて来た。恵美子にも、給料として多額の金が支払われている。恵美子は、この映画

のスターを探さねばならないのだ。

恵美子は、まず、このようなことに理解を持つ女性は、どこにいるのだろうか、と考えた。

まず武道や剣舞を習う女性。

次に歌舞伎や能を好む女性。

次に乗馬のようなアブティツクなスポーツを好む女性。

次に、どこか陰気なカゲのある女性。

どれも、すぐ見つかった。でも、どう切り出したものか。

彼女は、気長に面接をつづけた。

結局、彼女がこの分類の中から各々一人ずつを残して、一本ずつに主演させてみることにした。

剣舞をやっていた道子は、すぐ間に合いそうだった。

でも、テストの結果は、綺麗事、とてもバーバラの満足するような凄絶なものにはなりそうもないのだ。

みな、恥しいのだ。「日本文化の紹介」という、もっともらしいタイトルはつけても、それだけで彼女たちを動かすことは難しいのだ。

でも、一本の出演料十万円は、彼女たちに

とって、多少の苦勞を我慢させるであろう。

恵美子は、一本目を撮り上げるまでは、何なんでも道子をたたき直さなければならぬ。

恵美子は、道子に因果をふくめ、あの灼熱の瞬間のうめきを会得させるために、激しい責めを課すことにした。

道子は、「責め衣」を着せられた。ごわごわとした作業服。編上げのブーツもはいた。オートバイの曲乗りなどに、これをはいた女性が出る。まず完全武装というところであろう。

道子は、歯をくいしばって試練に堪えた。きりきりと革ベルトや麻なわで締めつけられても、息を荒くするだけだった。

「いいこと、いまの呼吸。いまのが突立てた時の息づかいよ！」

「はっ、はっ、はい……。」

「それ！」

「むう、うむ、うっ！」

「ウエストを絞ると、そういう声が出るでしょ。右へ引廻す処。」

「ああ、うむ、うっ！くくくッ！」

「苦しいのよ、切腹は。迫真のお芝居というだけで、恥しいことなんかないのよ。がんば

って！」

練習にしては、力がいりすぎている。

恵美子のサディズムだった。

恵美子は、グレイの乗馬ズボンに黒の長靴をはいて道子を責めている。

道子は恨めしそうな顔もせず、恵美子の云う通りになって悶え苦しんでいるのである。

十万円がほしいからか。それもあろう。でも恵美子の眼力は、道子が好んで白虎隊の剣舞を舞う事実を見逃していない。道子が、ご

わごわした作業服とブーツに愛着を感じはじめたことも見逃していないのであった。

道子には軍服での切腹シーンを演じさせることにした。

今日はテストである。

道子は幾分、恥しそうではあったが、乗馬ズボンを穿き、軍服を着け、そして長靴をはいた。

りりしい女将校ぶりである。

でも、彼女は、テストにかからぬうち、軍服姿を鏡に写したとき、激しくおののいて、その場にくずれてしまった。

ブランドーが与えられた。

「道子さん。辛いでしようけど、これからよ。決して恥しいことはないのよ。充分にオ

ーバーに呻くことね！」

「……」

道子も決心したようにうなずいて、いよいよ切腹シーンが始まる。

セットは、壊れかけた土塁と、鉄条網の切れたのが飾られている。

「天皇陛下、万歳——ッ！」

いままでの道子とは思えない迫力！

道子が軍服のボタンを外すところでカット。

次は軍刀を脇腹に突き立てるシーン。

「うっ！」

とたんに恵美子が、

「だめ」

やり直しである。

「あ、ううっ……」

「もっと、勇ましく！」

カメラが廻りはじめる。

「く、ううッ！」

どうやら合格らしい。

「う、うむ……、お、女将校も、や、大和撫子の、さ、さいご……。自、自決の手本……み、見せる！ あ、ああつ、うむ」

呻きも真にせまっている。一週間の責めは道子にとって大切な経験をしたことになるの

だった。

「ウ、ウーッ！」

刀を引廻しながら可憐な呻きをあげる道子

——カメラの背後に立つ恵美子も、胸のときめきを、どうすることもできないのであった。

「ああ……。ウーッ。」

軍服姿が泳ぐ。白哲の美貌がゆがみ、顔色はバラのようにあかいのだった。

KK 叢書発刊予告

第一巻 沼 正三「あるマゾヒストの手帖」

第二巻 松井頼子「淫火（みだらび）」

第三巻 吾妻 新「被虐の家」

第四巻 土路草一「潰滅の前夜」

（以下続刊）

KK叢書と題して右の通り本誌に既発表の傑作を単行本化して皆様の机上へ捧げたいと思います。定価その他内容の詳細に關しましては、いずれ完成次第、誌上にて広告の予定であります。尚、こういったものを単行本にしてほしいという御希望がありましたら、どしどし述べて下さい。続刊してゆきたいと思ひます。

或る倒錯生活

(その四)

西村 憲 一

(黒 髪)

桜も過ぎ、つゝじも散りかけた五月の末の事である。昼まで社を出た常が訪れると門の外に車が止り喪服を身に手に数珠をかけたり、えが僧を送って出て来る所であった。

「おや？」と訝る常へ「今日は旦那様の一周忌で御座いますの」と眼を伏せるのであった。

去る者、日々に疎しの諺通り、常は全く忘失していたのである。僧を見送って共に家に入ると、室の仏壇は美々しく飾られてあり、

鏤々たる香煙が尚、立昇っている。称名し合掌するり、えに付いて常も又、香を燻じ、在りし日のせいを偲ぶのであった。——せいさん貴方は倅せな人だよ。り、えさんにこんなにも慕われて。貴方は心を残して私に頼んで逝ったけれど、この人は貴方のことを、まだこんなに想っている。けれどこの一年間、一途な気持を見せられて貴方の為に喜んでいるよ。

——そう心の中で話しかていた。

居間に寛いで一服している間に、り、えは喪服を常着に替えて、常の前に食事を運び精進料理の箸を共に取ったのである。

それから三、四日経った或る日の事、何時もの様に立寄った常が帰ろうとすると、
「あの……今度は何日に来て下さいますか知ら？」

と問うのであった。

「え？それやり、えさんが来いといえは何日でも来ますよ。何か用でも？」

「いえ、用だなんて………お聞きして見ただけですわ」

慌てた様に眼を伏せて、何故か赤くなったのである。

「明日、明後日は一寸、手が引けないので、

その次の日に来ますよ」

「夕方？」

小首を傾げる様にした姿に媚が湛えられて
いるのだ。

「そうですね。矢張り夕方になるでしょうね」

「ゆっくりなされる様にして、いらっして下さいませんか？」

「そうしましょう。だが、どうしたんですか？」

「いゝえ、別に……何時もあり合わせ物ばかりでしょう。たまには御馳走しようと思つて」

「何時も御馳走になっていきますよ」

「是非いらっして下さいませ。お待ちしていますわ」

そういうと赤くなって、常を送り出したのである。その日は朝から雨になり、気温は急に低下して午後からは風も加った。

翌日は日曜であった為、工場の手配や事務書類に手間を取られ、会社を出たのは五時近かった。社の車を途中で返し、タクシーに乗り替えた常は、既に頭の中が、えの事で一杯であった。

茲一年間、密接な交際を持って見て、今では全く彼女に傾倒してしまっていた。せい、

死んでからそうだったのか。或は、もと／＼そうなのか。何時会っても静かな、そして淋し／＼なり、えであったが、反面、対する者に仄々と暖かさを与え何かしら魅きつけられるのであった。

しっとりとした静けさの中に溢れる品と艶かしさを想い出すと、居た／＼ない焦燥に駆られる常であった。間もなく車は止り、雨の中へ降り立った。いそ／＼と出迎えるり、えは若妻の如く華かで、手にした蛇の目の傘が雨の中に美しかった。二日間で邸内は面目を一新していた。

庭師を入れたのであろう。木も石も装いを新にし、芝生も刈り込まれ、泉水も深々と流れていた。畳は表替えされ、襖、障子も全部張り替えられているのである。

「？」常は吃驚して眼を瞠った。

「長い間、構わずにいたのですから……思い切って何も彼も仕替えましたのよ」

「まるで婚礼でもある様ですな」

「まあ！厭ですわ」

彼女は真赤になった。

「綺麗ですね。……だが、おゝごとでし

たね、僅かな、ひにちで……」

常は縁に立ち雨に煙る庭を眺め乍ら、今更

に宏大な庭の見事に驚嘆した。山谷、林野に巨岩、奇石を配し、百草、万木と水を以って、自然と人工の美の巧緻を現出しているのである。

「お風呂を、どうぞ」

我に返って振り向くと、縁に膝を突いて白い顔を向けていた。

「頂きましょう」

勝手知った浴室へ入れば、大きな浴槽に満々と湯が溢れ、窓を隔て、聞く雨の音が和やかであった。ゆっくりと体を浸し一日の疲労を湯と共に流して上った常は、快い満足と、心の弾む様な気持になっていた。

「おや？」

脱衣室の乱れ籠に、自分が脱いだ着衣は無く、変って男物の下着を上、男物の和服が一揃い置かれているのである。

これは？と驚いて「りえさん、りえさん」と呼んだが返事は無く、雨の音が静かに聞えるだけであった。止むなくそれを身に着けて鏡の前へ立って見れば、上背もあり肥っている体に、ぴったりと合い、おかしく無いのである。兵児帯を巻き出ようとすると、

「良く、お似合ですわ」

入って来たり、えが掌を返して艶かに笑う。

「悪戯しちや困りますね」

「だって、お洋服では、お寛ろぎになれない
と思ひましたの。あたしの着物じや変ですし
…………お厭でしょうが？」

「まあ、良いですよ、ゆったりして。でも誰
のですか、祈も身巾も丁度ですよ」

「ほゝゝ…………どうぞこちらへ」

笑い乍ら先に立ち、設けの席へ案内して、
常を床の前へ座らせるのである。一間の床に
は山水の一幅が掛り、青磁の花瓶に百合と沈
思梅が活けられてあった。

書院に置いた青銅の香爐からは佳香が漂い
開け放された庭から流れ入る雨風と共に、湯
上りの肌に爽快であつた。

床の間の前に置いた花梨の大卓子の上には
見事な器に様々な料理が盛られて、眼にも美
しく美味そうであつた。

「折角お招きして、何も御座いませんのよ」

「冗談じやない、こんなに誰が食べるんです
？」

「さあ、どうぞ召上れ」

片手で袖口を抑え、銚子を取って、うなが
すのである。

「御馳走になりますよ」

日は未だ暮れず、雨に煙る庭園が、得もい

えぬ風情であつた。

「お口に合いませんかしら？」

「いや、美味しいですよ。然し、多過ぎて何
れから食べようかと思つてね」

「ゆっくり召上つて頂戴」

「り、えさんも一つ」

「えゝ頂きますわ。酔いまして宜しくって

？」

盃を両手に受け首を傾け乍ら顔を綻ばす姿
体に媚がこぼれる様であつた。

「良いですとも。介抱して上げます」

長い間、見た物淋しさは全く消えて、打っ
て変つた浮々した姿である。常もつられて陽
気になつて行くのであつた。風は全く落ちて



静かな五月雨の中に暮色は這い寄る様に近寄っていたが、明るい室内は華やかに輝いて、上気したりえの肌は一段と艶やかであった。

「りえさん、私はねえ」

「え」

「こんな事をいって好いか悪いか判らないんだが」

「何で御座いますの？」

「貴女と知り合って一年余りになりますね」

「はい、色々とお世話になりましたわ」

「いゝえ、そんな事いってるんじゃないんです。私が酔ったからいうんじゃないんですよ」

何をいい出されるのか不安そうに上げた眼に、暗くなった庭がうつった。

「はい」

返事をしながら立って障子を閉め、もとの座へ膝を正した。

「貴女という人は付き合えば付き合うほど判らなくなるんです」

脇息へ、ひじを突いて彼女を見据える様に見つめるのである。

「まあ、何故ですの」

常の直視に堪えかねて自分の膝に眼を落すと、白い手で袂を合わせた。

「それ／＼それなんです！」

「はい？」

「貴女は器量といゝ姿といい、ほんとに綺麗で」

「あら」

「しとやかで優しく何事にも控え目で、そのくせ、よく気がつく」

「？」

「料理も上手だし、お茶もお花も一人前以上で、踊りなんか藤倉さんで吃驚して居た」

「まあ、大変な事になりましたわね」

「まあ、お聞きなさい。私の知って居る女の中で、貴女ほど女らしい女の人を見た事はありません」

冷えた盃を口に含んだ。

「死んだせい、さんから聞いた貴女が真実なのか、私が見たままの貴女が真実か、私には分らなくなった」

りえは深く頭を垂れて白い襟足を真赤に染めて居た。樹の葉に落ちる雨の音がしめやかであった。常は自分で酒を注ぎ口へ運んでいた。二人とも無言のまま暫く身じろぎもしなかった。

りえの肩が小さきみに震え初め、片手で袂を顔に当てたのを見つつ、常は煙草に火をつ

け一服大きく吸い込むと、

「りえさん怒らないで聞いて下さい。私にとつてせいさんが言った貴女が真実であろうと私の眼にうつる女の貴女が真実であろうと構わないんです。貴女がどちらであろうと私は可愛くって仕方がないんです。貴女の為ならどんな事でもして上げたいと思っているのです。これからは何でも私に言って、させて下さいよ。こんな事言つて、気を悪くしないで下さいね」

常はしみじみした調子でいい乍ら、煙草を灰皿に置いて、盃を取り上げるのであった。りえは白い首筋を此方に見せ、一層、肩を震わせていた。

「酒に酔つて変な事を云ってしまいましたね御免なさいよ。気嫌を直して一杯飲んだら。ね、りえさん」

りえの傍へ行き其の背へ手を掛けて慰めるのであった。

其の姿を、常は美しく又、可憐に思いつつ便所へ立つて行った。茶の間の時計が八時を報じ、常が座に戻った時、彼女は泣き止んで居たが、深くうなだれて身を固くして居る様子であった。

「さあ、飲み直そう」

りえの後に近寄ると、かほそい肩へ手をかけて白い顔をのぞき込んだ。

袖で顔を隠そうとするのを片手で押え、片手で其の顎を仰向かせれば、にっこりと微笑むのであった。血の気の引いた頬へ、おくれ毛がかかり、何とも言えない愛らしさである。

眼を閉じて、常の手に委せ切ったりえの様子に、常は我を忘れようとしたが、危く踏み止って其の手を離し我が席へ戻ると、りえに盃を差すのであった。其の盃へりえの方から酌をすると、小さな声で「一寸」と言つて銚子を持って出て行った。ひとり箸を動しつつ長い間の鬱積を吐き出した満足感に常は快よかった。りえは答えずに泣き出したが、自分を嫌悪しての泪では無かった様だ。だが常はせい、がどの様に彼女を愛していたのか知らない。

「失礼いたしました」

新しい銚子を持ってきたりえは、全身に羞恥を見せていた。

化粧も直したらしく、泪の跡は見えなかった。常の視線を逃れる様に酌をするのである。

「私に注がせておくれ」

常はりえに盃を持たせた。獻酬の中に氣ま

ずさも消え、共に陶然としたのである。常もりえも意識して先程の話には触れなかったが、二人の心は相俟っている事を共に感じていたのである。

「何か踊つて呉れませんか」

「はい、何に致しましょう？」

素直に立上つて舞扇を取るりえ。

「黒髪と言うのがあるでしょう」

「はい、おぼえて居るかしら？」

自分では意識しなかったがりえの肩を抱いた時、顔に乱れた髪のはつれが美しく「黒髪」を運想して望んだのである。

唄いつつ踊る着物の八つ口からの長襟袵の紅がこぼれて艶めき、扇と袂と表情に得も云えぬ風情を見せるのであった。

夜は更けて、酒にも肴にも飽いた頃、何気なく呟く様な小さな声でりえは云った。

「大村の旦那様の一年忌も済みましたわ」

「そう早いものですね」

彼女は、つと座を退り、常に向つて手を仕えると、「あたしの様なかたわ者でも、お厭で御座居ませんでしたら……」

と面を伏せた。

「？」はっとして見つめる常の眼に襟足が見る見る赤くなつて、

「旦那様と呼ばせて下さいませ」
がっくりと頭を垂れたのである。

消え入る様な姿であつた。

「有難う、りえさん。宜しく頼みます」

「あ、あり難う御座居ます……」

「そうでしたか、貴方は其んな氣持でいたのですか、一年忌をね。可愛い人だねえ」

深くうなずき乍ら、其の心情に胸打たれ、我が為に設けられた今宵の新装の席である事を知つたのであった。予め自分に日時を聞き僅か二日で邸内の手入れをしたのも、我を迎える為であつた。氣付いて見ればりえの髪には真珠が光り化粧も濃く、薄物乍ら着物は緋の襦袢に豪華なお召を重ね、帯は揚羽に結んでいるのである。ベールを冠れば其のまま花嫁の姿ではないか。着せられた男物の和服も自分の為に新しく仕立てたものに違いない。せい、に比べ常は上背もあり、よく肥っていて其のまま着れる筈はなかったのである。細々と行き届いた心根に常は、まぶたの熱くなるのを覚え、眼頭を抑えるのであった。湧き上る感情を制し兼ね、りえの白い手首を握つた。

一週間程、夢の様に過ぎた初夏の朝であつた。若妻の装いも華やかなりえは、常に向い

遠慮そうに言うのであった。

「あの、お叱りにならないで……」

「何だね？」

「あたし幸せですわ。この幸せを何時迄も続けて参りたいと存じますの」

「？……」

「其の為に旦那様のお家の方も会社の方も、反対を受けない様にしたいと存じます」

「そんな事は、えさんが心配しないでいいよ」

「だって心配になりますわ。あたし……」

「心配する事はないよ。誰にも判りやしないよ」

「はい、あたしだって何時もいて頂きたいんです。でも、それでは皆様から反対をうける原因になると思います。今迄通りにして頂かないと……」

「判ったよ、有難う。私も考えていたのだが、えさんが淋しかろうと思ってね。辛抱するかい？」

「はい、済みません。生意気なこと云って。御免なさい」

「じゃ今日は社へ出るよ」

「はい」

「社から家へ帰るからね、今夜は一人で辛抱

してお呉れ。鼠に引かれない様にね、りえさん」

「旦那様。厭ですわ、お呼びすてになって」

「あ、そうだったね」

新聞を置いて常は縁に立った。色を増した樹木の緑が広い庭一杯に溢れて、眼醒める様であった。濡縁の下の手洗鉢の横に紫陽花が咲き初めており、朝顔の竹垣には蔓が一面に絡んで、大きな葉を繁らせていた。りえの丹精であった。

「車を呼んで貰うかね」

大きく伸びをすると、後を振り返っていった。

「はい、直ぐ呼びますの」

「ああ、お前の機嫌の変らん間に出かけよう」

「あら、まあ酷い方ね」

怨ずる様に言い乍ら見上げる顔には媚が溢れ嬉しように、いそ／＼と立ち上るりえであった。

入梅を前にして気候は不順であった。その二、三日前から急に冷え込んだ肌寒い朝の事で、出て行った常は、その日も翌日も帰らなかった。三、四日しては来て泊って行く様になったが、時には異状な嗜虐を持ってりえを

困惑させたが、彼女も能く同調して彼の意に従った。倒錯した生活は、時には火と燃え、時には水と睦びつつ早一カ月余を過ぎたのである。

(二人の次長)

常との異状な生活を顧りみて思わず赤くなるりえであった。ふと常の言葉を思い出し、色々と考えて見るのである。中央家具との取引は重大らしく、万一の時は会社の興廃にも影響するのではなからうか。会社の隆盛は常の生命であり、その喜怒哀楽はりえの哀歓に変わりなく、平隠無事な社の存在は即ち彼と彼女の生活の安泰に違い無かった。社は即ち常であり、常は又りえの総てに外ならないのである。別に隠すつもりではなかったが、せいも常も知らない彼女の資産で其の難局の打開は出来ないものか？ 父の深い愛の遺産は父の言葉通りに温存され、毎年毎月、膨れており、二千万や三千万は今では容易であり、常の為なら惜しくはなかった。

その身の状態の上からも、一人住いの用心もあって証書も証券も通帳も、一切を実印と共に銀行の貸金庫の中へ預けている為に誰も其の事を知らず、自然、秘密となって保たれ

ているのであり、必要の無いままにせいにも常にも明していいのであった。又、彼女の性質として其んな話しは好まなかった。唯、一心にせいを慕い、常を慕って、其の愛情と庇護に身を委ねて来た訳であった。中央家具の内容さえ堅実であるならば、常の社との取引を保つ為に其一部を費したかったが、今更には恥かしくて云えず、其の金の為に二人の間に亀裂でも入る様な事がないとは保証できないのである。

胸を痛めたり、えは先ず興信所を以って相手方を調査して見ようと思っていたのであった。

手早く辺りを取り片付けて、犬達に食事を与へ、鏡に向つて仕度をする。

黒い単衣に博多の帯を締め、戸締りをして外へでた彼女は道でタクシーを拾った。運転手に興信所を探して貰い、其処まで送らせたのである。「西京興信所××支店」と金文字で書かれた扉を排して受付の若い女に來意を伝えた。

「どうぞ、此方でお待ち下さい」

案内された応接室で待つ程もなく、白いワイシャツの袖を捲り上げ鉛筆とメモを持った青年が額に垂れる髪を掻き上げ乍ら入つて來

た。

「お待たせしました」

向い合つた椅子に腰を下した。ネクタイが曲つていたが、良い柄で引締つた容貌に良く似合つて居た。

「御用件は？」

「はい、一寸お店の状態を調べて頂こうと存じます」

「商業調査ですね。相手方は？」

世辞も愛相もない応対であつたが、好感の持てる態度であつた。

「大阪の上六ですの」

「ええと、上六の番地は？」

「判りませんのよ」

「え？」

意外そうに顔を挙げた青年は初めて、えの美しい容姿に気が付いたのか、まじ／＼と見瞞めるであつた。

「で、調査の目的は？」

「はい、お店の營業状態と資産の内容……」

「一寸待つて、資産内容と、それから？」

「商品の主な仕入先と数量。支払状態もお調べになつて下さいませんか？」

「ええと、支払状況の調査ですね。はい、宜しい……それだけですか？」

「最近、お仕事の拡張をなさつていらつしやるのだんですけど、その進行程度と見通しと申しますのですか、それも一しよに……」

「拡張の進行と見通しですね」

「あ、それから取引銀行と信用の程度も……」

「ええと、銀行関係ですか」「あの、その専務さんで平松と仰有る方のお人柄と素行と申しますか、それもお調べ頂けますか？」

「平松専務の身上調査ですね。やりますよ」

「大変勝手なんですけど、此方の事は相手方にお知らせにならないで」

「好いです。承知しました。」

「では……」

好感の持てる青年であつた。金を渡し、日限を約して其処を出た。陽は暑く渴いた道路は車の通る度に砂塵を上げ、照り返す光は眩しかった。通行の女達は殆んど洋装になつて軽快そうであつた。

百貨店へ行き、白足袋の草履をエスカレーターに乗せ家具売場へ向つた。蘆の衝立と簾を求めて配達を頼み、他にも細々した物を買つて帰つたのである。

七月に入つて間の無い土曜日の朝の事であつた。

前夜から来ていた常を送り出し、屋内の掃除をしている時、ふと興信所との約束の日である事を想い出した。電話して見ると概略の調査は出来ているとの事で、後刻、行く事を約して急いで家事を片づける。



化粧をし直し、着物を替えて、ハンドバッグと日傘を手にして、邸を出たのは十一時近く、車を拾うと急いで行ったのである。満足と云う程ではなかったが、短時日の調査とすれば良く出来ており、彼女の目的は達した。

せられていた。一応、調査を打切つて貰い、残る調査費と多分の心付けを置いて其処を出ると、其足でM信託銀行を訪れた。

「宮部様いらっしゃいますか？」

顔見知りの行員に言つて待つていると、間もなく五十年輩の眼鏡を掛けた紳士が出て応接室へ通された。

「先日は大変お世話になりました有難う御座居ました」

「いや当方こそ。今日は何か？」

「はい、折入つてお願い申上げ度いと存じまして。あのお忙しいのでは御座居ませんか？」

「いや相変らずです。銀行という所は年中暇と云う事は無い所です。ねえ。でお願いと仰有るのは？」

「こんな事申上げて失礼でございますがM銀行の上六支店に誰か御懇意の方はいらっしゃいませんか？」

「上六には梶木君が居る筈ですが、何か？」
「まあ、宜かった事！一寸此れを御覧遊して」

彼女は受取ったばかりの調査書類を差出した。

掛けて居る眼鏡を外し、胸に差している老眼鏡に替えて其の書類に眼を通した宮部は

「此の書類と貴女と、何んな御関係ですか？」

「はい、其れを申上げる前に此の書類を御覧になって、中央家具と言うお店の状態は好いのでしょうか悪いのでしょうか教えて頂けません？」

りえの眼は真剣であつた。狭い室内に廻転する扇風機が空気を掻き乱しりえの体から発する脂粉の香りと、香水の匂いが立竪めて宮部の氣持を和らげるのである。

「そうですね。立場立場に依つては見方も違いますが悪いという状態ではありませんね」

「良いと仰有いますの？」

「此の興信所は信用出来まし、此の書類から見れば、まあ堅実な方です」

「有難う御座居ました。私とは関係無いのですけれど、此の書類にも御座居ます山田木工を伯母が経営して居りますの」

常との關係を明かす事は出来ず、彼女の答弁は苦しかった。

「ははあ？」

宮部は彼女が何を言おうとするのか解し兼ねた様子である。

「其の書類にも御座居ます様に、心斎橋の陳列場設置に就きまして伯母の方へも援助の申入れが御座居ましたのよ」

「成る程ね」

「伯母は女でもあり、金額も多いし、其れに昨年来、工場の増設を致しました後で、現在では余裕が御座居ません」

「……」

懸命に語る彼女の頬は上氣して美しかった。

「事情を申上げてお断り致しました所、其れ以来取引高が減つて参りました。大変お支払も良く、注文の多かった御得意様なので此方の事情が許せば御援助申上げたいと伯母は申して居りますの」

「そうですか」

「昨年、致しました工場の増設も半分は中央家具の為だとか申していますのよ。今後取引高が減る様ですと伯母の方も大変困るのではなかったかと存じます」

「そう云う事もあるでしょうね」

「私、貴方をお願いに上りましたのは……」

「？……」

ハンカチを持った右手に左手を重ね、心持首を傾けて見つめる瞳は大きく黒く開かれて

滯れたように輝いていた。

「上六の銀行の方へ、お話しして頂けません」

「それは」

「中央家具から申込みを計らつて下さる様に。生意気な事ですけれど、私の預金を移して保証させて頂きたいと思ひますの」

「しかし弓野さん。銀行は紐付の融資は出来ないのですよ」

「其れを宮部様に申上げたいと存じますの。始めから無理と知つての事で御座居ます。方法をお考え下さつて、聞いて頂けません？」

無意識の内に全身に媚を見せ取纏る様な眼もとで頼む彼女の姿に、溜息をついた。長年の預金者である彼女の初めて見せる態度であつた。

「そして中央家具様の方へは私の事は仰有らない様にして下さいませ。ね、お願い。宮部様」

「難かしい事をいつて来られましたね。中央家具が此方の取引先なら簡単なのですが何分他の銀行の事ですからね」

「お願い致しますわ。万一、回収出来なくても決して宮部様に御迷惑はお掛け致しませんわ」

「そんな事を考えるより貴女が伯母さんの方へ貸して上げて、伯母さんから廻されては……」

「伯母は私の預金の事は存じて居りませんのよ。又、報せる訳のものでも御座居ませんわ。それだから貴方をお願いに参りましたのよ。伯母は勿論、中央家具の方へも私の事は知れない様にお運び頂くと思つて来たのですけど。いけません？ 宮部様」。

膝に縋らんばかりの熱心さに、彼は深く考え込んでしまった。

普通なら問題にも出来ぬ話であるが、長年の大口預金者であり、各種の預金通帳を始め証券、証書の一切を預っている固定顧客の彼女の強つての願ひである。行内でも注視的で、自分を始め男子の行員の異様な関心を集めて居ること等を考えれば、銀行の爲にもむげに断る事は出来ないのである。

「兎に角、梶木君の意見を聞いて見ましょう。此の書類の内容では、そう悪い相手ではない様ですから」

「済みません、我儘を申し上げて」

「都合で梶木君に会つて貰わねばならんと思ひますが構いませんか？」

「はい、会わせて頂きます。でも夜分は困り

ますのよ」

「それは判つています。では暫く待っていて下さい」

「お願い申しますわ」

立上つた宮部は、えの熱い視線を背に意識し乍ら応接室を出て行つた。彼は支店次長で温厚な銀行員であると同時に、数字や書類には本能的に鋭敏な敏腕家でもあつた。

茲で彼女の申入れを拒み、万一、預金の引揚でも行われた場合は、次長である彼の手腕は批判を受けねばならないであらう。彼の心は決つており、如何に友の梶木を説得するかにあつた。

其の虚実の掛引は、えの前では都合が悪く自室へ帰つたのである。

彼の返事を待つ間、りえはハンドバッグから、もう一通の書類を取り出し、中央家具の平松専務の個人調査へ眼を通した。

読むうちに彼女の頬へ微笑が浮んだ。常のいった通り平松の婦人関係はまことに放埒で其処に記されてあるだけでも三人の女性の名前があつた。けれど男として、専務としての彼は努力も手腕も申分なく評価されている。

突然、備付けの電話が鳴り出した。受話器を取ると交換台の声で

「弓野様で御座居ますか。次長室からお継ぎ致します」

と言つて宮部の声が流れて来た。

「弓野さん？」

「はい、色々済みません」

「梶木君に話しましたがね、貴女にお会いして見たいつて云うのですが御都合は？」

「私の方は構いませんわ」

「僕も一緒に行きますが、向うの銀行よりは他の場所の方が好いと思うのですが、貴女は如何ですか？」

「はい、貴方のお宜しい様に……」

「じゃ、お任せ下さい」

間もなく宮部が入つて来た。

「色々と有難う御座居ます」

立上つて心から彼女は頭を下げた。

「いや、未だ礼を云われるのは早い。纏るかどうか此れからですよ」

「だって貴方には、ほんとに申訳なくて」

「さあ、参りましょう。車を待たせてありますから」

「済みません」

宮部の後について車中の人となった。

大抵、りえは金銀や宝石を身に付けるのは嫌であつた。腕時計でさえ好まず、買おうと

しなかったが、彼女を愛してやまなかった。せいは次々と買い与えて一通りのものは揃って居たのであった。今朝も着物を着替え乍らふと思いついて自分では好まなかったが、付けて来て良かったと思うのであった。大粒のダイヤを嵌めた髪止めとサファイアの指輪を差し、絹縮緬の長襦袢に涼やかな越後縮を着て、本物の博多帯を締めた其の容姿は、清楚な白足袋に水色の革草履と相俟って、上から下まで一分の相違も無く品と威を具えて、得も云えぬ美しさであった、近代的な美ではなく、嫵妍たる深窓の美であった。そうしたりえと膝を並べて馥郁として香る香水の包いと白い肌から漂よう脂粉の香りは、横に座す宮部の心を妖しく揺り、其の胸を騒がすのであった。

間もなく車は料亭「淀川」の車寄に止り案内された離れには梶木が既に待って居た。

梶木は呆然として、りえが余りにも若く美しいのに吃驚していた。

「宮部君、さっきの話の人、此の人ですか？」

「そうだよ」

「大体、君は説明が足らんよ。此んなお若い御婦人なら、此んな処へ来るのじやなかったのに」

話し合う梶木に向い敷居際に両手を突いて「弓野で御座居ます。本日は飛んだ事を御願ひ申上げまして、申訳御座居ません」

「梶木です、宜しく。さあ、此方へどうぞ」勧められる正座を辞退して下座へ着くと、

「あんな話を持込んだ人が此んな若い綺麗な人だとは全く意外でした。さすがにM信託さんは好いお客さんをもっていらっしやるねえ」

彼は、しきりに感嘆し、つつましく控えるりえを眺めて飽きなかった。年配の女中がお絞りと通し物のビールを持って来て置きつつ「梶木さん、お綺麗な方ですねえ」と遠慮もなくほめると、

「お澄さんもそう思うか」

「失礼ね、わたしでも綺麗な人ぐらい分りますよ。毎日、大勢の人のお相手をしているとほんとに美しい人と、美しいらしい人とぐらい判りますよ」

「なんだって、美しいらしい人とはどういう人だね」

「美しいらしいとはねえ、美容院や化粧品でごまかし、そう見える様にしている人の事ですよ」

「うまい事を云うね」

りえは恥かしくて真赤になっていた。冷房の良い部屋であったが。……宮部は其れに氣付き

「梶木君」

と眼で二人の話しを遮切った。

「此れは失礼。お澄さん、此の方に何か冷たい物でも差し上げて呉れないか」

「はい、何か見て来ましょう。お食事は？」

「食事は話の後だ。」

「ご用がありましたらどうぞ」

女中が出て行くと

「貴女を若いお方と知らなかったのでビールなんか注文して失礼しましたね」

「いいえ、構いませんわ。どうぞお召上り遊ばして」

「一口、貴女も如何ですか？」

「有難う御座居ますが頂けませんのよ」りえは自分の立場を考えて酌はしなかった。

「で、さっきの電話の件だが、もう一度詳しく聞かせて頂きましょう」

「はい」

再び梶木に説明すると共に、自分の希望も打明けた。宮部も傍から口を添え、補足して呉れたのである。

(未完)

猿 轡 放 談

— [そ の 一] —

三 鷹 家 浮

「猿轡」という言葉と、その使用価値について、私は久しい以前から、自分の持つ意見を一度発表してみたいと思っていました。

もっと、この事は、旧刊時代の拙作「交の字問答、第二話」に於て、ある一部分を対談的に申し述べておきましたので、或は本稿の中に出てくる一部分が重複のそしりを、逃れないであろう事を覚悟致しますが、とにかく一度「猿轡」というものに対する、私の思存分の意見を述べさせて頂きたいのです。

× × × × × ×

先ず「猿轡」という言葉の解釈を、文字通りに行なうならば、猿に噛ました轡……ということになるのでしようが、私は、馬に轡を噛ませているのはよく見掛けますが、猿に噛ました轡……というのを見た事がありません。

では「猿轡」なる語源は何れから……てなことになる、甚だ面倒ですが、調べて判らぬこともありません。

しかし、私が今ここで述べたい事は、以上の様な「猿轡」の語源ではなく、猿轡の使用価値に就いてが主なのです。から、巻頭の問題は一応、後日に譲って、早速、この方にかかりましょう。

「猿轡」を人間に用いた場合の形容詞は、二

通り使われているのが通常のようなです。即ち大衆文学の上にも現われるように、「猿轡を噛ませる」というのと「猿轡を嵌める」が、それです。

しかし、この後者の方は「嵌める」と「嵌」の字の下に「める」の仮名を附すと「ハメル」と読む事になり、又、「める」に代って「ます」と仮名が、つくると「ハマス」と読む事になる。

私は勿論、この「嵌める」と「嵌ます」は同じ意味だと思っていますが、「噛ます」と「嵌める、又は、嵌ます」とは、当然、違うものだと思っています。……

では、この両者の意味はどう違うのか？という事に当然なってきましたので、愚見を述べてみましょう。

一言にして申せば、勿論、それは読んで字の如く……でありましょうが、しかし私達マニヤたるもの、もっと「猿轡」という文字と言葉を、あらゆる見地から検討して、大いに楽しみたいものです。

私は思うのですが、「猿轡を噛ます」というのは、これは文字通りで、人間の口を開かせて手拭、半布、その他の布切れを噛ませる（布切れでなく皮革の場合も同じ）ことによつ

て、言語を発する役目を司る「舌」の動きを封じ、以てその目的を達する訳ですが、猿轡を「嵌めます」とか「嵌める」という事は「噛ます」とは、必然的にその動作に於て異なる筈だと思われれます。

一番判り易く申しますと、邦画に現われる猿轡の場面の殆んどが、この「嵌める」であり「嵌ます」でありましょう。

その点、洋画には前者の「噛ます」(噛ませた)場面が多い様ですが、さて両者の醸し出す雰囲気はどちらにどう強みがあるのでしょうか？

話が少し横道へ外れる様ではありますが、猿轡を人間に用うる場合に、まるで女房役の様に連れ添ってくるのが「緊縛」でしょう。

この点、「緊縛」は「猿轡」の前提でもあり、又、時には「猿轡」の方が「緊縛」の前提である場合もありましょう。

そこで、映画に現われてくる緊縛の場面ですが、これは邦画の場合ですと、時代物に断然、絞られ勝です。……という事は、人間を縛ったり、猿轡に依って声まで封じる必要のある時とは、一体どんな時なのか？ という事になるからです。

邦画の現代物の中で、縛られたり猿轡を嵌

められたりする場合と言いますと、まず探偵物でしょう。

強盗が、その目的を達する為に家人を縛り上げ猿轡を嵌せ、救いを求める声を封じる場合か、若しくは、そうした自由を奪った人間を、どこかへ拉致する目的の場合に、以上の緊縛や猿轡が必要となるものでしょう。

同じ探偵物でも、警官が犯人を捕えて猿轡を嵌せる必要は、余程、特異な場合を除いては先ずない筈ですし、公職警官でない一般人が犯人を捕えた場合でも、猿轡を嵌める必要はないでしょう。

その点、時代物ですと、腰に人切り包丁を差したり、御用提灯や十手で犯人を追っかけ廻していた、いわば野蛮時代の事とて、以上の緊縛猿轡の場面の演出も、無理のない気易さがあり、又、観衆にしても何かしら、そういう場面の現われるのを、期待している向きも、あながち無いとはいえないでしょう。

どうも話が、いつまでも横道に外れている様で申し訳ないので、この辺で一つ「猿轡」一本立に戻しましょう。

× × × × ×

猿轡を「嵌める」とか「噛ます」という形容詞に当て嵌まるそれは、邦画の時代物に絞ら

れ勝ちだと、先に私は申しましたが、猿轡は「噛ました」よりも、この「嵌めた」という方が、その魅力の点に於て勝ること請合いだ、私は自負しています。

「今頃になって、何をいうか……」と読者の方は、お笑いになるかも知れませんが、私のいう猿轡を嵌めた、又噛ませた人間は、若い美女を対象としての事で……いや、どうも恐縮です。

一体、邦画や邦劇で観る「猿轡を嵌せる場面」は、余りに手っ取り早く簡単で、つまり「噛ます」でなく「嵌ます」なのですが、実際の場合、アンな事で、よく被害者が声も立て得ずに黙っているものだと、私は常々疑問を抱いているものです。

この場面は、大衆文学の上でも度々現われるのですが、「アレツ」と叫ぶ口に、早くも古手拭の猿轡……それで女は、もう救いを求める事も出来ないで、いとも簡単に悪者達に担がれて行く訳なのですが、この場合の猿轡はどなたも御存じの様に、鼻口を(或は、口だけを)外側からモロに、覆い隠す様に縛る訳なのですがアレで果して、ウンともスンとも声が出ないのでしょうか？……

救いを求めるといふ事は、あながち「助け

てくれッ」とか、「アレッ」とか叫ぶばかりが、効力を生じる訳ではない筈で、たとえば時代物の場合で手足を縛られ猿轡を嵌まされて、駕籠に乘せられて行く道すがら、恋しの



君（勿論、そうと知れば助けてくれる）と、すれ違い乍ら、駕籠の中ではグウともスウともいわない為に折角の救いの神を遠ざける場合がよくあって、観客をハラハラさせますが

私はこの事に就いて少し申し述べたいと思います。

人間の口を開けて布切れを噛まし、舌の動きを止めたとしても、鼻穴で息の出来る限り「ウ」又は「ン」という発音か、若しくはオとアと一緒にした様な（何れも不明瞭ではあるが）音声は必ず出せる筈で、「助けてくれッ」とか「アレッ」とか叫ぶ事が出来ないにしても、前記の様に何等かの発音によって、「我れ、ここに在り」という事を、第三者に知らず事が出来るならば、救いの主は、案外手近かに現われる筈ではあるまいか？

そこで、私はいい度い。若い女が五体の自由を奪われる様に縛られ、その上、猿轡をされると、「私は、もうダメだ、声も出せないのだ」という観念性に陥ってしまったて、折角の救われる道を放棄してしまうのだろうか。

先にも述べたが、猿轡の本来の目的は、救いを求める声を出さしめない為であるが、では人間の口に猿轡を噛まし、又、嵌ませて、果してウンともスンともいえない様に、出来るであろうか？……勿論、出来ない事はないしかし、それが完全に出来た場合、即ち、被害者が窒息死するのだと、私はいい度い。人間の口を開けて布切れを噛ます。そうすると、

舌の動きが止って、言語を防げるが、鼻穴から息が通う限り、僅かであり不完全ではあるが、何等の発音が出来ると私はいった。……では、その鼻穴も塞いだらよい訳だが、さて皆さん。どういう方法で塞ぎますか？……鼻穴に栓をするって？冗談でしょう。勿論、そうすればウンもスンもありませんが、それでは相手が息が出来なくて、死んでしましますヨ！猿轡の目的が相手を殺す予備行為である場合は、先ず無いでしょうから、この方法は落第でしょう。

普通一般に行われる嚴重な猿轡といえ、先ず口を開かせて（鼻をツマめば息苦しくな

って、自然に口を開く）布切れを丸めたものを押し込み、舌の自由を奪った上、今度は鼻口をモロに外側から縛る方法ですが、これとて決して「ウン」とも「スン」ともいえない訳ではなく、……というのは、御承知でしょうが人間の鼻骨というものは、案外、堅いもので、この鼻骨が縛った布切れを、まるで押し戻すかの様にして、被害者に僅か乍らも呼吸の恩恵を与えてくれます。

鼻からにせよ、人間の体内へ外気が出入する、即ち、呼吸が出来るといふ事は、取りも直さず人間をして、何等かの音声を発せしむるに可能だといふ事が証明されるのだから、

猿轡を嵌められた人間が、このことを冷静に考慮して善処する余裕を持つならば、猿轡、何ぞ恐るるに足らず、ではなからうか……と私は思っている次第です。

最後に、私は若い女が、その鼻口を猿轡によって覆われて、恐怖と苦悶に喘いでいる姿ほど、こよなく美しいものはないと思います。私は、和装の女のそんな姿が断然、好きですが、洋装の場合でも、矢張り口を割って噛ませた猿轡よりも、この鼻口を覆ったものの方に魅力を感じます。若い美しい女性が緊縛され、猿轡に鼻口を覆われている姿こそ、吾等マニヤの渴望しているものだと思います。

愛好家の記録

人に知らざる

惑溺の世界

とやま

かづひこ

(118) 犬

最近創刊された、二十円週刊紙『コウロ』に、流行作家松本清張氏の小説「黒い

福音」というのが連載されている。その第二号では、犬を三匹飼う独身の女主人公が、十年間も水洗便所でもないのに汲取人を寄せつけない。その奇妙さを近所の人々がウワサする。

「……何かの処理が行われているに違いなかった。その処理を犬に結びつけて考える者がいた。それは犬に喰べさせているのだらう。むろん目撃した者はない。が、それ

がさもありそんなことだと考えられるようになった。犬は三頭とも大きく、コウシのようなのである。……」

と、いう件りがある。後段に至って、このウワサは打消されるのだが、女主人公のもとに通う一人の神父（外人）が登場してくるのだ。

かづひこがこれを読んだ場合、なんといっても、汚物の処理を犬と結びつけているところに、深い感銘をおぼえるのである。人間の犬化願望は、Mの世界では往々あることであり、かづひこの幻想もまた、しばしばそこに到達するからである。

(119) 空想料理

『週刊新潮』誌の最近号に次のような一文があった。高橋義孝という大学の教授が某誌に寄せたという「空想料理」だそうだが、かづひこを大いに惹きつけるコン立である。不可能なるが故にまた楽しい。

——『羽衣の天人の小便のコンソメ』『鍵の主人公の夫人の臀肉の塩漬』『ヘソのオリブ油漬』『えくぼのコンポット』『おくれ毛の三杯酢』『乳首の紫蘇

巻』など、空想料理の名がズラリ。なかでも、天女のスープなど、ヨダレが出そうだが、有閑人種の間では、このようにコトバのアソビのなかに、目を惹くものがあるようだ。——

(120) 水 虫

かづひこは、トルコ風呂を愛好する。週に二回は必ず行くが、先日行ったときのこと。

風呂から上って何気なくトルコ嬢の席をみると、美しいので人気者のキヨちゃんがりしきりと、右足の親指辺りを搔いている。

「何してるの？」

声をかけたら、清ちゃん、可愛い顔をあげて

「水虫が、かゆくて」

と、美しいマユをひそめる。でも、すぐに笑顔に戻って、マッサージにとり掛ってくれた。

「水虫か」かづひこは首すじをもんでもらいながら考えた。彼女は手を洗っていない。患部を搔いた指が、今、かづひこの首すじを揉んでいる。おそらく、水虫菌が伝染するだろう。他の人なら真赅になって怒るところであ

ろう。

だが、かづひこは怒るところが感謝したい気持だ。美しいひとのものなら、なんでも尊とさを覚えるのだ。

かづひこはじっと眼をつぶって、有難たくマッサージを受けていた。ご本人は何も気付かなかったであろうが——。

(121) 異物スリラー

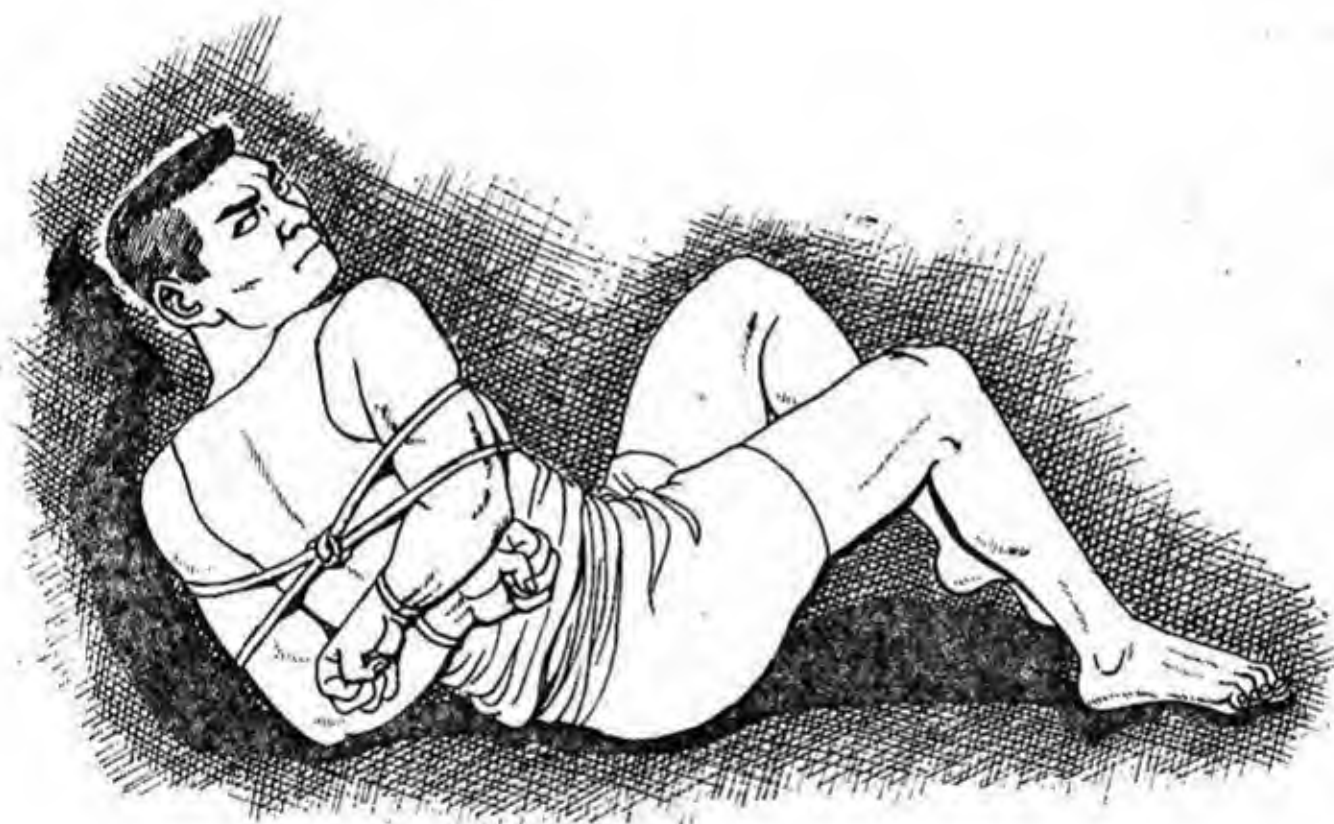
フェチシズムのにおいが、ありありと感ぜられる。「毛酒」を飲んだ新聞人という一文が『週刊新潮』誌に載っていた。酒席の座興が、外道におちた話したが、かづひこは、これを読んで、こんな小説を思い出した。

ある奥さんが、夫を殺そうとして考え出したテであるが、自分の頭髮を細かく刻んで、わからぬように少量ずつ食物に混ぜて夫に喰べさせ、長い間に体内に蓄積させてついに自然死に至らしめるという探偵小説だった。

復讐を遂げるために、異物を混入したものを知らぬ間に喰べさせる手段をつかわれはどんな不潔なモノでも思いのままだ。

拷問に耐える

小森小次郎



戦争が終った時、俺は二十三才だった。徴兵検査の時は第一乙種だったが、どうにか兵隊にとられずにすんだ。

樺太のS町、O製紙の巨大な工場がS川畔にある紙の町が、俺の故郷だ。忘れ得ぬ、ふるさと——だが、その故郷は、もう一つの、否、それ故にこそ、なお鮮明な記憶として浮かび上るのだ。

俺のその時の仕事は、流送夫だった。パルプ用の原木が、奥地から流送されて来る。工場より四キロ上流に、巨大な堰を作り、原木はそこに集められる。工場の需要と、水量を見合わせて、堰の水門を開き、丸太を放流する。何千本と貯って、もつれ合い、からみあっている丸太を、長い鳶口で操り、目もくらむ勢で水門から溢れ出る水に乗せてやる。勿論、水面に浮んでいる丸太の上を飛び歩き、跳びうつりして、次々と水路に押し出す。水面上に浮んだ丸太は、すぐに、くるりと反転して、ちょっと気をゆるめれば忽ち十米の深さがある水中に転げ落ち、落ちたら最後、水面には丸太が入り組んで常に移動しているから浮かび上る事ができず、死ぬより他はない。

非常に危険な、激しい労働で、鳶口片手に川の真中まで乗り出してゆけるようになる迄には、相当な時日が要る。また、おそろしく体力を要求する仕事だから、俺も一人前になったこの頃は労働に鍛えられて、筋肉隆々たる体になっていた。

戦争が激しくなると、一人、ふたりと応召してゆき、人手不足で朝鮮人を使用するようになったが彼らの中の一部の奴の臆病さは、気の短い俺たちには、かんしやくの種だった。タイミングが悪く、能率が上らず、その上、しょっちゅう事故を起す。そしてまた、彼らのうちのある者は、実に陰険であった。怒鳴りつけるだけでは間に合わず、腹立ちまぎれになぐりつけた事も、たびたびあった。

その始末の悪い奴らの中に、崔東華がいた。彼は、朝鮮人組の中では、一応リーダー格に推されていたが、それは作業上の実力ではなく、その弁口によるものであったようだ。リーダーだから、俺たちと接する事が多いのだが、彼の油断ならない卑屈さは、われわれの皆から嫌われていた。若い頃は、沿海州、北樺太をのし歩いたというのが彼の自慢で、手前ら若僧のくせしやがって、といった気配が、一見、柔順に見える様子の中に露骨に見え、それが「若僧」の俺には一段と癪にさわった。

会社は日給の他に、能率給を不定額として支払っていたが、ある日、大雨で俄に川が増水した時、彼が、作業の危険を理由に能率給の増額を要求して来た。俺たち日本人組は一向、平気な現場だから腹が立ち、能率が以前より三割方、下がったグラフを示して、上司を納得させる事の不可能を繰返し話したが、一向に埒があかず、あまりのしつこさに、とうとう彼の横面をはり飛ばして、事務所の外に放り出してくれた。当時、そんな事は普通の事だったし、その後

上司に話して、若干ながら増額は実現したから、俺はそれ切り忘れてしまったが、仲間の前に放り出された崔にしてみれば、忘れかねる恨みになったのであろう。一と月後、俺は嫌という程、それを思い知らされたのだ。

二

ソ連が参戦して、ソ連軍が国境を越えたニュースが伝わると、それこそハチの巣をひっくり返したような大混乱になった。女、子供は直ちに避難列車に乗せ、男だけで戦う指令が発せられた。事実、各地の町村は、かなり抵抗し、町は焼かれ、男たちは殺された地域もかなりあったものだ。少数の日本軍は南下を続け、流言は乱れとんで、混乱の上に混乱を加えた。今や、町的首脳者達は決断を迫られ、慌しい議論の末、無益な抵抗を中止して、一人でも多く生きのびようと結論し、S町は流血を見ない数少い町として、ソ連軍を迎えたのだ。

彼らは、戦車を先にして入って来た。殺気を潜めた男だけの街は根づよい日本人の抵抗にあって来た彼らにとっては、油断のならないものとして印象づけられたにちがいない。戒厳令が布かれ、数少い食糧は徴発された。灯一つない暗黒の町を、ソ連兵は酒と女を求めて武装したまま横行し、その夜、早くも不用心な日本人が数人、射殺された。今、考えると、彼らも一種の恐怖状態であったに相違ない。銃砲、火薬、食糧の没収は特にきびしく、隠匿した者は嚴罰に処すと布告され、倉庫はすべて封印された。更に、没収を恐れて山中に隠した物品の摘発は峻厳をきわめたが、この時、これら隠匿物資の摘発に一役買っただけで、いままで冷遇されていた朝鮮人

たちであつた。

○製紙S町工場は、無傷のままソ連軍に接收され、その管理下に業務は再開された。当然、われわれの作業も再び始つたわけだが、朝鮮人、人夫の鼻息は凄じいもので、まったく日本人を馬鹿にした態度を示し、命令など、なかなか聞くものではない。敗戦国民の悲しさで、ソ連軍政局では日本人をほとんど信用せず、一時は専ら朝鮮人たちの情報で動いているようなものだったから、俺たちにしては、彼等を刺激してはいけないと思ひ、つとめて腹の虫を押えてはいたが、どちらかといえば気短かな俺は、横柄な口のきき方で残業を拒否した崔東華を背負投げて、しばらくは起き上れない程たたきつけてしまった。同僚は皆、心配したし、おれもすぐに後悔したが「なに、心配いらねえよ」と仲間と言って帰宅した。家族たちは皆、避難して、一人きりのガランとした家の中で食事し、さて寝ようかという時刻になって、武装した五人ばかりのソ連兵に踏みこまれた。

何しろ、全然、言葉が通じないので、訳がわからぬままに、忽ち後手に縛られてしまい、近所の人々が戦きながら見ている中を、自動小銃の先でこづきまわされながら、軍政部に連行されてしまった。

一応身体検査をされたが、夏のことで、ランニングシャツにズボンだけ、他には、流送夫の習慣で、胸高に巻いた晒と褌が身についてる全部だから、無論、何も出ずに、縛られたまま地下倉庫に放りこまれた。

軍政局には、町の高等学校があてられており、おれがたたき込まれたのは、学校の書類等を空襲から守るために掘られた四坪ばかり

の穴倉で、周囲は荒土がむきだし、天井に細丸太をぎっしり並べて土を支え、その丸太を受けてこれも太い丸太の梁が二通り、更に径一尺ほどの丸太の柱が梁を支えて、四尺間に立っており、湿っぽく悪臭がした。

その時は、全然、拘引される覚えがないから、非常に不安だったが、度胸を決めて、その辺に散らばっているロープや、ガラクターの中から、空俵を見つけて横になった。

三

どのぐらい眠ったか、目がさめても十燭ぐらいの裸電球が一つづいてるだけで、時間の観念が失われていたが、銃をはずして老人のソ連兵が、黒パンと、どすぐろい色をした茶のようなものを持って来て、片手だけ解いてくれた。食慾はなかったが、無理して食い終ると、やがて三人の兵が入って来て、もう一度縛ってから穴倉をつれた。

軍政部になっているこの学校は、以前には青年訓練所も兼ねていたから、勝手はよく知っている。おれが連れ込まれた所は、銃剣術の防具、その他を置いてあった窓の小さい細長な狭い部屋で、これが調べ室なのであった。机が二つと椅子がいくつか置いてあり、黒い髪をした年輩の将校と、金髪の若い将校、その他、兵が二人居たが、将校の側に腰掛けている男をみて、おれは思わず息をのんだ。にやりとおれを見ているのは崔東華だった。なおも以外だったのは彼が片言みtainなロシア語を話し、何と通訳の役目を果しているらしいのだ。以前に北樺太のオハなどで労働していたらしい事は知ってたが、彼がロシア語を知っているとは思わなかった。作業再開後

彼の姿があまり見えないのを「奴のことだ」と氣にとめずにいたがこんな事をしていたのか。

取調べが始まった。相当な時間がかかったが、要旨は、ソ軍がO製紙の倉庫を接收した時、中身が非常に少い。隠してるにちがいないが、いくら追究しても埒があかなかった所、おれが、仕事の関係で、附近の山等の地理に詳しく、食糧、その他の隠匿に一と役買った事実があると密告した者があって連行した。お前も物資隠匿がどんな罰をうけるか知っているであろう。早く泥を吐いてしまえ。その方が身のためであり、もしあくまでシラを切るならば、そのときは——といったものであった。

要約してしまえば、それだけのことだが、意味がおれに通じるまでには随分長い事かかった。第一、通訳が覚束ない有様だから、何度も聞き返してから、おれに向き直るといった状態で、勿論、おれはまったく覚えがないことだから「知らない。覚えがない」としか答えられない。それを崔が、どの様に通訳するのか、同じことを繰返しているうちに、若い方の将校が突然、怒り出して何事か叫んだ。崔がまた、おれの方をちらり、ちらりと見ながら何か言う。俺は、たまりかねて「とにかくおれは全然、知らないんだ。そう云ってくれ」と言った。果して、そう伝えたかどうか知らないが将校は、いきなり立上って来て、俺に目もくらむような往復ビンタを喰わせた。突然ひっぱたかれて、俺は横手に、ふっとんで倒れた。すると胸倉を取って引起し、キィキィ声で、も一人の将校に何事か、いい立てる。上官らしいのは、軽くうなずくと、崔になにか言い、兵たちにも何か云った。俺は、そこから後手に縛られて四時間も立ち通しの調べ室から、また穴倉にもどされた。

時間は、穴倉では全くわからないが、次に入って来たのは、崔とソ連兵二人だった。崔は、縛られて坐っている俺を見下して意地の悪い笑い方をすると、しやがみこんで、

「ねえ、小森さん、あんたが強情張ってるもんだから少佐が怒ってたよ。早くほんとの事いっちゃった方がいいよ」と小声で言った。

「冗談じゃねえ。俺は何も知らんといってるじゃねえか。第一、俺がそんな事できるかどうか、お前だって判るじゃねえか」

「バカだねえ、小森さん。あんた、隠し立てすると酷い目にあうよ。今のうちに本当の事、言った方がいいよ。殺されるかも知れないよ」

「どう言われても知らねえものは知らねえ。どうにも言いようがないじゃねえか。とにかく、ここから出してくれるように話してくれよ。な、崔」

崔は、立ち上った。俺を睨みつけると、

「おい小森さん。偉そうに俺に命令すんのかよ。え？　ここじゃ俺の方が、ちょっとばかり偉いんだぜ。俺の考え一つで、お前さんをどうにでもできるんだ。少佐がヨ、言葉がわからんで面倒だから、俺に調べてくれて言ってるんだから。見ろ、兵隊二人ついて来てらあ。おう、やさしく話しゃ、ふだんとおんなじ気ィしやがって。今痛い目にあわしてくるから、そう思いな」

奴の様子は、がらりと変った。憎々しげに俺を睨みつけるその眼は、電燈の光を吸って鬼の眼のように見えた。

四

崔が何事か命令すると、二人のソ連兵は俺を立たせて、柱を背負

わせるように縛りつけ、革の鞭で肩から胸をいきなり打ちすえた。「うっ」

息が止まった。ぎいんと全身を痛みが走りぬけた。続けて打ち下される革鞭は、肩から腕、胸、横腹と、ところ嫌わず食いこんだ。なまなか言葉では言い表わせない苦痛だ。二人の兵士が交互にふり下す鞭は、俺に息をつがせなかった。六十以上も打たれると、うち下される鞭の痛さは瞬間のもので、燃えるような連続した痛みが本当の苦しきさになって来る。

「うっ。ううっ。うっ。ううっ」

俺は耐えた。その時には、すべてが俺には判っていた。崔の態度が教えてくれたのだ。

奴は俺に復讐したのにちがいない。無根の事を密告したのも奴だ。そして、畜生、奴は自分の手で俺を苦しめるために、取調べを買って出たのだ。くそっ、負けてたまるか。俺は、かすむ眼をこらして、崔を睨みつけた。と、合図でもしたように、鞭が顔にとんで来た。脳髓が、じいんとした。今は、ランニングシャツは、ずたずたになって体から離れてしまっていた。激しい鞭打の果ては気絶すると、よく言うが、俺は気絶しなかった、気絶すればいいと、どんなに思った事だろう。だが人間は、話に聞く程、簡単に気絶はしないものである。

何十回、打たれたか、それは判らぬ。彼らが去った後は、ただ水がほしかった。汗が目に入って痛い。口の中は何かネバネバしていた。体の痛みよりも、顔を打たれた所が感覚にひびく痛さだった。

その日の、恐らくは深夜であったろう。扉があいて崔東華と、前の二人の兵のうち髯の赤い大男の方のソ連兵が入って来た。二人と

も、ひどく酔っていた。兵の方はウォッカの瓶をつかんで、時々ラッパのみした。

崔は、目をすえて近寄って来た、俺の顎を、ぐいとしやくり上げると、

「おう、小森さん降参したかい。え？　へっへ。おれにヨ、おれに一言、今までは悪うございましたと、あやまんなよ。な、これからは何でもいう通りになります。と言え、今すぐ助けてやるぜ。どうだい。え？　おい、どうなんだよ」

おれは、唇をかんだ。目を閉じた。誰がこんな野郎に――

「ふっ、お強い、お強いですな、小森さん。日本男子てえ訳かよ。へっ、今に泣き声あげさせてやらあ」

ふらふらしているソ連兵の瓶をとって一口のみ、何やら怒鳴りつけて、崔は新たな拷問の支度にかかった。おれの両手首を別々に縛ると、天井の丸太に通して、ぐいっと引き上げた。二人がかりで引くと、おれの足先は忽ち地面を離れてぶら下った。両手を開いて吊るされると全身の重みが、一時に手首にかかり、ギッと縄がきしんで指先が、ふくれ上ったような感じになり、縄が締まると、その痛さは、それだけで充分な責苦になった。おれは、しかし、もがきもせず、ぐったりと吊るされていたにちがいない。

だが、おれの神経は、崔の指先に呼びさまされた。肩のあたりにわずかに纏いついたランニングシャツが、びりびりと引き裂かれてしまった。

「おう若僧。着たものの上からじゃ、ひっぱたいても、こたえねえんだ。今、もっと良くこたえるようにしてやるさ」

奴の手が腹に巻いた晒を解きだした時、おれは力をこめて奴を蹴

とばした。奴は、ふっとんで行って、ぼんやり見ていた兵隊にぶつかり、足もとが定まらぬ二人は、ひっくり返った。おれの、わずかな抵抗だったが、結果は一層ひどいものになった。起き上った二人

なのだ。

吊され、男の誇りをふみにじる凌辱を受けながら、おれは呻くだけだ。悶えるだけだ。おれは何度か呻き声をあげなければならな



は、怒りの声をあげておれをなぐりつけ、両足を縛って左右の柱に、ぎっちり結びつけた。

「畜生」

おれは、もがいた。無駄なもがきだったが、全力をこめて脚をすくめようと努力した。

五

おれは、体の痛みも忘れる程の口惜しさに喘いだ。「へっへっ、いい恰好じゃねえかよ。え、小森さん」もう奴らは自白など、どうでも良いのだ。おれは、声すら、ろくに立てられない。崔は思う存分、おれに復讐し、ソ連兵は殺伐な感情を酒であふり、おれという日本人にぶちまけるだけ

った。しまいには、俺の全身はちよつとふれるたびに激痛を覚える程にまで責めつけられた。奴が雑言を吐き散らしながら出て行って長い責苦からおれは放たれた。依然として、X字型に吊されたままだったが、おれは声をあげて哭いた。まるでおれの体でないようだ。火のように全身が熱く、のどが焼けるようだった。

「助けてくれえ」と、ひからびた声でおれは叫んだ。声をあげることで苦痛が、やわらぐ気がした。何度か叫んでいるうち、急速に意識を失ってゆくのがふしぎによく判った。

今、考えて見ると、思い当る筋があるが、多分、崔東華は異状性格だったのであろう。それはその後「正規」の拷問の時は手を出せない彼が、穴倉に戻されたおれを必ず「自分の手で」責める為にやってくるからだ。暗い裸電球の下で、崔と、奴が連れて来たのか、ついて来たのか知らないが、荒くれたソ連兵とに俺はいいように苛まれた。肉体に直接、苦痛を与える責苦はもとより、それ以上の苦しみを味あわされた。鞭、銃の台尻、サーベルの鞘、名は知らぬが革製の棍棒等でなぐられ、あるいは逆吊りや、重石を足首につけられて吊されたりした拷問におれは耐えきれずに呻きを、叫び声を、くいしばった歯の間から洩らさずにはいらなかった。

彼らが、捕われた俺に加えた惨忍な苛責の数々は、やり場のない精力の爆発だったのだろう。ともあれ、俺が監禁されている間中は四肢から縄が解かれる事はほとんど無いと言っても良かった。

六

「正規」の拷問は午前中に行われた。崔と若い将校が俺を連れ出しに来たとき、将校は長靴の先で、吊されたまま気を失っている俺を

蹴り上げ、俺はそれで気がついた。やっと吊り縄が解かれ、俺はどたりと土の上に落ちた。彼らに引きずられて取調べ室に行くと、そこで水を飲ませてくれた。俺は馬みたいに飲んだ。いくらでも飲めそうだった。水を飲むと、いくらか、はっきりした気分になって、拷問者たちを眺めることができた。

問答は大して時間がかからなかった。俺の答は決っていたからだ。ところが新しい訊問が若い将校から出て、俺は更に窮地へ追い込まれた。彼は聞いた事のない人名をいくつか並べた。何の事か判らなかったが、後でS町以北で武装解除し、シベリアへ送った日本軍隊のうち、シベリア出発の前に脱出した将兵の名である事がわかった。これも恐らく崔東華が吹きこんだのだろうが、彼は、俺がその人たちの行方を知っているものと決めてかかっているらしい。彼らは、我々が全部とっている程、頭を刈っているのをすべて軍隊関係と思いきんだ風で（これは、ごく最初のうちだけで、のちには彼らも、それが日本人の風俗だと理解した）その最初の「獲物」たる俺から、できるだけ情報をしぼりとうとしたのだ。「知らない」一点ばりの俺は、ずいぶん強情な奴として彼らの眼に映ったにちがいない。若い将校は憎悪の色を隠さずに部下に向かって何か云いつけた。

それからが大変なことになった。うっ血している俺の手首に縄が捲きつき、むき出しの梁に再び吊り上げられた。鞭は唸って、今度は背中のうちおろされる。皮膚がやぶれて、血がとび散った。二日の鞭打ちに上半身は血まみれとなった。俺は鞭打たれるたびに、全身の力をそこに集めて耐えた。ソ連将校の前で悲鳴をあげたくなかったのだ。今でも俺は、彼らの前で音を上げなかった二十三才の俺

を誇りに思う。不思議に氣絶はしなかった。氣が遠くなりかけると新しい痛みが襲ってきた。兵隊の手から鞭が捨てられ、水を浴びせかけられた。床におろされて、傷に何か軟膏をすりこまれた。「正規」の取調べ、いや拷問は今日は終わったのだ。穴倉に戻されるとパシと水が置いてあった。食わなければ参ってしまうと思ひ、無理してのみこんだ。疲れきっていたが、食慾は、てんでなかった。水だけが、しきりと欲しかった。しかし食ってしまうと、すぐ引き込まれるように眠ってしまった。

目をさますと、若い肉体は、かなり元氣を回復していた。しかし体を動かすどころではなかった。やがて崔と若い将校が入ってきた。崔が、持ってきた小椅子を俺の前に置くと、将校は腰を下し、何か長い事、喋った。早口なので崔にもよく分らないらしく、何度か聞き返すうち、将校は次第にいら立って来た。やっと崔が俺に伝えたのは、彼は日本軍武装解除の当面の責任者で、捕虜逃走の責を負わなければならない。どうか協力してもらいたい。先に言った人間のうち、一人でも行先を教えてくれれば、食糧の件は不問に付してもよいし、釈放もしてやる。どうか？ というような意味だった。俺は全く途方に暮れた。助かりたいのは山々だが、答える術がない。全然、言うことなしの有様で、まっ黒い絶望感が胸を覆った。唇を噛んで黙ってしまった俺を見ると、将校は怒りの唸り声をあげて立上った。崔に合図して、二人がかりで、俺を柱の前に立たせ、両手を高く上げさせて、一緒に、ぎりぎり縛りつけた。膝を折り曲げた両脚を柱をまたがせるように左右に引っぱられると、両足首を柱の後で、これもぎっしりとしぼり、返す縄で両脚を動かさぬ様に縛りつけた。そして、ポケットから蠟燭をとり出し、火をつけ

た。それを俺の目の前にかざして何か言った。白状しろとも言ったのだろう。おもむろに近づくと、ゆっくり炎の先を腋の下にさしつけた。

俺は息をつめた。齒をくいしばった。畜生ッ、声を立てるものか。畜生ッ！

脂汗が全身から吹き出した。炎は近づき、また離れる。その都度息をつめ、喘ぎ、苦しみ、悶えた。

「あうっ、ううっ、うっ、うっ、ちっ、畜生ッ！」

どんなに声を立てまいとしても、齒の間から呻きがもれる。無念だった。無実をとわれ、その上、この責苦——俺が何をしたんだ。助けてくれ、誰か助けてくれ。

異臭がたちこめ、もやもやした煙が俺の顔の前を動いている。全身、汗みずくだ。苦しい。熱っ、畜生。ああ、せめて脚だけでも動かないか。

「あうっ、あう、うう、つつっ」

野郎ッ。うむっ、息がとまりそうだ。死んだ方がいい。殺せ、殺せエッ、殺してくれえ。

「殺せえ——。殺せエ——」

俺は絶叫した。同時に拷問もやんだ。縄がほどかれ、ずるずると土にくずおれながら俺は、もうだめだ、もう死ぬと思った。

七

O製紙のTさんが馳けつけてくれたのは、俺が拉致された夜から数えて、五日目の朝だった。「Tさんは満州時代はハルピンに暮しておられたので、ロシア語は達者だった。ずいぶん手間だったが、

遂に説明がついて俺はあさましい姿で、かつぎ出された。相当の物品が軍政部将校に贈られたそうだが、それはともかく、外の光を見た時には、百年ぶりに見たような思いだった。気がゆるんで、丸一日、昏睡状態を続けたそう。それから四カ月入院し、通院もふくめて結局、一年近くも療養しなければならなかった。そのころは、無惨な傷あとや、火傷のあとを見て、一生消えずに残るのかと滅入ったものだが、若さと十五年の年月は痕跡を、それとは判らぬ程うすれさせてくれた。だが、あの屈辱の五日間の記憶は永久に俺の脳裡から消えないにちがいない。

崔の行方はずいぶん探したがその後、誰も知らない。

俺が捕われてから四日間、拷問され通しだったが「正規」の拷問

特高拷問史

庄田美起夫

腕を吊られた少女は、痛そうに顔をしかめた。それでも泣声はたてなかった。

寒々とした板敷の室の中に、少女はひとりひっそりと吊られていたが、そのまわりをとりまいている刑事たちの眼はギラギラ光っていた。

「体にきかれない前にいうんだ。早くいわないと泣いても許さん！」

セーラー服の女は、ギョッと唇をかんで決心を瞳であらわした。

「お前の先生は、自治会でどういうことを喋った？ 別にお前がいわなくても、他の

は吊るされて、打たれ、あるいは水を浴びせられるくらい。その後は必ず手当をしてくれた。真実、骨身にこたえたのは、穴倉でうけた拷問で、崔をはじめ数人のソ連兵が入れ替り立ち替り、俺を痛めつけた。奴等は、それを面白がっているようだった。中でも仰向けに縛られさんざん責められた後で、今度は、うつ伏せに縛られて受けた屈辱は死んでも忘れることはできない。また、逆吊りにされたり犬責め（としか云えない）にされて、のたうちまわった無念さは誰にも分ってもらえない程、胸の中がわき返る。俺は今でも崔東華に思い知らせてやりたい気持をもち続けている。今、ここに記したのはその時の二日程の事だけだが、今次大戦中は俺よりも、もっと残酷な目にあわれた人もあろう。結局は戦争の罪悪なのだ。

奴に聞けば、すぐわかるんだぞ。」

少女は一心に聞かないふりをしていた。先生からどんな場合にも口をきいたら、多勢の人が犠牲になると聞かされていたからだ。気づく少女は耐えているが、体がブルブルふるえていた。これから一体、自分の体に何にをされるのか……。

ナイフが鋭い音をたてて、セーラー服のわきを腹の半ばまで裂いた。しかし、あらわにされたのはワキの下だけだった。裂かれた布の間がひろげられて固定された。脇腹に男の手がその作業をつづけている間、

少女はもがいた。無言のまま――。

乳くさい体臭が男たちの鼻をくすぐった。やせて見える割にムッチリした少女の腋の下から肩の下の肌にブラジャーが喰い込んでいた。これから何にをされるのか、鼻すじの通った表情がひずんで、明るい大きい瞳が恐怖のかげにおびえて見開かれていた。

最初の一本で少女の沈黙は完全に破れた
ギューッ、ピチッ、

「イタア、イタッ、イタタタタ」

正確に間をおいて悲鳴があがる。

ギューッ、ピチッ、ギューッ、ピチッ。

それに応ずるように女の悲鳴があがる。

だんだんひきつるようになってくる。

右脇の次は左脇なので、少女の体は、このひきぬきにつれて右へ左へと踊るように揺れうごく。

「ヒイイ……イタア、ヒイッ」

きゅっ、きゅっ、とちぢみあがる少女の体からしぼり出されるように汗の粒がふき出す。しばらくすると、少女は水を浴びたようになり、セーラ服にしみ出てくるようになった。だが、この恐ろしい「腋毛の抜き責め」はまだ始まったばかりであった。

「イタタタ、アウッ、ユルシテ……」

少女の脇腹がケイレンしてガクガクふるえた。今や絶叫に近くなってきた少女の悲鳴と共に、体は右に左に、苦痛を避けようとしてせんない努力を機械的につづけていた。

「あうっ、ゆるして、いいいます。何でも」

「ちえッ、いうのなら、何故もっと早くいわねえんだ。あれだけ念をおしたのに。今更駄目だ。俺たちを甘く見るな」

この冷酷なつきはなしと、今自分の体に加えられている肉体的な苛責にたえきれなくなった少女は、泣きわめいた。

「いたいッ、そんなことしないで、しないで。うわッ、イタア……何んでもいいます。何でも……」

然し、貪婪な男の手は、規則正しい間隔をおいて、一本一本と充分の時間をかけて出来るだけ苦痛の多いやり方で引き抜いてゆく。全く、身を削るような一秒一瞬であった。それだけに、少女のはかない抵抗は狂的なげしきに加えて必死であった。

恥も外聞もなく、叫び声を挙げ泣きわめいた。泣き声をはりあげればそれだけ苦痛が軽くなるとてもいうような泣き方であった。

た。両手は天井から吊られていたが足は足の裏がべったりと床につく位の余裕があったので片足を交互に縮めたり伸したりして身もだえした。

やがて両腕の腋毛が一本残らず抜きとられると、天井から吊り下っていた縄がゆるめられた。ドサリと大げさな音を立てて、少女は床板の上にくずれるように倒れた。袖をまくり上げられた汗ばんだ二の腕に、床のゴミが吸いつくようにへばりついた。

「馬鹿な奴だ、早くいいやがりやいいのに。こんなこと位で勘忍してもらええると思っただけな間違いだぞ。」

ボロボロのように皺くちやになったセーラ服の上衣をビリビリと手荒く引き破るとスリッパと紺のスカートだけの少女を椅子に坐らせ、手馴れた縄さばきで括りつけてしまった。その前に机を置くと供述調書をポンとほうり投げた。

「今度は素直に何んでもいうんだナ」

ペンをとり上げた刑事は、さも勝ち誇ったように頬杖をつきながらいった。

他の刑事たちは手持無沙汰にゾロゾロと隣室へ退っていった。



ドリーミング小説

女

人

(によにんりよじょう)

旅

情

桂

牧次郎

夜 霧 の 章

瀬戸の海は静かに眠っていた。空も、海も島も、くろぐろとけあって、うすすみ色の中に沈んでいた。太古そのままの静寂であった。漁火だけが、遠く、近く、点々と、不知火の伝説の鬼火のように、ちらちらと燃えていた。それは、人間の悲しさにも似て、身も世もなげに、またたいていといった方がよかった。あの女、深草順子にめぐりあうにはふさわしいロマンチックな夜だった。俺は、船の甲板に出て、夜霧の中に、遠いメルヘンの世界を空想していた。その時だ。かげろうのように、あの女が、再び、姿をあらわしたのだった。

「あのう、もし……」

衣ずれの音がして、脂粉の香が鼻をついた。甘い、忘れ得ぬ匂い。夜目にも白い女の顔がそこにあったのだ。

「もしや、美舟さんじゃありませんの」

女の顔は俺の顔のすぐ側にあった。俺は、ふるえる声を押し殺すようにしていった。

「ええ、おや、あなたは、深草さん」

「とうとう、お逢いしましたのね」

女は、さりげない調子で、ポツンといって

黙った。

「とうとう、お逢いしましたね」

俺も、同じことをいって、口をつぐんだ。重苦しいような、変になまめかしい沈黙が俺たちを包んだ。ややあって、

「お、お約束、果さねばなりませんの？」

女の声は低かったが、たしかにふるえていた。

「そ、そういうことになりそうですね」

空とほけるようにいった俺の声も、かすれていたにちがいない。

白いしなやかな手が、そっと俺の手の上にさしのべられて来た。

流れ星が一つ、尾をひいて、すっーと夜霧の中に消えていった。

言 問 の 章

三日前の、東海道線の汽車の中である。東京発二十一時の大阪行急行列車は、大船から一人の女を乗せた。女は軽く会釈して、俺の前の席に腰を下ろした。俺は、まず女の美しいのに目をみはった。上品な顔立ち、黒い瞳は澄んで、二重瞼と長いまつげが印象的であった。鼻筋も通って、愛らしい口もとには大きなほろがあって、よけいに魅惑的であった。

た。

ふくよかな頬は桜色で、首筋まで、すきとおるような白さ。俺は一時に体内の血が躍動するのをどうしようもなかった。こんな美人とさし向いで旅ができるなど、そうざらにある事ではない。ぞくぞくするような快感が、一種の幸福感をともなって押しひろがった。何とか話しこんで、一寸でもこの女と親しくして損のあらう筈はない。早くその糸口をみつつけようとあせったが、女の美しさに気おされた愛じで、声がでなかった。

大阪までは長いのだ。あせってはならぬ。自分にいいきかせて、俺は、女の様子をしばらくうかがい、チャンスを待つことにした。

女は、スーツケースから赤い表紙の本を取りだして、パラパラとめくった。しおりの代りに一枚の写真がはさんであつたが、何の写真かは分らない。とも角、女はそこからよみ始めだした。しかし、その本が何という小説であるかは、ちらりとみた題名で知ることができた。『赤い殺意』たしかに黒い太い字で赤い表紙に染ぬいてあつたのだ。

俺はその瞬間から、女に異常な興味を抱いたのである。

『赤い殺意』は藤原審爾の小説。今流行の推

理小説もどきの小説なのである。

美しい人妻が、ある夜、強盗に襲われる。なまめかしい浴衣を着た人妻に強盗は「向うむきになって、手を後にまわせ」と命令する。そして、縛られた人妻はシーツを切りさいた布で猿轡をされる。強盗は朝方、逃亡するのだが、その後、二度、三度と人妻を脅迫し続ける。結局、憎悪と女の弱さとの相克にのたうつ人妻が、殺意を抱くが、その殺人は失敗する。強盗は人妻に殺されたように思わせて、実は自殺したのである。最後に強盗の恋文が人妻の許に届けられ、それは遺書でもあるのだが、真実を明かす。人妻は殺人未遂にもならず、ほっと胸をなでおろすと共に、二人の秘密は闇にほうむられ、家庭の平和は保たれるという、念のいったストーリーである。それが、彼一流の、ネチコイ文章で、心理描写などやってあるのである。

その小説を、今、この美しい女は俺の前で何のためらいもなくよみふけているのだ。

俺は、女の表情の動きに注意した。その如何によつては、自分が小説の強盗にもなりかねないぞと心をときめかしていたのである。

女は紅潮した面持で、或る時は口もとをほころばせて、無心によみすすんでいた。

車内が一寸ざわついたので、みると静岡に停車していた。女も始めて顔をあげ、フラットフォームの方をみまわすと、ポケットから財布を取り出し、窓を開けようとする。チャンス到来。

俺は一方の引手をもって、女と力をあわせて窓をあけてやった。

「すみません」

微笑して礼をいうと、女はお茶とみかんを求めて、俺にもすすめてくれた。

「ダンケ、シェーン」

俺はキザなドイツ語で、いかにも大学生らしく、もったいぶって礼を述べて、

「失礼ですが、煙草、吸ってもいいでしょうか」

と、これまた、すこぶる鼻もちならぬ、キザな文句を吐いた。だが、今が大切な時なのである。この女の関心をひき、俺をインテリイにみせるためにも、これは必要な演技なのである。レディファースト。俺は悪魔のような欲望をおさえながら、偽善者の仮面をかぶって、いんぎんにそういったのだ。

「どうぞ、どうぞ、おかまいなく」

女は親切にマッチをすってくれた。白魚のような白い華奢な指が、俺の口もとへのびて

きた。

桜貝のような爪がきれいであった。

それから、俺と女は急速に親しく口をきいた。いろんなこと。あれや、これ、とりとめもない、よしなしごと。でも、ただ話しているだけで楽しさは数倍した。

頃合いをみて俺は勇敢に質問していった。

「あの、その本、面白いんですか」

「はあ、これですの。そうねえ」

女は一寸、口ごもった。

「どんな、ストーリーですか？」

「あの、一口にはいえませんわ」

「いや、二口でも、三口でもかまわないんですよ」

俺は笑いながらいった。女もつりこまれて笑った。笑うと、えくぼができた。チャーミングな片えくぼである。

「そうね。学生さんの、およみになる本じゃありませんわ」

「なぜでしょう。その作者は直木賞作家ですよ。彼は、「秋津温泉」という作品で……」

ここで、まず文学論をぶって、女を幻惑しておく必要を感じて、俺は学識をひけらかすようにハツタリをかませながら、それでいて女の自尊心を傷付けないように注意しながら

話した。

「では、あなたが、およみになるといいわ。おかしいしますわ」

女は本をさしだしたが、受取らなかった。本をよむ真似をしても小一時間はかけねばなるまい。その間に、女はねむるだろう。もう夜更けである。だが、ここで逃がしては何にもならない。

「あの、テーマだけでいいんですが」

「それなら、一種の恋愛小説ですわ」

「一種のというと、つまり、普通のメロドラマのロマンスではないのですね」

「ええ、そうですわ」

「もう少し、話していただけませんか？」

「ある人妻と、強盗とのお話ですわ」

「へえ、人妻と強盗のねエ……」

「あら、そんな大きな声なさるものではありませんわ」

俺は、ここで頭をかいてみせた。そして、

周囲の乗客も殆んど眠っている事であるから一つ、邪魔にならぬように筆談にしてはいかなるものであるうか。ロマンチックな夜汽車には、ふさわしいと思うのだがと水をむけたのである。女は快よく同意した。そして、手帖を破つての、筆談となるのであるが、筆で

でかくと、口でいえないことがズケズケと加けるもので、さても奇妙な問答となつたわけである。

『私ハ、T大学文学部四年、美舟^{みふね}和人。九州島原マデ、切支丹文学ノ論文ヲカクタメ実地踏査ニ行ク途中デス。貴女ハ？』

『私ハ、深草順子。S映画ノニューフェース。目下、京都ニ向ツテ進行中デス』

『ドウリデ、オ美シイト思イマシタ。京都デロケデモ？』

『イイエ、アル先輩ノ家ニ打合せノタメニマイルノデス』

『貴女ノ出演サレタ映画ハ？』

『其他大勢デ二度アリマスガ、台詞ハ、シヤベッタコトアリマセン。時代劇ト現代劇ト一本ズツデス』

『ドンナ役デシタカ』

『腰元ト娘デ、ドチラモ悪者ヤ、ギヤングニ縛ラレル役デシタ』

『ソレデ、台詞ハナイノデスカ』

『ハイ、さるぐつわサレテイマシタカラ』

『ソノ映画、ゼヒ、ミタカツタデス』

『上映ノ時ハ、カットサレテイマシタカラ、アリマセンヨ』

『映画デハ、本當ニ縛ツタリスルノデスカ。』

後デ縄ヲ自分デ持ツテイルトカイイマスケレド』

『スターノ中デハ、ソレガ普通デスガ、私ノ場合ナドハ、本當にククラレマシタ』

『ドンナ氣持ナンデスカ』

『最初、ハズカシイ思イデシタ。ミンナデ、ジロジロミラレテイルノデスモノ。ソノ上、身動キモデキナクテ、手首ハ痛イシ……』

『ソレデハ、赤イ殺意。モ映画ニナルトシテ、アナタノ演技用トシテオヨミデシタカ』

『実ハ、赤イ殺意。ノ主役ヲヤル先輩ノ女優サンヲタズネテ、打合ワセニイクトコロデシタノ』

『ト、イウト、スタンドイン。ツマリ吹キ替エニ、アナタガ？』

『オ察シガイイノネ。トテモ、イヤナ目ニダケアワサレルノデスワ』

『イヤナ目ト申シマス……』

『イジワル。アナタハ、イジワルネ』

『何故、私ガ、イジワルデスカ』

『アナタハ、赤イ殺意。ヲ、オヨミニナツテ御存知ナノデシヨウ。チャント、オ顔ニ出テマスワヨ』

『コレハ、一本参リマシタ。実ハ、私ハ、ゼヒ、アナタノ縛ラレタ姿ガ、ミタクテタマラ

ナクナツテイタノデス。笑ワナイデ下サイ」

『笑イハ致シマセンガ、無理ナ注文デス』

『ドウシテモデスカ』

『アナタハ私ヲ、オドカシナサルツモリ？』

デハ、コウシマシヨウ。モシ、今度、ドコカ

デ、偶然、オアイスル時ガアツタラ、ソノ時

コソ、アナタノ願イヲキキ入レルコトニシマ

シヨウ。イイコト。偶然デスワヨ」

『私ノ願イガ、ドンナコトデモデスカ』

『アナタハ、私ヲ縛ツテミタイトオツシヤツ

タノデシヨウ。ソレダケデス』

『ソレデ充分デス。私ハ神ニ祈リマス。神ヲ

信ジルナラ偶然ヲ信ジルヨリ仕方アリマスマ

イ』

『デハ、オヤスミナサイ』

『オヤスミ』

女はその辺を片付けると、すぐに眠り始め
かすかな寝息がもれてきた。寝顔も美しかっ
たが、それよりも、その姿勢をくずさぬ態度
と、自然なままの寝姿とに又、ちがった色気
があった。

俺は、なかなか眠れなかった。目をつぶっ
ては、またひらき、何度もうくり返しては、女
の寝姿をながめ、その寝顔の美しさにみとれ
ていた。俺は、きっと、この女を縛ってみせ

るぞ、その機会が必ずあるような気がして仕
方なかった。そして、もう俺は、あの手をね
じまげ、あの胸に縄をかけて、首縄もしめ、
あの唇をこじあけて、ハンカチを押し込んで
と、よからぬ妄想をたくましくしていた。い
つしか、とるところと、まどろみ、夢かうつつ
か、夢幻の桃源郷へ魂をとばしているのだっ
た。

俺が眼をさました時は、女の姿はなかつ
た。

汽車は関ヶ原のあたりを走っていた。

京都駅では、窓をあけてプラットフォーム

を探したが、女らしい姿は見当らなかった。

俺は夢をみていたのだろうか。狐にだまされ

ていたのだろうか。とも角、一ぶくしてと煙

草を口にくわえ、さてと、ポケットに手を入

れ、マツチを取出そうとした。その時、何や

ら紙切のようなものにふれた。

それは一枚の写真であった。女が、赤い

殺意の本に、はさんでいたものにちがいな

かった。

俺はその写真を一目みると、あっと声をあ
げるところであった。

スチール用に撮したものであろうか。それ
は、赤い殺意の主人公である人妻が、体

をグル／＼巻きにされている写真である。

顔は勿論、分らないが、深草順子の苦悶の
表情であるのは、その姿態で分った。

写真の裏には達筆で走り書してあった。

『途中、用件がありますので、岐阜で失礼致
します。お休みなで、このまま行きます。

あなたの神様によろしく。順子』

見果てぬ夢の章

そこが、一等船室であるのか、特二等船室
なのか、俺は知らぬ。とに角、個室になった
豪華な洋風の船室であった。

女は、そこに俺を招き入れた。ボーイに何
か耳うちすると、チップをやって追いはらっ
た。

その部屋には、もう一人の、美しい女性が
いた。はでな和服を粹に着こなして、あふれ
るような色気があった。その女性が、順子の
先輩という信濃葉子であった。

「順ちゃん、このお方なの？」

「はい。只今、おつれました。T大の学生

さん、美舟さんです」

「あなたが、私たちの助手をやって下さる
の」

「……？」

俺は何のことか分らないのでだまっていると、
「学生さん、秘密は守っていただけますね」

「秘密？」

「ええ、お礼は充分に致します。ま、アルバイトのつもりで張切ってね」
「ア、アルバイトですって」

「ええ、あなたでしよう
順ちゃんに、縛らせてくれないかって、たのんだの」

「はあ、そ、それは」
「いいのよ。そんなに、
てれなくっても」

俺は、へどもとして、
うろたえたが、葉子なる
女性の語るのをきいてい
る内に、もう落付きを取
戻すと同時に、自分が、
千載一遇の好機をつかん
でいることを知った。つまり、この密室で、
「赤い殺意」の実演を行う。葉子が人妻。順



子が吹き替え。俺が強盗という配役である。
葉子はいった。特に俺を選んだのは迫真の演

も覆面をしろというので、黒い布をかりて覆
面すると、もう強盗になったように思われて

技ができるというわけだから、一生懸命にしてみたい。演技になったら、遠慮はいらないから、本当の強盗のつもりで、何でもいいから、思うように振舞ってほしい。ただ、殺されては困るけどねと艶然と笑うのである。

「では、これが小道具です」
順子が、手渡してくれた箱の中をみて俺は又、おどろいた。

麻縄。手拭。ハンカチ。
それはいいとして、鞭。鎖
鉄棒。注射器、薬品、皮バ
ンド。帯。扱帯。腰紐。灸
線香。

など、一体、何に使用するのか、とっさには思いつかぬものが雑然と入っていた。

準備にかかるから、俺に

きた。

葉子は着物をぬいで、緋じりめんの長じゆばん一枚に、紫の腰紐をしめて、ベッドに横たわった。順子は、絹の純白のスリッパ一枚になって、隅にうずくまっている。流石に両手で胸のあたりを、おおっている。

「本番よ」

葉子の声がかかった。俺は、とびだしていった。

「やい、静かにしろ。さわぐと殺すぞ」

まず、葉子にナイフをつきつけた。

「あ、は、はい。お金なら、さしあげますゆえ、ナイフなど、おしまいになって……」

「おい。おきたら、向うむいて坐れよ。え、何をグズグズしゃがる。さっさと向うをむくんだよ」

「は、はい」

「手を後にまわしてもらおうか」

葉子は、きちんと正座すると、はだけた袴元をなおそうとしている。

「はやくしろ。夜が明けるじゃないか」

「はい」

葉子は、あわてて、両手を後にまわした。

俺は、それに麻縄をからませた。しなやかな小さな美しい手だった。キリ／＼と胸の上か

らしめつけて、くい入る程きびしく縛りあげた。その間、葉子は適当に身をくねらせ、むなしい抵抗を試み、俺の気持をかき立てるのを忘れなかった。

「しばって、どうしようというのです。お金はタンスの引出しにあります。早くたすけて下さい」

「やかましいやい。この口、つべこべぬかすな」

型通り、ハンカチを丸めておしこみ、手拭で猿轡をかましてしまう。そして、床の上にグイ／＼と押しつけた。葉子の顔は苦しげにあえぎ始めた。

「今度は吹き替えの番だよ」

俺は、弁解じみた注釈をいれて、順子につかみかかると、毛布の上に組伏せた。順子はすごい力でもがいて、はねかえそうとした。

俺は順子の両手をねじまげて、背中中十文字に交叉させて、ひざでおさえつけ、おもむろに縄をしごいた。もう夢中である。何ともい

われぬ悪の魅力が、身体をつきぬけて行く。

後手にくくり上げ首に縄をかけて引起すと、胸の上から二巻、三巻としめあげた。

キュキュと縄はしまって、非情なうめきをたてさせる。猿轡をかませると順子は無惨な

姿でころがってもだえているのだった。

もう、強盗ではない。悪の囚虜に早がわりした元氣盛りの若者である。俺は、二人の女をかかわるがわる責めた。うずくような陶酔に狂いたった。赤い殺意のストーリーなど問題ではない。小道具の箱をひっくりかえして、俺は、いろいろな苛責を試みた。肩をふるわせて、二人はすすり泣いているらしい。悲しみの涙か、苦しみの涙か、はたまた、喜びの涙か、もう俺に判断する理性は残っていない。

肩をあえがせて吐く息と、部屋に満ちる異常な雰囲気だけが、俺の心を有頂天にしていた。猿轡の下でうめいている、こおろぎのような声。むむむむ、と地下で夜更けて泣くという、みみずのように、二つの哀姿は身をくねらせて、もだえた。

最後に、俺は二人の女を背中合わせに縛ると、天井の下を通っている鉄骨の柱に吊りあげた。一人で、二人の女を宙吊りにするのは一寸無理だったが、ふみ台をおき、縄を通してから、台をとった。二つの物体は、赤と白の輪をえがいて回転した。それを鞭で叩くと勢がついてまわった。クルクル。縄がよじれると、また反対に廻りだす。それが面白かつ

た。俺は、子供のようににはしやいで、独楽を
まわす無邪気さで、鞭をふるった。鞭のふれ
るたびに、女たちは身をのけぞらした。

葉子の顔、順子の顔、葉子、順子、赤、白
紅、白、走馬燈のように目まぐるしく交互に
俺の顔をいつたりきたりした。二人ともグッ
タリとなった。先にまいったのは順子の方で
ある。俺は順子だけをおろして、葉子だけは
吊したままにしておいた。

船は来島海峡に入ったのであろう。はげし

くゆれ始めた。ピッチング。ローリング。エ
ンジンの音も一段と響いて来る。ドドドド
と、腹の底までこたえるような音である。

吊られたまま葉子は、俺の方を睨みながら
何か物言いたげな表情であったが、船の振動
で赤い振子のように、空しく左右にゆれてい
た。エンジンの音にまじって、時々、「むむ
むむ」という声がきこえてくるのは、葉子の
ものであるか、順子のものであるか。そ
れすら俺は夢うつつできいていたのだった。

狂った頭の片すみで、

海底に眼のなき魚のすむという

眼のなき魚の恋しかりけり

牧水の歌がだしぬけに思いだされてきた。
そうだ。今、この船の走っている海の底で
は、限りなく眼のなき魚がかなしんでいるこ
とであらう。と、そんなロマンチックな夢み
たいなことを、ぼんやりと考えていた。

——おわり——

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9×6.5cm) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

Y 7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y 6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y 5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y 4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y 3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y 2	乱れ黒髪裸像	(大塚啓子)
Y 1	全裸荷造棒しほり	(大塚啓子)
Y 10	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y 9	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y 8	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y 7	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y 6	蒲団貫通またぎ	(大塚啓子)
Y 5	初々しき全身像	(岩井知子)
Y 4	ヌード股間しほり	(絹川文代)
Y 3	全裸脚股間縛	(絹川文代)
Y 2	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y 1	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y 10	全裸全身自慢	(愛川悦子)
Y 9	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y 8	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y 7	遅ましきヒップ	(愛川悦子)

Y 22	裸身の補われ人	(愛川悦子)
Y 21	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y 20	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y 19	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y 18	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y 17	蒲団貫通またぎ	(大塚啓子)
Y 16	初々しき全身像	(岩井知子)
Y 15	ヌード股間しほり	(絹川文代)
Y 14	全裸脚股間縛	(絹川文代)
Y 13	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y 12	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y 11	全裸全身自慢	(愛川悦子)
Y 10	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y 9	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y 8	遅ましきヒップ	(愛川悦子)

Y 23	大の字晒し	(絹川文代)
Y 24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y 25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y 26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y 27	もつこれで許して	(益田房子)
Y 28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y 29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y 30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y 31	囚女後手縛り	(大塚啓子)
Y 32	全裸強列股間縛	(絹川文代)
Y 33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y 34	開股一番直線	(絹川文代)
Y 35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y 36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y 37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y 38	妖艶闊のしほり	(絹川文代)
Y 39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y 40	強烈第手首縛	(田原美佐子)
Y 41	ハタカ縛り人形	(絹川文代)

Y 42	濃艶ハタカ縛り	(絹川文代)
Y 43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y 44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y 45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y 46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y 47	全裸寝台乗馳走	(花坂道子)
Y 48	振袖令嬢後手縛	(花坂道子)
Y 49	長襦袢後手縛	(花坂道子)
Y 50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y 51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y 52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y 53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y 54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y 55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y 56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y 57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y 58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y 59	聖壇のさらし者	(絹川文代)
Y 60	エビ實めの表情	(絹川文代)



異^い加^が苦^く研究

浣腸現考学

栗 瀬 長

浣腸の浣は「あらう」「すすぐ」の意であり、史記に、「俞跗治^レ病、漸^ニ浣腸^ニ」とある。以前は灌腸と書き、灌は水をそそぎかける意であるが、何れにせよ、腸を洗うの意味に変わりはない。今、私は、マゾの立場に立ちながら、浣腸について考察してみたいと思う。

一、浣腸の目的

A、医学的目的

浣腸は先ず第一に医学的に用いられることは勿論である。歴史的にはその起源をギリシヤ・ローマ時代に求め得るようであるが、西洋医学として体形づけられたルネスサンス以

後、略々現在の形として、用いられたようである。

我が国に浣腸器が渡来したのは江戸時代オランダより、即ち蘭学の一部としてであるが、広く巷間の医者が用いるようになったのは勿論、明治以後であった。

さて、その目的とする所は大別して三種である。即ち催下、止下、滋養浣腸がそれである。

イ、催下浣腸

催下浣腸とは読んで字の如く、下痢を催さしめる為、いうまでもなく、直腸内の糞棄物を排出せしめるのであって、便秘に対し、或

は疫痢、赤痢等の伝染疾患の際、腸内の細菌を速かに体外に排出せしめる為に行う。

ロ、止下浣腸

あまり一般には行われないが、下痢が激しく、体力の消耗が考えられる時、下痢止めとして用いられる。

ニ、滋養浣腸

重症患者にして、体力衰微のため栄養摂取が充分に行われないような場合、栄養分を大腸内、奥深く注入し、腸管より栄養吸収を計る目的をもって行う。

その外、蟻虫駆除の目的をもって、大量の稀薄な酢を浣腸することもあるが、これは、

くわしくは後述する。又、腸閉塞の場合、大量の液による高圧澣腸が行われる場合もある。

B プレイ的目的

医学的に用いられる澣腸は忌み嫌われる排泄物を強制的に排出せしめる為に、患者にとつては強烈な羞恥感を感じ、それが場合によっては責苦となるのである。これが、屢々澣腸された経験者の場合、マゾとして澣腸の責苦を我が身に課してみたい欲望にかられるようになり、或は自分独りで、或は夫婦、親友等と、澣腸を楽しむ場合が生ずる。これ即ち、遊戯としての澣腸、プレイ的澣腸と名付けられる所以である。

なお、サディズムの一環として、他人に責苦を与える場合、澣腸が用いられることが少くないが——例えば追われて隠匿を目的として飲み込んだ宝石を強制的に澣腸により排泄せしめるが如く——これも広義にプレイ的澣腸と解してよいと思う。

一、澣腸器

普通、用いられる澣腸器には、グリセリン澣腸器、イルリガートル、エネマシリンジ、スポイト、軽便澣腸などがあるが、その各々について特性、使用法などを調べてみよう。

イ、グリセリン澣腸器

澣腸器として最も一般的。医者、家庭はい

うに及ばず、マニアとしてこれを所持しない者はないであろう。ガラス製唧筒式、小児用二〇〇CC入りをはじめ、三〇〇CC、五〇〇CC、一〇〇〇CC入りなどがある。比較的澣腸量が少く効果をあげる為に、使用液は脱水作用の激しいグリセリンであるが、その量などは後述する。ガラス製故、取扱いに注意しないと往々にして破損する上、澣腸の際、勢よく注入すると、内筒底に激突して忽ち亀裂を生じ易い。これを避けるため、最近では外筒底にゴム片を附着せしめたものが発売されているし、外筒底に輪ゴム（〇バンド）などを入れておくことで破損を防止出来る。なおグリセリン澣腸器は使用が簡便であるが、嘴管が大体三厘足らずで短く、充分直腸の奥まで達するところが出来ないで、場合によっては短いゴム管を連結し、その先に十厘ぐらいの別の嘴管を附けた方が好ましい場合がある。

又、グリセリン澣腸器では、自分独りで澣腸するのに聊か不便である。姿勢の事は後述するが、横臥にしか用いられず、最も好ましい姿勢である仰臥では、どうしても他人の手を借りねばならぬ不便がある。最近、嘴管がLの字型になった澣腸器が東京本郷の某医療器具店で発売になったが、これは便利であるが、破損し易いのと、グリセリン澣腸器としてのイメージをこわすのが、やや欠点といえる。

ロ、イルリガートル

病院における澣腸といえば、イルリガートルといつては語弊があるうか。それ程、病院ではこれが用いられる。小児科、産科、内科などで、生々しい石鹼液に湿ったイルリガートルを見かけない人はいない。最近では割合、家庭にも見られるようになったが、マニアにとっては前記グリセリン澣腸器とともに必備の品であろう。

太いガラス製円筒、（最近ではポリエチレン物が多くなった。破損が防げて好ましい）下部が丸みをおびて急に細くなり、短い嘴管の先に二米余のゴム管をつけ、更に十厘程の嘴管をつけたものである。容量は普通五〇〇CCであるが、病院などでは一〇〇〇CC入りの巨大なものも使われている。大量に澣腸するので、洗腸といった方が適切であり、使用液は、くわしくは後述するが、大体、石鹼液、食塩水、場合によっては牛乳、微温湯などである。刺戟と脱水作用の強烈なグリセリンは不向きである。

イルリガートルは、水圧により注入する為に約一米位の高さに吊るすのが普通であり、一分間に約一〇〇CCから二〇〇CC注入するのが望ましい。注入量が多ければ多い程、又、早ければ早い程その刺戟が強いので、小児、重病などでは五〇〇位に低めて徐々に注入する事もある。

プレイとしてはイルリガートルが最も精神的に強烈な感を与える。量の多いこと、目前に注入される液が、拒ばもうとするのを嘲るが如く、静かにその液面を下げつつ、ゴム管が、ほのかにゆれて、次第に直腸の膨満が感ぜられるとともに、強烈な腹痛がおそう。マゾにとって、これ程の醍醐味があるうか。

イルリガートルの欠点は、準備に聊か手間がかかること。注意しないと、ゴム管と噴管が外れて、水圧のため一面水浸しになる事。施了後、腸内の水圧と、ゴム管内の若干の残量の水圧が釣り合つて、管に残るため噴管をうかつに抜くと、若干の液がゴム管から洩れ出る事などがある。何れにせよ、イルリガートルを用いる時には、ゴム布かビニールの風呂敷等を敷くようにしたい。

容量が五〇〇乃至一〇〇〇CCしかないため、大量浣腸を欲する時は、他人に浣腸してもらつた場合はよいが、独りの時は、甚だ不便であることも欠点の一つであろう。

ハ、エネマシリンジ

両側に長くのびたゴム管、真中に丸々とふくらんだゴム球、そのグロテスクな姿が特にマニアの共感を呼ぶ。しかしながら操作が、やや難かしい為、あまり一般的に用いられない。医家用に専門の医科器械店にしかないのが欠点であるが、大量浣腸には、どうしてもエネマシリンジでなければならぬ。グリセ

リン浣腸器では、何度も吸い上げねばならずイルリガートルでは、やはり数回、液を補給する必要があるが、エネマシリンジでは、大量の液を用意すれば、ゴム球の圧縮を反復するのみにて、希望の量を用い得る。しかしながら自分独りで操作するのは余程の熟練を必要とし、普通は他人の手を借りねばならない。

ニ、スポイト

市販されているゴム・スポイトは、三〇CC位の小型から、一〇〇〇CC位の大型まで各種ある。噴管も、小型は二種位から大型となれば五種位であるので、浣腸目的では大型が望ましい。しかしながら容量には限界があるので、液はやはりグリセリンが普通であり、大体、唧筒式グリセリン浣腸器に準ずる。ゴム製故、破損することもなく、形も手頃であるが、液の内容容を重視し得ず、マニアにとっては何か物足りないが、独りで行うには頗る便利であろう。

ホ、軽便浣腸器

薬局の店頭にて「浣腸薬下さい」という声を屢々耳にすると同時に、何か抵抗を感じつつ、これを買われた経験がおありの事と思う。毎日の新聞紙上にも軽便浣腸の広告には屢々、お目にかかる。又、子供の頃からこれの御厄介にならなかつた人は少い位、あまりにも身近な存在といつてよいであろう。

軽く手の中に入つてしまふポリエチレンの

小型容器。丸くふくらと、ふくらんだ容器。形よく、すんなりとのびた噴管。マニアにとっては、実に魅力ある存在である。

イチジク、ハート十字、アイデアル、東宝など、十数種類が発売されており、何時でも何処でも手軽に求められる。

しかしながら、子供用二〇CC、大人用三〇CC、重症用でも四〇CC（何れも五〇％グリセリン溶液が普通）で、量に於て物足りなく、どうしても二個、三個、一度に使用せねばならぬ不便がある。しかも噴管の部分が二種足らずで、あまりにも小型のため、イルリガートル、エネマシリンジの如く、被施行者の視覚に訴える事が出来ないのが欠点である。とは申せ、何にも変え難い軽便さ故に、最も多く用いられ、又、将来も用いられるであろう。

三、浣腸の方法

浣腸の仕方は今更、詳述するまでもないと思うので、各種浣腸器に適した液について考察すると共に、特記すべき事項にのみ止めたいと思う。

A 催下浣腸

イ、グリセリン浣腸器液
グリセリン五〇％溶液が普通である。即ちグリセリンと水と半々に割つたものであるが、幼児、重病人等の場合には三〇％溶液程

度に薄める場合もある。一方プレイとしては、なるべく濃度の高い方が脱水作用が強く、効力が強くなって苦痛を増大せしめる。

ロ、イルリガートル液

イルリガートルには、石鹼水、食塩水等が用いられる、石鹼水は、薬用石鹼、或は良質の化粧石鹼の五%溶液、即ち水五〇〇グラムに対して石鹼二十五グラムを溶かしたもの。この場合、水よりも微温湯の方が溶け方が早いし又、溶解の際、攪拌するとよく溶解するが、泡が液面に溜らないよう注意する必要がある。

食塩水は一〇%が普通、即ち水五〇〇CCに対し、五〇グラムの食塩を溶かす。この場合、充分に攪拌しないと、食塩が沈澱することとに注意する必要がある。

石鹼水、食塩水とも、濃度の濃い方が効力の強いのは勿論であるが、特に食塩水の場合には濃度三〇%以上ともなると、直腸に火のついたような激痛を与え、排出後も相当な激痛の残ること、石鹼液の比ではない。従って、あまり濃度を高めることは、腸管に炎傷を起す恐れがあるから注意せねばならない。

その他、重病人には刺激を特に避けるため、牛乳、単なる微温湯が用いられることもある。

ハ、エネマシリンジ液

エネマシリンジでは、医療用としてはイルリガートル同様であるが、プレイ用としては、

高圧浣腸として微温湯そのものが普通である。効力による苦痛よりも、大量による腸管への圧力による苦痛を主とするが故である。

B、止下浣腸液

下痢止めの止下浣腸としては、一%のタンニン水が用いられるが、これは特殊な医療用としてのみであり、マニアにはあまり必要とする事項ではないので省略する。

C、滋養浣腸液

栄養物の摂取が出来ない重病人に対して、大腸管から栄養物を吸収させる為、葡萄糖液に、ビタミン、カルシウムその他を混合した養分を少量宛、微速度をもって、大腸奥深く注入するが、これも医家の行う特殊療法故、割愛する。

D、蟯虫駆除液

蟯虫駆除の場合、先ず、排便の目的でイルリガートルにて洗腸した後、酢一〇%溶液にて洗腸する。これは必ず毎晩、就床直前に行う必要があり、量も三〇〇CCから五〇〇CCを必要とする。毎晩、蛔虫の発見されなくなる迄、而も、排便洗腸と二回、イルリガートルを用いられるため、これを受ける患者にとっては可成りの苦痛であり、又これが、マニア誕生の一原因となる場合もありそうな氣のするの筆者の色目か。

E、浣腸の時の注意

浣腸液は、グリセリン浣腸で、小児の二〇

CCから大人で五〇CC、イルリガートルで五〇〇乃至一〇〇〇CCが普通であるが、プレイとしては、グリセリンで一〇〇CC、イルリガートル、エネマシリンジで、三〇〇CC位迄が適当であろう。

この場合、普通は体温より、やや低い三十六度位に温めて用いられるが、温度が体温より高いか、或は、ずっと低いことによって効果が違おう。しかし五〇度以上では腸管に炎傷を起し易いから避けねばならない。濃度も濃い方が効力が強いが、食塩水など、あまり濃いのも避けた方がよい。浣腸器を使用する際には、随意筋を傷つけない様に注意すべきは当然であろう。

施薬後は脱脂綿等で、押さえ、少くとも五分、出来れば十分以上、我慢しないと、充分目的を達しない。

この我慢の点が、マゾとしての苦痛を満足させるのであって、いくら長くても長すぎることをない事に留意し、あらゆる手段を用いて、長時間、苦痛に耐える事が望ましい。とこう考えてくると、マゾとは実に厄介な哀れな運命を背負ったものだ、吾ながらつくづく思う。この上はせめて、神聖な医療器具を乱用して冒瀆になることを戒めたいと思う。

創 作

N 街 の 朱^{あか}い 室^{へや}

仏 光 刀 四 郎

一 アクセサリーを売る女

N街の「珠樹」と云うアクセサリーを売る店で、近頃、すばらしく美しい女が売場に立つようになった。舗道を往く者が——男も女も、前面の飾窓の中を覗くふりをして、奥の女を覗き見て行く。N街は、官公庁を始め一流銀行や一流会社が、ぎっしり詰まった巨きなビル街である。退け時になると、人の大群が舗道一杯に溢れる。その人の波が、「珠樹」の前を通るとき、必ず一度は奥へ視線を投げて行くのだ。もっとも、中には傍目もふらず、ただ、せかせかと歩み過ぎる者もある。大概それは、齢老けた木念仁である。若い男は遠目にもその美形に魅せられ、B・Gたちは、その女へ対して一種のファン心理を芽ぐんでいた。女は二十七、八の齢恰好である。

「お姉さま」と呼んでみたい甘やかな想いが、わけても、高校を出たばかりのB・Gには強い。彼女たちは月給を裂いて、しばしば「珠樹」でアクセサリーを求めた。齡上のすぐく美しい同性から、愛嬌を示され、手づからイヤリングを嵌めて貰うことに、うっとり酔うような心地を覚える。他愛ないと云えばそれまでだが、しかし、その他愛なさ真剣になる一時期が、乙女たちにはある。

朝、彼等が出勤する時には、「珠樹」は錠戸を下ろして、まで眠りの中にある。店が開くのは、十時前後である。眼も醒めるような美しく化粧を整えた顔で、女は床を掃いたり窓を拭いたり、また、そのあとで陳列品を取り替えたり、花瓶に花を活けたりする。小さな店だから一人で充分なのであろう。他に店員はいない。こまごまと立ち働く女の項に陽差しが当って、匂うばかりに白く、そうして

何とない気品が、その様子に漂っている。

朝は遅いが、夜は割方、長くまでやっている。十一時近くまで、舗道へ明るく灯をこぼしているときもある。

或る日、そんな時刻に、一人の中年の紳士が前を車で通りかかって、ふと思いついたように急に車を停めて、店へ這入って行った。

「贈物にしたいのだがね——」

ケースの中の品々を見つつ云って、ふいに声を嚙み下ろした。陳列ケースの向うの思いがけない美貌と、ぶつかって瞬間、舌がこわばった感じであった。

「お幾つ位のお方様でしょうか？」

やわらかく、よく澄んだ声である。

紳士は、やがて小函を小脇にして車へ戻った。女が選んでくれた品は、センスの斬新な若向きの首飾りであった。それをシートに置き、車をスタートさせながら、紳士は溜息を吐いた。

（美しい女だ……）

顔が美しいばかりでなく、すんなりとした細身の華奢なスタイルが、外人を見るようであった。紳士はもう一度、溜息を漏らした。フォーグラブを点けた。夜の街路に乳色の霧が流れだしていた。

二 別れの首飾り

紳士の名前を瀬波良平と云う。良平と云う名前が嫌いで、普通は蟬風で通している。俳句の雅号である。下手の横好きと云うのである。俳句誌に三つも四つも関係し、金銭的なパトロンにもなっているが、句作は一向に上達しない。と云うより、一般の俳人には理解できない異様な情感が、瀬波蟬風の句には籠っているのだ。

仕事は——何もしてない。但し、各一流銘柄の株を何万株と保ち、その配当金だけで王侯のように豪奢で気ままな暮しを得ている。齡は四十五歳。独身。生涯、結婚する意志はないと公言している。

さて、その彼が、女性への贈物をたずさえて、乳色の霧が舞い罩めた夜遅い街を、愛車のインペリアルを駆って行った先は、N街から橋一つ越えた向うの文化住宅街の、河の岸にのぞんだ一軒の家である。洋風の玄関に、「植村恵子」の表札が門灯の光に読める。車の強烈なヘッドライトが、その家の前の闇を斬り裂いて来て、停まると、降り立った紳士は、ノックもなく玄関の中へ身を入れた。

式台に、若い女が蹲まっている。後向きに、背中を丸くして。若いと見たのは、着ているパジャマの派手なピンク色からばかりではない。そのパジャマ姿にうかがえる美体の線が、張ち切れそうに豊かで、新鮮な若さを匂わせているからだ。「いらっしやいませ」顔を挙げることなく、女は云った。

「おそくなった」

靴を脱いで、蟬風は式台に上る。そうして、女の背中にどっかりと跨った。やわらかな背が攪う。ぐっと女は肘を突張る。

式台は障子敷居に区切られて、その先からは廊下になっている。かなり長い一本廊下の突当りが寝室である。

「ああ……ぶつのは待ってえ——」

びしり、びしりと平手打ちを浴びながら匍い進んで行く廊下の中で、女は崩れ伏して声を挙げた。

「お願い。お部屋に辿りつくまで、ぶたないでえ……」

蟬風の体重を背中を支えて進むだけでも、息が切れそうに苦しいのに、その上、烈しく叩かれたのでは、可憐な女の身では耐えきれ

ない。

「立て！　しゃんと匍わぬか！」

黒髪を、ぐいと掴んで女の顔を斜めにねじり向けると、その白い頬へ、ぱしっと蟬風は平手打ちをくれた。

「痛ッ——」

「もう一度か」

「ごめんなさい」

女は体を起して、再び元の如く馬の姿勢に戻ると、目頭をうるませた。打れた頬が薄赤く充血して、びりびりと痛んでいる。

蟬風は右手で女の髪を手綱代りに握る。そのために、髪を長い下げ髪にさせている。右手に黒髪を鷲掴みにし、左手で叩きながら、打跨って行くのだ。

これは今夜だけのことではない。蟬風が来たとき、いつも命じることだ。だから女は、インペリアルが前に停まると同時に、玄関へ行って式台に蹲まるのが習慣になっている。

寝室へ辿り着くまでに、女はもう一度、どさっと打伏して、へたばった。

「ぶつのは、後で十分おぶちになって。今は許してください」と泣声まじりに懇えるが、蟬風は肯かぬ。

「いつも許してくださるのに……」
若い項が顫える。



「ああ、今夜は、つらいわ……」

「まだ泣くのは早い」

ぐいと引き起して、

「そら、もうあと二米だ——恵子、またピンタをやるぞ！」

「あ、あるきます」

寢室のドアまで、わずか二米の距離を進むのに、女は顔一面に汗を浮べ、悲鳴を挙げて、眼から涙をほとばしらせた。

室に、はいると女は汗を拭いた。ベッドの脇の三面鏡台に向って顔を直すその様子を、蟬風は椅子に座って、眼を細くして眺める。指に挟んだ葉巻から、濃い煙が昇って、香りが、化粧の芳香と溶け合う。女は丁寧に顔を直すと、こちらを向いて、

「貴男——」

ぱらりとパジャマの上衣をはだけて、鏡台の前から立ち上ると、蟬風の前へ進み出た。そこで後を向く。両手で鉄輪を握った。

鉄輪は、天井から垂れ下っている二本のロープの先端についているものだ。そう、電車の釣皮を長くしたようなものだと思って戴けたら、よろしい。それを、女は掴んだ。

「胸ではだめ？」

後を向いたまま云う。

「だめじゃないね。後で責めてやろう」

「可愛想な恵子……」

万歳をした恰好に差上げているかいなの両手首を、蟬風は麻縄で鉄輪に縛りつけていく。ゆるまないよう、手首が脱けないよう、力を絞って締めつける。女のひらいた指が血の気を喪って白くなった。

「猿ぐつわをして……」

「おう」

綺麗に紅を塗った唇を、あーんと言う工合にひらくと、小粒な齒列が眩しい程皓い。可愛い舌が覗いている。

「もっと、うんと開ける」

「裂けちゃう……」

「そら、頬張れ」

ハンカチを二枚丸めて、蟬風は、ぐいと押し込み、上からタオルで縛った。項で固く固く結ぶ。

「ム……」

「ふふ、苦しいか」

蟬風は壁の方に退って、そこにあるスイッチを拇指で押した。途端に女の体は浮き上って、床から二尺ばかり踵が離れ、ぶらんと宙吊りになる。ロープが釣瓶のように上に昇って、吊り上げたのだ。

この家は、まだ建って間がない。栗原組と云う建築業者が請負って建てた。設計をしたのは、同組のKと云う一級建築士である。

Kは、完成後に寢室の壁と天井の一部を毀し、内密にこの責め吊りの仕掛を施したのである。無論、瀬波蟬風から頼まれてのことだ。電気仕掛の精巧な装置である。

宙に、ぶらりと吊されて、女は早や、腕が抜けるような苦痛にあえいでいる。手首は紙のように白くなった。苦しさに、足が宙を掻く。どう悶えても、踵が床に届くことはない。芋虫のように女は、ぶら下っている。

「さあ、お美味い鞭を喰べさすぞ！」

びゅっ——唸りを立てて、黒い太い革鞭が蛇のようにくねると、びしっ！

したたかに音をたてる。「むっ……」かすれた呻きが、猿ぐつわから洩れる。女の顔が一瞬、充血し、双眸から涙が噴き落ちた。びしっ！

びっし！

……蟬風は上衣を脱ぎ捨て、ワイシャツの袖を捲り、眼をらんらんと燃やし、悪鬼の如き形相で鞭を振りつづける。その朱を帯びた凄まじい貌に、だが一脈、とろけるような恍惚の色がある。

「恵子、辛抱しな、辛抱しな。フッフ」

灼けるような痛撃を浴びるごとに、女の眦から血の泪が、したたる。腕は痺れ上って感覚を喪い体は、だらりと垂れ、祈るが如く頭をがっくりと前へ落している。鞭が空気を裂き破って、なおも容赦なく炸裂する。

びっし！

びっし！

びっし！

血を見て却って飲ぶ残忍性は、蟬風には無い。雪の肌を鞭で紅く飾る美しさへの陶醉はあれ、血に狂喜する病的な偏執はない。昨今、乗物の中などで女性の臀部を刃物で切ったり、路上ですれちがいざまに胸を刺したりする事件が多く起っているようだが、これらの犯人は、純粹な意味でのアブノーマリストではない。憎むべき、残忍なけだものである。

余談にわたったついでに云うが、アブとは、官能的美の昇華した傾向であり、不知火の如き美しい夢幻な炎、とでも云い得べきものだと思う。「耽美」と云う言葉と同義語に置かれるべきものだと思う。一種の芸術的境地であり、そこに遊ぶ精神を識る者でなければならぬ。

女の本から血がこぼれだしたのを見ると、蟬風は鞭を捨てた。壁のスイッチを押すと、するすると女の体は下って足が床につく。さ

らに鉤を押しつづけると、ロープは徐々に垂下して、ぐったりとした女の体をそっと床の上に伏さすような工合になる。女は後ろ向きに大の字に床に匍い伏した。蟬風はまず両手の縛めを解き、次いできつく喰い込んだ猿ぐつわをほどく。

「……あ……いたい……いたい……」

唾液にぐっちゃり濡れたハンカチを、蟬風がひき出してやると、女の唇はそうあえて云い、それから項を震わして鳴咽しだしたが、蟬風は笑って、鏡台の抽出からガーゼと薬用アルコールの瓶をとり出して、

「よしよし、手当してやるから泣くな」

「……消毒はいや——」

駄々子のように、足をバタバタさせて叫ぶ。云うまでもなく、猛烈に泌みるからである。

「お願い、私に湿布させて——」

「こいつ」

起き上ろうとする肩を抑えつけて、素手で、再びビシビシと打ち据えた。

「ああッ、ま……まだ、ぶつの……」

「おとなしくするか！」

「……」

泣きじやくりながら女は合点した。手当が始まると、女は幾度か悲鳴を放った。

二人が寝に就いたのは、真夜中、二時近くである。蟬風はレコードを掛けて、女に民謡踊りを五曲踊らせた。黒田節もあれば安来節もある。体を痛めつけられた女には当然、上手には踊れない。すると、

当然また仕置を受ける。蟬風は、今度は床に四つ匍わされて鞭を当てた。

翌朝。

蟬風は七時に眼を醒ました。これは長年の習慣である。どんなに遅く寝ても、朝七時にはきちんと床を離れる。女も起きた。赤い眼をしている。打れた痕がうずいて、眠れなかったものだろう。女がタオルを絞って湿布しているらしい気配を、蟬風は曉方、夢うつつに感じていた。

蟬風は云った。

「恵子、僕はお前に……さようなら」を云う。……さようなら」



れからが人生だろう。若い立派な男性と結ばれて、幸福になることを祈る。この家は、今こそ云うが、最初からお前の名儀で建ててあったんだ。お前のものだ。恵子、お別れの握手を——」

三 石 落 の 花

栗原組の建築士Kが、瀬波蟬風の邸を訪れたのは、蟬風が植村恵子と別れて、一月程経った頃である。瀬波邸の前庭には、石落の花が季節を想わせて咲いている。

Kの長身が門をくぐると、向うの芝生で蟬風は手を振り、クラブを肩に担いで歩み寄って来た。今打ったゴルフボールが、堀際の芝

「——」

早くも女の眸からハラハラと、落ちた。

「……きらいになったのね」

「そうではない——お別れの贈物だ」

泣く女の頸へ、昨夜求めた首飾りを蟬風はしずかに掛けてやって、云う。

「一年の交際で、僕は約束通りお前を生娘のままおいた。これは僕が誇ってもいいことだと思う。おまえは十九歳の純潔な乙女だ。こ

生で白く転々している。

「こちらから上り給え」

「は……」

蟬風に対するKの態度は、きわめて慇懃なものがある。帽子を脱いで腰をかがめながら、彼のあとについてテラスへ上り、そこに靴を脱いで座敷へ通る。

先日から蟬風が再三、電話で頼んで置いたことの返事を、今日は持って伺ったらしい。

「聞こうじゃないか」

と、座卓を距てて対座すると、蟬風に早速に云った。

「『珠樹』の女、あれはですな——」

……これだけの広い邸に、女中も下男も置いていない。誰か、主婦代りに外から毎日通って来る女でもあるかと云うと、それもない。文字通り一人暮らしである。掃除、風呂焚き、洗濯に至るまでも蟬風自らがする。これは一種風流な殿様暮しであろう。それにしても、よく掃除の行届く殿様である。二人が今、対座している座敷の障子窓も、埃一つとどめず磨き込まれていて、何やら話し合う二人の様子があかるく透いて見える。話は大分すすんでいるらしい。——稍あつて、

「そうか、そうか。それは有難い」

蟬風の、うれしそうな弾んだ声が、石路の花の咲く前栽まで高く聞えて来た。

N街の装飾品店「珠樹」に居る女と、瀬波蟬風が会ったのは、その翌々日である。場所は、この市の繁華街にある「城」と云う喫茶

店の二階であつた。この段取りをつけるまでに、Kはどれ程骨を折ったか知れない。「珠樹」へ何度も通つて、ようやく「それ程おっしゃるのでしたら、一度お会い致しましょう」と女に納得させていた。「そうかそうか」と蟬風がよろこんだのは、このことであり、そうしてその手放しのよろこび様は無理もない。

これまでに、Kはすでに幾人かの女を、瀬波蟬風へ紹介している。頭から爪先まですっかりマゾ化しているような女もあつたり、アブの世界に全く染まっていないう娘もあつた。デパートのエレベーターガールであつた植村恵子などは、後者に属する。Kが、そうした奇妙なとりもち役を買つて出るのは、一つは昔、蟬風から受けた厚い恩誼に報じる念もあつたが、亦には、蟬風の清潔な精神が好きだからである。蟬風は一人たりと雖も度を越した関係に陥つた女はいない。それはK自身には遠く及ばない、不思議に潔白な強靱な精神として映つて、心を惹いた。

蟬風がそうしたマニアであることは、Kは充分「珠樹」の女に説いている。女は、その言葉を信じる氣になつたからこそ、蟬風と会う氣になつたと云えるだろう。それを聞いて、(あれほどの美女が、よく……)と、蟬風は欣喜し、併せてKの骨折をひとしお有難いと感じたのである。

さて、「城」の二階で二人は会つた。女は店を閉めた後に来ているから、時間は十一時に近かつた。Kはこの席には来ていない。室内は暗く、各テーブルに一個ずつ蒼い色電灯が灯っている。その淡い光に照らされた女の美貌は、凄絶な程である。

「K君から事情は伺いました。御主人とお子様がお悪いそうですね」

知らぬ者は、誰も、この女を三歳の娘を持つ人妻とは思ふまい。

B・Gから「お姉様」と慕われてふさわしい、若い優雅な雰囲気をしつとりと身に持った女である。

Kが伝えたところによると、主人と娘は胸を病み、田舎の或るサナトリウムで長らく療養をしていると云う。ために、女はあの店で働いて、家族三人の暮しを一人で背負っていると云うものだった。

「はい……」

女は點頭した。

「失礼なようですが、私の御承知のモデルになって戴けたら、金銭的な不自由はお掛け致しませんし、お別れする際には、充分、後の身が立つように計います……如何でしょうか？」

と、蟬風は身を乗り出す。

「……………」

綺麗な眸を伏せて、女は向いている。

「うん、と仰有って戴きたいな」

「……………」

「貴女がえらんで下さった、あのいつかの首飾りは、実はある女との別れの記念に」

不意に女は皓い歯を見せた。

「伺っておりますわ」

「……だったら、この私の目下の淋しさがお分りになるだろうと思うが」

「……………」

「また黙ってしまわれる」

「あの……………」

女は頬を薄赤くして云った。

「私なんて、貧弱で……とても貴男のそんなモデルなんかには」

「冗談じゃない」

卓を叩かんばかりの語勢で彼は云った。

「貴女ほど優れた肢体を持った女性は、めったに居ません。それだからこそ、私は貴女に魅かれたのです」

「子供も産んでいますし……肌だって綺麗ではありません」

「そんな雪のような項をしていて」

なにを云うというように蟬風は笑い、

「さあ、うんと云って」

「……………」

女が小さくうなずいたのを見たとき、蟬風は感動に打れて暫く口が利けなかった。

四 鞭 恋 い

女の名前を音羽弥生と云う。

齡は二十九だと後で蟬風に打ち明けている。

弥生が、N街の「珠樹」を辞して、瀬波邸へ移り住んで来たのは、そろそろ冬の萌しを朝夕に覚えだした頃である。

一月余りの期間がその間に過ぎていた。これには訳がある。

「珠樹」の経営者は、浦上珠樹と云う三十余りの独身女で、これが丁度アメリカへ旅行していた。装飾店の他にホテルを二つ経営していて、云わば本業のホテル業の視察のために渡米していて留守だったのである。

弥生にとって珠樹は女学校時代の先輩に当り、その誼であの店で働くようになっていたから、彼女の留守に勝手に店を退く訳にはいかない。然も、相当の高給で遇され、店をすっかり任せられているのでは尚更その厚意に叛く真似はできない。

だから、珠樹が帰るまで暫く待つて欲しいと、弥生は瀬波蟬風に頼んだ。弥生は店に住込んでいる身だ。

そう云われてみれば、邸へ同居させることは、蟬風は待つより他なかったが、その代り閉店後に弥生を車で迎え、邸へ伴つて鞭をうけることは承諾させた。

それは初めて実行したのは、あの喫茶店で会った翌夜である。そのときの模様を少し描いてみよう。

弥生は店は戸締りを施すと、裏口から外へ出て、そこに待つ



ている高級車の前部シートへ身を乗せた。

「お待たせして、すみません」

香水の佳い香りが、蟬風に匂った。蟬風はスタートさせる。インペリアルは飛ぶようにN街を走り抜けた。星が夜空一杯に燦めいて、蟬風の胸には、ふと少年のようにひたぶるな感動が湧いた。記念すべき、この美しい夜よ……

車が邸へ着くと、弥生は不意に怯えてシートから降りようとしなかった。

「帰らして……私、こわい——」

「何を今更、云う。奥さん」

蟬風は外に廻って、助手席のドアを開けると、弥生の和服の帯を掴んで、ずる／＼と引き寄せた。

「せ、瀬波さん、待って——」

腰から下だけが外へ出て、力まかせに引張られた名古屋帯がしどけなく崩れた恰好で、弥生は叫んだ。物の怪が飛ぶような鬼声で啼いて、夜鳥が庭樹の梢を渡った。

ぴしやっ、ぴしやっ、と蟬風の大

きな掌で、ぶたれたすと、弥生は温和しくなつて、じつとシートへ顔を埋めていた。

「痛い、奥さん」

そう云う間にも、掌はぴしゃっ／＼と撲ちつづける。

「……………」

「返事をしろ」

ピシッ……

「アアッ……痛い——」

「これくらいで泣声を挙げたら、後の鞭責めになつたらどうするんだ一体。え」

「は……はい……」

「それ、もっとちゃんと脚をふん張って」

「……はい」

こうして、やがて蟬風は弥生を邸内へ入れた。本格的な鞭責めがそれから始まった。それは烈しいものであった。

翌日、音羽弥生は病人のように青い貌で店に出ていた。見方によれば、この日ほどその美貌が凄艶に見えたことはあるまい。

店をしまう頃、蟬風の車はまたその店の前へ静かに滑って来た。

「今夜も責めるの？」

「今夜も責める」

弥生は同乗して、昨夜の如く邸へ行き、昨夜の如く責められた。

そうして、深更になって店へ送り帰された。

店の女主人、浦上珠樹が帰朝するまでの約一月余の期間、二人には大体こういう状態が継続したのである。

珠樹が戻ると、弥生は直ぐに暇を乞い、瀬波蟬風の完全な責めモ

デルとなつて、邸内に起居を共にするようになった。前裁の石路の花はいっしか散り、朝夕、寒風が立つ頃であった。

邸に移ってから弥生は、むしろ積極的に蟬風に奉仕した。責めに馴らされ、妖しいマゾの華を心の奥底に開花した女の態度がそこにあった。眼も醒めるような緋の衣で六尺褌を作り、それを締め込んで鞭を浴びることも、或いは芝生に身を伏して自転車車輪に轢かれることも、弥生自らの発案によるものであった。

弥生が最も慕うのは鞭責めであった。

これを、蟬風は俳人らしくみやびやかな言葉でこう詠んだ。

鞭恋い——と。

寒夜亦吾が鞭恋らる美貌かな

蟬 風

五 朱 い 室

先に述べたように、音羽弥生には肺を病む夫と娘がある。K県のK町と云う空気の良い海浜町の国立サナトリウムで、二人は永い療養生活を送っている。

弥生は蟬風から莫大なモデル料を貰ったとき、夫と娘を見舞に行ってもいいか、と遠慮した風に伺った。モデル料と云う名目で渡された拾万円だが、久しぶりに娘に会って欲しいものの一つでも買ってやりたいと、弥生の母性愛は希んだ。

「泊りがけになるな」

「ええ、一泊せねばなりません。でも、一泊だけですぐ帰って参ります」

「一日でもお前がいなのは淋しい」

「その代り今夜は充分、鞭を戴きます」

「こいつ、用意のいい奴だ」

蟬風の膝前になめし皮の鞭を差しだして、壁を向いて背を丸めた弥生の姿を見つめて彼は苦笑を洩らした。可愛さに眼が細まる。

「早く撲ってエ」

硝子戸を透かして、淡い初冬の西陽が部屋へ流れ、鞭を振う蟬風の影を黒く壁に描いた。

翌朝、弥生は夫と子の許へ向った。

それっきり、帰つて来なかったのである。

蟬風の落胆振りは、見るも気の毒なくらいであった。弥生は確かにサナトリウムへ行き、そこで一泊し、予定通りの列車で帰途に着いたことは分ったが、それから先の行方が知れない。一体何処へ行ったのか皆目、分らないまま早や一週間の日が過ぎ去っていた。

蟬風はまるで大病人のように露わな憔悴を顔に見せていた。

「なんとか探しだしてくれ」

こういうことは、建築士のK以外に頼む者はいない。「K君、頼む……」と手を執らんばかりにして云う。無論Kは助力を惜しまないものだが、何の手掛りもない女を一体どうやって探したらいいのか、方法がつかない。あのN街の「珠樹」は、弥生が身を退くと一緒に閉店してしまつたし、社長の浦上珠樹は現在、新ホテル建設のため横浜にずっと滞留していると云うし、ここにも何の手掛りも無さそうだった。

「あの女はいずれ貴男の許へ帰つて来ますよ。待つんです」
しまいには、そんな気休めごとを云うよりしかなかった。

女体 『切腹風景十二態』 (9×13センチ) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

輝美切腹

切腹のプレイ

大手札判(9×13寸) 印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
二枚一組 二五〇円
略号(こせ)

大手札判(9×13寸) 印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(れい)

女性自刃三態

豊麗切腹三態

大手札判(9×13寸) 印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(じじん)

大手札判(9×13寸) 印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(ほう)

「弥生——！」

深夜、暗い庭へ向つて絶叫し、美女の幻を夜空に描いて、蟬風は慟哭した。

弥生は何処に居るか？

「珠樹」の二階の室に弥生は居る。終日、鎖で繋がれて犬のように其処で飼われている。「珠樹」は鏝戸をおろして閉業している。だがその店舗も二階の室も浦上珠樹の所有物である。彼女は、ホテル建築中の横浜から、三日毎にこっそり飛行機で帰つて来て、この二階の室で弥生を責める。室の窓は朱いカーテンが垂れ、壁は赤ペンキで塗られ、床は朱い絨氈が敷かれている。全室すべて朱色に覆わ

れた中で、頸に鎖を繋がれている弥生の姿は、真白な犬を置いてい
るようだ。炎えるような朱色一色の中に鮮やかに浮立つ。
「よくも私を裏切って、あんな男の責めを受けたわねえ。しかも、
とう／＼住みこんだりしてさあ、血が出るまでぶってやるっ！」
「ぶって、ぶって。お姉さま、思いきり鞭でぶって。弥生は悪うご
ざいました。でも、お姉様の鞭が待遠しくて、ついお留守中にあの

男の鞭を……ム——」
「ふふ、こたえたかい。もっとぶってやるわよ。その憎い云訳が云
えないように」
「ど……どうぞ……たんと責めて」
弥生の言葉は嘘ではなかった。折柄、N街は夕陽に映え、朱い室
を炎の色にした。

〔新版〕女体緊縛フोटオンプレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 種)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R1	柔肌に強烈な荒縄 (須川令子)
R2	海浜に於ける緊縛 (萩千恵子)
R3	床間の飾り物 (佐賀美智子)
R4	高小手猿ぐつわ (花坂道子)
R5	海老責し (萩千恵子)
R6	後手猿ぐつわ (須川令子)
R7	後手足し (村田那美子)
R8	鏡に映つた後手 (伊吹真佐子)
R9	股間し (須川令子)

R10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R12	女学生制服しはり (須川令子)
R13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R14	開股しはり (川辺砂登子)
R15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R16	トイレでの縛り (須川令子)
R17	立木野外しはり (村田那美子)
R18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R19	足場椅子ゼメ (伊吹真佐子)
R20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
R21	帆立しはり (萩千恵子)
R22	強烈な椅子ゼメ (伊吹真佐子)
R23	椅子責め (佐賀美智子)
R24	逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子)
R25	後手吊りゼメ (伊吹真佐子)
R26	股間しはり後手 (中塚文子)
R27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R28	高小手しはり (加賀利江子)
R29	変型足しはり (萩千恵子)
R30	松樹後手しはり (村田那美子)
R31	くさりゼメ (伊吹真佐子)
R32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R33	股間タテしはり (中富綾子)
R34	首繩股間しはり (坂口利子)
R35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R36	和服の後手しはり (藤田節子)
R37	仰向全裸悦虐責 (川端多奈子)
R38	後手首繩シメ (加賀利江子)
R39	乳房下しはり (村田那美子)
R40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R41	お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)
R42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R44	コルセット縛り (中塚文子)
R45	股間しはり (萩千恵子)
R46	手と足と緊縛 (加賀利江子)
R47	後手しはり (萩千恵子)
R48	御開帳 (萩千恵子)
R49	くさりゼメ (川端多奈子)
R50	折檻の魅力 (須川令子)
R51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R53	開股椅子ゼメ正面 (花坂道子)
R54	振袖の緊縛 (村井知可子)
R55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R56	ヌードしはり (田中芳代)
R57	本繩しはり (萩千恵子)
R58	股間しはり (村田那美子)
R59	落花狼藉の緊縛 (川辺砂登子)
R60	樹間のハリツケ (益田房子)
R61	帆立舟のゼメ (益田房子)

R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R73	変型全裸股間縛 (花坂道子)
R74	ヌード縛り (村田那美子)
R75	全裸横臥緊縛 (萩千恵子)
R76	ビクニツク (須川令子)
R77	ハイヒール (村田那美子)
R78	湖畔の宿にて (萩千恵子)
R79	尻立逆しはり (須川令子)
R80	下着の色模様 (大塚啓子)
R81	目隠し開股縛り (田中芳代)
R82	後手高小手 (愛川悦子)
R83	乳房しはり (花坂道子)
R84	開股ベッド縛り (愛川悦子)
R85	全裸床柱縛り (萩千恵子)
R86	亀ノ甲縛り (愛川悦子)
R87	ヌード股間縛り (大塚啓子)
R88	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
R89	ガソジガラメ (愛川悦子)
R90	臀部丸出し猿轡 (中塚文子)
R91	破れたシユミーズ (伊吹真佐子)
R92	女学生のしはり (萩千恵子)
R93	仰向開股しはり (須川令子)
R94	乳房くさりゼメ (川辺砂登子)
R95	野外バンド責め (村田那美子)
R96	トイレ正面排せ縛 (中塚文子)
R97	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R98	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)
R99	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)

連載第三次元小説

影の国

雪 俊 遙

第四章 水責めの石

愛子は、それから何日も学校を休んだ。

身体は兎も角として、顔の腫れが仲々引かなかったからだ。

午後、学校から帰って来た芳江がノートを持って来て、復習がてらその日の勉強を教えてくれた。芳江は才氣走った所はないが、つましやかで思慮深く、よく気のつく娘だった。真面目なので学校では、ずっと首席で通っていた。

抜けるように色が白くて可愛らしく、しかも凛とした気品のある芳江の美しい姿を見てみると、新町の奴隷市場で、煌々と輝やく照明燈に照らされながら、せり売りされていた田鶴子のことを思出した。似ていると思う。芳江の方が一周り小柄だが、気品という点では、ずっと上だった。

「愛子ちゃん。何を考えていらっしゃるの？」

ハッとして我に返ると、芳江の丸々とした澄んだ目が、笑いを含んで覗き込んでいる。

愛子は赧くなった。勉強の遅れるのを心配して来てくれた芳江の前で、彼女は、いつのまにか田鶴子の代りに芳江を、せり売り台の上に立たせて空想していたのだ。

「又、妹さん達のことを心配していたんでしょ？」

何という善意の持主だろう。

「本当に、あの日は、新聞の広告で、あなた達が売りに出されるのを知ってね。私、生れて始めて奴隷を、アラ、御免なさいね。――」

つまり、欲しいってお願いしたのよ。三人で百万円あれば充分だろうって、お兄様が行って下ったんですけど、愛子ちゃんを七十万円でやっと引取ったら、次の珠ちゃんも又、四十万までせられちゃったでしょう。美喜ちゃんもどこかの置屋の人が、仕込めばいい半玉さんに出来るって、三十五万も値をつけたって言うんですもの。どうしても、愛子ちゃん一人しか、引取ることが出来なかったのよ」「いいんです。仕方のないことですもの。妹達も自分に、いい値をつけられて、奴隷にされても誇りを持って生きているでしょうから」

「いつも私、お父様に妹さん達も早く引取って下さいと、お願いしているんですけど、買手が親類だと聞いて、法外な値を吹掛けて仕様がなくて。うちだって、そんなに沢山お金があるわけでもない、父や兄の社交費なんかも大変でしょう。殊に最近、この辺の政治状況がとても不安なので、父なんかも責任上、労力もお金も注ぎ込んでいるのよ。幾ら世間知らずでも、私だけ我儘を通すわけにいかないんです。本当に愛子ちゃんには悪いと思っているのよ。お客さんにしておくことも出来なくて……」

「いいえ、そんなこと。今だって感謝してます」

「私はね、このまま愛子ちゃんを自由に上げて下さいって、何回も父にお願いしたのよ。でも父が、家には格式というものがあるのだから、大きくなった娘にお附きの奴隷もいない様じゃあ、貧しい家庭の人か、女権論者みたいで工合が悪いっていうの。それに七十万円のお金を払った人を自由に、家族の一員に加えていられる程、うちは財閥じゃない、なんて言うのよ。私が我儘で、こんな時でもなければ奴隷を買って、なんてお願いしないでしよう。父

にしてみれば、やっとの思いで附けた奴隷を自由にさせるなんて、とんでもないっていう気持ちなのね。あなたが若し自由になっても、私の家に居られなければ結局、職業婦人になるより仕方ないでしょう。職業婦人だって、いろいろ会社でお仕置を受けるそうですもの。私の傍にいて、一緒に学校へ行ってる方がいいと思ったのよ。でも、愛子ちゃんに別の考えがあるのでしたら、仰有って下さいね。私、出来るだけ力になりますから。私だけ楽してるのが心苦しいの」

「有難うございます。芳江お嬢様」

「又、お嬢様だなんて。誰もいない時は、芳江って呼んで下さいって、お願いしてるじゃありませんか。愛子ちゃんの方が私より三日だけお姉様なんですよ」

翌日、愛子は頬の腫れがまだ少し残っていたが、学校へ行った。女学園は、郊外の大きな丘の上に建っていて、裏手は墓地になっている。

昼休みに、愛子が広い墓地を一人で散歩していると、同級生が四、五人、下級生を虐めていた。

中学部三年生の山木美登里という、美人で評判の下級生が、ピカ／＼磨き上げた石の台の上に寝かされて、手足に制服の細いベルトを巻きつけられ、他の下級生四人は、ベルトの他端に後手に括られて、車裂きのように大の字に広げた山木美登里の四肢を引張らされている。

四人の上級生が、自分のベルトで馬代りの下級生を、ひだの細かいセーラー服の上から、ピタ／＼と叩いている。

美登里は、台の端から首を逆さに垂れ、顔を真赤にして、美しい



顔には不似合な青い静脈を、みみず程の太さに浮き立たせて悶えている。名前通りの緑の黒髪は、その辺に落ちてでもいたのかと思う様な汚い細紐で括られて、台の脚に繋がれていた。

どこの学校でも、下級生を私刑した上級生は、学校の規則で仕置されることになっているが、報復を恐れて下級生が届出ないので、不良学生の間では、半ば公然化しているのだ。

「何をするんです、小松さん」

愛子は義憤を覚えて、ハンカチを口中に押し込まれた上から自分の細いベルトで、ぐるぐる巻きに口を縛られた美登里の苦痛に歪んだ美しい顔を、写真に納めている、クラスの不良少女の総大将、小松文子の方に、にじり寄った。文子は

「この子はね、三条將軍の夫人がどんな風に処刑されたか知らないと言うのよ。で、皆で教えてやっている最中なの。つまり、歴史の課外授業ね」と、いった。

三条將軍は五十年前も前に、この国が血で血を洗うような内乱をやった時、革新派の陣営から出て、内乱を鎮定した功労者だった。

しかし、それから間もなく、保守派の残党と陰謀を企てた咎で、同じ革新派の手で銃殺されて、賢夫人の誉れの高かったその夫人は王宮前広場で、手足を四頭の馬に縛りつけられて、四つ裂きの刑に処せられた。

暫く地下運動のグループと接触していた愛子は、そういうこの国の歴史の真相なども大分、三田央子達から聞いていた。この国の先祖達が何百年の昔、ふとしたことから、次元の遠う所にあるこの国を発見して、N国から移住して来て以来、次元の違いを逆に辿ってN

国へ戻るという知恵が誰からも喪われてしまった。それを側近の科学者に秘かに研究させ、超次元ロケット、超次元テレビなどで、次元外世界の文明に窓を開いたのが、三条將軍だったのである。

当時の革新派の政綱は、拷問法、奴隸法、特別処刑法等から男を適用除外するというものだった。將軍は、これに飽きたらず、殊に英邁で慈悲心の強かった夫人は、人権拡張運動の古典的名著を何冊も秘かに出版して、上流家庭の人達に配っていた。こんなことから夫妻は革新党に取っても異端分子だったのである。

夫妻は名門の出であると共に、人格者として国民の間に大きな人氣があったので、二人を殺すには、その思想や業績を目茶苦茶に曲げる必要があった。そこで革新党は、労働運動その他、一切の社会運動関係者に、拷問、奴隸、処刑、凌虐、四法を適用させようとした反動の親玉が三条將軍であるように公表したのであった。

保守色の強いこの地の墓地に、その三条將軍の立派な墓があるのは、当然であると共に、非常に皮肉なことだった。

「そんな授業なんてないわ。許してあげなさいよ」

文子は唇を曲げて、さげすむ様な目で愛子を見た。

「何さ、あんたなんか奴隸の分際で、よくも図々しく自由民の娘にそんな口がきけるわね」

愛子は、アッと思った。

愛子が、せり売りされたのは平日の午前中だったから、学生は誰も市場に来ていなかった筈だと思っていたが、こんな不良少女なら授業をサポートでも見に来ていたかもしれない。芳江は、新聞の広告を見て知ったとも言っていたし、三葉の写真を入れて、その日、売買される奴隸の特徴や経歴を印刷した商品カタログを、級友の父

兄が家に持って帰らなかったとも限らない。愛子は、ぐわあんと横面を殴られた様な気持だった。顔から血の気が引いて行くのが解った。

「皆、今度はこの子を責めてやろうよ。この子は本当は奴隸なんだから、あんな制服なんか脱がせちゃっていいんだよ」

愛子は何だか無性に腹が立って仕方がなかった。

「私が代りに課外授業の実験台になってあげるから、その人達はどう許して上げて」

愛子は、そういつて台の上に横になった。

「面白いわ。私の言う通りになさいよ」

文子は細いベルトで、愛子の手首と足首をきびしく縛った。

「じゃあ、今度は私達が引張ってみせるから、あんた達、よく見てください」

四人の同級生がベルトの端を持って、

「ソレ、一、二、三。ヨイショ、ヨイショ」

と懸声をかけて引張る。

愛子は歯を喰いしばって、咽喉からこみ上げて来る呻き声を辛うじて抑えた。声一つ立ててやるものか。奴隸の境遇にいと、そんな片意地で苛責に耐えていられるものなのだ。

固く合わせた目から透明な涙が湧いて出る。手足は今にも抜けそうに痛い。

「もう勘忍してえ」

愛子は、とうとう悲鳴を上げた。せい／＼と喘ぎながら、涙に光る目で憐みを乞うように、文子の悪戯っ子らしい、陽やけした小さな顔を下から見上げる。

文子は勝ち誇って、愛子の胸の上に馬乗りになった。

「どうだ、愛子。今日から私の奴隷になるか」

「なります、なります」

私は、どうしてこう弱虫なのかしら。いくら意気込んでみても、それは始めの内だけで、一寸痛い目に遇うと、すぐ相手の言いなりになってしまふんだから、本当に情ないわ……。

「本当になるわね。なるわね」

文子は、目をキラ／＼光らせて愛子を見ながら、念を押した。

文子の父は貧しいサラリーマンなので、奴隷を買う金がないのだ。

愛子は、今はもう見栄も恥もなく、

「痛アイ。痛、痛ッ。なりますったらア」

自分で意識しないのに、泣きながら甘えているのが不思議だった。

「ヨシ、もうあんた達はお帰り。今日のことは誰にも言ってはいけないよ」

文子達は下級生を釈放すると、愛子を引き立てて、土饅頭の裏へ廻らせた。

島崎隆子という娘が小さな木戸をあけると、愛子の鼻をキュツとつまんで、お墓の下の方へ引きずり込んだ。中は広々として、ヒヤリと空気が冷たい。隅の方に棚があって、骨壺が幾つか並んでいた。三条將軍の家族の骨であろう。愛子は気味悪さと寒さの為にガタガタ身体が震えた。

愛子は、その日から昼休みごとに墓地へ連れて行かれ、三条將軍

の墓の中で文子達にいじめられるようになった。

物理の実験に使う細い銅線で縛られて引きずり廻されたり、四つん這いの背の上に重い墓石を括りつけられて歩かされたりした。その時は、昼休みの終る直前まで、愛子はそのままそこへ転がされて文子達に、さんざん叩かれたり蹴られたりした。

こんな工合だから、愛子の肌には、鞭や縄目の跡が絶えたことがなかった。しかし幾らも経たない内に、芳江に発見された。

「愛子ちゃん、私の知らない時に誰かに虐められているんですよ。」

いつもの優しい芳江とは打って違って、酷しい目で見つめられると、愛子はとても隠しておけなかった。一番尊敬している美しい御主人様から優しく責められながら白状したいと、ちらっと思ったが威厳に満ちた芳江の態度には、その程度の我儘さえ通せない強いものが感じられた。愛子は素直に文子達のことを白状してしまった。

「駄目よ、愛子ちゃん。もっと自分の身体を大切にしなければ」

「済みません。お嬢様」

「明日から、学校に居る間中、私の傍から離れちゃ駄目よ。いいわね」

「ハイ」

これで文子の折檻から逃れられると思うと、愛子は、ほっとすると同時に、何だか惜しい様な気がした。

この地区の区議会議長として、区の保守派の大元締である島村民治の娘で、しかも成績は抜群、性質も温和で人望の高い芳江が、四六時中、愛子の傍に付きつきりでは、幾ら無鉄砲な文子も手が出せない様だ。うっかり近附くと芳江に酷しい目で睨まれるので、文子

は、愛子が密告したと思い込んだ様だった。

愛子は、縛られて折檻を待つ時の自分のいじらしくて耐らない様な被虐感を思出して、時々文子の苛責の鞭が懐しくさえ思えることがあった。

いつか、級の者の愛子を見る目が変わって来た。誰も彼もが、穢らわしいものでも見る様に、侮蔑をこめて愛子を見る様になって来た。

芳江と一緒に廊下を歩いていると、下級生までが、袖を曳いて笑あいながら、立止って二人を見送っている事さえある。もともと少しツンとした所のある芳江は、一層ツンと澄してしまつて、スタイルの良い長身でズン／＼傍目もふらずに歩いて行く。愛子が後から、扈從の様に伏目について行くと、芳江は長い腕で邪慥に、その肩を引き寄せて、

「もっと胸を張って並んで歩かなければ駄目よ。皆、貴女が私の奴隷だって噂しているんだから。いやね、貴女は私の従姉なのに。私は人を奴隷にして喜ぶ様な、そんな女ではないわ」

と、忿懣を愛子一人に、ぶつける様に言った。愛子は、いつも優しく淑かな芳江から邪慥にされるのは、胸がジーンとするほど嬉しかった。もっと邪慥に扱って欲しいと思った。私が芳江お嬢様を一番好きなのは、芳江お嬢様に、奴隷が欲しいという気が全然ないからなのだよ。人を奴隷にしよう、しようとしている人の奴隷にされるよりは、するまい、するまいとしている人の奴隷になることの方がずっと幸福な感じがするものだよ。なれなければ空想でもいい。芳江の意志には拘わりなく愛子の心は、もうすっかり奴隷の心に変質してしまっている様だった。こんなことは、芳江お嬢様には

一言も洩らさないようにしよう。もし解ったらきつと、一ぺんに嫌われてしまうわ。と思った。

或日、突然、警検署の護送車が学園の前に停った。婦人警吏がハイヒールのまま教室へ入って来て、おどろく皆の前で文子と隆子ともう一人の坂田活子という娘を縛って引立てて行つた。

三人は愛子に対する流言蜚語の罪に問われたのだという話だった。

この国の刑法女性編第二百三十三條は、こうなっているのだ。

虚偽ノ風説ヲ流布シ人ノ信用ヲ毀損シ、若クハ其ノ業務ヲ妨害シタル者ハ、水責メ台ニテ、川、又ハ池沼ノ水ニ浸ス。簡易裁判所ノ裁判官ハ、以上ノ罪人ニ就キ、一等乃至十等ノ罪ヲ定メ、刑ヲ左ノ如ク執行ス。

一等。水責メ椅子ニテ腹部マデ三時間、水中ニ浸ス。

二等。水責メ椅子ニテ水上ニ三時間、晒シタ後、首マデ一時間、水中ニ浸ス。コレヲ二回、繰返ス。

三等。水責メ椅子ニテ水上ニ三時間、晒シタ後、口マデ一時間、水中ニ浸ス。コレヲ三回、繰返ス。

四等。水責メ椅子ニテ水上ニ三時間、晒シタ後、鼻ノ下マデ一時間、水中ニ浸ス。コレヲ四回、繰返ス。

五等。水責メ椅子ニテ水上ニ三時間、晒シタ後、腹マデ一時間、水中ニ浸ス。ソノ間、十分オキニ二分ズツ目ノ下マデ水中ニ浸ス。

六等。前手ニ縛リテ、頭髮デ水責メ竿ノ先端ニ吊リ、胸マデ二時間、水中ニ浸ス。ソノ間、十分オキニ二分ズツ眉マデ水中ニ浸ス。

六等。前手ニ縛リテ、頭髮デ水責メ竿ノ先端ニ吊リ、胸マデ二時間、水中ニ浸ス。ソノ間、十分オキニ二分ズツ眉マデ水中ニ浸ス。

六等。前手ニ縛リテ、頭髮デ水責メ竿ノ先端ニ吊リ、胸マデ二時間、水中ニ浸ス。ソノ間、十分オキニ二分ズツ眉マデ水中ニ浸ス。

ニ浸ス。

七等。前項ト全ク同ジ姿ニテ額ノ下マデ三時間、水中ニ浸ス。ソ

ノ間、十分オキニ三分ズツ額ノ生際マデ水中ニ浸ス。

八等。後手ニ縛リテ、腕ト髪トデ水責メ

竿ノ先端ニ吊シ、足首、膝、胸、

首、ト各一時間ズツ水中ニ沈メユ

キ、最後ニ五分間、頭ガスツカリ

隠レルマデ水中ニ浸ス。

九等。手足ヲ大ノ字型ニ竹棒ニ縛リ、竹

ノ先端ト頭髮トヲ別々ニ縛ツテ先

ヲ一本にシ、水責メ竿ノ先端ニ吊

ル。五分間、頭髮ノ先マデ、スツ

カリ水中ニ沈メ、足先ガ水面ニ現

ワレルマデ吊上ゲテ五十分間、晒

シ、コレヲ半日（六時間）繰返ス

水呑ミ過ギテ悶絶セバ岸ニ降シテ

休息シ、約二時間ヲ経テ、再ビ刑

ヲ続行ス。

十等。足首ヲ重ネテ縛リ、水責メ竿ノ先

端ニ五分間、逆サニ吊ツテ晒ス。

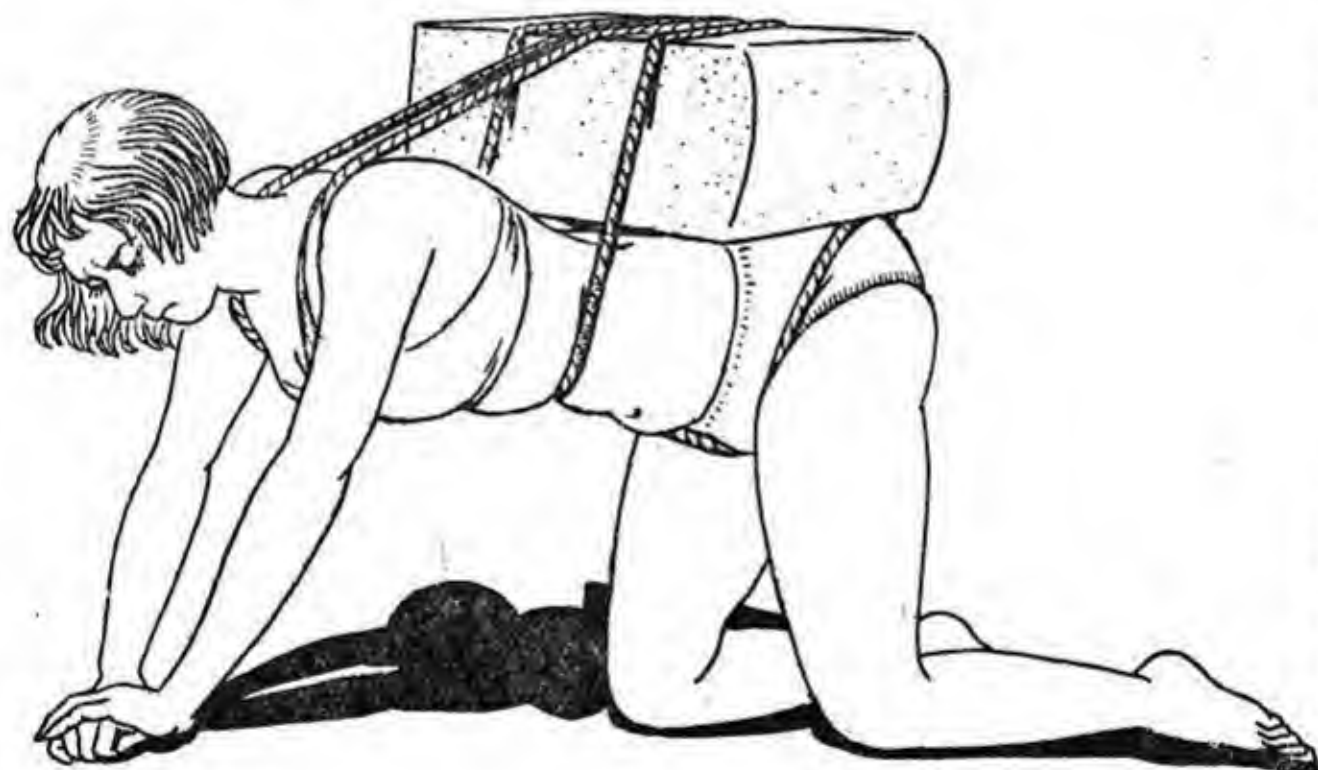
ソノママ五分間、膝マデ水中ニ浸

シタ後、吊上ゲテ更ニ五分間、水

上ニ晒ス。岸ニ降シテ二時間、休

息シ、再ビ逆吊リトス。コレヲ全

日（十二時間）繰返ス。



以上ノ刑ニ用フ錘ハ罪人ノ体重ノ一割ノモノトス。

この話が学校中に広まると、皆すっかり興奮の態で、三人が何等

刑に処せられるかが話題の中心になっ

た。議論する者、賭けをする者。その賭

けも金でなく、一等の差につき十回の割

りで鞭打を賭けている者さえ居る。無論

そんなのは余り優秀でない学生で、芳江

の様な優等生になると、超然として本を

読んでいた。愛子も仕方なく傍で別の本

を読んでいたが、内心、気懸りで仕様が

ない。

芳江は

「お父様の所にいろ／＼オベツカ使いに

来る人がいるから、誰か忠義立てして密

告したのかもしれないわ」

と言った。

文子達は即決裁判で、次の日曜日に刑

を執行されることになった。

その前日。署長が島村家へ自身で挨拶

に來た。刑場の貴賓席の招待券を待って

來たのである。芳江一人がどうしても行

かないと駄々をこねたので、代りに愛子

が家族の人達のお伴をして行くことにな

った。

朝早くから花火がポン／＼上げられて、町中がお祭のように浮かれていた。

新町川の、一番水の深んだ岸辺を刑場にして、二台の水責め椅子と一本の水責め竿が立てられた。椅子は車のついた台に柱を立て、上方に横木をつけて、その先にワイヤーで吊してある。頑丈そうな四角い木の椅子だ。ワイヤーの端は手廻しの車に巻き付けて、自由に伸縮出来る様になっている。竿は根本の方を台に固定してあって、接着部は滑車のようになっているので、中程を縛ったワイヤーを緩めれば直角から竿頭が水面に届く角度まで、いろいろと角度を調節出来る様になっていた。

八時カツキリに、暗緑色のペイントを塗った護送車が刑場に着いた。隆子を生頭に、文子、活子の順で、後手に縛られて高いタラップを降りて来ると、観衆はどよめいた。

三人とも大分、痛めつけられたと見えて、セーラー服はあちこち破れて泥が付き、顔は見違える様にやつれて黒ずんでいた。殊に色白の美しい活子は、目の廻りに蒼黒い隈が出来、後れ毛をほつらせて、一際、凄艶だった。おとなしくて真面目な彼女が、どうして文子などと一緒に括られたのか、愛子には不思議でならない。

三人は、うなだれたまま、棧敷席の前を曳廻され、愛子の目の、五米と離れていない河原に引据えられた。その前の席にいた簡裁の判事が、マイクを通して、大声で判決理由書を朗読した。

「……然るに被告等は共謀して、全校生徒の敬愛する芳江嬢を失脚せしめんとて、同嬢の従姉、川島愛子嬢を、恰も同嬢の奴隷であるかの如き流言を全校生徒に流したり……」

こんな判決文を聞かされるのは、愛子にしても苦痛だった。とに

かく三人は、すぐ目の前に、こちら向きに座らせられているのだ。

しかも、うなだれたり出来ない様に、後に二人宛、婦人警吏が立っていて、六尺棒を肩から顎の下に差込んで、顎を持上げている。棧敷席の真中に、貴賓席だけ天幕を張って建ててある。判事はその又真中にいるので、愛子から五、六人しか離れていなかった。三人は時々、恨めしげに愛子を見た。その度に愛子は身の縮む思いがする。

「主犯、坂田活子は九等刑」

婦人警吏が活子の髪を掴んで顔を地面に、こすりつけさせ、

「有難くお受け致します。と言うのよ」

と知っている。活子が背中を波打たせ、泣きながらそう言うまで宣告は中止していた。

「従犯、小松文子は四等刑」

文子は要領よく、さっさと、

「有難くお受け致します」

と棒暗記の様に返事してしまったので、活子のように痛い目を見ずに済んだ。

「従犯、島崎隆子は三等刑」

「有難くお受け致します」

お辞儀が終ると、すぐ隆子から引起された。後手の縄を解かれて制服を脱がされた。

顔ほど、やつれていない、白い丸々と肥えた肩の辺りに、痛々しい拷問の跡が、はっきりと残っていた。

二の腕についている、赤いのや、紫のや、朽葉色の傷跡は一番、古い責めの跡らしい。

群強く抓られた跡を示す地図の様な青痣。彩雲の様な五色の責傷の色どり。

婦人警官が両手を掴んで、愛子のすぐ前まで連れて来た。というのは、そこに体重秤が置いてあるからだ。責傷が一層生々しく見えた。白く見えた肌に、かすかに留置場の垢が滲んでいることも解った。虐待ぶりを、生々しく感じさせるのだ。

向う向きになった時、一際、鮮やかな縞馬模様の筈の痕が、くつきりと浮いているのが見えた。

隆子が一番、上流の水責め椅子の所へ連れて行かれた。両手両足が椅子の腕木と前脚にピタッと添えられた。手首と肘。足首と膝下が、細引で三巻宛縛られた。豊かな身体に縄が喰入って、見えない位だ。

次は文子。この少女は卑屈なほどオドオドしてしまっていた。愛子は酷く失望した。こんな人だったのかしら、と思う。

文子は、一しきり椅子の上で泣いていた。二人の椅子には鍾がつけられて、高々と川の上に吊上げられた。

最後が活子の番だ。彼女は、他の二人と較べ物にならない程、責傷のあとが、むごたらしかった。活子を主犯に追いやった手段は、これで解った。

責賓席に向いて立たされると、もうそれだけで、典雅に整った活子の顔は涙で濡れていた。刑吏が二人後に廻って、拡げた手足の裏側に青竹を当てた。別の刑吏が細引で手首を括りつけた。

足の青竹の真中に鍾が吊され、手の青竹の両端に吊縄が掛けられた。メイン・ロープで頭髪が棕櫚箒の様に束ねられ、水責め竿の先端に吊るされた。そして青竹の吊縄が、そこに結ばれた。

ワイヤが巻かれ、手足を磔にされた活子は、髪の毛で長い竿が垂直になるほど高々と吊り上げられた。責賓席の人々は舟に乗移って川の中へ移動した。横から見た時、小さな顔の割にツンと高い鼻の

真直な線が、ハツとするほど美しかった。

白い典雅な顔を正面に向けた活子の吊り姿の前に舟が来ると、愛子は何とも言えず辛かった。芳江と一諸に家に残っていれば良かったと思う。活子は声を忍ばせて鳴咽していた。目が細く吊上って、涙の玉ばかり大きく光って溢れて来る。手首だけを縛られているので、瘦せた肩が下って細い腕が、上向きの弓と言った形だ。脇腹から腋窩にかけて、焼饅を当てられたらしい三角の火傷がひきつれた様についていた。

「降せ」

隊長格の刑吏が下知すると、カラ／＼と滑車が廻った。活子の体が少しずつ降りて来た。

水面で遊んでいた家鴨が、けたたましく鳴いて四方へ逃げ散った。ポチャン。小さな音を立てて、先ず鍾が沈んで行った。

愛子は、思わず目を大きく見開いた。群衆はシーンと静まり返って、瞬き一つしなかった。

何干という眸が、灼附く様な熱心さで注視する中で、活子の足が先ず水の中に漬けられた。そして膝、腰、腹、胸と、次第に沈んでいった。

今は首から上だけが水面に出ていた。何とかして水責めを逃れようとするかのように、活子は何回も顎を突出して顔を水面に仰向けた。必死の思いでのけぞる顔が、急激に沈んで行った。あとには水面が渦巻き、渦の中央にゴボゴボと小さな泡が浮いて来る。渦の下には苦しげに歪んだ白い顔が見えていた。黒い鼻の穴から泡が噴出て来る。

水責め竿は、釣竿の様に水面に這った。一番長い頭髮の先まで今は水中にあるのだ。澄んだ川水の中底に、苦しげに体をくねらせる活子の姿が妙に縮んで見えた。

(続く)

映画観賞

新東宝作品「九十九本目の生娘」と

グラマー女優「三原葉子」について

近藤 一

評判につられ、新東宝作品の「九十九本目の生娘」を観に出かけた。三本立、五十円の料金のせいか、最終回まで超満員であったのに驚ろきながら、場内を秘かに観察すると、老若を問わぬ男性と、若い女性がチラホラ、馬鹿々々しい台詞の箇所ではテレ隠しの哄笑が聞こえたものの、クライマックスでは結構

息を殺し瞳を輝やかせている？ 処をみると、某週刊誌の謂うおHな紳士や淑女が案外多いのではなからうかと感じた次第である。

ストーリー自体は決して荒唐無稽なものではないと思うし、却って現代劇と時代劇とをつきませたような設定は確かによい思いつきであり、安心できるムードもある。その背景

が岩手県の深山で、日本のチベット”と呼びながら標準語を話さねばならぬ映画である処に、かなりの無理が出ることはやむを得ない缺陷であるというべきだろう。

火造りの祭とやらが十年に一度行われ、その夜は白山神社の宮司も山を降り、村人は雨戸を閉めて山へ登らず、舞草一族に山を明渡す。社前で舞草鍛冶に伝承の秘法による製刀がなされ、一本ずつ奉納して九十九本に至れば一族の不朽の繁栄があるという。その秘法というのが、打ち上った焼刃を娘の生血に浸して仕上げるので、その娘は同族ではいけないため、麓から拐かして来なければならぬ。

ハイキングに来た女性二人が捉えられ捧げられるが娘でなかったため製刀が失敗し、二人は斃り殺しにされる。

代りの娘を探しに一族の老婆が山を降り警察に捕えられると一族は警察を襲い、次に署長の娘を捕えて山へ逃げ込み、もう一度、刀を打ち直す処で遂に警察の手入れとなるのだが、この映画の見せ場は、責め抜かれた挙句惨殺される三原葉子のヴォリュームが第一であろう。

この部落が山村からなお遠く離れた山中で極めて原始的な生き方をしているだけに、ス

リップ一枚に剥かれた洋髪の若い女が虐げられるシーンには一種の奇妙な共感が湧く。これは社会的復讐の共感なのだろう。恰も白人の美女が人喰人種に捕えられ、彼らの神に捧げられるシチュエーションに似ていると思わ

れる。我々に文化人たるの自負がある反面では、未開の人達への同情があり、周囲の文化的な形骸に反撥を感じているためかも知れない。自分でフン縛ることもできないだけに、原始人の手を借りて残虐な所為を、望んでいる

たスタイルだけに、肥り気味の三原葉子と並んでは影が薄れるのもやむを得まい。二人共並んで眼を閉じ、身動きもしないが、気を喪っていないことは顔をおこしていることで分る。白のスリップが軀にへばりついてピタ



るのかも知れない。
戦前の小学校に学んだ私達の胸の中では、神とか儚式とかいうものにもっと強い意義を認めたいという願望があるらしい。神のために娘の生命が捧げられることも、その娘が自分に関りが無い限り、傍観者としての位置に立つことができる。たとえスクリーンの中の物語としても、滝に打たせて浄め抜いた娘を社前に吊り上げ、乱舞しつつ生血を採るシーンを、何の抵抗も感じず肯定して観ていられるのは、神という意識があるためだろうか。

三原葉子は、惨殺される女の役である。台詞も発声も殆んどない。演技？は終始、無言の被縛のヴォリュームがするのだ。まず立姿で滝に立てた柱に括りつけられる。もう一人の女はつけたしらしく、均斉のとれ

りと体の線を表わしているし、頭からびしょ濡れで、額に垂れた髪からもポタ／＼水滴が落ちる。じっとしていることで辛うじて休えているという表情がリアルというべきか。バケツでもかけているらしく、水は都合よく三原の頭上にだけ多量におち、もう一人の女にはカメラがポイントを移した時だけ申し訳程度に水が注ぐ。

次は愈々火造りの儀式である。神前に部落の長が額づき、部落民の面前で白髪の鬼面をつけた祭衣の人が太鼓につれて舞い狂う。何の木か、いくかかえもある古い大樹の枝に「いけにえ」が二つ、太い縄で吊り上げられている。細面の女優は吊りの全身もすりすりとしており、伸びやかな感じ。三原の方は全体に豊かな丸みがあって、松井籟子さんがいわれた「太鼓のバチで叩くのに最適な女」が感じられる。

アップが折り込まれるから、やはり女優が吊られるポーズを取ったことは確かだろうしトリックがあったとすれば、スタンド・インを使ったか人形を使ったのであろうが、三原が吊られることを承知したのなら、他の女優には最早、拒否の自由は許される筈もない。

実際には撮影の都合で、ある時は吊られ

放していたかも知れない。何せスリッパ一枚だから、縄の掛け方も割によくわかる。二人とも腹部を締め上げた縄で吊られていて、後手は別にしっかりと縛り上げてある。手や脚が露わな半裸なのだから脇の下で吊ることはできないし、間違ひもなく腹で吊られているのだ。三原のアップでは腹部に黒光りする中縄がキッチリ五巻きしてあったから、或いは安全のため、縄の下には巾広のベルトでも締めていたかも知れないが、とにかく腹部で吊られていたことは間違ひない。吊りの迫真力は相当なものであった。

もう一人の女優は、彼女より肉付きが乏しいように見える。それだけに吊られた軀が殆んど二つ折になって、顔が膝より下にあり、髪の毛も長く垂れ下って揺れていた。

祈禱を終った部落の長が抜刀して犠牲者に近づくと交互にアップが繰り返される。その時のアップでは彼女達の上体が起きていたから、足の下に台でもなければ、さぞ辛い苦業であつたろう。三原のアップの時に、もう一人の女優の脚のあたりまで写っているのが、ゆると揺れ動いていたのは哀れであつた。

長の刃が彼女達の胸の辺りを斬り裂いた想定で、吊られた女体の脚を伝い血潮が足先か

ら滴り落ちる。滝に打たれてびしょ濡れの女体を、水滴と共に彩る血潮は非常なショックを呼ぶ。血は足許の桶に溜められる。

新刀を鍛え上げ、生血の筒に浸けて出来栄を調べる間も、彼女達は古木の枝に架けられていた。新刀は彼女達が娘でなかったため失敗し、怒った長は憎しみを籠めて、すらりとした女の体を力任せに殴りつける。出来上ったばかりの新刀で発止々々と叩る斬るの隣りに吊られている三原のスリッパが白いのに比べ、もう一人の女優のスリッパは酷く彩られ、幾筋もの血の流れができていたが、初めて主たる扱いを受けると忽ちカットで、次には、死骸になって山頂に捨てられて発見され、墓をかけられる。

ポスターには水車に縛りつけられて逆さまになった三原葉子が色彩で画かれていたし、映画誌の紹介欄も、そして某週刊誌にも彼女が足首を縛られ水流の中で逆吊りになっている写真まで添えて、そのようなシーンがあるように伝えていたが、スクリーンには現われなかった。ストーリーを顧れば、水車を使って彼女を苦悶させるシーンの必然性は無い。彼女は神に捧げられる犠牲であって、そのため滝という神秘的な力で浄められねばならぬ

だから、もしありとすれば滝に逆吊りされるシーンの筈だが、それでは祭りまでに死んでしまうし、現実の女優を使って撮り得るポーズではない。ただ彼女達は祭りの四日程前に捕えられたことになっているので、その間、何処にいたか。滝に打たれ放しではあるまいし、着衣のまゝ掴まったものがスリッパ一枚に剥かれたのはいつだったのか。三原は膝までもあるタイトのスリッパだが、もう一人はスラックスを穿いていた関係で、ごく短かいスリッパである。スラックスの女の麦藁帽子を部落の子供が遊び道具にしているのも、暗示を秘めた佳い演出だったろう。

二個の女体が古い大樹に吊られているシーンの遠景では、果してリアルであったか分らない。だが新東宝のことであり、この作品では、責められるだけが役目のような出演者の彼女達なのだから、スピード演出を条件に実写だったかも知れない。そう想って観ると、すらりとした女の方は、深く折れ曲った体が不安定なのか終始、揺れ続けていたように見えるのだ。

この映画は、刺戟を売り物の新東宝らしく最初から風変りなシーンである。二人の若者が棒を構えて、息をはずませている。それが

決斗でなく何かを挾撃するものであり、やがて五月藤江の扮した部落民の老婆が抑えられ樹の蔓で縛り上げられて麓の駐在所まで曳かれて行く。後手は細いもので堅く縛ってある。老婆がイキがいくだけに幾らか救われる。

火造り祭に炭焼きが二人、酔った勢いで犠牲の惨殺されるのを覗き、発見されて刺し殺される。翌朝、死体が発見された時は村人への見せしめとして一人が樹上に直立して括りつけられ、一人は樹下に、ぶらりと逆吊りにされる。

部落と村の和解を希う宮司がいて、その協力により神社に隠された九十八本の刀を警察が抑えると、部落民は沼田耀一扮する宮司を襲い、縄で縛り上げた上、首に樹のつるを絡ませて曳いて行く。そして血祭の犠牲として十数本の刃で斬り虐んでしまう。

宮司を恋慕する娘が、老婆の拾い子として九十九本の刀のため捧げられることになり岩牢に入れられる。娘の許婚者が牢を破って逃げる途中、男は弓に射られ追手に惨殺される。

娘の代りに老婆が警察署長の娘を捕えて来ると、あざみという娘の成敗を聞かされ、長

に抗って殺される。

警官隊の山狩りに、製刀を急がねばならぬので部落民は仕度を急ぎ、署長の娘は滝に曝される。余り急いだためか、この娘は和服のまゝ帯の上を二巻き位で、後手に柱へ括られる。シーンは柱から解かれる所からで、喚きながら曳かれて来ると、大樹の下に縄が用意されていて、後手に縛り上げられ枝にかけられる。「救けて！許して！」が繰返され、部落民が容赦なく引く縄の端で、娘の体は地を離れる。両足が空しく地を求め、体がクルリ／＼と廻るので後手の緊縛もよく見える。それも祈りが済む頃には全身を二つ折にして動かない。正に生血を取られる寸前、恋人である巡査部長？が駆けつける。この男は娘に駆け寄ると吊縄をそのまゝにしておいて、いきなり吊られている娘を抱き寄せるのだから情無い。更に縄を解かれた娘がふらつきもしないで立って、しっかりした口調で物をいうのだから恐れ入ってしまう。

部落の長は、一族の宿願が破れたことを識り手早く割腹した上、喉を突くと、その切先が首筋へ貫けて、ぶっ倒れる。

この他、警察署を襲われて殺される巡査数名、その直後襲われた署長の妻、部落近くの

山で矢を射込まれたり大石で打ちのめされる
搜索隊員、銃弾で撃たれる部落民等々、人命
など物ともせぬ扱いには恐れ入る。

私の大きな不満は二点ある。一つは、あざ
みの成敗だ。彼女は宮司に想いを寄せた裏切
者であり、部落民の血を享けぬ敵である。逃

げ出したのは期限の直前であるが、その頃、
何故、滝で浄めておかなかったのだろうか。
老婆の破約を見究めた上では間に合う筈が無
い。どうせ許婚者に助け出させるの

なら、滝の中からの方が自然なサス
ペンスだし、悲壮感も強くなる。

次に署長の娘だ。短時間で浄める
のだから裸に近いほど自然であり、
着衣のまゝでは第一、血の流れが遅
くなるし、衣服に吸われて少くなる。
洋髪の署長の娘だから和服の下にス
リップでもおかしくはないし、長襦
袢というガラではないから、やはり
シュミーズ姿にした方が娘らしくて
良かったと思われる。

結局、三原葉子の虐殺シーンが圧
巻であったというべきだろう。唯、
彼女が長の刃に刺された時の苦悶の
表情が欲しかった。二人の女が一言
も叫ばず呻きもしなかったのは気絶
を意味するのだろうか。心臓を貫か
れて、その瞬間にウーン！と大きく
のけ反り、次につながり首を垂れれ
ば宙吊りの体はゆるりと揺れて、忘
れ得ぬ感慨を与えてくれたらうにと



彼女のためにも惜しまれる。更に製刀に失敗した長が憎悪を籠めて叩き斬るのが彼女であつたと思う。彼女の全体から醸すムードが正しくその対象として最適となっているのだから。

だが、しかし私としては「九十九本の生娘」の彼女に満足し、そしてその演出者の労を多とし、この作品をプロデュースされた大蔵社長に敬意を表するものである。

× × × × ×

私は三原葉子という女優が好きである。私が観た作品が少いせいか、私は彼女の主演作品を識らない。彼女に好感を抱いたのは、昨年の春「スター毒殺事件」を観てからであつた。この作品の主演女優は万里陽子であつた。三原葉子は、みじめな役まわりであつた。

どだい彼女が売り出されたのは、グラマールームに乗り遅れまいとする会社の商魂かららしく、彼女は碌な台詞も貰えずに、何かあるとすぐ肉体美の露出を命じられていた。実際、見事過ぎる体だから、着衣の彼女は数段割引かれてしまう。万里陽子、今の万里昌代もグラマールームという売り込みだが、その姿態が清楚に見えるためには三原葉子しかいなかったのかも知れない。

肉体女優の名に随って彼女は、殆んど出演する毎に美体を露わにした。だが、それが自然なのは女給かダンサーのような職業の女でしかない。暴力の犠牲となればおかしうはない。尋常ではヴォリュームが豊か過ぎて滑稽でもある。刑罰ではクリシタンでもない限り酷刑にはできず、彼女のフェイスでは殉教者やスパイなど向きそうもない。といって棄てられる女がびつたりりの善良さでは、他人を欺く女賊の悪賢さは持合わせていない。

結局、彼女の持つムードは欺かれ陥れられる女のそれであつて、方法はリンチが好適なのだ。「女の防波堤」がそれだった。組織からの逃亡を図った売春婦がヤキを入れられる。鞭の嵐に絶叫し、跳ね上り、転げ、呻き悶える彼女の演技は貴重なものと思う。ヒロインの親切が仇となり、非情な男達の追跡に立すくんだ彼女は、追いついた乗用車のタイヤに圧し潰されて無残な死を遂げる。

「ヌード・モデル殺人事件」では、偽者とも見破れず殺人狂に誘われるまゝ、ついて行つて虫けら同様に殺されてしまう。ヌードモデルのグラマールームが殺され、間一髪、救われるのが清純型の三ツ矢歌子で、彼女だけヌードを見せぬ処は「九十九本の生娘」と軌を一にす

るものだ。

このような使われ方は決して彼女のためにならないし、また会社のためにもならぬ。その意味で「幽霊と憲兵」のチャイニーズスタイルは一つの転機であつたらう。スパイの情婦としての演技もさることながら、素肌を出すよりも、体の線にびつたりした着衣で示す方が、男心を魅了することもある。

「女吸血鬼」の幻想的な扮装も意欲的であつた。ネグリジェのような衣服で体の線が柔かく透けて見えるのも魅力的なものであり、清純さとは縁遠いけれど、大自然の広大さをバックにして見劣りがしない彼女である。

透けて見える上に、表情の変化も豊かであつたのは「鮮血の乳房」である。この作品でも彼女を含めた肉体派が惨殺され、清純派の北沢典子が危うく救われる。この作品での役は奇術の女太夫で箱抜けを演ずる。薄羅を纏い、両手と両足を揃え紅白の縄で縛られる。緊縛の苦痛か、切なげに喘ぐような表情が佳い。結局、舞台裏で殺され、仕掛に詰められて舞台の上へ転げ落ちる。

一体、彼女は何故、無難作に惨死させられるのだろうか。映画製作の上で、ストーリーの展開上、必要な人物は善悪に拘らず、終幕

まで活躍をする。ヴァンプ型は悪事の限りをつくしても改心の有無に拘らず最後までとにかく生残る。ヒロインは屢々危難に遭いながら、その都度、辛うじて救い出され、やはり最後まで生残る。従って、もしストーリーの途中で殺害される女性があれば、善悪いずれにもあまり重要な位置を持たないといえる。

その女性の死がなければ物語の進展がないとか、或いはそれが死んでも話の流れには大して影響が無いということの意味するのだ。後者についていえば宗教劇や戦記ものにおける大量処刑や戦闘場面の群衆シーンがある。個々の人物の特性を無視した取扱いだから、一般にはエキストラや無名の新人達が動員される。これに対し前者はその女性の特性を稍々注視する。物語の発端や探索の手掛りや局面の新しい展開の契機にされる。女性そのものより、惨死ということが一つのポイントだから、できるだけ強烈な印象を残しておくためにはショッキングな演出も必要とされるのだらう。

罪もない女が巻き添えを喰って殺される。善人側の女が悪事の秘密を知って血祭に上げられたり、鍵を握っていて責め殺されたり、悪人側の冷酷非情を印象づけるために虐殺さ

れたりする。悪人側の女も用が済んで口封じに消されたり、裏切者としてリンチされたりする。

ゾツとするような冷酷な表情も背筋を凍らせるような鋭どきをも持たせていない三原葉子の持味では所詮、悪の首脳にはなり得ないし、といって肉感豊かな彼女では楚々とした清潔感を必要とされるヒロインは勤まらぬ。現在の彼女はグラマー女優の典型であり、その域を出ないのだ。

悪役を印象づける残虐は弱い者いじめがよいし、できれば女を責め苛むことが多微的である。大体、縛ったり叩いたりするのは惨いことなのだが、女の優れた体はそれを美化してしまう。やせている女と肉附豊かな女とを較べれば、後者の方が佳い。やせていては余りに痛々しくなる。同じグラマーなら美貌に越しことはない。苦しみ悶え哭き入れる姿態の美しい女が、真の美女とも思われるからである。そして同じ美貌なら親しみ易い温和な感じの女がよいと思う。つまり、どうしても苛めずにはいられないほど愛くるしい女というのが、世の中にはいるものなのだ。そういう女が責められているのは心を痛めずに凝視することが出来る。三原葉子とは、そういう

数少ない女優なのである、と私は思う。

今までの処、概ね悪役側に見込まれて罪咎もないのに無残に殺される役が続いた。積極的な善性を示して悪と対決するような役が無かったのは、演技の上でそれまでの強い個性を持たなかったためだろうか。稀に悪人側に立っても精々情婦のような手先役で、それも冷酷さなど持たせず、せいぜい誘惑する位が関の山で、惚れっぽく、挙句の果に寝返りまで行かないうちに裏切者にされてしまうという決まりきった所しかないのも、彼女のかもしだすムードのせいかも知れない。

スクリーン面で見ると彼女は流石に美麗である。活力に満ちてたるみは全く無い。さすがにそれが生命の女優らしく、隅々まで手入れの行届いた膚は、ライトの中で純白の艶を輝かせている。

由来、グラマー女優として売出された女性には、どこか淫蕩的な表情を持っており、それ故にファンの層も限定されてしまうのが常である。根岸明美、中田康子や泉京子、毛利郁子など、その例であらう。

無節操な描写は画面を汚なくするし、品の無いグラマーは観客を倦きさせるだけだ。日活では、白木マリが未だに脱皮できぬまま終

りそうで、やはり筑波久子がトップにいるがアンバランスな、あどけなさや冷たい暗さが売物だけにギャング映画の情婦役が過多だ。

東宝は演技派が鎬を削っているだけに、単なるグラマーで儲ける必要もなく、中田康子が貫禄を誇っているが、どうもアクが強過ぎるし出演本数も多くないから、むしろ白川由美を活用すべきではなからうか。白川の美貌と鋭い瞳なら悪女として大成するだろうに。東映の小宮光江は野暮ったいし、些か丈の足りない美空ひばりがいては丘さとみ位で我慢すべきか。浦里はるみが出ていないのは淋しい限りだ。松竹は泉京子の海女ものを一枚看板にしているようだが、グラマーの責め場など殆ど無いし、大映も毛利郁子の蛇もので人寄せを企ててみても京マチ子が君臨する上に山本富士子があの美麗さを見せるに至っては影の薄れること夥しい。それに会社の製作方針としてグラマー女優を活用しようとする風潮が乏しい所では、刺身のツマ程の效用もない。現に京マチ子はグランプリを獲得した演技派であり中田康子、泉京子もヴァンプ役を好演するのだから、悪に徹しきれぬグラマーとして耐え得るのは筑波久子位のものだ。

その点で、新東宝は特異な存在を示してい

る。映画はテレビに喰われることはないと言いつて大型画面での娯楽性を打出し、正にエロ、グロ、ナンセンスをも辞せぬ社の方向は

他の五社と劃然一線を隔てるものである。それだけに演技力は二の次で女の子を集めることに熱心である。強力な看板も無く、といっ



れん子

て有望な新人も現われぬまま、東宝娯楽作品の潮流に甘んじていた不振から脱しようとして、大蔵社長が卒先指揮を取った影響が、善いにつけ悪いにつけ表われている。

集められた女優のうちで幾人が期待どおり伸びただろうか。宇治みさ子や久保菜穂子も活用されてはいなかった。筑紫あけみも辛抱した割に決定打が無い。最近の三ツ矢歌子や大空真弓もまだ、新人群の一員に過ぎぬ。時代劇重視だけに、若杉嘉津子、北沢典子が比較的出演数も多いが、若杉の芝居では真剣味が乏しく迫力が弱いし、北沢は未成熟というだけで気品に欠けるから、武門の生まれにはなり得ない。小畑絹子も中途半端で、毒婦をやらせては若杉の賞禄に及ばないし、娘役にはならず、といって年増をやるムードでもない。万里昌代は期待できそうだ。ソファイア・ローレンばりのマスクで体もよいしイキの良い処が強味で、もしシリーズもので女無頼をやらせたら、新東宝の名物にもなるだろう。

新東宝に女優が育たないのは女優の使い方に難があるのではないだろうか。そのため観客の固定数が少く、ひいては会社の営業成績も振わぬために、よい女優が揃わない悪循環

を繰返すからで、会社も頭を痛める処だろう。続けて何本かに使ってみて、それで人気が出なければ終りである。こんな状態ではムダの集積に過ぎない。出演本数の多いだけで人気が出ると思うのは大きな誤りで、却って狭小なイメージの中に凝り固まってしまうかも知れないのだ。本数稼ぎでは単なるお目見得だけの役だから、その女優に限らず誰でも良いので、従って印象は弱い。新人女優を使うなら芝居の勢いお姫様人形に使おうという料簡では策が無さすぎる。本当に売出そうという意欲があるのなら、恋と復讐のスペクトルにでもまず抛り込んで、最初に思いつき絞り上げ観衆の脳裡に焼きつけてしまったはどうだろう。

復古調の先端を行く新東宝で描く女性は古風な忍従の女だ。然し、弱いだけでは女性の観客は勿論、男性もついて行かないだろう。虐げられた女が起上る時の共感に男性にもある。女性には復讐の快感に酔える。それが端的な表現を借りれば、映画の中でヒロインが古風な女らしさとスーパー・レディの特質を併せ持てばよいのだ。力道山に演出されたプロレスブームの単純な原理と一般なのだ。

これでもか／＼と責め苛まれる過程と、復

讐の経過だけでスターを創造できるのではない。従来は話を尤もらしくするためにつなぎの部分が多く、ヤマを省略したものさえあったが金と労力と時間の浪費だ。責められる女について或る種の資質を備えたグラマーが最上であると思わせたのは、苛酷な責めにも耐え得ると思わせる体格があつてこそ復讐の期待につながるからであつて、復讐のない被虐では、大衆のアイドルは生まれないのだ。時代物ならば長襦袢が優れているから、却って柳腰の方が珍重されようが、それも現代的な時代劇であり、ヒロインは五尺に足りないでは失格であつて、これが現代物となれば、ヒロインは素晴らしきスタイルの持主でなければならぬ。

マゾヒスティンの歓喜は、何人にも理解し得るというものではない。従ってマゾ女優の看板を掲げることは余り意味が無い。真実味豊かに責め上げて同情を喚起すれば、定石のハッピーエンドが新鮮になろう。唯、製作者としてはリアルな責め場を陰惨にさえしなればよいのだ。知合の女の子が、「どうせ、ぶっつなら、ふとっていなくちゃあダメよ」と云ったし、別の女友達は「素敵な女の人が残酷な目に遭わされたりすると、女としての

あたしは、いい気味だなんて思ったりする」とも云った。責められる女は「素敵な女」でなければ映画にならないのだ。しかもその素敵さは、かなり客観性が無ければならないから、アクの強くない、クセの無い、美貌のグラマ—ということになって、目下、活躍中の女優からは幾人も拾えない。若杉嘉津子も万里昌代もアクが強いように思う。

こう観て来れば窮極には三原葉子を指さねばなるまい。何よりも、まず豊富な体格である。そして、あどけなさの残る顔立ちには、親しみ易い善意が見える。プロポーションも造られた八頭身の冷やかさが無く極めて自然であり、目許と口許には清潔感がある。動きも鈍重でなく、こせっかない。臉を閉じ、眉を寄せて苦痛に堪える表情をアップに収める時、私は息をつめて凝視するばかりで、そのポーズに関する限り、正に入神の技とも評し得よう。三原葉子は、誠に数少ない「責められるための女優」の一人と云ってよいと思う。

だが、しかし新東宝にはこの種の稀少な女優がもう一人居る筈なのだ。昨今、入社の人ではない。荒川さつきである。彼女にも勿論、決定打は無い。ギャング映画などでヒロインの若い娘を庇ってヤキを入れたりする

る損な役廻りを、イキの良い芝居で見せてくれる。「女の防波堤」ではセーラー服のモンペ姿からラク町のおときに墮ちるまでを真剣に演じていた。脳梅毒で発狂し、ベッドへ革紐で縛りつけられ、口から泡を噴いて悶死するまで、笑い、哭き、精一杯、生き抜いた女の善意を見せてくれたのだ。「バラと女拳銃王」ではヒロインと話をしたというだけでリオンチを受けるナイトクラブの花形になった。防音装置のある地下の拷問部屋に幽閉され、苛酷な私刑を続けられた結果、遂に発狂して生きた屍を晒す憐れな役を演じていた。

発狂は惨殺よりも却って残酷かも知れぬ。気違いの言動の滑稽さが、被虐の美女に寄せられる同情を抑えてしまうからであろう。同じような拷問に苦悶しながら、三原葉子は颯り殺しにされ、荒川さつきは発狂する。死体となった女は收容されればスクリーンから姿を消すのに、発狂した女はみじめに狂態を演じなければならぬのだ。而も、荒川さつきはうまく、はまり役という程に好適である。山本富士子からケンを取除いたような日本調の美貌に加えて、女ターザンでデビューした姿態のあのヴォリュームである。明るく行動的なムードは、安心して愉しむことができ

る。荒川さつきの、こういった貴重な資質を新東宝は活用して来ただろうか。

強力なスターを作るとは会社の大きな利得だ。だが看板に偽を籠めた宣伝ではスターは生まれにくいし、顔見世だけでは女優群から一步も脱し得ない。筑紫あけみ、宇治みさ子、久保菜穂子達の抜けたアナを、誰をどの様に使って埋めるか、そして三原葉子、荒川さつきの競艶に万里昌代を絡ませて、どれ程の営業成績を挙げて行くか、来春の正月興行が勝負所と云えるだろう。

三原葉子、荒川さつきの健在と、新東宝映画の猛進を切に／＼祈ってやまない。

(以上)

◎本誌の旧号在庫について◎

本誌の旧号は一部の売切品を除いて殆ど各月号取揃えておりますが、最近保有部数が大変少くなり、或は売切れのものが出るかもしれませんので、御入用の月号がございましたら、この際売切れにならない中に、御注文下さるようお願いしております。尚、売切品の補充はつきかねます故、悪しからず御勘弁願います。



乱筆にて。悦特第二集、拝見し驚きました。私の想像していたより、はるかに上廻った逞ましい姿の写真や絵には恐れ入りました。或る女性が主人にぶざまな恰好で責められる姿は見事です。後手に縛られて、赤ん坊のオシメを尻にあてられた情けない恰好で放置させられる画は見事です。又、残酷なロソク責めは余りにも惨虐すぎると思います。四馬氏の画はなかなか見事です。写真集の方はよく肥った大塚嬢の「逞ましき姿」は気の毒です。後手に縛られた細紐が身に喰い込み、痛々しく真白いパンティが落ちそうで、肉附きのよい尻が丸出します。「黒蛇地獄」は、白いパンティが男性のモ

ッコふんどしのように見えます。一枚一枚、丹念に見ていると、胸が躍るような気がします。しかし色々な責められる姿がありますが私の好む男性のものが一枚もありません。私達、輝マニアは特に輝に興味を持つものです。どうか男責めの写真や画も掲載下さるようお願いいたします。

無理かもしれませんが滝れい子様、今一度、昔のような男責めの姿を描いて下さい。今から五、六年前はグラビヤに口絵に、よく出て居りました。時代物、奥御殿で腰元に裸に剥がれた男が、罵責めにあらぬ処や、焼け落ちた城で生き残りの男が、あぐらをかき大刀を腹へ突きさしている絵などありますが、今では、このような絵は

掲載されなくなりました。しかし特集号の「青い隣院」は私たち輝マニアを、あつと云わせた。真に迫るものがある。杉原様の画は生きています。女護ヶ島で色々な出来事を語ってくれる若い漁者、薄い肌着一枚に六尺褌といった姿は私の胸に、ぐっと迫ってくるものがある。又、滝れい子様の「マゾヒズム画廊」に輝マニアに、もつてこいの画が二、三ありました。菅良太様の「猩紅匪」は完結しました。ガツカリしております。どうか又、筆を揮われんことをおねがいいたします。最近、映画でも輝姿が多く見られるようになりました。東映の「いろは若衆花駕籠峠」には、大井川の渡場で、日焼けした体に色あせた赤褌を、ぐいっと締め上げた人夫の姿は見事だ。青木様、輝姿の画を描いてくれる方は、あなた以外にないと思います。どうか毎月、描いて下さる様おねがいいたします。

又、編集部の皆様も愛輝者のため御協力下さい。では我等、輝愛好者の諸君。口絵や写真に輝一つのたくましい姿が採用されるまで頑張ってください。

(清水ふんどし男)

愛知の山本様、酒井様、颯風は如何でしたか。案じつつ御見舞申します。さて十一月号拝見しました。

在アメリカ、M・Tさん、小生では如何ですか。唯年令が二十六才ですが、その他の御意見は、小生の希望と非常に良く似て居ります。小生は自分より二、三、年上の人及び多少、大きな身体の人に憧憬を覚えます。尚、小生、趣味は絵画の観賞、特に緑の茶掛った色が好きで、版画・赤富士の雄大さに感激を覚えます。文芸創作、古川柳をつつくのも楽しみです。身長一米六〇、体重六十八キロで健康に帰郷されての御便りを待っています。無事です。

(広島 S・K生)

拝啓、貴社、益々御清栄の段、大慶に存じます。最近、沅陽や切

◎写真特写引受◎

特別に交った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他にいてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

甲斐に参案「涙のダイヤモンド」 略号 (なみ)
四馬孝画

○胃の洗滌 ○ヒマシ油賣

大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

甲斐に参案「涙のダイヤモンド」 略号 (かん)
四馬孝画

○伸し賣 ○苦悶のコルセット ○浣腸賣

大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

腹については少な気味の本誌でし
たが十月号は浣腸及び女性切腹の
稿が沢山あり、マニヤの私にとり
読みごたえのある嬉しいものでし
た。旧号には浣腸及び切腹につい
ての見応えのある稿が沢山ありま
したが、出来れば、それ等をまと
めて特集号として出して頂けない
でしょうか。編集部御考慮をお
ねがいいたします。

(浣腸、切腹マニヤ)

貴社、益々、御繁栄の事、御喜
び申し上げます。

一年中で一番気持のよい秋にな
りました。貴社の皆々様、いかが
でしょうか。先日、突然、お手紙
を差上げ失礼いたしました。手前
勝手なことを申し御迷惑と思いま

すが、私の気持の一端をお話しい
たしました。私は縛り、責め等に
は余り興味はありませんが、女装
には興味があります。しかし洋装
より和装に強く心を魅かれます。

十一月号の読者通信欄にて東京の
新井様のお便りがありました。が、
私も新井様のように女装してみたい
と思います。着物や着付け化粧
等について色々お伺いしたいこと
が沢山あります。このようなこと
は誰にも聞けず、私の気持を理
解してくれる人もおりませんし、
色々考えた結果、本誌の通信欄を
借りて同好の方の御力ぞえをおね
がいする次第です。どうか私の気
持を理解して下さい友人になつ
て下さる方のお便りをお待ちしま
す。

(尾崎正春)

姫路のN君、その後どうしてお

られますか。あの白鷺城の近くで
共に楽しんだ一夜、今もなお忘れ
ることは出来ません。そうそう、
あれから、一度お便り下さいまし
たね。しかし、あの時、私は出張
中で、どうしてもいけなかったの
です。ここで改めてお詫びします。
あの時の写真をとり出しては、い
つも、もう一度会いたいと思つて
おりました。しかし連絡先がわか
らず今日まで、のびのびとなつて
おりました。もし、よければ一度
御連絡下さい。お待ちしております。
(大阪 M・O生)

御誌、益々御発展、同慶至極に
存じます。さて小生、初めて貴誌
を手にしてから、すでに十年近く
にもなりますが、好きな男性責の
記事は、すべて切りとり別に編冊
してあります。ただ旧刊号のものは
紛失いたしましたので非常に残念
に思っております。しかし復刊号
の貴誌には少々不満を感じており
ます。それは男性同士によるプレ
イというものが毎号一篇、多いと
きでも、せいぜい二篇という少な
きで、記事も、とうてい旧号の迫
力には、かなわないのです。同人
雑誌的性格を有する本誌としては
記事の制約は、まぬがれないとし

ても、やはり比率からいって、私
のような希望を持つものが多いの
ではないでしょうか。失礼の段は
御容赦下さい。これほどまでに期
待し、毎月を楽しみにしているの
ですから。処で、こういった興味
もあつて日頃、原稿など専門的分
野に亘るもの以外は書いたことの
ない私が、ここに勇を振って私の
体験など下手な告白文として提供
した次第でありますから、もし、
おとりあげ願つて貴誌の末席でも
汚せば本望です。

【G】組 緊縛フオート

判紙焼付	一枚一組	一五〇円
中画焼付	五枚一組	六〇〇円
大印	十枚十組	一〇〇〇円
G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

この一文は、私の奇妙な体験の発端となるもので、これ以後、挿話も、いくつかあるのですが、よければ書いてみます。それは貴誌の記事中、今までに見かけなかったもので、一人の加虐者が、二人の被害者を一体として同時に色々な形で責め抜くというもので、写真とか絵にすれば同好の士には十分に喜んで頂けると思う構図です。なんなら私がモデルになったらよいと思っております。もしよければ誌上にて御連絡下さい。又、大阪近辺の方で、私のよう

○浣腸フोट

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

紅白まんだらの扱帯が後手の手首に喰い込んで苦痛にゆがむ文代嬢の美貌。身動きもできない捕われの姿態に襲いかかる三〇〇Cの硝子製浣腸器。空しい抵抗をあざ笑うエネマシリンジのゴム球。イルリガートルの嘴管。浣腸が終って便意の苦痛と戦う表情。文代嬢熱演の浣腸責フोट。

な相手を望んでおられる人がおられましたら、御便り下さい。(夏木 明)

○

私は東京に在住する十八才の女性でございます。半年ほど前に貴誌を知り以後、毎月愛読させて頂いております。毎号、本当に素晴らしい記事の満載で、皆の前で、のびのびと読めないのが残念でございますが、それでも大いに楽しませて頂いております。中でも特に四馬さんの口絵と浣腸に関する記事は、一番早く目を通しますし、

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

浣腸芸術という言葉があるとしたら、浣腸の苦痛に悶える姿態に美しさを発見するという狙いが、それに該当するかも知れない。紐と浣腸器のくもし出す美しきコントラスト。白い肌に妖しくまといつく黒色のゴム管若い女性の生理に激しい変動を期待するグリセリン溶液。夢の如き浣腸責アツプ。

写真 礫

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚啓子

胸をときめかして読ませて頂いております。浣腸で私が魅力がございいます点は、それが若い女性にとつて堪えられない恥しめを与えてくれるからなのでございます。私なんか、まだこんなことをいう資格がないかもしれません、女性に対する責めの中で一番、高尚でエレガントなのは、この恥しさを利用したものでございませんかしら。無理に恥しい姿勢をとるようにならね、恥しさを失いそうなの横では大量の石けん水とグリセリンとが次第に用意され、遂には巨大な浣腸器が手に取られ、私のお腹が、ぶつくりとふくれ上るまで約一リットル近くもの浣腸液が注入されます。そして手を上にあげて爪先が下に、やつとつよくうに縛り上げられます。浣腸液の間断ない責めに我慢できず許しをこが、なかなか許してもらえない。こういった責めにたいして私は、たまらなく魅力的なムードを感じるのでございます。こんなことを書きますと、わたしが、さも

経験があるようですが、また一度もそういう機会に廻り会わないのです。それで自然、本誌などで、なぐさめてくれるのです。私はバレーのお稽古をしていますので体が柔いつもりです。若し四馬さんがモデルがおいらでしたら余りひどいポーズでございませんでしたら、お引受けしてもいいと思っております。特に涙のダイヤモンドの中の浣腸責めや、ヒマシ油責めのようなモデルにしていたら、どんなに素晴らしいこととございませう。でも私は宙吊りにされるのは好みませんわ。だって、とっても苦しうなんですもの。私は、そうした苦痛には、とても堪えられないと思いますし、又、好きではありません。私の好きなのは前にも書きましたように恥しさを中心とした責めでございませう。いろいろつまらないことを書きました、なにとぞおねがいいたします。

(上原由紀子)

花坂道子緊縛フォト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

始めて投稿します。私は女性下着愛好者です。わけてもオコシ、長襦袢には強い執着があります。今、こうして書いています。中には女性用ピンクのタオル履巻の下には赤いオレシをしています。実にオコシは私にとって精神を安定させる反面、云うに云われない精神状態にさせます。そして又、私自身を精神を女性化しています。私がオコシ等に執着を覚えたのは小学校の頃からです。母親や義姉の赤いオコシや長襦袢をつけて、ひそかに一人、楽しんでいました。長ずるに従って就職もし、収入を得る様になつてからは自分で買うようにもなつたし又、材料を買つて作るようにもなりました。何れにせよ、このようにしてオコシには執着があつて、私自身どうするとも出来ません。夜、ひそかに寝間着の下に赤い花模様のおコシ(裏地にモスリンの赤布地の衿)を

して夜更けの裏町をさまよつたこともありつた。私は五尺三寸足らず、十三貫五百ぐらいですが、顔は少し、いかつい方かもしれない。しかし元々、荒々しい方ではなく、きわめて女性的で、その上赤やピンクのおコシをするとうるさく女性化します。私は同好の人と交際したいと思ひますから、お呼びかけ下さるようお願いいたします。猶、私は洋装下着類より和装下着類の方が、はるかに執着が強いようです。編集部におねがい。私達のような女性下着愛好者は大勢いると思ひます、このような人達の告白、願望等一括して特別号として発行して下さる様おねがいいたします。しかし私の見落しで既に発行されている様でしたらお教え下さい。又、これから発行の企画があれば、どうか写真の方も頼みます。例えば帯を結ぶまでの順序とか、オコシをしている色々な

ポーズとか、私達にとって遠大な夢でもあります。どうか、よろしくたのみます。

(名古屋 藤岡生)

私は東京の有名大学の女子学生ですが、ふと近くの本屋で貴誌を見出し、非常な胸のときめきを覚えました。その時は、そのまま店を出しましたが、どうしても口絵、写真などが頭の中にこびりついて離れません。それで妹のメガネを借りマスクをかけて思ひきつて十一月号を買いました。そして内容を一気に読み終ると、今までにない気持が起りました。

サドとマゾということは、おぼろげながら知っておりましたが、実際に目の前に現れるのは、やはり非常にショックでございます。今まで新聞の広告や薬局などで浣腸という文字を見ると、何か、とてもドキドキして空想ともつかぬ漠とした事が頭の中を駆けめぐります。又、映画などで女優さんが縛られているのを見ましては、とてもいいなあなどと考えてみた事がございします。そして貴誌を見るに及んで、私は、そうした事に並々ならぬ興味を持っているのを知つたのでございます。

私は、やはりマゾヒストなんで

女体緊縛フォトE組 9×13印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢

ES2 全裸悦集

モデル 須川 令嬢

ES3 四枚一組 羞

モデル 佐賀美智子嬢

ES4 三枚一組 淫宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢

ES5 二枚一組 脱がされる娘

モデル 須川 令嬢

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢

ES7 剥れたスリス

モデル 佐賀美智子嬢

ES8 五枚一組 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢

ES9 七枚一組 女学生の縛り

モデル 須川 令嬢

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢

六枚一組 四〇〇円

すわね。貴誌を手に入れて何時間もたない中に、完全に、とりこにされてしまいました。写真のモデルの方を、とっても羨ましく思います。でも私を夢中にさせるのは、何んといつても浣腸ですわ。無理に大量の石けん水を注入され両手を高く縛られて二十分も我慢させられたりベッドの上に寝かされグリセリン浣腸をされたら、どんなに素晴らしいことでしょう。

又、一週間も何も食べさせてもらえず、毎日二リットルの牛乳をイルリガートルで注入するなんて素晴らしい事ではございませんか。その他、コルセットでウエストをびっちりとして薄いブラウスとスカートだけで銀座を歩かせられたら、行き交う人達が、さぞ私をふりかえって見ることでしよう。私は恥しきで真赤になるでしょうけど、でも、そうしてほしいような気がするのです。

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

又、どなたか私を浣腸して下さいたり責めて下さる方がおられまじたら、どんなに素晴らしいことでしょう。もし人に絶対に知られないのでしたら、そうしたプレイをして下さる方の処へ今すぐにも飛んで行きたいわ。でも、やはり今ここで私の本名を書くのは恐いような気がしますわ。こうしたことを実現させるのは、やはり無理なもので、とんでもないことまで書いてしまいました。こんな御手紙は、ほんとうは恥しくて出せませんが、ですが、恥をしのんで文字や文体まで気をつけて書きました。

(東京 九仁子)

読者の皆様、女性に打ち負かされた又、組み伏せられることを喜ぶ男性を、世間では一般にマゾと概括していますが、これは、とんでもない誤りです。マゾヒズム

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

女体

『浣腸風景十二態』

(9×13cm) 十二枚一組

印画紙焼付 九百円

モデル 大塚啓子嬢

略号(ちふ)

女体浣腸連続フオート

略号(ちよ)

(9×13センチ)

印画紙焼付

十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

スというものが、どんなものであるかは沼正三氏が、これまで本誌に発表された架空小説や評論をお読みになれば、よく納得される筈です。しかし男女が格闘し、そして常に女性が優位になつて関係を男女ともに喜こんだとしても、それだけでサド女性、マゾ男性というものは、どうでしょう。私の場合、いつも逞しい妻に抑えこまれて「息苦しい魅力」を、ここ十余年、満喫しております。しかし十一月号のM・A様の男性相手のレズリングの詳報を拝見しても、はたしてM・A様がサドで相手の男性がマゾか、実はよく判断つきかねるのです。M・A様の文は妻も読みましたが、「ハンマー投げやハイヒールを穿いての巴投げは大怪我のもとだから止めた方がいい」という意見でした。この点は小生も同感です。妻は女子大時代

に柔道を三年間、正式に習いましたが、受身の不十分な小生のために、危険な大技は一切、使いません。妻の得意は縦四方固めといって、馬乗りになると同時に両足先を相手の臀部の下に入れ、両足先と両膝の働きで相手を制してしまふ技です。これをやられると、小生は息が出来ません。技を知らずに男を組み敷く場合、腹部ではなく胸板に跨って両膝で相手の両腕を抑えつけてしまうことです。跳ねかえされるおそれのある場合は重心を両膝に移し、お尻を持ち上げるだけで十分です。

(東京・諸岡堅雄)

一愛読者様。どの地方の方か分らないのが何より残念です。しかし、あなたのお便りを拝見し思いもかけない方にお逢いした喜びを感じました。小生、甚しい苦痛を

伴うようなMもSの性癖もありませんがACROというものに漂っている、いわばM的、S的なものに何にもまして魅力を感じるのです。一人で、ただステージを眺めるだけでなしに、語り合えたらと心から思います。少年のとき恐怖を覚えながらサーカスの訓練に何よりも強く引きつけられ、学生時代、体育の時間や運動部での生活に忘れられない思い出があります。サポーターを知ったのも、その一つ。サポーターの他に全部にゴムを織りこんだナイロン製の水泳パンツを愛用しています。強い緊縛感にはサポーターに劣りませんし、すべすべしたビッチリした感じは最高です。夏には毎日、海へ行き満喫しました。あの訓練に臨む青年教師のイメージです。

(東京 水野生)

特集号の四馬孝画集、拝見しました。「哀れな強力」は主題で他を圧倒、文句なくAクラス。だが

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

(大中判印画紙焼付)

顔の肌にもうの出ているのが惜しい。注意して見て下さい。眉の上辺りは特に目立って醜く、ヘヤースタイルも少し悪い。「ムチ打ち開始」は、犠牲の女性の体が殊の外、魅力あり、ヘヤースタイルも満足。そして解説文が、ききました。これも文句なくA級。

「美容体操」の少女の表情もよし脚線は、あげてない右足が絶品。「美音訓練師」も先ずA級に入るだろう。後は同巧異曲も多く感心出来ない。「拷問台」は女体を痛めそうに嫌だし、「水責め倉」は溺死さしてしまふのでは駄目だ。死なせる責めでは、責めの妙味が判らぬ御人といわれても仕様ががあるまい。「鼻責地獄」は台の下が少し画面に欲しい。台の下の上半身と虚空をつかむ手ぐらひは描いて欲しい処だ。「蛇倉幽閉」の女性には、一年前の画を見るような心持がする。この責めなら「防水服の恐怖」の姿勢が座らせるからして、体を大きく描いて蛇をから

緊縛フォト新作発表

大手札型印画紙 焼付
各組三枚一組 二五〇円

聖壇の裸女

略号(けい)

開股三番勝負 (その一)

△モデル

絹川文代

略号(けと)

カーテンの翳

略号(けろ)

開股三番勝負 (その二)

△モデル

大塚啓子

略号(けち)

艶姿色模様

略号(けは)

開股三番勝負 (その三)

△モデル

絹川文代

略号(けり)

浴場の欲情

略号(けに)

開股三番勝負 (その四)

△モデル

大塚啓子

略号(けり)

いけにえ

略号(けほ)

開股三番勝負 (その五)

△モデル

絹川文代

略号(けぬ)

のぞき見

略号(けへ)

開股三番勝負 (その六)

△モデル

絹川文代

略号(けぬ)

ませるべきでしょう。「苦悶の舌吊り」「流腸室の女体」は、先ず「として」も、他は劣るように思う。「猿ぐつわと煙草責」は女体を二人にせず、一人にすべきだ。鼻をつままれて正に脱脂綿をつめられようとしているポーズで、他の男が煙草の火を近づけた処を、煙草の煙を口端から漂わせ、ボーカーフェスで手を胸に近づけた男でも描けば、グッと引きしまったでしよう。以前の如く馬鹿長い脚もなくなり、つい最近のような鼻を天井に向けたのも少なくなった

のは、大いに歓迎、欲をいえば女の目に愁いを、そしてヘヤースタイルの吟味、それから余りにも後手ばかりが多すぎることに……。勝手なことばかり申しましてすみません。(八幡市・丸木戸)

お詫び。(麻生保氏、及び黒田史朗氏に)

十二月号で麻生保氏が「イルゼ・コッホの美醜について自分は書いた覚えはないが……」と書いておられる点につき訂正いたします。「麻生保氏」は「黒田史朗氏」の

誤りでした。御兩人に失礼の点、おわび申し上げます。猶、麻生保氏に一言、申し上げます。私は通信や告白文の時は天泥盛英（アメデオ・モリエールと読みます）諷刺には森本愛造の名を用いております。以前に誌上で申し上げたことですが、念のために申しをえます。

（原 忠正）

十一月号、貴誌を手にして頁をめくる中に鳴滝三郎氏創作の「女はそれを我慢出来る」と一筋縄では駄目な娘（副題）というのにぶつかった。中ほどまで目を通していくと、一五二頁の下左の終り

から十行目ほどに諷刺物で「北京の売笑婦」という活字と、原題は「長安西望」という活字が私の目をとめた。というのは、「北京の売笑婦」という諷刺劇の筋、内容が、ついでに書かれてあったが、その内容が昭和二十二年一月に東京一つ橋講堂にて、劇団、泉座が公演した馬少波・辛大明作「古米は解けて」に酷似していたからである。中央軍に解放される北京の紅灯街を舞台にしたもので、嗜虐趣味のある者には一応、興味をそそる場面がある作品だった。女の無知を利用して何んとか自分だけは解放軍から逃げようとする悪ら

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型（9×13センチ）印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り（略号しん1）

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り（略号しん2）

四枚一組 三〇〇円

大杉啓子嬢の巻

☆股間縛り（略号しん3）

☆全裸縛り（略号しん4）

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り（略号しん5）

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり（略号しん6）

四枚一組 三〇〇円

絹川文代緊縛姿態集

大手札型印画紙焼付型

○全裸緊縛集 略号（きぬ）

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号（きこ）

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号（きた）

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号（きり）

三枚一組 二五〇円

つな女将がいる。女達は、女将のハラわかつていながら、それでも解放軍が自分達を救ってくれる人間とは仲々思えない。小さい時に女郎屋に売られ、客をとることしか知らない女たちに何が出来るというのか、そういつた娼婦たちの不安が描かれている。炭鉱の落盤で父を失い、周旋屋に騙されて売られた女が、女将に折檻され、やがて一人前の娼婦になり、男に騙されて又、泥沼に落ち込んでゆく。虐げられた女の惨めさを描くという狙いだ。劇中、女将のズルさと憎々しさを、よく出している津田まり子が光る。そして特に蹴ったり殴ったり折檻場面が、どぎつく、すさまじいのが印象に残って離れない。以上が「古米は解けて」のアウトラインだが、中国物の諷刺劇、売笑婦を扱った点私は、どなたか利用するのではないかと虎視眈々として、うかがっていた矢先でもあった。創作品に限るべき筈の当選作品の極く一部ではあれ、酷似している劇を挿入してあるのは、私としては、劇名を変えたその気持が不快である。作者としては、とんだ濡れぎぬたといわれるかもしれないが、実によく似ているので、私としては黙っていられたくなったのである。女流新人文芸賞で西村みゆきさんが、針のない時計で問題になったのも、まだ耳新しい。編集責任者の井は免も角、作者、鳴滝三郎氏の胸中を是非、誌上に発表して頂きたい。雑誌の性質上、とやかく云うほどの問題ではないかもしれない。しかし嗜虐趣味を持つ者は、自分の趣味を満すために映画演劇、新聞にテレビに、そして雑誌に目を向けているのである。一地方紙の片隅の嗜虐記事ぐらい利用しても分るまいと思っても、その方面に興味のある者には異常なほどの神経が発達して見逃がさないものである。我々は別に意味もな

くK・K誌に二百円もの金を払っているのではない。自分の趣味を満すためである。その方の趣味のない人には本誌など、一見の価値もないことを知るべきだ。机の上のコップの水も喉をかわかして、いない人には目にもとまるまい。価値のある人にとつても、中に不純物が混入されていては、飲んだ後の気持が、すっきりしない。最後に読者欄にて鳴滝三郎氏と対決するのよい。二信、たしか十月号から始まったと記憶する。バスガールの運命、十一月号にも十二月号にも見当らない。連載物の筈である。これがラスト・ストーリーが、どう発展するか面白いところだけに続きが期待される。折柄、現実にバスガールが釣銭を間違えた場合は天引きとのことで、有力新聞の社会面を賑わせ、労組も立ち上っているそうです。現金を扱う故に、抜打的に身体検査もある由絶好の嗜虐種があるではありませんか。作者よ、奮起して、紺の制服を題材にした以上、続けて書かれんことを望みます。

(東京・阿倍能磨)

初めてお便り差上げます。私は女装愛好者ですが、貴誌に余り女

装の記事が見当たらないのが物足りません。私の女装歴はもう八年位になり、和洋装のかつら他女性の持たねばならぬ品は殆んど揃えています。夏はとにかく秋から春にかけてはよく外出して、ひとりでお茶を飲んだり、映画をみたりするので、男らしい男性と御交際したいと常日頃思っています。私の計画は、ささやかなアパートを借りて、そこに私の衣装その他を置いておき、好きな男の方に遊びに来ていただいたりいろいろなプレイをしたり(少しはマゾ的性質も持っていますから)写真をとったりしたいと考えています。何分ひとりでは計画をすすめるのに資金その他のいろいろな面で支障がありますので、もし私の考えに御賛成の方、(男性味百パーセントの方、四十才以上、又は私と同じ側の方でもよろしいです)の方なら私と同年輩以下)は文末の住所に封書でお便り下さいませ。なほ私は当年三十二才おつきあい下さるのでしたらW型の方は女同志として、M型の方は肉体精神共に女として扱って下さる方に限りません。

(東京・成舞芳夫)

朝晩めつきり肌寒くなって参り

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、計村 隆
連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)
3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)
3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)
3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)
5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)
5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)
3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)
5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)
3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)
3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子
3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)
5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)
3枚1組 二五〇円

ました。新年号を手にして、一番興味深く読みましたのは「撮影会兼読者座談会」の記事でした。私も下手ながらカメラを少しばかりひねくりまわすので、時折マードスタジオなんかに通ったこともありましたが、一度でも縛られた若き女性の姿を自分の手でフィルムに印したく願っておりました。撮影会のまるで手にとるように書かれた記事を読みますと、本当に身体中がうずうずするような羨ましい気持ちを感じえませんでした。何故自分も第一番に申込まなかったかとくやまれます。然し自分のように、今まで直接申込んだことも一回もな(ず)つと書店から買っています(御社のためになったこともない)ので、申込んでも殆んど駄目だろうと思います。今回のように会費無料でなく、経費が十分償われる位の会費を負担させて次回には是非開催されるよう御願います。8ミリ映画や緊縛写真の展示も、是非拝見したいものです。座談会の記事も大変面白く読ませていただきました。私も次には、座談会に出て、いろいろと体験談を話せるよう、平常からまとめておきたいと思います。ニユーフェイスの館さんは、明るい近代的なお嬢

さんで好感が持てます。これを機会に誌上にもドシドシ出場され、又、読者の中の同好者の撮影会にも顔を見せて下さるよう望みます。それに辻村氏が言っておられるように、大塚さん、森川さん、絹川さんなどのベテランが競って出演される撮影会も必ず催して下さい。御願います。何にはさてもいっても飛んでゆきますから。(兵庫 秋水生)

はからずも書店で臨時増刊号のサド特第三集を見つけてバラバラと頁をめぐっていますと、自分の写真が二葉ばかり見つかりましたので、大変なつかしく昔を思い出されて筆をとりました。その時、丁度連れの人がありました。私が余り熱心に一冊の雑誌ばかり見ているのを不思議に思つて、しつこく訊ねますので、何やかや云つて、うまくごまかして、その書店を出しましたが、その友達は、あとあとまでしつこく不審がるので弱りました。私も、あの頃から比べると齢をとりましたので、身体に自信はありませんが、今一度ぐらいい、きつく縛られてモデルになつてみたいという気持ちもあります。普通号はほとんど見ていませんが

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歌

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 儀(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手型(9×13種)です。

お申込は 天星社代理部へ

臨時増刊号の口絵では大変美しい人達が沢山活躍されていますのでうらやましく思いますが、私なんかの出る幕ではないと観念しています。それに、やつと非常な苦しみの上忘れかけた縄への魅力にとりつかれてしまうと大変なので恐ろしいというような気持ち、なつかしいという気持ちが相半ばしています。暇ができましたら、その後の私の体験談といったものでも書かしてもらえませんか。

(大阪 川端多奈子)

冬を訪れも感じられる昨今、愈

々御清栄の段お慶び申し上げます。サド特集号第三集に引き続きKK十二月号、正に御惠贈に与かりました。相も変らぬ誠実そのものの貴社の経営に感激しております。十二月号読者通信の横浜、山上武一氏の御意見には私も賛成で、中でも一つのテーマに基づく緊縛フット特集の作製は近い将来実現を望みたいものです。

目次上の面の愉しさは益々好調ですね。兵士四人と囚われの美女の表情、姿態の見事さは心憎いほどで、読者通信にある東京新宿、古屋喜代子さんの欲求にもマツチ

するものではないかと思ひます。グラビヤの四馬氏の画は、ヒロインの近代的な美しさが愉しみです。「懲罰室」の自転車は車輪の無い方がよかつたと思ひ、また浣腸責の方は、パンティをずり下げる位の配慮が欲しかったと思ひます。滝氏の画のアイデアは面白いものでした。日本女性を縛り上げその足許に伏す米人紳士。紅毛美女を乗馬服のまま縛り上げて、松の根方に括りつける武士。いろいろの問題を含む佳作でした。特写フォトの絹川嬢は相変らず美しい姿態で「明眸皓齒」はデビュウ当時のもののようですが、あどけなさやいたずらっぽさが現われています。「真紅の腰巻」の方は、かなり柔らかみが増して股間縛りもみじめです。首縄の点が不明なのは残念で、また股間縛りの腰巻は美観を大切にしたいと思ひます。扉のカットで貴婦人のプレイらしく引廻される女体の柔らかい線が素晴らしいと思うのです。私の「お仕置をめぐり一考察」は多数のページを頂き有難うございました。カットも美しく感謝に堪えません。今後何かテーマを見つけてレポートを纏めてみたいと思ひます。「黒井チエの青春」は目下第

三回を清書しています。これで終結にしてみたいので一応話に纏めをつけてみました。十二月号の読物中でも蒼野氏「別れても」藤山氏「ベルリン最期の日」三条氏「おぼろ月」辻村氏「話の屑籠」藤木氏「最後の激突」柴崎氏「王宮の浣腸室」桂氏「乙女櫓」等々は楽しい作品でした。

(東京 近藤一)

久し振りにお便りさせていただきます。貴誌も復刊されて、はや数年になると思ひますが、この読者通信も最近では、だいぶん我々の仲間が投稿されるようになって意を強くします。清水のふんどし男様をはじめ揮愛好者の方が続々現れて緊揮男子の写真や小説の少いのを嘆かれておられますが、それももう少しの辛抱、決して落胆せず、各自が自分の揮記録をこの欄に根気よく発表して遂に読者通信全ページが揮マニヤの記事でためられるようになれば、本誌の編集の方も、緊揮写真のせざるを得なくなると思ひます。実際、最近では水泳場ですら、六尺揮をあま見かけなくなつて一層我々の思ひはつのであるのです。終戦直後の頃は青年の大半が、堂々と晒の六尺

女体「責」写真厳選集

大手札型印画紙焼付
各三枚一組二五〇円

いずれも口絵に掲載不可能なる力作中より厳選した素晴らしい粒選りの緊縛感に満ち溢れた極鮮明なる印画紙焼付の責写真集です。

危機一発 (絹川文代) △略号「きき」▽

後手猿轡の無防備な身体に襲いくる悪魔の手によつて手荒に引きはがれようとするパンティ……。

女体開陳 (絹川文代) △略号「かい」▽ 三枚一組

美貌の絹川さんがきびしい縄目に足の指をくの字に曲げての喘ぎよう。なんとという美しい惨劇だろうか……。

哀花悶々 (絹川文代) △略号「あい」▽ 三枚一組

白く輝く女肌をぎりぎりタテに縛りあげて悶えに悶えぬく哀れにも艶な姿を見せてくれたが……。

雁字搦目 (絹川文代) △略号「から」▽ 三枚一組

首、胸、腹、腰、股とガンジガラメに肌に喰い込めとばかり、無茶苦茶に縄をかけられ、猿ぐつわに呻めく……。

寝室俯瞰 (愛川悦子) △略号「ふか」▽ 三枚一組

愛川さんのポリウムの肉体が縄目にくびれて盛りあがりベッドの上に転々とするとところを天井から覗くと……。

柔肌地獄 (大城啓子) △略号「やわ」▽ 三枚一組

押せば凹み放せば弾きかえす張りのある全裸の柔肌を余すところなく露呈して縛に屈伏するという乙女……。

禪姿を見せていたことを思うと残念でなりません。私も学校を卒業して六年あまりにもなりますが、学生の頃、京都の踏水会という水練学校で見た若者達の禪姿が今でも懐しく思い出されます。

今はどうかのかわかりませんがその頃は六尺禪がその生徒の唯一の制服になっていました。生徒といっても小学校から上は三十位の泳ぎの出来ない青年で、皆いや応なく六尺を締めさせられて練習をしていました。事務所の横では晒を売る所もありました。教師も大ていアルバイトでしようか二十五、六の若者たちで彼等は赤禪をしめていました。細巾の赤い木綿の六尺を下腹に喰い入るようにかたく締めてメガホン片手に大声で

どなっている勇ましい後姿——かたく締められていたために禪は丁字型よりむしろY字型になって、それもほとんど尻の割れ目に深く喰い込んでいた——に、しばし目を離せませんでした。この時せめて一枚でも写真をとっておけばと残念です。禪マニヤの皆さんも、きつと、こんな思い出を持ってもらえると思います。お互いにこの欄を通じて話しあい慰めあひましよう。お互いの緊禪写真を出して誌上でコンテストでもやれば、面白いでしょうが、それを強請すれば、この便りまでボツになりそうなのでやめます。マニヤの皆さん頑張りましょう。(禪マン)

フエチの皆様、皆様の活躍され

昭和三十五年初頭に放つ提供!!

S 特第四集「美しき惨虐物語」 定価 三五〇円

盛り沢山の口絵、華麗なグラビヤ、豊富な書下しの創作、小説集
二月上旬予定。

限定版 特別号 第三集

特価 五百円

『女体緊縛グラフィ集』

現在迄温存した秘蔵的緊縛フォトを網羅した特別号、一般書店にて一切販売いたしません。

◎いずれも三月号誌上に詳細発表、乞御期待!

ている文面が近頃めつきり少なく女性フンドシ愛好家の松原様、男用ナイロンブリーフ・マニアの富永洋子さん等どうしましたか。又ブロースマニアの同好者諸氏も全然便りがなく私もさびしくなりました。私もブロースマニアの一員として大いに毎日楽しんでいますが、これからもどしどしフエチの記事をのせて頂きたく思います。私は女性のパンティ、ブロースの愛用者ですが、私は九州より出て会社に勤務しています。

妹がやはり上京し(短大)私と一緒にアパートに住んでいます。妹は美術の専攻で何時もズボンにジャンパーを着て男の様な服装をしています。又大変だらしないく自分のパンティが汚れると私のトリコットのブリーフを着用して洗たくは近頃全部私がします。その様なことで、この二年間は私もすっかり女性のパンティに興味を持ち(もちろんもつと前からいくらか興味はあった)私は毎日女性用パソナイカブロースをはく様になりました。妹に云って買わせるのですが、私の愛用するのはナイロン製の色物が多く、股くりが深く股上の浅いものを好みます。こんなのを妹にはかせると、お尻が半分

程露出して魅力があります。妹は私のナイロンの小さな男子用ブリーフを愛用する様になりましたが私よりずっと肥っているのです。そのブリーフは腰の所までしかなくすっかり伸びきり今にも破れんばかりにはりきり私を喜ばせます。又前が開いているのでトイレの時に脱がずにすむとの事です。近頃は男子用でも前のあきが全然ないブリーフが出ています。私はブロースマニアやパンティを男子用に改良したりして秋の夜長を楽しんでおります。妹は女性用はトイレに面どうとの事で時々しか自分のパンティをはきませんが、今私は妹に申又からパンツをはかせ、だんだんふんどし又三角水泳ふんどしをすすめてゆきたいと思ひます。私はもう下着は男女兼用の時代と思ひます。では、皆様もどしどしお便り下さい。

尚、編集部の方へ、男女の下着アルバムを作ったら如何でしょう。売れる事間違いありません。モデルに着用させたものが良いと思います。又、男が女性用、女が男性用を着用したのも附ろくに入れてほしいと思ひます。

(東京 塚田章)

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

皆さま御無沙汰いたしました。いろいろな一身上の都合のため誌上に余り姿を現しませんでしたがおかげで至極健在にて過しております。時折は特写フォトの出演で読者の方とおつきあいをしたり、又以前から文通をしていました方のところへ暇をみて出張したりしています。この頃はお仕事の方が忙しくて、そう余り出かけることも少いのですが、一度そういつた時の経験談を書いて編集部へ送っておいたのですけれど、どうやら没になってしまったようです。特写フォトの撮影といった時は

久しぶりに思いきり男性を苛めることが出来るというので不思議と爽快な気分になって楽しんでおります。今のところMフォトも余り必要でないらしく、出演の機会に多くは恵まれません。いざいざ、最近一入ポリウムの増した私の姿をどらんにいれたいものだと思っております。雑誌は毎月たのしみに見ています。では、いざいざ、後程、さようなら。
(大阪 春日ルミ)

久しぶりにパンを執らして戴きました。女装マニアの方々御元氣

の事とします。私も心の奥底には女装の事を考えながら、種々の事情で遠ざかって居りましたが、最近又又、やもたてもたまらなくなりKK誌の既刊号の「女装関係」の処のみを読み返して、色々女装のイメージをえがき乍らせめてもの慰めとして居る昨今です。

新しい読者の女装マニアの方のために、女装関係の記事を拾って見ますと大略次の通りです。

29年9月号	変性男子の告白
30年1月号	綿ネルの妄想
30年3月号	女性願望の青年の手紙
32年1月号	わが半生の記
32年1月号	赤いネオンのきえる頃
32年3月号	或る女装マニアの記
32年9月号	女性志願者の夢
32年11月号	女性ホルモン服用実験報告
32年1月号	右に同じ
33年4月号	私の生い立ち
33年5月号	私の女装遍歴
34年4月号	赤い着物と白い

右のうち私が特に感動したのは「或る女装マニアの記」「赤い着

物と白い縄」でした。筆者、森本信一、桜井良美両氏の告白は私等マニアの最高をゆくものと思えます。先頃の読者通信の編集部解答にサド特集が非常に希望が多い旨が書いてありましたが、女装マニアの為に「女装特集号」を計画されたらと思います。現在迄の女装マニア寄稿者を動員し、グラビア等も豊富に取り入れたらとても素晴らしいと思います。滋賀雄二氏も三十人位の女装マニアの会を結成しておられるとか聞いて居ります。材料も数多く持つて居られる事と思います。

尚、一言致したい事は、私も以前に書きましたが、前記の森本、桜井両氏も書いておられる通り、筋骨たくましい男同志の同性愛とは全く異り、あくまで女装のみを追う自己愛であると私は信じて居ります。桜井氏の告白の如くマゾ的傾向は殆どの女装マニアが持つて居るのではないかと思います。私も異娯、女形、ゲイボーイ等とも何度となく交際して見ましたが女装しているという事が魅力以外は何も興味は持てません。女装マニアの方々のより多くの発表、体験、告白等の投稿を期待します。

(宮崎 矢島浩二)